

魔法少女リリカルなのは
は 夢現の物語

とげむし

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

にじファンからの移転作品になります。

何処とも知れない所で生まれた少年堅一は、一人の少女と出会うことで自分に繋がる道へと進んでいく。本編再構成、主人公は「転生者」。本編再構成・主人公強いけどチー卜じゃない・ハーレム・シリアス・若干エログロが含まれます。

目次

第十話	182
第九話	164
第八話	143
第七話	119
第六話	100
第五話	78
第四話	55
ジュエルシード	
第三話	37
第二話	14
第一話	1

第十一話	204
第十二話	229
第十三話	250
第十四話	271
第十五話	295
第十六話	313
第十七話	334
第十八話	354
闇の書	
第十九話	370
第二十話	391
第二十一話	410
第二十二話	432

第二十三話

第二十四話

第二十五話

第二十六話

空白期

第二十七話

第二十八話

|

|

|

|

|

|

|

452

473

494

507

524

544

第一話

「どうかこの子には、心穏やかな日々が訪れますように——」

そんな、祈るような暖かな囁きを、記憶の彼方で聴いた覚えがある。



唐突ではあるが、自分の頭の中に閉じ込めてある『考察』を許して欲しい。

『夢』を見た覚えは誰にでも——至極稀に見たことが無いという「例外」を除けば——あると思う。

日中の活動を停止し、脳を休め、日中に収集した情報の最適化を行うなどと言われている睡眠時に見るものである。

モヤモヤとしたものであったり、はつきりとどのような内容であるか理解できたり、場合によってははつきりと感触や感情の揺れを感じ取る事もあったりする、不安定・不確定でありながら誰もが見ているもの、それが『夢』であると思っっている。

そんな不安定な『夢』の中で、眠りから覚めた時に一番厄介だと思うのが「現実感が

ありすぎる」類の『夢』だと思ふ。切迫した『夢』だったら尚の事その影響は大きい。一日中ソワソワしたり、不安になってしまふ事もあるのが、そういった「現実感がありすぎる」類の『夢』の最大の悪影響かと思ふ。

『胡蝶の夢』と呼ばれるものにある通り、「現実と夢の境界線が曖昧」になりえるのである。理性では現在が現実であると理解しているはずなのに、どこか感情が「これは夢ではないか」と思つてしまうような、そんな『夢』が存在する。

さてここからが本題ではあるが、もう既に皆さんお分かりであるかと思ふ。

現在自分は、『夢』と現実、どちらの側に立っているのか、悩んでいるのである。

「——夢と思ふには現実感がありすぎるし、だが現実だと思ふには、少々奇抜なものであるよな」

洗面台にある台座に昇り、鏡に映る自分の姿を見て、本当にそう思う。

映っているのは幼年期の少年。それは正しいのかも知れない。だが心の奥底で、『違う自分』がいるような気がしてならない。

それに照明に照らされ照り返している『黒髪』は、その一本一本を解して光に翳すと、非常に深い『青色』である事が分かる。

そして鏡を見つめるその瞳も、近付いてよく見ると微妙に『青色』になっている。

だがこれも、たった今気付いたものではなく、少しずつ、徐々にであるが、気付いて

きたものである。

幼少の頃——というには現在も非常に年若い訳だが——の記憶は朧気にあり、ここ最近徐々に意識がはつきりし、それと同時に違和感を覚え、最終的に現状のように「夢か真か」の境地に至っているのである。

だが、悩み出して約半月間。これが現実であると理解してはいるのであるがどうにも違和感を拭い切れていないだけで、そろそろ感情のほうも「認めてやってもいいんだからねっ！」と言ってくるのでそろそろ認めちゃってもいいんじゃないかと思う。

これは現実である、と。

しかしそうなると一つの不都合と言うか、不可解な現実には直面してしまうので、中々認めにくいものがある。

「青髪・青眼の純日本人は、世の中に存在しない」という現実に対し、じゃあ自分は何なんだ、っていう不可解が発生してしまう。

家族がみんな日本人なのとか、そんな話では無くなってしまう。かなり「あり得ない」話に発展してしまうから、こうして日々悩んでいるのである。

とまあ、最近はこうして悩む事から一日が始まるのであるが。最終的には、問題の先送りを行うのもセットとなつている。

「けんちゃーんっ！ そろそろご飯にするわよーっ！」

「はーいっー!」



自分の家庭環境は何やら複雑なようである。

まずこの家の家長であり自分の父、中田正元という人物なのだが。その名の醸し出す
雰囲気の通り、どうやっても「おじいちゃん」にしか見えないのである。

そして非常にガタイが良い。

「なんだ、人の顔見て? 箸が止まっとるぞ?」

ぼーっと目の前の父親を眺めていると、そんな返答が返ってくる。少々性格が大雑把と
いうか、適当な所があるが、近所でも評判の『気のいいおじいちゃん』が自分の父であ
る。

……明らかに血の繋がった父親ではないだろう。

「なんでもない。ちよつと考え事」

「もう、けんちゃん。ちゃんとご飯食べながらにしなさい」

食つてれば考えるのは良いのかよ、と思わずツツコミを入れたくなる発言をするのは
中田翔子。先に挙げた父の「孫娘」である。

つまり自分の「逆に」歳の離れた姪っ子という事になる。ちなみに卒業を控えた女子大生。

……この拭い切れない違和感は非常に如何ともし難いものがある。

「なんかそれはまた間違っているような気がする。食事中は考え事をしない、と言うべきなんじゃ」

「いいのよ。どうせけんちゃんの変態癖は言ったって止まらないんだから」

真つ当なツツコミを入れてキツく返されているのが、中田雅俊。父の内弟子であり、翔子さんの旦那。副業で父と一緒に接骨院をやっている。苗字は元々内弟子であり婿養子に入っている為。

……接骨院のほう我真つ当な職業であると思います。

そんな違和感しか覚ええない家族に囲まれているのが自分、中田堅一。傍から見ると普通だが実態は青目・青髪の日本人にはほぼあり得ない見た目をした幼児である。

ちなみに年齢はどの程度かはわからないが、幼児であると思う。非常に他人事のようにであるが、これは致し方ない。

自分は既に「社会性」を持ち合わせており、自分が一般の範疇から逸脱してしまっている事を理解さえしている。

傍から見ているような心情で自分を見つめなければ、正直やってられんのである。



うちは武道の道場をやっている。雅俊さんが内弟子として一緒に住んでいる母屋とは別に、敷地内にいい門構えの道場が立っている。

父曰く、若い頃は一人武者修行で世界を放浪していたそうだ。特に決まった流派を師事していた訳でもなく、日本古武道色の強い無手勝流に色んな流派のいいところ取りをしたという、なんとも大雑把なその流派の道場は「山田流山田道場」と看板に書かれている。

なんで山田なんだ、中田じゃないのかと突っ込んだ事はあるが「看板彫った奴が間違えたが、非常に良く出来た看板だからそのままにしている」とこれまた大雑把な回答が返って来た。以来流派は山田流らしい。

そんな大雑把な流派である山田流は、老若男女合わせて門下生50名を超える町内ではでかい規模の道場である。

雅俊さんのような内弟子こそ一人だけだが、日頃の運動不足解消やシェイプアップ、ついでに護身術と武道の精神を学ぶために日々門下生がこの道場を訪れる。

そんな道場も今日は休日。今は広い板張りの床に、何故か自分と父、翔子さんと雅俊

さんの四名が座布団敷いて座っていた。

「……あのー、何が始まるうとしていゝるんでしようか」

普段中々訪れる事のない道場に、何故四人集まって座っているのか。しかも1対3で自分の正面に大人三人が座るといゝいかにも「これから何かあります」と言わんばかりのシチュエーションである。

さすがに声を上げずにはいられなかつた。

「うむ。お前も三歳になり、俺たちの言葉も理解できるような年齢になつたみたいだしな。色々と話をしておこうかと思つていゝる」

その言葉に、喉の奥から奇妙な音が鳴る。『自分が三歳である』という事実に凄まじい衝撃を受けたのだ。

こんな三歳児あり得ないだろう……。

「なんつーか、お前自分が三歳だつて事に驚いてるだろ。無理もないと思うが」

呆れたような視線を向けてくる我が父上に無言でコクコクと頷く。あり得ないものはあり得ないのである。

だが事ここに至つて、更に父は衝撃的な話を重ねてきた。

「まあそれにしても『まだ生まれたばかり』だつた赤ん坊、つまりお前を引き取つてから三年程度つて事で、実際にお前がいつ生まれたのかは分からのだがな」

父上様、さすがにそれはシヨツキングすぎる話ではないでしょうか。



父の話を要約するところだ。

ある日の早朝、内弟子と二人で道場の掃除から始まる日課に繰り出し道場へ入った所、そこには毛布のようなものに包まれた赤子がいた。

どうにも生まれたばかりにしか見えないその赤子がどこから来たのかも分からないが、とにかくどうかしなくてはと思い大学通学の為家に住んでいた翔子さんと三人頭を捻り、なんやかんやで父が引き取り育てる事に。

その子育てを通じ祖父と孫娘のコミュニケーションも円満となり、また内弟子と孫娘は共に『はじめての子育て』に四苦八苦する内に愛を育み「二人の子供も欲しいね」なんて事になってめでたくゴールイン。女子大生でありながら人妻であるという特殊属性が生まれたらしい。ちなみにそれまで翔子さんは「おぼこ」だったそう。

後半は本当にどうでもいい話だが、要は自分は「養子」らしいのである。

「まあ、理解はしていたら？ 自分が実の子供じゃないなんて事ぐらい」

「いや、まあ。正直に言っちゃうと一目瞭然というかなんというか……」

「だよなあー」

ほんとに適当なやり取りだなこれ、とか思ってしまうくらい場の雰囲気は緊張感が全くなく、ヘビィな内容に比べてものつすごく軽い空気が流れている。

しかも父の隣では自分のキューピット役を務めることになった夫婦が当時を思い出したのかストロベリった空気を放ちキャツキャウフフとはにかみながら会話している。

なんなんだこれは。

「でまあお前の生い立ちはこのんな訳なんだけど。ここからが本題なんだわ」

「えっ、まだあんの?」

この居心地悪い場を正すように、改めて話を切り出す父の言葉について疑問の声を挙げてしまう。

もう終わったもんだと思っていた。

そしてその言葉に合わせるようにはにかみ夫婦を会話を止め、姿勢を正して自分を見つめる。

「言い難いとは思うんだが、お前、どうなってんだ?」

「……え。いや、どうなってるって」

「あー、なんていうかな。お前はとも “子供” じゃない。普通の、それこそ雅俊と同じように会話できるぐらいに “人間” なんだよ。自分でも理解してるんだろうが、それは

「子供」じゃない訳だ」

言われた事について心臓が跳ねる。

それは今朝も感じていた違和感でもあり、日々過ごす中で疑問に抱いている自分の「社会性」を疑問視する質問だった。

「自分を見て他人を見て、自分と他人の差異に気付くつつーのはガキでもできるだろうが、お前の場合その差異が「何」で、「何故」その差異が存在するのかを確認しようとしている。それは「子供」、ましてや口を開いたばかりの三歳児のする事じゃねえ。――まあ、大人しくゲロツちまえ」

その有無を言わさぬ言葉に、自分はあつさりと両手を挙げ、腹の中のものを吐き出した。



自分の抱える違和感の正体、自分と家族との差異の疑問に関する解答があり、自分の中に存在する「社会性」に関してゲロツたその日から、毎日鏡を見て悶々と考える事は無くなった。

正直一度ゲロツてしまえばあとは野となれ山となれ、だ。

腹の中に溜まった違和感も不思議なほどスーッと溶け、毎日が清々しく過ごせるようになった。

父は「前世の知識―とかそんなもんかなあ。まあ泣き喚いたり危なっかしい真似しなさそうだからラクでいいか」なんて投げっぱなしな事を言っていたが、まさしくその通りで誰もそれで損をしないんだからいいじゃないか、と思っっている。

そんな感じで二年間、昨年より強制的に幼稚園に通わされつつ山田流の弟子にもさせられつつ、こうして日々を過ごしている。今一番の楽しみは又姪(まためい＝姪の娘)か又甥が生まれる事である。そろそろ6ヶ月。頑張ったな、雅俊さん。

予備動作からの必殺コンボ「出来たかも……ポツ」を見た時の雅俊さんの喜びようは半端じゃなかった。泣き笑い大騒ぎし父に殴られた雅俊さんはとても気持ち悪かったです。

その報告を翔子さんの両親にし、家に訪れてきた両親に土下座して「必ず幸せにします!」と言った雅俊さんはテンパリすぎでした。もう結婚しとんだろ。ちなみにその日が初めて自分の戸籍上の姉に当たる人物に会った日でした。非常に微妙な顔で見つめられましたけれども。「娘より若い弟ってどうなのよ」って自分に言われても知りません……。

そんなこんなで翔子さんのおめでたから、重い荷物以外の外への買い出しは自分が担

当する事になりました。さすがに妊娠してる人をフラフラさせるのも悪いし、自分幼稚園通ってる以外は道場にいるか市内の図書館に行くかぐらいしかありませんから。

自分の住む海鳴市の図書館は蔵書が多く、またジャンルも数多く備えている至れり尽くせりな所である。一日居ても飽きない自信がある。名前の示す通り海の近くにある市なもんで、本の大敵潮風が大変そうだなあ。

そんなくつだらない事を考えつつメモ通りに買い物を終え、調味料とお肉のパック(安定期に入り肉を欲する翔子さんの為の焼肉セット)を持ち帰る道すがら、ふと横を見た。

こう、「わたし落ち込んでます」といった雰囲気醸し出す小さな背中を見つけてしまった。

どんな精神構造だったらあんな雰囲気をあの年で醸し出せるんだろうと思うくらいに、非常に「子供らしい」後ろ姿から途轍もない重みを感じる。

あー、なんか嫌なもの見ちゃったなーとか一瞬思ってしまったが、それはそれ。正直一般的な価値観ではあの年の子供があんな雰囲気醸し出すのは異常である。自分も異常の類に含まれる訳だが。「放っておいちゃならねえ」と父の声でそんな言葉が頭の中を駆け巡っていた。

よし、じゃあ関わろう。そう思ったら後は行動するだけだった。

荷物の袋をかきかきと鳴らしながら後ろに近づき、頭の左右から下がる短めのツインテールを避けて声をかけつつぽんぽんと肩を叩く。

「お嬢ちゃん、こんにちは！」

「ふえっ！」

振り返った少女はやはり涙目で、元から大きいだろう眼を最大限に広げて自分を見返した。むむ、幼稚園では見ない子だな。知ってる子だったら良かったんだが……。

まあもう声をかけてしまったので仕方がない。知らない子だろうと放って置けないと判断した以上このまま何もしない訳にはいかなのである。そう思い手に提げた荷物をかさつと持ち上げて笑顔で言った。

「よう、肉食わねえか!？」

この間抜けな一言が、将来的に自分の道を定める一つの分岐点になるとは思いもしなかったのである。

第二話

自分は中田堅一、只今一応五歳。現在妊娠中の中田一家胃袋管理人、中田翔子さんの代わりに夕飯の材料を買う帰りに、道端でひどく落ち込んでいる幼女を見つけた。

幼女をこんなに落ち込めてぢやならねえと父である中田正元の声が脳内再生された自分は、勢い良くその幼女に声を掛けたのである。

「よう、肉食わねえか!」

正直、勢いに乗ってしまった自分を振り返ると赤面する事必死である。

だがしかし勢いが功を奏したのか、幼女は「ふえっ? えっ?」などと絶好調に混乱を引き起こし、その隙に「まあまあいーからいーから、寄って行きなよお嬢ちゃん」なんて言いつつ腕を引つ張り帰宅の途についております。

帰宅途中で見つけた事もあり、幼女をウチまで引つ張るのに左程時間は掛からなかった。

道中黙って腕を引かれるままに着いて来た少女の様子は、未だに不思議そうな顔をしていて、混乱が尾を引いているようである。

まあ当たり前だ、どこの世の中に突然声をかけて「肉食わねえか!？」と言う人さらいがいるか。そんな人間自分しか居ないであろう。対処法なんて分かりっこない。

あつさりとウチへ連れ込むのに成功した自分は「ケ・セラ・セラ（なんとかなるさ）」な気分です母屋の玄関を開けた。

「ただいま戻りました」

「あの、えと……」

「まあまあいいーからいいーから」

玄関前に来てようやく混乱から覚めたのか、少女は一瞬拒絶の姿勢を見せるがそうは問屋が卸さない訳で。正直ここまで連れて来て逃がしては意味がないので、相変わらずの胡散臭さ抜群の言葉で家に引き入れようとする。

とここで、玄関へ向かってくる足音一つ、ゆっくり移動している事から翔子さんだろう。

「けんちゃんおかえり。ちよつと遅いよーって、あら？　桃子さん所のなのはちゃんじゃない？」

翔子お姉さま、この少女を知っておられたんですか……。



アツアツのホットプレートの上でジュージューと香ばしい匂いを放ちつつ完成されていく原始的でありながら究極的に旨い肉料理の一つ「焼肉」。

それをまるでバキュームの如き勢いで胃袋へ納めていく我が家族がおりました。

「うめえうめえ」

「うめえうめえ」

山田流師範であり我が家の長、父である正元さんとその孫娘の翔子さんである。しかし翔子さんよ、未だ二十も半ばも娘さんが「うめえ」なんて言うもんじゃなからうもん。「はいはい、どんどん焼いていくから慌てないでちゃんと飲み込んで食べてね。あつ、二人ともご飯無くなるけどおかわりいるかい？」

「うむ、弟子よ頼む」

「お願いね、あなた」

肉をプレートに載せつつ差し出された茶碗にご飯を山盛りするのは仕事帰りの旦那様、雅俊さん。ほんと「パパ」な感じになってきたよなあ最近……。

そんな様を横目で見つつ、自分もプレートから肉を拾い、自分と、隣に座る幼女の器

にそれぞれ載せる。

「はいなのはちゃん。これ焼けてるから大丈夫だよ」

「あつ、はい。ありがとう……」

箸が進まないのか、元々この程度の食の進みなのか。一枚一枚をゆつくり食べながらご飯と肉を交互に咀嚼する幼女は高町さんちのなのはちゃん。ひらがな三つで「なのは」だそうだ。

翔子さんが近所で見つけた「ママ友」である高町 桃子さんの娘さんで、自分と同じ5歳。早生まれらしいが自分も早生まれだったりする。正確にはわからないけれども！

なんでも明らかに女子大生な翔子さんが抱っこ紐で自分を抱えて買い物していた所、同じ売り場にこれまた明らかに女子大生程度にしか見えない桃子さんが、なのはちゃんを抱っこ紐で抱えて買い物しているのを確認。すぐさま声をかけお互いに苦労とか話している内に仲良くなったとの事である。

女つてスゲエ、自分と同じ状態というだけで知らない人でも話しかけられるとかまじスゲエと心の中で思った。恐らく父と雅俊さんも同じ気持ちだった事だろう。笑顔でありながらも若干驚きを含んでいる顔だった。

んでまあお互いに協力しながら子育てをしつつ、互いの境遇を話していたりしたらし

い。翔子さんはなのはちゃんのおむつを換えた事があるそうだ。

「桃子さんはけんちゃんのおむつ換えた事あるわよ」

「やめてええっ！ 考えないようにしてた事をあつさり言うのやめてっ!!」

「高町さんち男の子は一人居るけど旦那さんの連れ子らしくて赤ん坊の男の子は初めてだつて。けんちゃんのあそこを啄いたりしてたわよ」

「ぬぐおおおおおっ!! 誰かつ！ 誰か自分が今聞いた事を忘れさせてくれええええっ！」

見ず知らずの女性におむつを換えられた事も恥ずかしいが、その女性に恥部を啄かれたなんて知りたく無かったわ!!

なのはちゃんはゴロゴロとのた打ち回る自分を不思議そうな目で見ている。何が恥ずかしいのか分からんのであろう。うんうん、まだ君にはこの恥辱は早いのであるよ。

その桃子さんにもし会うような事があつたらどんな顔をすればいいのかわからんね、うん。気まずい感じになるのは確かだろうが。

そんな恥辱混じりの夕食も終了した所で、みんなでお茶を飲みつつまったり談笑。

翔子さんはなのはちゃんとお話をしつつ、桃子さんの近況を聞いている。ていうか、桃子さんは『翠屋』という喫茶店の経営者兼店長だそうで。ちよくちよく翔子さんが買ってくるシュークリームはその店で買ってきていたらしい。

まあ最近は妊娠しているもんで表に出ない上に悪阻をあったもんで行けていないそうだが。

「それでなのはちゃん。お父さんは元気？ 土郎さんだっけ」

翔子さんがそう聞いた途端、オドオドしながらも質問に答えていたなのはちゃんは一転して意気消沈。ウチに連れてくる前のような重い物を背負った雰囲気醸し出し始めた。

うーん、なるほど。家族に何かあつて沈んでいたって事か。翔子さんも納得のいったような表情を見せ、なのはちゃんの背中をポンポンと叩く。

「何かあったのかは分からないけど、お姉さんにお話してみない？」

背中を優しく撫でながら促す翔子さんの言葉に、なのはちゃんは涙を流しながらわんわんと泣き始めてしまった。



泣きながら伝えたなのはちゃんの話の纏めると、父親の土郎さんは事故に巻き込まれて入院、現在も意識不明の重体。桃子さんはその看病と翠屋の経営で大忙し、ご家族である姉も翠屋の手伝いで大忙しで、兄は学校から帰ってはどこかへ一人で行って夜中に

帰るような生活。なのはちやんは一人家でお留守番という寂しい状態になっている、という事だ。

父親の事故をきっかけに家庭がうまく回らなくなるというのは理解できるが、その兄が家族放つておいてどこかへ行くという行動が一番問題なのではないかと思ってしまう。翠屋の手伝いをしている訳でもなさそうだし……。

泣き疲れたなのはちやんは翔子さんの膝を枕にしてぐずりながら眠ってしまった。優しく彼女の髪を撫でる翔子さんは、まさしく母親の表情をしている。子を生む親は偉大だねえ。

「実はさつきね、翠屋さんへ電話しておいたのよ。なのはちやんお夕飯食べていくから遅くなるって。桃子さんじゃなくて娘の美由希さんが出たから何かあったのかと思つてね。お兄ちゃんの恭也君が迎えに来るって言つてたから」

翔子さんは始めから何かを察していたらしい。それでもなのはちやんに聞いたのは結局、本人から聞くしかなかつたからなんだろうけど。このぐらいの歳の子が普通一人寂しく過ごすというのはよろしくない事だもんな。

しかしその恭也さんも、何を考えているのやら。と思つたら呼び鈴がピンポンと音を鳴らす。件の恭也さんがどうやら来たらしい。

さてどうするのか、と思つたら父と雅俊さんが席を立ち上がった。

「さて、利かん坊が来たみたいだからな。ちよつと男同士で話をして来るわ」

「翔子はなのはちやんをよろしく。けんちゃんも来るかい？」

「いえ、辞めておきます」

「そうか」

父と雅俊さんが二人で行くという事であれば、自分が行くのはよろしくないだろう。恭也さんとしても余り見られたくない姿を見せてしまう事になる。

そう考えていたのが分かったのか、雅俊さんは得心した顔で一つ頷くと、父と一緒に玄関へと向かっていった。

さてさて、どうなる事やら。



結果から言うとうと、どうやら恭也さんは土郎さんが復帰するまでウチの道場に通う事になつたらしい。

と言つても学校から帰つた後は翠屋の手伝いをし、その後ウチに来て父の扱きを体験する、というコースらしいが。過酷だ……。

「君がなのはを連れてきてくれたのか。ありがとう」

眠っているのはちゃんを背負い頭を垂れる恭也さんは、少し尖った印象のある美少年でした。なにこのイケメン、とマジで一瞬思ってしまう。

「それでは先生、皆さん。ありがとうございました。明日もまたよろしく願います」「うむ。桃子さんへ明日病室にお伺いする旨、伝えておいてくれ。あとなのはちゃんの事もな」

「はい。何から何まで申し訳ありませんが、よろしく願います」

颯爽となのはちゃんを背負い去って行く彼は、どこかすつきりとした表情であった。

しかし明日、病室へ行くという事は土郎さんのお見舞いに行くという事なのだろう。なのはちゃんの事と言うのは、ウチで預かるって事かな？

「違うわよ。恭也君がウチに来ることになったって結局一人なのは変わらないんだから、じゃあお夕飯はウチで食べる事にしましょうって」

なるほど、そういう事か。確かにきちんとお家があるんだから、寝る時とかはそっちのほうがいいに決まってる。夕飯をこちらで食べるのであれば一人寂しくなんて事もないだろうし、なによりウチには恭也さんが通う訳だし。誰もいない所よりは全然良い訳だ。

「さて、じゃあ明日は桃子さんと土郎さんのお見舞いに行かないとね。おじいちゃん、私も行くわよ」

「ま、そう言うと思つたがな。身体は大丈夫か？」

「もう安定期入つたもの。これからちよろちよろ身体動かさないと良くないわよ」

むん、と可愛らしく力こぶを作るようなポーズで翔子さんが言うと、父と雅俊さんはヤレヤレと言つた苦笑いを浮かべる。

まあ、昔つからこんな人でしたよねえ翔子さんは。



明けて翌日。

自分が幼稚園から帰つてくると既になのはちゃんが居間でジュースを飲んでいた。

「ただいまーつと」

「あつ、お、おかえりなさい」

少しもごもごとおかえりを言うのはちゃん。昨日の今日で慣れる訳もなく、つい言い淀んだみたいだ。それでも昨日のような重い空気は纏つておらず、良い結果に転がったようである。うむうむ、よきかなよきかな。

「あつ、帰つてきた。じゃあおじいちゃん道場に居るから呼んで。すぐ病院行くわよ」

「はーん」

台所からひよいと顔を出した翔子さんは、すぐさま気付いて声をかけてくる。

さて、自分は特に準備をする事もないし、ちゃつちやと病院へ行つちやいますか。

と父の駆る車で走行する事30分、到着したのは鳴海大学病院。市内で一番設備の充実しているこの病院はまさしく巨大であり、噂ではとある難病に関する研究と治療が行われている場所でもあるらしい。その難病がどんなものかは知らないけれどね。

それで、ウチの父はどうやら病院の先生に知り合いがいるらしい。なんでもまだ若い女性の先生らしいのだが……。

「父上。どうやってその女医さんとお知り合いになったんでしょうか」

「おい息子よ。不穏な発言をするのはやめて貰おうか。ちよつと前にウチの院で整体や骨接ぎを勉強しに来とっただけじゃない」

父の言葉にホツと安堵する。ウチの父は道場をやっているが、それともう一つ、昼間は接骨院を開設している。人体構造を武術を通じて理解した父は、その知識を生かし癒し方も勉強、接骨院を開設したという事だ。

「お待ちせしました。お久しぶりです、中田先生」

背後から聞こえてきた女性の声に振り返ると、綺麗な銀髪の『女の子』が立っていた。……どう見ても女子高生程度にしか見えないんですが。でも白衣着て胸にはネームタグが装着されている。

「紹介しよう。フィリス・矢沢さんだ。さつき言ったがウチに整体を習いに来た事もあ
る、高町士郎の主治医らしい」

「フィリス・矢沢です。よろしくお願ひしますです」

こちらに向けて頭を下げるフィリス先生。その勢いで綺麗な銀髪がサラサラと音を
立てるように、流麗に流れていく。

——こんな美人と一緒に居て、本当に疚しい事は何も無かつたんだろうか。

「父さん……」

「おじいちゃん……」

「本当に無かつた。何も無かつたんだ、マジでだ。母さんに誓つてもいい」

母さんとは今は亡き父の嫁さんの事である。そこまで必死なら、まあ、信じてもいい
かな、とは思つた。



フィリス先生に病室まで案内されている間、フィリス先生は士郎さんの容態に関して
説明をしてくれた。

先日まで状態が安定していなかつたそうだが、峠を超えた今では随分落ち着いている

という事。腕部に大火傷があったり折れた肋骨が内臓を傷つけたりしていたそうだが、そちらも手術で修復し、既に抜糸も終わっている。問題なのが昏眠状態から回復しない所だそう。

一応頭部の確認もしたが特に損傷も無く、植物人間になるといった心配は無さそうではあるが思ったように意識が回復しないとの事。意識の回復を待つばかりであるらしい。

状況は良いのか悪いのか、よく分からない所に来ているが、まあ医者でもない自分は何もできる訳ではない。自分でできるのは正直、フィリス先生の言葉を聞いて不安になったのはちゃんを慰めるぐらいだ。

「大丈夫だよ。土郎さんが起きちゃえばすぐまた一緒に過ごせるようになるから」
「うん……」

弱々しく、だがしっかりと繋いだ手を握り返してくるなのはちゃんの頭を撫でてから、病室へと入る。

個室のベットに横たわる、心電図を付けられた男性と、その横に少々疲弊した女性が居た。見た目通り疲れてしまっているのだろう、その柔らかな笑みにも少し陰りが浮き上がっている。

「なのは、翔子さん……」

自分たちに気付いた女性は、声をかけるとすぐに頭を下げてきた。この女性が高町桃子さん、なのはちゃんの母親で翔子さんの友人。ベッドに横たわるのは旦那さんの土郎さん。眠っている状態ではあるが、顔立ちが恭也さんに似ているように見える。

「お母さん……」

「もう桃子さん、一言連絡くれればいいのに。何だつて協力したのよ」

「ごめんなさいね。身の回りの事で手一杯で……」

すぐに駆け寄ったなのはちゃんを優しく抱きとめ、桃子さんは翔子さんの言葉に苦笑を浮かべて謝罪する。旦那さんが大怪我で入院したという事で、大わらわになつてしまったのだらう事はよく分かる。翔子さんもそれが判っているのか、一言言つただけで桃子さんを気遣う言葉をかけていた。

ふと父を見ると、一瞬苦い顔をしたかと思えばすぐにフィリスさんへと向き直る。

「手術等は終わったという事だが、掌や足裏へのマッサージといった刺激は与えても大丈夫か？」

「はい。実は私のほうからお願ひしようかと思つていたんです」

どうも父は土郎さんの治療に協力するつもりらしい。フィリスさんも意図に気付いたように言葉を返していた。

だが父はふむ、と一拍考えると桃子さんへと声をかけた。

「桃子さん。俺は接骨院もあつて毎日に来てやる事も出来んが、あなたは毎日見舞いに来ているだろう？ 掌と足裏の簡単なマツサージを教えてやるから、毎日やってみないか？ 神経への刺激は意識の覚醒にも丁度よい」

「私に、出来るでしようか……？」

「大丈夫、力是要らない。必要なのは毎日続ける事と、的確に刺激するコツじゃ。どれ、今ちよつと教えてしまおう」

父さんはそう言うと、すぐに士郎さんの傍へ寄り、動かしても大丈夫そうな右腕を取り桃子さんへ手本を見せる。

「まず掌の場合は薬指を優しく揉みほぐし——」

父さんが士郎さんの掌を参考に講習を始めると、桃子さんと一緒になのはちゃんも、聴き逃すまいと真剣な表情で説明を聴き始める。

自分と翔子さんは、その姿を静かに見つめているのだった。



父さんが桃子さんへマツサージを教えたその日、帰りがけに自分は桃子さんへ礼を述べられた。

「堅一君、なのはの事ありがとうね。良かったらこれからもなのはの事、お願いしてもいいかしら」

「お礼を言われるような事じゃありませんよ。なのはちゃんも、明日また来るんだし、一緒に遊ぼうね」

「うん。ありがとう、堅一くん。またあした」

今日は桃子さんと一緒に帰るらしいなのはちゃんはそう言つて、笑顔でその日はお別れした。

その日から約一ヶ月間、平日は毎日幼稚園から帰るとなのはちゃんがウチに居て、一緒に遊んだり自分の稽古を見学したりしていた。ちなみになぜ自分より帰宅が早いのかと言うと同じ幼稚園に近所の子がいるらしいのだ。かと言って仲が良い訳でもないらしいが、その子は自分の事は知っているとの事である。

そつかーと思いつつ今日もなのはちゃんの相手をしつつ稽古をし、終わったら夕飯を一緒に食べてお風呂に入る。一応子供一人で入るのは危ないという事なので自分も一緒だ。流石にこの年の子に欲情するような奇異な精神は持ち合わせていないし、精通すら始まっていない自分が興奮する訳もない。気分は娘と入る父親だ。

お風呂から上がると来ているだろう恭也さんの鍛錬を待つ為に、なのはちゃんと再び遊ぶ。

もつばら最近ではテレビゲームでの対戦時間である。

「えいつ、このおつ」

「ふつ、甘いわねなのはちゃん！ 大パンチは隙が大きいからボディがガラ空きよつ!!」
ガチャガチャと必死になって操作するのはちゃんに対し、大人気なく勝ち誇った忠告をしつつ隙を突いては連続コンボを叩き込む翔子さん。なんとまあ大人気ない事を。

ちなみにあれからも翔子さんと桃子さんは毎日電話でやり取りをしていて、その日のなのはちゃんの報告をしたり、桃子さんから土郎さんの様子を伺ったりしている。最近ではマッサージの刺激に反応を返すようになっていて、目を覚ますのも時間の問題だろうと喜んでいるそう。

「ふえーんつ、またまけたー!!」

「はっはっはっ！ まだまだ甘いわねなのはちゃん！」

どうも連続コンボから一度も地面に着地する事無く決着してしまつたようだ。テレビ画面ではこれでもかと勝ち誇つた翔子さんのキャラクターが映っている。本当に大人気ない事を……。

「えーんつ、けんちゃんまたまけたー！」

「あーはいはい、また翔子さんの事を負けさせればいいんだね」

「うんつ、なのはのかたきを取つて！」

泣きべそかいて引っ付いてくるなのはちゃんの頭を撫でつつそう言うと、嬉しそうに返事を返す。ここ二週間ほどでなのはちゃんからの呼び方が「堅一くん↓けんちゃん」に変わったのは、仲良くなったのは元より翔子さんの影響もあるだろう。別に問題ないのでそのままにしている。

さて、それじゃあなのはちゃんの敵を取るかなと思いいコントローラーへ手を伸ばした所で、ウチの電話が鳴った。

「はいはいっと。じゃあ電話出てくるからけんちゃん、なのはちゃんと仲良くゲームしててね」

「ゲームで機嫌が悪くなるのは翔子さんぐらいだよ……」

よっこいしよと、最近目立つようになったお腹を抱え、翔子さんは立ち上がると電話台へと向かう。こういう時自分が行ったほうがいいんじゃないかと一度聞いてみたのだが、ちよつとした事で動かなくなると動きたくなくなるから自分で出来ることは自分でしたいとの事で、こういう時は翔子さんに任せている。

「じゃあなのはちゃん。二人で遊ぼうか」

「うんっ」

そう言つて二人でコントローラーを手に、対戦キャラクターをどれにしようか選んでいく。

二人とも決まった所でステージを選択して、さあ始まるぞという所で、バタバタと何やら慌てた足音が聞こえてきた。ていうかこれ翔子さんじゃ！

「二人とも！ すぐに出れる準備して！」

「ちよっ！ 妊婦が走ったりしちゃダメでしょうが！」

「んな事はどーでもいいのよっ！」

「いやいや良くないからね！ とりあえず一回落ち着いて！」

慌てて駆けてきた翔子さんに落ち着くように言うと、翔子さんは一度深呼吸し、それでもやはり若干慌てた口調で捲し立てた。

「土郎さんが、目を覚ましたって！ けんちゃんすぐにおじいちゃんとかんと恭也君呼んできて！」

その言葉を聞いた途端、自分は慌てて立ち上がり二人のいる道場へとダツシュしていった。



「中田先生。お世話になっていましたようですね」

「全くだ馬鹿者。家族を心配させるような情けない事態を引き起こすとは思わなかった

わ」

「面目もございません」

あれからすぐ道場へ飛んで行き父さんと恭也さん、なのはちやんと四人で病院へ駆けつけると、眠りから覚めた土郎さんが、桃子さんに寄り添われて身体を起こしていた。そこへ先ほどの言葉へ繋がり、二人とも苦笑交じりで言葉を交わしている。

「お父さん……」

「なのは、心配かけてごめんな。恭也も、すまなかつたな」

「父さん。良かったよ」

なのはちやんは声をかけられるとわーっと泣きながら土郎さんへ飛びつき、恭也さんは静かに言葉を返す。その顔は本当に安堵したような表情だった。ちなみに娘さんの美由希さんの所へは翔子さんと雅俊さんが行っており、一緒にこちらへ来るという事だった。車が5人乗りだったししょうがない。

「堅一君。君も、なのはの事ありがとう。桃子からとても良くしてくれていると聞いているよ」

「いえ、自分と一緒に遊んだりしていただけで……」

「これからも、なのはと仲良くしてくれるようお願いするよ」

「はい、なのはちやんとでも良い子ですから」

今もぴーぴーと鳴き声をあげているのはちゃんを見ながら答える。士郎さんも、なのはちゃんの頭を優しく撫でながら、笑みを浮かべて彼女を見つめていた。



その後駆けつけた美由希さんも泣きながら士郎さんへ抱きつき桃子さんも泣き笑いを浮かべながら喜んだその日から二週間、あつという間に士郎さんは退院をした。

手術などは元々終わっていたし、その後の経過も良好。すぐに点滴から流動食、刺激の少ない和食を中心の食事へと変化し、すぐさま退院という常人では考えられない回復を遂げていた。

だが中身は大丈夫でも身体を構成する筋肉などは、寝たきり生活が祟って未だ復調を遂げていない。そこで、暫くりハビリとして週に3日、父さんの接骨院へ来てマッサージと柔軟を受けに来る事となった。

付き添いはなのはちゃん、いつもニコニコしながら接骨院へ訪れては甲斐甲斐しく士郎さんのお手伝いをしている。

「全く娘に甲斐甲斐しく世話をされるとは、いい身分だな」

「いやあ面目ない。普段構ってやれなかったもので。しかし先生だってお孫さんがいつ

も一緒に羨ましい限りですよ」

「まあな。あいつもそろそろ出産だし、ひ孫が生まれると思うと嬉しいもんだ」

「そうか、もうお子さんが生まれるんですね」

うつ伏せになり寝転がる土郎さんの背中をマッサージする父さん。最近筋肉の張りも出てきたしそろそろマッサージから筋力トレーニングへ切り替えようかなんて話もしていた。

自分となのはちゃんはその光景を横目で見つつ、漫画を読んでいた。と、横からツンツンと啄かれ、顔を向けるとなのはちゃんがキラキラした目で自分を見ていた。

「ねえけんちゃん。けんちゃんのお母さん赤ちゃん産むの？　けんちゃんお兄ちゃんになるの？」

「えっ」

「えっ？」

一瞬間が理解できなかったが、まあ翔子さんの出産の事を言っているのだらうとは思う。そしてなのはちゃんは恐らく翔子さんを「けんちゃんのお母さん」と呼んでいるんだと。——まあ普通に考えて、翔子さんが母親だと思われても仕方がない訳だが。

父さんもそこに思い至ったのか、マッサージをする手を止めて思案していた。

「うむ、確かに。普通はそう見えるがな……。あー、堅一、なんとかしろ」

「そんな大雑把な……」

「ウチも複雑ではありませんけど、先生の所は説明しづらい複雑さがありますよね」

「いやあそうですねえ確かに自分は翔子さんが育ての母親とも言えると思うんですが、戸籍上はその人が父親でして……」

どうもある程度察したらしい土郎さんも会話に加わり、投げっぱなしの父と二人で、どう上手いこと説明しようか考えこんでしまった。

まあそんな事もありつつ、高町家と中田家は、これからもずっと、お付き合いをしていく事になるのです。

ちなみに翔子さんのお子さんはこの会話から一ヶ月後の昼間に生まれました。破水してから一時間後という脅威のスピード出産。元気な女の子です。

せめて、雅俊さんが病院に到着するまで待つてあげられなかったのかと、ほんの少し雅俊さんが不憫に思えてしまうのです。

第三話

自分は中田堅一。少々奇特な環境に生まれ育つた幼児だったが、この度めでたく幼稚園を卒園し、小学校へ入学する事と相成りました。ただ、その小学

校入学前にもゴタゴタがあったりなかったり。きつかけは些細な事ではあるが、正直人生設計に影響を与えるような選択が発生してしまったのです。

「ですから、この聖祥大学付属小学校でしたら小学生の頃から高度な教育を受けられますし、ウチのなののもこちらの小学校に通わせるつもりですし、ここは一つ、堅一君も一緒に学校へという事にしましょうよ、ね？」

「とは言いがなあ……。コイツに高度な教育なんざ今更必要だとは思えんし、そこは私立なんだろう？」

世間ズレとかしちまいそんな気がしてなあ。聞けばイイトコのポツチャン嬢ちゃんに通うような学校じゃねえか」

低姿勢ながらも一步も譲る気はなさそうな土郎さんと、父がちゃぶ台越しに言葉のドツチボールを行っている。ちゃぶ台の上には「聖祥大学付属小学校

入学のしおり」と書かれたパンフレット。表紙にはいかにもイイトコっぽいお坊ちゃんとお嬢様が写っている所を見ると、父の言葉は正しいようである。

そう、中田堅一の小学校入学が、一気にイイトコの学校へ入学するのかしないのか、というゴタゴタが現在進行形で発生しているのである。流石にこれ

はどうでもいい話ではないので父も結構真剣に考えている模様。父の懸念は「お坊ちゃんでもない自分がやっていけるのか」といった事なんだろうと思う。

しかし、そこまで気にする事ではないような気がするなあ。まあ普通の市立小学校に入ると思っていたから多少は驚いているが。この家の経済力的には何

ら問題ないと思うし。

「ねえねえけんちゃん。けんちゃんは違う学校行っちゃうの?」

「んー……、それを今父さん達が話し合ってるんだよねえ……」

二人の話し合いを背にやはりTVゲームと一緒に遊んでいたなのはちゃんが、純粹無垢な表情で問いかけてくる。空気を読んだのか読んでないのか、背後の大人二人は静かになり、こちらの会話に耳を傾けているようだ。

自分としてはどちらでもいいのだが、土郎さんの言う「なのはちゃんと一緒の学校」というのに魅力を感じない訳ではない。主に保護者的な心情で。何となく危なっかしい

からなあこの子は。

まあそういう事で、いつちよ助け舟でも漕ぎ出しますかねえ。

「なのはちゃんは、自分が違う学校に行ったら嫌かな?」

「やだ! 一緒に遊べなくなっちゃうかもしれないでしょ? こないだお母さんが他所の学校より時間長いって言ってたの」

「あー、そうなんだ。それだと確かに遊べなくなっちゃうかもしれないね、時間が合わなくて」

「でも一緒の学校だったら学校でも遊べるでしょ?」

「まあそうだねえ。別のクラスになっても休み時間は同じだしね」

「あーもういい、分かった分かった」

自分となのはちゃんが会話をしている所に父さんが口を挟んでくる。振り返ると若干呆れた顔で自分を見据えていた。

「お前、そういう嫌らしいやり方するなよ」

「ごめんね、こういう性分なんで」

「はあ……。勝手に育ちやがったガキは始末に負えねえなあ」

眉間に指を当てながら大仰に頭を振る父。申し訳ないけど、こういう性分なんですよ。

「じゃあお前、入学試験パスできるんだな？」

「満点でも取れば満足ですかねお父様」

「言つたな？」

困り顔から一転、ニヤリと怪しげな笑みに切り替わつた父に思わず心の中で舌打ち。この親父、満点取れなかつたら何させるつもりだ……。

「つー訳でだ。入学願書出すから必要書類を揃えてくれや」

「はい、ここにありますからどうぞ」

満面の笑みで諸々の書類を鞆から取り出した土郎さんに、父さんは渋い顔を見せた。

「お前、承諾するまで粘るつもりだったな」

「桃子には泊まるかもしれないと言つておきました。いやあこんなに早く承諾していただいて助かりました。堅一君も、ありがとう」

「いえいえ」

はつはつはつと非常に爽やかな笑顔を見せる土郎さんに、父さんは「ぐぬぬ……」と言わんばかりの表情で返している。なんとも対象的な二人の構図だが

、これにて自分の入学騒ぎは一件落着つて所かな。

「はいはい。いろいろ決まつた所で、翔子さんのご飯が出来るから配膳手伝つてねー」
そう翔子さんが呼びに来るまで、二人はずっと、渋い顔と笑顔で対峙しているのでし

た。



その後順調に入学願書提出と、入学試験を消化。無事に合格して晴れて私立聖祥大学付属小学校への入学が決定しましたとき。ただ一つ問題があったのは、試験結果が満点では無かった事。

「まあなんだ、ペーパーテストは満点だったみたいだが、な。自由行動すら試験科目になるっていうのはすげえな私立の小学校ってのは」

「教室でっ、読書がっ！ ダメ、とはおっ、もわなかったあ！」

グググ……と腕に力を入れ、腕立て伏せ。胴体には程々に重いトレーニングベストを着けて、そろそろ約束の200回到達でございます。

「しかし運動テストは大変だったな。懸垂10回程度しただけで教師どもが慌てやがる」

「もうっ、ひとりっ！ できたっ、子が居た！」

「おお、あの子な。女の子だっのに体力あったわ」

「198っ！ 199っ！ につひやくっ!!」

200回達成と同時にピターンッ！と床に転がる。春先だつていうのに昼間っから汗だくになって床に寝転がる小学生は自分くらいのものだらう。ゼーはーゼーはーと息を切らせながら父を見上げると、何かを自分へ放り投げる所だった。慌てて手を胸元へあげて投げられたものを受け取る。

「おわつとつと」

「それな、これから肌身離さず着けてろよ」

「なにこれ？」

父の投げ渡してきたものを見ると、本革のような材質だが両面がツルツルしている、腕時計のベルトだけのようなもの。丁度ベルトの中間点に小さな宝石が埋まっている。

「ブレスレット？」

「おう。お前が赤ん坊の時にずっと握りしめてたもんだ」

「へー」

何やら重要な事を聞いたような気もするが、正直どうでもいい。自分の出生に関わる一品なのだろうが、こんなもんで手がかかりにすらなりはしない。何せベルトに刻印も何も入ってはいないし。

「まあ大事にするよ」

「そうしといたほうがいいだろうな。もしかしたら何かわかるかもしれん」

「いや、こんなもんじゃわかんないでしょ……」

言われた通り左の首に巻きつける。うん、ピツタリフィットする。ていうかサイズが丁度良い。違和感も全く無く、非常に肌に馴染む逸品だという事は分かった。しかし、恐ろしいほどにフィットするなあこれ。何かありそうな気がしてきたわ。

「なんか本当に、何かわかるかも」

「だろ？」

そういう我が父君は、非常に良い笑顔を向けておりました。



さて、翔子さんの娘さんである綾子（あやこ）ちゃん約1歳半が初めて喋った言葉が「じーじー」だった衝撃の日を掻い潜り、やって来ました入学式。お約束の学校前の記念写真は俺の横に綾子ちゃんを抱っこした父さんが満面の笑みを浮かべている構図となりました。デレすぎだろじい……。

入学式の席順は名前の順で、一番右上が「あ」で始まり、最後は「わ」となっている。まあ「ンジヤメナ」とか「ンゴロンゴロ」とか奇抜な名前を持つ外国人がいない限り、大体が「わ」となる。渡辺とか綿貫とかね。

なもので、「な」から始まる自分と「た」から始まるなのはちゃん結構間が開いておられます。隣にいても内緒話したりとかはしなくてね。あ、なのはちゃんももちろん合格してありました。あんな良い子が合格しない訳が無い。

入学式と言えば学校の理事長やら校長、教育委員会の誰々がありがたい話をする訳です。そしてその後在校生代表、普通に考えれば生徒会役員の会長さんとかなんだけれど、まだ垢抜けない小学生が新入生へ祝辞を述べる。「おめでとう、ウチの学校は楽しいよ！」終わり。はいはい次いってー。

ここで今度は新入生の答辞。っていつても学校が用意した文章を読み上げるだけ。通常新入生の答辞を読み上げる子っていうのは、入試で一番を取った子の役割になる。で、その子は今壇上に上がっている女の子。

「新入生代表、アリサ・バニングス」

うん、外人さんだ。ありやハーフとかじゃない、純欧米人。キラツキラのプラチナブロンドに透き通るような白い肌。凜とした佇まいは、どこをどう見てもお金持ちのお嬢様。しかも頭も良いと来たからには、人生大勝利ですなあ。

読み上げる文章は教師が用意したものなのだろうが、中々どうして様になっている。先に祝辞を述べた生徒会長のほうは迫たどしさを含んでいたが、彼女はツラツラと流れるように読み上げている。これがお嬢様の実力というやつか……。

彼女の答辞が終わった後、在校生代表を交えて校歌の斉唱。それが終わったら保護者と一緒にこれから学び舎となる教室へと移動である。あーやつと終わった終わつたと思いつつ、軽くあくびをしつつ体育館の出口へ整列して向かう。出口で保護者と合流だ。

出口には翔子さんと娘っ子の綾子ちゃんだけが居た。

「あれ、父さんは？」

「帰ったわよ。孫の入学見に来た爺ちゃんみたいでみつともないって」

「あー……」

みつともないも何も玄孫すら生まれているじじいは何言ってるんだと思わなくもないが、いつまでも若くいたいと思う年頃なのだろう。ゲートボールとか絶対手を出さないうって言ってるしな。将棋はするけど。

まあ帰ってしまったものはしょうがない。自分は翔子さんから綾子さんを受け取り一緒に教室へと向かう。周辺の保護者が微笑ましいものを見る視線も、一緒にいるお子様達が珍しそうに見てくる視線も全て無視だ。

「あ、けんちゃん。なのはちゃんは隣のクラスだつてよ」

「そうなんだ。まあ一緒に学校だし様子は見てるから」

「よろしくね、お兄ちゃん」

お兄ちゃんって、俺はなのはちゃんのお兄ちゃんになった覚えはないぞ……。



そんな入学式も終わって小学生本稼働です。隣のクラスになってしまったのはちゃんばぶーぶー言っていたがそれはしょうがない。昼休み一緒にお弁当を食べる事と、放課後一緒に帰る事を条件になんとか治まってもらいました。しかし、自分のせいでもないのに自分が対価を払わなくてはいけない理不尽はなんなんだ……。

「——ん、今日のきんぴらごぼう。何だか母さんの作る味に似てますね」

「あ、わかったー？ こないだ桃子さんに教えてもらったのを参考にしたのよ。おいしくなってるでしょ」

「ウチの味に近いので、ご飯が進みます。あ、おかわりいいですか？」

「ああ。どんどん食べたまえ」

食卓で美味そうに飯を食っている恭也さんと翔子さんに雅俊さん。土郎さんの入院騒動時にうちの道場で稽古をつけるようになった事から、土郎さんが退院し全快した今でも月に二、三度学校帰りに稽古を受けに来ている。なんでも他流試合には色々学ぶ事が多いんだとか。

ちなみに恭也さん、というか高町士郎さんは「小太刀二刀御神流」という剣術の正統後継者であり、血脈である恭也さんとその妹の美由希さんに受け継いでいるらしい。なんでもかなり古くからある流派らしく、開いてはいないが自宅にはウチのように道場もある。かなりエグイ業もあるそうで、門外不出の流派らしい。

で、実は過去に士郎さんはウチの親父様と手合わせをした事があるとか。結果は両者とも教えてくれなかったけど、道理で見舞いに行つた時に知り合いっぽい会話をしてた訳だ。

で、その流派はなのはちゃんには受け継がないらしい。何でも「運動神経が切れているから」だとか。まあ、分かる。何も無い所で偶に転びそうになるし、足遅いしね……。そのなのはちゃんは、現在ソファーに座り大人しくノートパソコンでインターネットをしている。一緒に自分も。

このノートパソコン、士郎さんに入学祝いで買ってもらったそうで、最近ウチに来るときは必ず持参してきているのだ。

「あ、見てみてけんちゃん。この子猫さん可愛いねー。にゃーにゃー」
漁っていた動画サイトで動物動画を発見して、ひたすらに見入っているのはちゃん。そのまま成長してくれるとお兄さんは嬉しいですよ、ほんと。

ちなみに父さんは玄孫の綾子ちゃんと一緒にお風呂である。あの爺さんの最近一番

の楽しみは玄孫との触れ合いなのである。

そうこうする内に恭也さんも食事を終え、米粒一つ残さず綺麗な「ごちそうさま」を披露し、帰宅の段となった。

「ありがとうございます。次は再来週にお邪魔させていただきます」

「ああ。都合が悪くなったら連絡をくれればいいから」

「はい、雅俊さん。お疲れ様でした」

「けんちゃん、また明日ねー!」

見送る自分達に頭を下げ、恭也さんとなのはちちゃんは帰っていった。しかし見送りに間に合わないって爺さん、風呂で遊びすぎじゃねえのかおい……。



こんな日常が続いていたある日。

なのはちやんを教室まで迎えに行った所、どうもクラスメイトを追いかけてどこかへ行っただという。

ん、追いかけてってどういう事だ? と聞いてみるとどうやらクラスの中にいじめっ子がいたらしい。その子がいじめられっ子の大事なものを持って逃走。いじめられっ

子追いかける。なのはちゃんも追っかける、という構図らしい。

これは修羅場の予感……。慌てて学校内を探し回る事にした。——で、辿り着いた中庭では、予想通りの展開になっておりました。

「このっ！　このっ！」

「なによっ！　このっ！」

「あああう……、ああっ！」

中庭で制服を土まみれにしながらどったんばったんと暴れまわる二人の少女と、それをあわあわしながら見守る少女一人。

暴れているのはなのはちゃんと、学年優等生のアリサ・バニングス。なのはちゃんがいじめっ子っていう事はないのだから、恐らくアリサちゃんがいじめっ子なのだろう。そしてあわあわしているのがそのいじめられっ子という事になる。

しかしまあ女の子二人が土まみれで取っ組み合いの喧嘩って。なんとまあ今時男らしいやり方なんでしょう。

制服が土まみれなのは元より、髪の毛はぐつちやぐちやだし顔に引っかき傷やら腕に齒型まで。どんだけ激しいやり取りしてんのこの子達……。

一瞬その激しさに思わず呆けてしまったが、これだけ激しく暴れるのは問題がある。慌てている少女もどうも止められなさそうなので、自分が止めに入るしかないか。

そう思い、足を一步踏み出そうとした――

「やめてっ！ もうやめてよっ!!」

――所で、一步踏み止まり、今一度様子を伺う事にした。

意外な声の出所はあの慌てていたいじめられっ子。思つたよりも大きな声にそれまで大暴れしていた二人も大人しくなり、じつと彼女を見る。

ちよつと離れた位置にいたので小声で話されると聞こえないが、どうやらいじめられっ子が色々言っているみたいだ。その声にいじめっ子が反応し、またなのはちゃんも反応する。そんな繰り返しだが、どうやらもう争う気は無いみたいで、二人は静かに離れると制服の汚れを叩き始めた。

……どうやら自分の出番は無くなったのだろう。雨降つて地固まるとは言うが、何とかなつたららしい姿を見て踵を返し教室へと帰る。出ていくような野暮な事はしないし、変に意固地になつてしまふかもしれないので、ここは三人だけにしておこう。

明日から土日の二連休、引っかけ傷とか、軽いものであれば来週の月曜日までには治るだろうなあと思ひながら、久々に学校から一人で帰ろうと思うのだった。

その夜、なのはちゃんからお詫びの電話があったが大丈夫だとだけ言って終わりにした。



んで、その翌週。

昼休みに紹介されました。

「わたしのクラスのアリサちゃん、すずかちゃん。今日から一緒にご飯食べようと思
うんだけど、いいよね？」

「アリサ・バニングスよ」

「あ、あの、月村すずかです……」

なんというか、昨日の今日でいきなり紹介されるとは思わなかったです。

負けん気の強そうな顔で自分を見て自己紹介をするアリサちゃんと、おどおどしながら自己紹介するすずかちゃん。

先日喧嘩したばっかなのになんで仲良くなってんの？ もしかして拳で友情を育んだとかいう話か？ などと疑問に思いつつぽかーんと彼女たちを見ていたら、なのはちゃんがおずおずと申し出た。

「あの、けんちゃん……。ダメ、かな？」

凄く申し訳なさそうな顔でこちらを見てくるのはちゃんの声でハツと気付く。そういえばまだ何も言っていなかったわ。

「あ、ああ。全く問題ないよ、一緒に食べよう。自分は隣のクラスの中田堅一です」「よかった！　じゃあ早速お弁当食べちゃおう！　ね！」

につこり笑ったのはちゃんの言葉で、みんなお弁当を食べる準備を始める。

……なんていうか、子供って凄いなあと思いました。自分も子供だけけど。

こんな感じの出会いがあり、自分はそれまで一緒にいたのはなのはちゃんだったが、自然とアリサちゃん、すずかちゃんとも遊ぶようになった。

勘違いされないように言っておくと、他に友達居ない訳じゃない。幼稚園から一緒だった知り合いもクラスにはいる。ただまあ、こういう子供の遊びが

苦手なものもあって、暇な時は本を読んでもるか道場で鍛錬してるかだけでも……。

このアリサちゃんとすずかちゃん、かなり利発なお子様なようで。まあアリサちゃんに関しては何も言えなかったけど、思ったよりも考えている

。自分の事やら周囲の事やら。またすずかちゃんも似たようなもので、趣味は読書と言うが子供が読むような「ふしぎ探検！」みたいなものではなく、一般文芸小説を多く

嗜んでいるようだ。なんとも世の中にはいるもんなんだなあ年不相応なお子様が、と思つてしまう。

まあ、お互いに利発だったからこそ、今の関係があるのかもしれない。どうにも話を聞く限りお互いクラスに馴染めていなかったようだし、ね。似たような人間が近くにいる、近づきたくて、思い余つてちよつと先走つちやつたのが先日のアリサちゃんなんだろうなあと思う。あの時の喧嘩が嘘のように、今じゃ三人で仲良く笑い合つてるし。喧嘩から生まれる友情っていうのも、中々に男らしいテーマですなあ……。

「——でね、こないだウチの子が三匹子犬を生んだのよ」

「ふええっ！ そうなんだ！ 今度見に行つてもいいっ!？」

「いいわよ、それぐらい。すずかも来るでしょ?」

「うん。見せてもらいに行くね」

「うん。じゃあケンも来るって事で良いわよね」

ここで言うケンって言うのは自分の事、まあ分り易いあだ名ですわ。しかしこう、女の子三人の所に混ぜてもいいものなのかと、最近若干考えてしまう部分があるが、まあここで断るのもどうかと思うので承諾しておく。

「うん、是非見せてもらおうよ」

「決まりね。じゃあ今週の土曜日に集まりましょ。駅前まで迎えに行くから」

ま、こんな感じで、自分の周辺は新たな環境に順応しつつ、年月を経っていくのでした。

ジュエルシード

第四話

暴れまわる異形の怪物。光を放つ少年。波打つ湖面から少年へと飛来する無数の怪物の破片が、少年を大きく空へと吹き飛ばした。



「なんか変な夢も見始めたな……」

自分はずちよつと変わった境遇ではあるが極々普通の家庭で育った、小学校三年生である。名前は中田堅一。どこで生まれたかはとんと検討もつかぬ。暗い道場で泣いていた所を父達に発見された事だけは後日の話で知っている。

とまあ猫っぽいや自己紹介を介して、自分はとうとう小学校三年生になった訳である。なんだかあつという間の三年間である。

小学校三年生ともなると、周囲の子供達も中々に自尊心を持ち始め、具体的な成長が眼に見えてくる。自意識の変革がここ二年で起きている訳だ。子供っぽさは残るが暴

れまわるような粗雑な部分はだんだん抜け落ち、行動に思考が伴い始め、意識して会話を行う事が安定して可能となり始める。

まあ自分の周辺の人間は若干その部分の成長が早く、利発なお子様が多い。そしてこの度、そんな利発なお子様方と、同じクラスになった。

「あ、けんちゃん！ おはよう」

「おはようなのはちゃん。そろそろバス来るよ」

「うん、行くう」

同級生その一、幼稚園からの幼馴染である高町なのはちゃんと家前で合流し、一緒にバス停まで向かう。最寄りのバス停は鳴海東通り。ここから聖祥大付属小学校行きのバスに乗って我らが学び舎まで一緒に行くのが毎朝の通過儀礼である。

「おはようございませす」

「おはようございませす」

丁度来たバスへ乗り込み、先に乗っているであろう二人を探すと、バスの最奥から声がかかる。

「なのはちゃん、けん君」

「なのはー、こつちこつち」

「あつ、すずかちゃん、アリサちゃん。おはよー」

「おはよう二人共」

最奥に座っていたのは一年生からの付き合いである月村すずかと、アリサ・バニングス。同級生その二とその三。小学校一年生からの付き合いである。

「おはようなのはちゃん、けん君」

「おはよう」

すずかちゃんと隣り合わせで座っていたアリサは、自然とすずかちゃんとの間を開け、一人分座れるスペースを確保する。そこにすっぽりなのはちゃんが座ると、すずかちゃんが今度はなのはちゃんとの間を詰め、すずかちゃんの隣に自分が座る。これが毎朝の定位置である。

女の子三人と一緒に行動しているので、まあ自然と男か隅っこになる訳だ。だからと言つて寂しいとかそういう風を考える事はない。適度に会話に混ざる程度で正直お腹いっぱいなのである。女の子はお話好きみたいだしね。

「けん君。この間教えてもらった『クレープを二度食えば』っていう本、面白かったよ。うん、あれば漫画だからいいんだなあと思って思った」

「そっか、良かったよ。難しすぎず丁度良い感じの話が入った短篇集だったからね。再録版のほうでしょう?」

「うん。話が全部SFチックで、全体的に可愛かったよー」

すずかちゃんと言葉にうんうんと頷く。自分の紹介した本が他人に絶賛されると嬉しいもんだねえ。収録されてる話のほとんどが女の子が読んだらいいんだろうなあと思っただけから紹介してみたが、大正解みたいだ。全体的に『リリカル』なテイストだもんね。

学校へと到着し、バスの乗客各々が自分のクラスへと入っていく。昨年まで自分だけは他のクラスへと行っていたが、今年は四人一緒に同じクラスだ。

こんな感じで、一日が始まる。



学校が終わり、いつも一緒にいる女の子三人はこれから塾へ。塾へと通っていない自分分は一人、市立図書館へと向かう。自分が塾へ通わない理由は簡単、通う必要性がないと思っただけから。

自宅で予習復習は毎日ちゃんとしてるし、正直学方面ではほぼ問題がないと自尊している。学校一の優等生であるアリサ・バニングスをして「完璧凡人」と言わしめるものがある。なぜ完璧なのに凡人か、思考回路が小市民的すぎるんだと。それは別にいいんじゃないかなあと思う。小市民万歳ですよ!!

まああの三人で言うところのアリサちゃんは優等生であり、両親は大企業の経営者である完璧なお嬢様。すずかちゃんも全世界へ輸出される工業機器の開発・製造会社を営むるご両親の元で育ったお嬢様、一番市民に近いのはちやんだって、TVでも偶に取り沙汰されるくらい話題の喫茶店『翠屋』マスター夫婦の娘さんである。一番小市民なのは親父が道場と接骨院やつてる自分の家なのだから、そら小市民的にもなりますわ。

到着した図書館で自分の今見たい本を探す。目的は心理学の棚だ。

「つと、これだな」

物色して見つけたのは「夢占い」関連。正直今日ずっと、見た夢が気になって仕方がなかったのである。

というのも、ここ最近、自分の体調という調子が、ずっとおかしいのである。数日前から無性に胸がざわつき、どうにも落ち着きがない。そこへ来て今朝の夢である。あんなにくつきり鮮明に夢を見た事がない自分としては、これは何かあるのではと思つても仕方がない。

そうして、目的のブツを持って読書机へ移動しようとした時に、ふと視界の端にある意味見慣れた姿を見つける。

車椅子へと座り、それでも背伸びをしてなんとか目的の本を取ろうとする少女。やれやれと思いつつ、自分は彼女へと近づき目的のものであろう本を棚から引き抜いてや

る。

「ほれ、これだろう」

「ああ、ありがたいなあ堅一君」

本を手渡すと自分に気づき、礼を述べつつにつこり微笑む少女。彼女の名前は八神はやて、自分が常連となつてこの図書館にちよくちよく来ている同じく常連さんである。

「全く、ヘルパーさんか司書さんをお願いすればいいだろうっていつも言ってるのに」

「届くと思つたんやけどなあ。それにヘルパーさんはあと二時間は戻つてきいへんし、司書さんもどこにいるかわからん」

「はいはい。はやてちゃん、これ持つてて」

「ん、あんがとなあ」

はやてちゃんの言葉を若干呆れ顔で聞いた後、はやてちゃんに自分の持つていた本を渡し、そのまま車椅子のハンドルを持つて読書机へと移動する。はやてちゃんを見かけると最近はこのパターンで一緒に読書をする事が多い。

本が好きになつたきっかけはいつの頃からか、彼女の足が不髄となり、表にあまり出れなくなつた為の本を読み始めたのがきっかけだと言う。足に関しては現在も治療の為に鳴海総合病院へと通院しているのだそうだが、状態の改善は見られないという。

家ではどうやっているのかは分からないが、正直彼女のプライベートに深く突っ込んで良いほど親密にはなっていないと認識している。彼女から家族の話題を聞いたことがないのも躊躇する理由の一つだ。きっと、複雑な状況下にあるのだろう……。

自分に出来ることと言えば、こうして移動の手伝いをしたり、見かけた時に一緒に本を読んだり話をしたりするぐらいである。

読書机に到着し、椅子を一端に寄せてはやてちゃんの足が机の下に入るよう車椅子を止める。その隣に、自分が椅子に座って本を読むのだ。

「はいこれ。堅一君、夢占いなんて興味あったん？」

「いや、目的は占い部分より夢を見るメカニズムというか、心理的な状態の部分なんだけどね」

「なるほどな、夢見が悪かったりしとるんか？ 私の最近夢見が悪くてなあ」

「へえ、そうなんだ」

本を手渡されながら言ったはやてちゃんの言葉に興味がでる。もしかしたら自分と同じような夢を見たりしているかな？

「うん、夢の内容はようわからんのやけど、朝起きるところ、胸がざわつくんよ」

「へえ……。自分と同じかもしれないね、変な夢は今朝見たんだけど、胸がざわつくっていうのは……最近あるんだ」

「そうなんか、何かあるんかなあ」

不思議なものやなあと言うはやてちゃんと言葉を受けつつ考える。こう、二人で共通の何かが発生しているというのは言った通り不思議なものである。何が原因なのかよくわからないが、共通の何かが発生し、現在もそのざわつきが止まらない。

本当に謎な現象が起こっているなあ。——なんて思っている時に、胸のざわめきが一気に加速した。

『助けて!』

はつきりと聞こえた声に、思わず椅子から音を立てて立ち上がる。周辺を見回すが、声の持ち主が近くにいるような事は無さそうである。何より、あれ程切迫した声を発する人間が、周辺には居ない。

「堅一君?」

「はやてちゃん、今声が聞こえなかったか?」

「声? いや、何も聞いてへんけど……。ん、なんか胸がざわざわしよるよ」

「そうか……」

「何か、あつたんか……?」

不安そうな、心配そうな目で自分を見つめてくるはやてちゃんにどうしようか考える。

今自分に聞こえたのは、間違はなく子供の声である。しかし周辺にはそんな状況にありそうな声の持ち主は存在していないし、何より自分の感覚が「ここではない」事を理解している。ならばどうするか、正直自分の感覚に従い行動をしたいのだが、自分と同じような状態にあるはやてちゃんは車椅子、もし「何か」があつた時に対応できないかもしれない。さて、どうしよう……。

と悩んでいると、隣のはやてちゃんから言われた。

「堅一君。私らの「何か」がわかるんやったら、一緒に連れていつてな」

「……まあ、そうだよな。わかった」

何とも自分の考えを察したようなはやてちゃんの言葉に覚悟を一つ決める。何、なにかが起こると確定した訳でもないんだ。そう怯える事もないだろう。それに自分だったら、「ある程度」の状況であればはやてちゃんを連れて回避する事ぐらい可能だ。その為ではないが、毎日の鍛錬を行っているのは伊達ではない。

一つ決めると後はたやすい。自分とはやてちゃんの取った本をすぐ近くにある回収ボックスへ入れ、はやてちゃんの車椅子のハンドルを握る。

「ちよつと早歩きになるけど、大丈夫？」

「安全運転でなー。あ、ヘルパーさんに電話しとかな」

「了解。じゃあいくよ」

「はーん」

携帯を弄りながら笑顔で頷くはやてちゃんを見てから、自分ははやてちゃんと一緒に、図書館を出るのであった。

◇◇◇◇◇

ただただ自分の感覚に従い、はやてちゃんの車椅子を押しながら道を歩く。結構自分の家に近くなってきているが、もしや自分の家で何かあるのだろうか？ などと日和つた事を考えていると、ふと自分の感覚が途絶えた。あれっと思つたのははやてちゃんも一緒のようで、急に落ち着いた事に少々戸惑っている。

「ん、なんやおかしいな。急に静かになつたわ」

「自分も。なんだろ、ここらへんなのかな？」

周辺を見渡すと、雑木林の生えた公園が脇にあるのがわかる。ここはボートなども漕ぎ出せる湖があるような結構大きな公園だったりする……、夢の内容を思い出すと、正解なのかもしれない。

「はやてちゃん、ビンゴかもしれない」

「そか、じゃあ行ってみようや」

はやてちゃんの言葉に、ゆつくりと公園へと向かい移動する。いやあ、ここへ来るまで結構早歩きで来てたから、はやてちゃんも戦々恐々としてたんじやないかなあと思いつつくり歩く事に切り替えただけだね。

次第に公園の入口が近づくにつれ、自分達とは逆に、公園から出ようとしている人影が見える。数は三つで、中央の人影は何かを抱えているみたいだ。自分たちと同じぐらの背丈、恐らく小学生なのだろうと思っていたら……。

「あれ、なのはちゃん?」

「なんや、知り合い?」

「うん、幼馴染」

印象的なツインテールが目印な幼馴染、なのはちゃんがいた。その両脇にいるのは一緒に塾へ向かったアリサちゃんとすずかちゃん。三人とも、なのはちゃんの抱えた何かを気にしながら歩いてきているようだ。

随分慌てているようだが、三人は自分に気づくところらへ駆けてきた。

「あれ、けんちゃん!」

「や、三人とも、どうしたんだ?」

「なのはが公園でフェレット見つけたんだけど、なんだか怪我してるみたいなの……」
「ウチのネコが偶にお世話になってる動物病院が近くにあるから、そこへ連れて行くつもり」

なるほど、なのはちゃんを見ると小動物を抱えている。茶色い毛並みに掌より少々大きなサイズ。子供のイタチと見るとそうなのだろう。今はぐつたりとして意識が無いようである。

「ほんまや、ぐつたりしとるなあ」

はやてちゃんも気付いたようで、なのはちゃんの持つているフェレットを見て眩く。
うん、早めに連れて行ってあげたほうが良いだろう。

「けんちゃん、その子お友達？」

「うん。ま、道すがら自己紹介でもしてよ。今は病院に行かないとでしょ？」

自分はやてちゃんの車椅子をUターンさせて、公園の入り口へ向かうよう操作する。あの動物の様子を見る限り深い怪我は無さそうなので大丈夫だろうが、三人が心配しているので早いに越した事はないだろう、と思う。

「ま、ええよ。旅は道連れやからなー」

「いつの間にか旅になってたんだ、これは」

はやてちゃんの言葉に苦笑しつつ、三人と一緒に、動物病院へと向かう事になった。



結果から言えば、そのフェレットは大きな怪我も無く、少々衰弱している程度の状態であると言われた。今日はとりあえず動物病院で宿泊して貰う事に。心配していた三人はホツとしていたが、自分も似たような見立てをしていたので予想通りである、といった感じだ。

今は五人仲良く帰宅の途についている。はやてちゃんはヘルパーさん、アリサちゃんとずすかちゃんは迎えの車待ちで商店街入り口で待機である。

ちなみに女の子四人は自分の言った通り道すがら自己紹介を済ませている。ずすかちゃんに限っては、その読書好きの為ちよこちよこ図書館ではやてちゃんを見かけてはいたそうだが、今まで話しかけず仕舞いだったそう。まあずすかちゃん、引つ込み思案な所があるからね。

んで、はやてのほうも顔は見たことはあつたそうで、「やっぱりそうかー」などのほんとは話している。名前は知らなくともお互い顔は分かっており、同じ読書仲間という事で打ち解けるのは本当に早かった。

「堅一君とはちよつと本取るの手伝ってもらつてから話しとつたんやけどな。月村さん

はこう、物静かな感じでな。読書中に声かけるんは気が引けてたんよ」

「わたしの事はすずかでもいいよ、はやてちゃん。うん、わたしも、凄く真剣に本読んでるはやてちゃんには、ちよつと話しかけれなかつたんだ」

「そつかり、じゃあお互い様やな。でもこうして会うたんやし、今度から遠慮せんと声かけてな、すずかちゃん。私も声かけるし」

こんな感じで終始和やかに、趣味の事やら好きな本やらを五人で会話を交わしていた。

五人でおしゃべりをしていれば時間が経つのもあつという間で、はやてちゃんはヘルパーさんが、アリサちゃんとすずかちゃんは車が到着して「また明日」と約束して解散。

自分はなのはちちゃんと二人、高町家へなのはちちゃんを送る為道を歩いている。

「でも良かったー、大きな怪我してなくて」

「うん、そうだね。でも公園になんでいたんだろあの子は」

帰る道すがらに二人で話していると当然先ほどのフェレットの話題になる訳で、自分としては何故そんな所にフェレットがいるのかが正直不思議だった。

その話をなのはちちゃんに振ると、一瞬足が止まる。

「なのはちちゃん？」

「けんちゃん、あのね……。声が、聞こえたんだ」

その言葉に、自分も足が止まる。なのはちちゃんを見ると、どこか不安そうな、継るような眼差しで、自分を見つめていた。

「塾に行く近道だから、公園に行ったら、夢で見たことある光景で。周囲を見渡してたら聞こえたの、『助けて』って……。それで、その声が聞こえた方に行ったら、あの子が居たの」

「なるほど……」

「こんな事、普通は信じないだろう。だが自分も同じ事に遭遇しているので、今のなのはちちゃんの言葉は十分に信じるに足るものである。夢の事、そして聞こえた声。どうも、自分と同じような状態なのかもしれない。」

「その夢って、モヤモヤした怪物と、光る少年が湖で争ってるようなやつ？」

「けんちゃんも見たの!？」

「やっぱりそうか」

「という事は、夢で見た湖はあの公園で間違いないだろう。そして助けを求める声に導かれた先には、怪我をしたフェレット。あの夢で助けを求める状況にあったのは、あの光る少年……。」

「どうにも、厄介な事になった気がするなあ……」

「そうなの？」

「ああ、なのはちゃん心配しなくていいよ」

「ぶー！… なんてー！… けんちゃんのイジワル！」

駆け寄ってきて拗ねた顔でポカポカと叩いてくるのはちゃんに可愛いなあと思いつつ、先程の思考に思いを馳せる。

自分の意識としては正直あのフレットどうなるうが知った事ではない。まあ助けを求められて手を貸さない訳はないので助けるつもりではあるが。それよりも危惧すべきは、あの異形の怪物である。

あの夢で少年は、対抗出来ず吹き飛ばされていた。という事は、あの怪物は未だどこかに潜んでいる可能性が高い。あれがもし、人の多い場所に現れたとしたら……。

自分はこの状況を理解してしまった。ならば、明日、あの少年（フレット）と話をしなければならぬだろう。例えばそれが、彼が望まない事であったとしても。

この街は、自分の住む街なのだから。



思ったよりも早く、望まない事態は発生したようである。

夜分遅く、食後の鍛錬も終えそろそろ寝ようと思った時、突然激しいノイズのような

耳鳴りと共に、声が聞こえてきた。

『聞こえますか？　僕の声が聞こえますか？』

「クソツ、いきなりかよー！」

激しい耳鳴りとその声に悪態をつきながら、布団を蹴り上げ洋服へ着替える。

『お願いです、力を貸してください！　お願い……』

勝手な事言いやがってと思いつつ、急いで部屋を飛び出し玄関へと向かう。途中、父と遭遇するが簡単にやり過ごす。

「なんだ、こんな夜中に」

「ちよつと高町さんの所行ってくる！　なのはちゃんが心配だ！」

「ん、わかった。連絡しとくか？」

「お願い！　家から出さないように言つといて！」

父にそれだけ言うと、自分は慌てて玄関を飛び出し、高町家へと猛ダツシユを開始した。

頼むから、早まらないでくれよ、なのはちゃん……。

結果から言うと、一歩遅かったようだ。

「すまん、電話の後すぐになのはの部屋へ行つたんだが既に飛び出した後だった。今恭也と美由希が探しに行っている」

「そうですか……」

心配そうに言う土郎さんに申し訳なさが沸いてくる。そしてなのはちゃんの行動力にやっぴりか、というある種の諦めを。しかしここでぐずぐずしていても仕方がない。自分も探しに行くしかない。あの声の主からして行く場所の検討はついている。

「自分も探しに行きます。正直に言ってしまうと場所の検討はついていますから」
「では俺も行こう。親としてきちんとなのはには言わないとな」

そう言う土郎さんの言葉に、数瞬迷つてからお願ひしますと返す。これから向かう先には、もしかしたら昨日夢で見たような異形の怪物がいるかもしれない。アレと対峙するとかそういう状況に陥る可能性は十分あるが、その場合土郎さんが居ないよりは居たほうが絶対に良いと思う。

小太刀二刀御神流という流派と土郎さんの腕は、達人どころの話ではないのだ。そんなじよそこいらの化物だろうと、太刀打ちはできまい。

早速行こうと思った自分に、土郎さんの後ろで帰りを待つ担当の桃子さんが聞いてくる。

「堅一君、なのはがどこへ行ったのか教えてくれないかしら？」

「……恐らく、榎原動物病院です」

それだけ言うと、目指す榎原動物病院へと駆け出した。



榎原動物病院へ向けて走っている途中、先ほど声と共に聞こえたような大きなノイズが、再び自分の耳を襲った。

「ぐっ……、なんだこの音！」

思わず足を止めた自分に背後から声がかかる。

「どうした、大丈夫かい？ 堅一君」

「ええ、別に大丈夫で……」

声に返答としてつつ振り返ると、声の主であるはずの土郎さんが、そこには居なかった。一瞬状況が理解できなかったが、慌てて周囲を見渡すと、自分の周辺には人が誰も居なくなっている事に気がつく。今さっきまで自分は、人を掻い潜りながら榎原動物病院へと駆けていたというのに……。

「クソッ、何なんだよククショウ！」

本当に理解不能だ、人が突然居なくなるなんて。自分は悪態をつきながら、再び榎原動物病院へと駈け出す。恐らく、この状況でもなのはちやんは見つかろう、というか自分しか見つけられない状態に陥ってしまったのだと思う。自分となのはちやんは、同じ夢を見て同じ声を聞いた人間なのだから。

頼むから無事でいてくれよと思いつながら走る事数分、向かう先から自分と同じように走ってくる影を見つけた。あの髪型は間違いない！

「なのはちやん!!」

「けんちゃん!」

思った通りなのはちやんだった。胸元には恐らく声の主であろうフェレットを抱え、慌てた様子で駆けている。急いでなのはちやんへと近づき、彼女へと合流する。

「なのはちやん、良かった」

「けんちゃん! 今ちよつと大変なの! モヤモヤのお化けがいて」

なのはちやんの言葉に思わず舌打ちをする。もう既に遭遇してしまっていたか……。あれがどういう性質の化物かはわからないが、人を襲う類のものである可能性は高い。なにしろ、そこに居るフェレットは襲われていたのだから。

「おいフェレット、言葉は分かるだろう? 自分達はどうすればいい?」

「助けに、来てくれたんですね。僕に、少しだけ力を貸して欲しいんです!」

声をかけると、案の定フェレットは返事を返す。しかし分かっているけどフェレットが人間の言葉を話すのはびっくりするけどね。

「お礼は必ずしますから！」

「お礼とか、そんな事言ってる場合じゃないでしょ！」

続けざまにフェレットの言った言葉になのはちゃんが噛み付く。まあ怒る気も分かる。助けに来てみりやお礼はするから力を貸してって、お礼目的で来た訳じゃないんだよって。

だがフェレットはその言葉を遮り、なのはちゃんの胸元から飛び出して自分たちに告げる。

「今の僕の魔力じゃアレを止められない。でも、あなた達の魔力だったら」

「魔力？」

思わず自分となのはちゃん、二人でハモって聞き返す。魔力って、またなんてファンタジーな言葉が飛び出すのか。

だが状況はそんな悠長な事を考える余裕も与えてくれないようで、なのはちゃんの駆けてきた方向から、まるで獣のような咆哮が聞こえてきた。

そちらへ視線を向けると夢と同じ、いや明らかに大きくなっている怪物が、こちらへ視線を向けていた。

「グルウオオオオオツツ!!」

「クソツ、悠長に話をしてる暇は無きそうだな」

自分はなのはちゃんの後方、化物の前に立ち塞がる。

「けんちゃん! どうするの!?!」

「なのはちゃんは、どうすればいいのかそのフェレットから聞いておいて。自分は、アレの目を引きつけておくから」

「ダメだよ、そんな危ないよ!」

「なのはちゃんじゃ一度捕まったらアレから逃げられないだろう? 自分だったら捕まる事もないだろうし、多分逃げられるから。頼んだよ!」

自分の言った言葉に根拠なんかありやしない。それでも、誰かがアレの囿にでもならないと、話をする暇も作り出せそうにない。だったら、普通より動ける自分がその役割に立ったほうがマシだろう。

なのはちゃんの背後からの声を無視し、化物へと近づく。

夢の中で見た手段は自分の破片を周囲へ撒き散らし物理的に破壊する事と、対象へ直接跳びかかる2つだけ。他にも手段として何かある可能性はあるが、恐らく『目からビーム』とかそんな意表を突かれるような手段はないだろう。

物理的な手段だけならば、逃げられない訳はないと考える。

「さて、いっちょやりますか」

指から手首、肩、首と足の関節を徐々に鳴らしながら構えを取る。

正面切つて打撃を打ち込んでも無駄だろうとは思うが、試すだけでも試してみるか。

「さあ、来やがれバケモノ！」

獣の咆哮と共に、自分達のゴングが鳴り響いた。

第五話

数日前から続く胸のざわめき、奇妙な夢を見た昨夜、夕方聞こえた姿無き声の元を辿つて着いた先にいた幼馴染達と負傷した小動物。その日の夜間に再度同様の声に、焦燥感を掻き立てながら幼馴染の家へ行くと、姿が無い事を告げられる。心当たりへ向かう途中、街中から人が消え、幼馴染は喋る小動物を抱え、化物から逃走していた。

どこで何を間違ってしまったのかわからないが、自分の日常はあつという間に崩壊し、現在眼の前には非日常の象徴と言つても間違いではない、化物が存在していた。

体中を黒い霧のようなもので覆っているその化物は、自らの身体を撒き散らし物理的に衝撃を与える事が可能な物体であると理解している。

幼馴染に抱かれていた小動物は明らかにこの化物の関係者。現在は小動物との会話を幼馴染に任せ、自分はこの化物の目を引きつけ、「何を、どうすれば良いのか」を小動物から幼馴染が聞き取る時間を稼ぐ使命を帯びている。

自宅の山田流道場にて日々鍛錬を行つてはいるが、誰かに対して実践を行った事はなく、ましてやこのような化物との対峙など山田流の想定外も良い所である。

まずは様子を見つつ回避を行い、打開策が思いついたら反撃に転じる。本来であれば

対峙すらせずに遁走するのが賢いのであろうが、時間を稼ぐという最優先目標を達成する為には、これしかない！

「グルウオオオオオオツツ！」

咆哮と同時に、化物が動く。霧のようなその身体で覆われた中にありながら、しっかりと確認できる三つの頭の内一つが、こちらを目掛けて突っ込んでくる。速度はかなり早い、だが、この距離からの突進など！

「テレフオンパンチもいいとこだなー！」

来ると判っているものだと、避けるのは容易い。だが何があるか分からない以上、油断せず、大きく距離を取り回避する。

自分の横をその頭が通過したのを確認しようとし、その頭が外壁へと突っ込むのを目視し、そして、その外壁が大きな音を立てて、大穴を開けるのを目撃した。

……予想してはいたが、さすがに洒落にならない。一つでも当たればアウトだ。

「グガアツ！」

頭をすぐに胴体へと戻した化物は、続けて身体から槍のように先を尖らせたものをいくつも伸ばし、突き込んでくる。逃走経路を潰そうと横に広げたその槍の数は五つ。

「数が増えればいいってものでもー！」

一つ、二つと横へ回避し三つ目の下を潜る、そのまま未だ外壁に突き刺さったままの

二本目の槍へと蹴りを放つ！

外壁が物理的に破損するという事は、逆に言えば自分でも触れる事が可能であると仮定し、確認の意味を含めた攻勢だ。結果はまあ予想通り、外壁を突き破る強度を持つソレが、人一人の蹴りでへし折れる訳が無い。

「っ、かつてえー！」

予想していたとは言えやはりそれは悔しい。思わず毒づきながら方向転換し自分を貫こうと突進してきた四本目、五本目を回避する。全く、やはり手も足も出ないもんだな。

「しようがないか、こんな化物相手じゃ……」

自分の採用するべき手段はもう一つだけ。回避しつつ、相手の視線をこちらへ向けたままにする為挑発を繰り返すしかない。幸い避けられない速度ではなさそうなので、これは問題ないだろう。

「ググウウ……」

見れば化物も、自身の攻撃が当たらないのが不満そうに唸り、心なしか頭についている目のようなパーツが睨んでいるように見える。

これは自分にとっては望み通りの方向。このまま続けていけば時間は稼げるだろうと思ひ、改めて化物へと構えた直後、突然、桃色に輝く光の柱が現れた。

その柱に気付いたように化物も視線を移す。なんとなく、何となくだが、あの光の柱はなのはちやんのだろうと理解する。

「自分の時間稼ぎは終わりかな。思ったより早くなんとかなり——」

そうかな、と言おうとした所で。

自分の身体の中に、強大な荒波が生まれた。



「大丈夫ですか！ 何があっただんですか!？」

人間の言葉を喋る小動物が目の前に現れる。ああ、今ちよつと意識がトんでいたなあ
と脳の一部で冷静な判断をしつつ、自身の身体を両腕で抱き締めたままにする。口からは返事を返そうと声を出す、生憎それは言葉にならず、「グヴウウ」という変な呻き声に変換されてしまった。

「こ、この子も凄い魔力だ……、で、でも何があつてこんな」

思い返してみると、多分なのはちやんの放つたのであろう光の柱が立った途端、自分の中で「ナニカ」が狂った、としか言いようのない奔流が生まれたのだ。対峙していた化物が光の柱目掛けすつ飛んでいくのを眺めながら、自分は自身の身体を抱きしめ、全

身がバラバラになりそうな大波を耐えていた。

指向性を持たず無作為に訪れる波は頭と言わず手足と言わず、全身に大きな衝撃を与え、立つても居られず這い蹲り耐えるしかない。

「いいですか、落ち着いて下さい。今あなたの中でリンカーコアから魔力が多大に生成されています。無尽蔵に発生したそれが今あなたの身体へ負荷をかけている状態なんです。まずは落ち着いて、深く深呼吸してください」

いやいやむりむりむり。小動物がよくわからん事を言っているが、この状況で深く深呼吸なんぞできる訳がない。深く息を吸った途端、身体が爆散してしまいそうだ。

唸りつつ否定の意を示すと分かったようで、小動物は一人「これは抑えこむしか」とか「でも僕にこの魔力量を」とかなんだか不安になりそうな事を呟いている。

もうなんでもいいからどうにかなるなら早く何とかしてくれないかな！

「よし！ 今からあなたに魔法をかけます。あなたの今抱えている魔力を一部僕のほうへ流し、外へ放出させる事ができれば状態はある程度落ち着くはずです」

説明もいいいで、早くしてくれませんか、マジで。

「それではいきま——」

ようやくと終わったのか、小動物は手から緑色に光る魔方陣を出現させ、自分へ魔法をかけようとした所で、自分はその背後から急接近する黒い物体を目撃する。

アレは例の化物に間違いない。なのはちゃんがその背後から桃色の光を発しつつ飛んで、こちらへ向かっているのも一緒に見える。

うわー、なのはちゃん空飛んでるわあとか一瞬間実逃避を行って見たが、背後の黒い物体はこちらへと迫ってきており、なのはちゃんは黒い物体がこちらへ到達するまでには間に合いそうにない。

ここにいるのは負傷した小動物と、なんだかわからんが全身が爆発しそうな自分だけ。さて、どうしようかと一応悩んだふりをして、全身に力を入れる。

激痛が身体と言わず脳にすら走るが、そんな事は言っていられない。何せ、化物はもう目の前なのだ！

「オオオオオオオオツ!!」

「グルオオオオオオオオオ！」

自分と化物、お互いに獣のような咆哮をあげ、激突する。

ドカン、と。

大きな衝撃音と共に土煙を撒き散らす。

「そんな！ まだ動いたら……」

両手を前に突き出し、化物の突進を止めた格好で立つ自分を見て小動物は声をあげ、その語尾を萎ませる。

全身の激痛を抑えつつ両手を前に突き出す自分と化物の間には、鈍色の光を放つ壁が存在していた。

「まさか、デバイスも無しにプロテクションを発生させるなんて……」

「オオオオオオオオオ！」

小動物が何か言ってるがそんな余裕はない。両腕に力を込め、壁に接触した化物を、思いっきり弾き飛ばす！

再びドカン、と音を立ててまた民家の外壁へと突撃した化物を見てから、追撃をかけようとした所で、自身の身体の異常に気付いた。

今度は全身が、燃えるように熱くなっている。

「ヴォアアアアッ！」

熱い、熱い、熱い、熱い!!

自分の身体がそのまま燃えるんじゃないかと思うくらいの熱量に、思わず叫び声をあげる。

「けんちゃん！ どうしたの、けんちゃん!？」

「落ち着いて！ 無理な魔法行使をしたから出口を求めて君の魔力が暴れているんだ！」

自分に近づつき慌てているのはちゃんと、状況を説明してくれる小動物。なんとなく

その状況は理解できるが、熱いものは熱いんだ！

どうにもならん熱さにそろそろ死ぬんじやねえかなあとか思っていたら、再び獣の咆哮、そして衝撃音。

見ると、苦しそうな顔をしたなのはちゃんの前に桃色の壁が立ち上り、またしても突っ込んできた化物を阻んでいた。

その様子に、身体の熱が悪化する。

野郎、女の子に、なのはちゃんに何してんだおい。くそつたれが。なんで自分の身体は動かないんだ。動けよコンチクショウ！

「オオオオオオオオオオオ!!」

今までで最大の熱量を身体が感知する。

ああこりや死ぬかなあ、と思った時、唐突に声が聞こえた。

《魔製結晶の暴走および生成魔力の放出経路への異常を確認、放出経路の許容力理論限界値突破を確認した為、緊急避難措置として緊急経路を作成、魔力放出措置を行います》

声のした次の瞬間、全身からドン、と鈍色の光が発生した。

光が発生した影響なのかわからないが、自分の身体は宙に浮き、周辺の家屋よりも上

空を浮遊する。

周囲には鈍色の光が走り、その内周を何やら呪文めいた文字が記載された帯がクルクルと回っていた。

「……なんつじゃこりゃ」

《落ち着きましたか、『buddy（相棒）』》

先程から唐突に発生する、意味不明な状況の連続に声をあげ驚いていると、またもや声をかけられる。

そちらの方向を見ると、光り輝く四角形の小さな宝石が正面に浮かんでいた。あれ、ていうかこれって。

「ブレスレットの宝石？」

《その通りです。現在相棒の体内にて無尽蔵に生成を行っていた魔結晶の制御および、魔力放出経路の緊急修復を行っております。正常な運用が行えるまで15秒程お待ちください》

自分の質問にあっさりと答える宝石。言葉を喋る小動物と謎の化物の次は、言葉を喋る宝石と来たもんだ。

「いや、そんなあっさりと言われても……。で、この状況は一体なんなんでしょうか」
《簡潔に回答しますと、あなたの体内中で生成された魔力が暴走を行っていた為、現在正

常な運用が行えるよう調整中です。——只今終了しました。身体に異常はありませんか?》

「ん? ……ああ、何も問題なくなってる」

言われてみると、先程まで自分に発生していた全身の痛みと燃えるような熱さがすっかり収まっている。すげえなあ。

「助かった、ありがとう」

《当然です、私は相棒の補助を目的として作成された『思考型魔力行使戦闘用兵装・補助装具』なのですから》

……なんだかもの凄く物騒な名前の道具である事は理解できた。戦闘用兵装ってなんだよ。

《詳細は後ほどご説明いたします。現時点での最優先項目として、私の使用者正規登録および武装・戦闘服（バトルジャケット）の選択、装着が急務だと提案します》

「そうか……。それを終わらせれば、あの化物へ対抗できるか?」

今現在眼下にてなのはちゃんと対峙している化物を指さし問いかける。なのはちゃん自身が気になるのか上空を見つつプロテクションと呼ばれた魔法を展開したままである。そして化物もののはちゃんへ突っ込みながら、三頭の内一つはこちらへ視線を向けている。

《問題ありません。あの程度の存在であれば、あなたの技術、魔力を持つてすれば圧倒し、完膚無きまでに殲滅するなど容易い事でしょう》

「そ、そうか……。じゃあ、よろしく頼む」

何だか物騒な奴だなあとちよつと引きつつそれが出来るなら願っても無いことなのでお願いする。

《了解しました。それでは私の装具としての名前の登録の後に、相棒の名前の登録を行います。私の名前を教えてください》

「名前、か……。そうだな、スティールなんてどうだ？」

唐突に名前を付けろと言われ、周辺をきよろきよろしながら名前を決める。周囲に存在する鈍色、鋼鉄の如き光、現状を表す単語だが、うん。結構良い名前ではないかと思う。

目の前の宝石は一瞬輝くと、再び言葉を発する。

《良い、大変良い名前であると判断いたします。『装具名：スティール』と登録いたしました。続けて、相棒の名前を教えてください》

なんだか嬉しそうに聞こえる声で返答するスティール。ちよつとこそばゆい。

「中田堅一だ、よろしくなスティール」

《了解いたしました。『装具使用者名：中田堅一』と登録いたしました。これより正規使

用者中田堅一の名の下に、武装・装具・相棒として私は存在いたします。以後よろしく
お願いします》

大仰な事を言っているが、まあコンゴトモヨロシクという事だろう。自分も軽く返して
合意する。

《それでは続いて武装・バトルジャケットの登録を行います。あなたの戦闘技術に一番
見合うであろうものを最適化し自動登録しますが、よろしいでしょうか?》

「ああ、それで構わないよ」

《了解いたしました。それではこれより、武装・バトルジャケットの装着を行います。装
着が終了し次第、地上へ降り戦闘を開始して下さい》

「ああっ!」

言うと共に、全身が輝く。

ステイルの周囲に鈍色をした四角の板が現れ、それにステイルが嵌ると、自分の
胸元へと装着される。

そこから全身に鈍色の光が伸び、白、小学校の制服と道場で使用する道着の間の子の
ような色合いと形状の服が現れ、両の手足には、鈍色の手甲、足甲が嵌められた。

どうやら徒手空拳での戦闘が最適であると判断されたようで、これならば山田流での
鍛錬が無駄にならないと考える。ステイルが、使用者の補助を最大限に考えた相棒な

のは間違いないな。

ゆつくりと地面へと降下し、なのはちゃんとその背後で待機していた小動物の間に到着する。

「お待たせ、なのはちゃん」

「け、けんちゃん……」

「君は、魔導師だったのか？」

戸惑いを多分に含んだなのはちゃんと、小動物の声。まあいきなりこんな事になれば戸惑うのも間違いは無い。というか魔導師っているのか？

化物は空気を讀んだのか状況に戸惑っているのか、体当たりを敢行していたのを辞め、自分を睨みながら待機している。

「今からその魔導師みたいだ。んで、今からちよつとそいつ、倒すから」

「えっ」

言うや否や、化物へと接近し、回し蹴り。化物は叫び声もあげぬまま、横つ飛びに吹き飛ばす。

身体が羽のように軽いのに、一つ一つのインパクトに重みを感じる。手足には得体の知れない力が漲り、本来では対抗できないはずの化物を吹き飛ばす程の力を与えてくれた。

「これが、魔力つて奴か」

《その通りです。今は攻撃部位への付与程度に収まっていますが、あなたの魔法資質に合わせ、修練を重ねれば射撃などにも利用可能となります》

「そっか、なるほど。これならいつにも対抗できるとて訳だな」

拳を握りしめ確信する。確かにこれなら、あの程度の化物は完膚無きまでに磨り潰せてしまいそうだ。

「す、凄い……。初めての魔法戦闘でこんなに圧倒するなんて」

「けんちゃん、凄いのー！」

なんだか驚いてるのか感心してるのか分からないリアクションで喋る小動物と、きやいきやいと喜ぶなのはちゃん。お兄さん、久しぶりなのはちゃんのはちゃんの笑顔を見た気分ですよ。

自分が蹴り飛ばした化物のほうを見ると、地面を何度か転がって停止したような跡があり、今起き上がってこちらを見たようだ。

《さて、追撃をしましょう》

「わかってる。……しかし淡々と物騒な奴だな」

《そのように製作されていますから》

冷静な発言に同意しつつ、つい思ったことを言ってしまうが、ステイルはしれつと

した声で返事を返す。こいつ、中々にいい性格してるな。

言われた通りに追撃する為、再び化物へと接近する。

向こうはやつと身体を起き上がらせたばかり。防御しようときつと攻撃は通るだろう。このままぶち抜いてやる！

「喰らええっ！」

地面を踏みしめ、思いっきり拳を突き込む。当たる！ と思った直前、化物は三体へと分裂し、小さくなって背後へ飛び自分の拳を回避した。

「チツ、その程度の知性は持ち合わせてるか」

《現在のあなたの魔法技術では三体を一度に屠る魔法の行使は困難です。面倒な奴ですね》

「全くだ」

さてどうしたものかなあ、と思いつつも全く脅威を感じない奴らへの対抗手段を考える。まあ一体一体潰していくのが確実だろう。

その方向で考えを纏めた所で、化物三体がなんとなく、ジリジリと後退しているのに気付いた。

「えっ……っ？」

まさか……、と気付いた時にはもう遅かった。

三体の化物は、自分に思いつきり背を向け、前に向かって全力前進した。つまり、全力での遁走だ。

「なん……だと……」

「わっ、逃げちゃった!」

思わぬ事態に呆けた自分と、驚くのはちゃんの声。なんだよ、やる気出したらこれかよ……。

「二人とも、そんな事言っている場合じゃない! 追いかけないと街に被害が出るよ!」

小動物の言葉にハツとし逃走した化物を見る。奴らは既に小さくなって家屋の上をピョンピョンと飛び移っている。確かにこのままじゃヤバイ!

「けんちゃん、追いかけよう! 二人で行けば三匹でも大丈夫でしょ!」

「わかった! すぐに行こう!」

「うん!」

なのはちゃんの言葉に同意すると、なのはちゃんはすぐに空へと浮かび、ギューーンと化物の行った方向へと飛んでいく。

そうか、魔法だったら飛べるのかと思い自分も飛ぶ為にステイールへと話しかける。

「ステイール、自分も飛べるか?」

《問題ありません。飛ぼうと思うだけで飛翔魔法が行使されます》

「よし、行くぞー！」

掛け声と共に空へジャンプする。すると、その飛翔魔法が行使されたのだろう、鈍色の光が一瞬煌き、自分は空を勢い良く飛んでいた。



結構速度出るんだなあと思いつつ空を飛び、化物達を追跡する。屋根を飛び移っている奴らをすぐに目視圏内に捉える事が出来た。

《あと10秒程で接触が可能です。またあの少女により魔法による遠距離射撃が敢行されるようですので、我々はそのサポートに回りますよう》

「遠距離射撃って、マジですか」

ステイルの言葉に驚きつつなのはちゃんが降り立ったビルの上空を通過する。上から簡単になのはちゃんの様子を確認すると、持っていた杖の形状が変化しており、なのはちゃんは両手で杖を構え、右手はトリガーのようなものに添えられている。周囲には桃色に光り輝く魔方陣。

《彼女は遠距離魔導師としての適性が高いようですね。相棒の適性は中・近距離となるでしょう》

「そうか、近距離戦闘だったら問題ないな」

なるほど、なのはちゃんは射撃の適性があるのか。今度ガンアクションゲームでも買ってみようかな。

《砲撃魔法が発射されます。発射予測カウント、3…2…1…》

ステイルルが言い終わる前に、自分の背後から桃色の光が勢い良く走る。これがなのはちゃんの魔法かあと感心しながら眺め、その光が三体の化物に伸びるのを確認する。

一体目、二体目共にその魔法はぶち当たったのを確認したが、三体目は器用にも、飛び上がって背後からの魔法を避けやがった。

「一体避けられたか」

《我々の出番です》

「だな」

避けた最後の一体、宙に高く飛んでいる一体を捉えるため加速し、その正面に回りこむ。

「グオオオ！」

「食らえ！」

呻き声をあげる化物にお構いなしに下から上へ突き上げるような蹴りを放ち、更に空中高く放り上げる。

《強力な一撃をイメージして下さい。攻撃部位へと魔力を集中し、相手へと叩きつけるのです》

「わかってる！」

《あなたの技術は足場を力場とする事で本来の効果を発揮します。魔法があれば、空中であろうと足場は生成可能です》

ステイルの言葉に今いる場所から高く跳ぶようにイメージし、足に力を入れる。足元はまるで地面があるかのように反動を捉え、その足場を元に、跳び上がった。

《そうです。そしてその足場は任意の場所に生成できる》

「ありがとうよ！」

ジャンプの勢いで高く舞い上げた化物を追い越し、空中で宙返りし、逆さまになり再び足を踏ん張る。イメージとして天井を蹴る感じだ。

数瞬の待機の間、両腕に自身の胸から湧き出る熱い塊、魔力を両腕に集め、一気に天井を蹴る！

「はああっ！」

ドン、という音と共に天井を蹴り、舞い上がった化物の土手っ腹に、両手で掌打をぶ

ち当てる。全体重と落下の勢いを乗せた双掌打、威力は十分だろう！

「グオオオオ……」

双掌打を受けた化物は叫び声をあげた後、光の粒となり消えていった……。

後に残ったのは、淡く光り輝く六角形の水晶のようなもの。何にせよ、化物は目の前から消えた。

「ああ、これで終わったのかな……」

《初の魔力行使戦闘としては、上々だったのではないでしょうか。お疲れ様です、相棒》
光り輝くその水晶を手に収め、遠くから近づいてくる桃色の光を眺めながら、胸元で喋る相棒に答える。

「ああ、お疲れ様。相棒」

こうして、自分の魔法との邂逅は終了を告げた。



「でもけんちゃん凄かった！ あんな事できたんだね！」

「いや、なのはちゃんも最後の砲撃凄かったじゃん」

きやいきやいと喜んでゐるなのはちちゃん。いやいやあなたも十分凄いですから。

「いや、二人共凄かったよ……。僕なんかよりも魔導師として才能がある」

「ま、お前には色々聴かなきゃいけない事があるからな。そこらへんも含めて説明してもらおう」

なのはちゃんの胸元に抱えられた小動物から発せられた言葉に、しれつと返事を返す。こいつには色々聞かなければならない事があるのだ。もう既に巻き込まれているので、だんまりは許さない。

「さっきの化物の事といい、光る結晶の事とか、色々と教えてもらわないとな」

「うん、わかってる……。僕には君たちに教える義務があるから」

何だかシユンとしてしまった小動物にちよつときつく言つたかなと思いつつ、これから来るであろう問題に思いを馳せる。

色々と非現実的な状況が起こり、一般的に言えば子供であるはずの自分となのはちちゃん、二人が共に危険極まりない戦闘行為へと参加し、しかも打ち勝ってしまった。

負ければ良かったのかとかそういう話ではなく、なぜ我々にこのような力が存在するのか、も含め理解しなければならぬ。そしてあの化物を生み出したとされる結晶体の話も。

「まあその前に、自分達のほうが色々話をしておかなきゃいけない状況みたいだけどね」

「ふええ？」

元通り、人が存在するようになった世界を歩いている中、遠目に見える榎原動物病院の前で佇んでいる一人の男の影を確認し、自分は呟く。

立ち止まった自分につられなのはちゃんも立ち止まると、その影が自分達に近づいてくる。

距離がだんだんと近づくにつれ、なのはちゃんの顔が不思議そうな顔から驚きと困惑、そして怯える顔へと変化していった。

目の前の影の持ち主はもの凄く満面の笑顔を自分達に振りまいていた。但し目は笑っていない。

「さて、一体何が起こって、どういう事なのか。事情を説明して貰おうかな」

底冷えするような、冷徹な怒りを湛えた高町士郎さんが現れた！

第六話

夜分遅く、というか日付も既に変わったであろう深夜に、高町家では家族会議が開催されようとしている。出席者は高町家全メンバー＋中田家からは自分の父である中田正元。自分が家を飛び出してから高町さんちへ連絡し、その後高町家にて待機していたとの事だ。

ちなみに翔子さん夫婦はいない。雅俊さん明日仕事だし寝ている綾子ちゃんを置いてくるとか連れてくるとかする訳にもいかないしね。

そして高町家リビングの円卓、というには長方形すぎる席の一番上座へ座る家長、高町士郎さんから号令がかかった。

「さて、必要な面々は揃っているの、大人しく今日の出来事を話すようにしなさい」
上座からの声に自分となのはちゃんは椅子に座りつつ「はい」と返事する。今日お持ち帰りしてきた小動物（フェレット）——ユーノ・スクライアと言うらしい——は、ナチュアルに桃子さんに抱かれた状態だ。ていうかおい、なんでアイツこっち側にいないんだよ……。

本日の事情に関しては、本当の詳細を語るにはアイツは必要不可欠なのである。自分
はまず拳手をして椅子から立った。

「まず、今日の事の起りに関して掻い摘んで説明をすると、なのはちやんが公園で声を
聞く、その声に従い周囲を散策、その小動物を発見。夜間、再び声が聞こえ、動物病
院へ行くと化物と遭遇、小動物によりなのはちやん魔術師となり自分も魔術師となり化
物を撃退、といった感じです」

「……こう、色々とおかしい単語があるのだが、もう少し詳細を聞かせてくれないだろ
うか」

横で話を聞いていた恭也さんが、ものすごく不思議そうな、そして多分に困惑を含ん
だ声色で問い返す。

普通、こんだけの簡単な状況説明で納得するのが難しいのは当たり前だ。当然想定通
りであったその問い掛けに、再び話します。

「状況の説明だけであればこの程度にしかありません。ですが事態の詳細に関しては、
自分達よりその小動物がより詳しく理解しているはずです。

——小動物。いつまでもダンマリを決め込んでいると、*「絞めるぞ？」*

鍋にするとどんな味がするんだろうなこの小動物は、といった視線を向けると桃子さ
んに抱かれていた小動物はビクリと反応し、慌ててその胸元から降り、自分の足元へ

寄ってくる。

「あらっ、もうけんちゃん。そんな事言ったら可哀想でしょう?」

手元から可愛いのが居なくなったからか、残念そうな声色で自分に言う桃子さん。いやいや、可哀想とかそういうのいいですから。その言葉に流石に可愛い物好きな美由希さんも若干引き気味だ。空気読めよって顔してる。

「桃子さん……。先ほど言った通り、コイツは普通の小動物ではありません。魔法」といった概念の力を行使する生き物です」

「け、けんちゃん。そんな言い方しなくても……」

自分の言葉に思わず声を上げるのはちゃんだが、正直これだけ言っても足りないと思う訳で。なにせコイツは今回のはちゃんを事件へ巻き込んだ主犯なのです。優しくしてやる謂れはない。

自分のそんな意識、意図を理解したのか、小動物は若干しよぼくれながら、口を開いた。

「堅一さんの言う事は間違っていないです。……このような格好で失礼します、自分はユーノ・スクライア。この次元世界とは別の世界からやって来ました」

喋る小動物に一瞬場がシーンと静まったが、次の瞬間には動揺の声が広がる。

「しゃ、喋った、だと……」

「きよ、恭ちゃん、腹話術とかじゃないよこれ」

「だから、普通の小動物ではないと言ったでしょう……」

慌てる高町家長男長女に若干の呆れた視線を乗せて告げる。だがこれで、自分の言葉が真実である事がある程度は理解されたと思う。

「今回の事件に関して、全てお話いたします……」

色々諦めが入ったのか、ユーノは文字通り小さくなりながら、事の発端と今回の件に関して、静かに話し始めた。



話した内容は、本来であれば荒唐無稽な物語。

この世界には数多の『次元世界』と呼ばれる世界があり、その一つの世界で遺跡を発掘していたユーノは、事件の原因『ロストロギア』と呼ばれる古代文明の遺産の一つ『ジュエルシード』を輸送中に原因不明の事故に見舞われ、ジュエルシードは海鳴市近辺へと落下。回収を目的としてユーノはここへ降り立ったという訳だ。

「ですが、ジュエルシードの力は強大でした……。魔力を持つなのはさん達がいなければ、今回の回収も出来なかったと思います」

しょんぼりしながら告げるユーノにうむむと悩んでしまう。あの化物、自分が魔導師として魔法を行使できるようになった後は、至極簡単に対応可能な存在だった。正直、そこまで困るような相手では無かったような気がするのだ……。

「今回回収出来たジュエルシードは三つ。残りのジュエルシードも回収しなければいけません、現在僕は傷を負っていますので……。

わがままを言つて申し訳ありませんが、傷が癒えるまでの間、この姿で滞在させていただけませんか？　お願いします！」

事情をある程度説明したユーノは、そのフェレット姿のまま土下座のような状態で頭を下げる。その姿に高町家の家長は悩む。だがその悩みの方向は恐らくユーノの扱いという部分ではないだろう。自分も今の話を聞いて、正直頭の痛い所である。

「なあ、ユーノ君。そのジュエルシードという物質は、残りいくつ程あるんだい？」
「それは……。残りは18個、全部で21個になります」

自分と同じ部分に疑問を覚えたであろう土郎さんの問い掛けに、ユーノが答える。残り18個、それだけ、今日対峙したような化物が生まれる可能性があるという事だ。海鳴全域に一度に現れたら海鳴市は壊滅しかねないぞ……。

それを一人で回収するのは現実的に無理だろう。手が足りないし、今日の化物にも敗退したユーノに、その数の化物を何とかできるとは思えん。

「そのジュエルシードというのは我々には対応できないのかな？」

「いえ、発動前に見つければ問題はありません。ですが一度発動してしまうと魔法が使えなければどうする事も。それに、ジュエルシードの位置は発動前は曖昧にしか分からないので……」

「ならば、発動前のジュエルシードを人海戦術で見つける、というのがベストな対応な気がするな」

士郎さんの言葉は至極真つ当である。状況として説明したが、家屋の外壁を容易く破壊できるような化物を生み出す物質があと18個もある。それが発動する前の場所は曖昧にしか分からないので、人海戦術で街中を探索したほうが効率が良いのは当たり前だ。

だがそれには当然人手がいる訳で。そして士郎さんのほうからそれを言うという事は、当然そういうつもりなのであろう。

「街を破壊されるのは困るからな、我々も手を貸そう」

「そんな！ これは僕のせいで起こってしまった事ですから……」

「いやいや、誰のせいとか関係ないから。街がどうにかなりそうだったら早めに何とかしないとイケないだろうが」

士郎さんの言葉にユーノは悲鳴のように声を上げるが、自分が言った言葉で沈黙す

る。そりゃ申し訳ないと思う気持ちは分かるが、ヤバイのは自分達の住んでいる街なのだ。発動前ならなんとかなるのであればそれは手伝うべきだろう。

「ともかくそういう事だ。君の居住も問題ない。我々はなるべく信頼の置ける人間へ話してその危険物を回収するようにしよう。勿論発動してしまったものに関しては、なのは、堅一君、ユーノ君の三人で対応して貰う事になってしまいが、大丈夫か？」

あつさりと事の判断を行った士郎さんに、ユーノは「あの」とか「それでは」とか戸惑った声をかけるが士郎さんは思いつきり無視。自然と発動後の対応に関しては実の娘と自分のような子供へお願いする辺り、なんとも色んな意味で強い人である。

「自分は問題ありません。なのはちゃんも、今日現れた程度の化物であれば、落ち着いて対応すれば怪我する事はないでしょう」

「わたしの魔法だったら、練習すれば三つ一片に封印する事が可能なの！ けんちゃん
は近づいてぶったり蹴ったりするけど、わたしは遠くから魔法で攻撃する係みたいだから」

「そういう事なんで、なのはちゃんの安全はある程度保証できますよ」

「でも！ もしジュエルシードをこの星の原生生物が取り込んだら、今日よりも強力な生物が生まれてしまう可能性が高いんだ！ 危険すぎるよ！」

「なら尚更、発動前に見つけないとな。その為にはみんなの協力が必要だ」

なるほど、生物をそのまま取り込むともっと大変な事になるのか、なるべく心して事態にかかるようにしないとな。

自分達の考えを何とか変えさせようと言った言葉のようだが、正直無駄である。ぐうの音も出なくなってしまうたユーノは、今度こそ諦めたのか、「申し訳ありません……」と、疲弊した声で返答した。



その後、ジュエルシードの現物を見せる為になのはちゃんがレイジングハートという魔導師の杖、『デバイス』と呼ばれるものから現物を取り出し、みんながそれを携帯で撮影して保存。ついでになのはちゃんの魔法少女ルック撮影会が始まっていた。

「いいわあ、いいわよなのは！ 可愛いわよお！」

「いやあ凄いいえこれ。うんうん、可愛いよなのは」

「ふにやああ！ やめて、携帯で撮らないでよお姉ちゃん！」

変身したのはちゃんに頬ずりしながら思いつき抱き締める桃子さんと、その姿を携帯でパシャパシャ撮影する美由希さん。顔を真っ赤にしながらわたたと桃子さんの両腕から逃げ出そうとする魔法少女ルックのなのはちゃんがそこには居た。

「ふええくん、助けてよレイジングハート！」

《No problem. Master》

あのデバイスも良い性格してんな、あいつがバリアジャケット解除してやれば終わりだろうに……。若干引くぐらいテンション上がってしまったている二人を呆れた目で見ていた自分に、土郎さんが話しかけてきた。

「なのはも大変だな。しかし堅一君も、あんな感じの杖を持っているんだろう？」

「いえ、自分のは杖の形ではないんですが。ああ、こいつに關しても色々聞かないといけない事があったのを思い出しました」

《相棒の戦闘技術は自身の身体能力を駆使したものであり、杖のような形状は相棒には合わないでしょう。棒のような形のものであれば問題はないのでしょうか》

土郎さんの質問に答えるような形で、左腕のブレスレットについた相棒・ステイルが唐突に話す。その声に土郎さんは一瞬驚き、父が声に気づいてこちらへ近づいてきた。

「おっ、そいつ話すようになったのか」

「話すようになったのかって……。あんた知ってたのか」

《彼はこの世界へ到達した地点の住人でした。今まで相棒の守護をしていたように、感謝いたします》

なるほど、こいつを初めて渡した時の意味深な言葉と笑顔はそういう事だったのか。これはゆつくりと話しを聞かなければいけないさそうだなあ。

「とりあえず、自分の事とか、自分に魔法が使える事とか、分かるんだったら教えて欲しいんだが」

「ま、そうだな。俺もお前預かってたけど、こいつが喋ったのは最初の一言だけだったから」

自分と父の言葉に、ステイールは一瞬その宝石を思わせる身体を輝かせ、やがて答えた。

《分かりました。まずは相棒の生い立ちと、私の存在。それから相棒の魔法技術に関して、私の中に存在するデータから知る限りの事を全てお話いたします》

そうして、ゆつくりと語りだしたステイールの話は、現在海鳴に起こっている事象よりも、更に荒唐無稽な物語だった。



昔々、とは言っても自分の生まれよりも前の事。

その世界は住まう星の存在を科学的に確定させた人物の名から「ハズラッド」と呼ば

れる星に、強大な文明が存在した。

現在の地球では及びびもつかない叡智を兼ね備えた技術研究者の存在する世界では、科学技術と共に魔法技術の融合した発展がなされ、正に理想郷のような生活が営まれていた。

だがそれは、戦争の上に成り立っていた理想郷であり、その理想郷から一步外れば人同士が殺し合い、また人が造り出した化物、魔獣が闊歩する世界であった。

そんな世界で生まれた一つの命があり、生まれながらにして兵器として運用される予定であった彼は、正しく「人造生物兵器」として、日々戦争へと駆り出されていた。

本来であれば彼はその国に何千年も続く国王の血族、だが死産となった赤子を解析し、その古代の血に潜む化物の遺伝子を抽出し活性化させた兵器となった彼は、命じられるままに、命を刈り取るよう兵器として成長させられる。

彼は人を殺し、国を破壊し、また命じられるままに人を殺す……。

だが彼にも心はあり、その安息を与えてくれる存在が居た。幼くありながら類稀な科学技術と魔法知識を保有していた少女が、彼の傍にはいたのである。

自身の生みの親とも言うべき少女の元へ、彼は戦争へ駆りだされていない間は訪れる。戦場へ一度入れば理性を無くし、周囲の生命を無差別に殺し尽くす彼は、自身の理性がある短い時間を、その少女に捧げていた。

彼を造り上げた事を後悔していた少女は、それでも自身へ時間を捧げてくれる彼に、いつの間にか恋をしていた。

だがその恋は、決して叶う事の無い悲恋であると分かりきっていた。

ある日少女の元へ、国の軍隊より一つの報告がなされる。彼が戦場にて、自身の魔力に耐えられず自壊したという報告。

連日連夜の戦闘行為に身体を酷使し、それでも命令される限り全力で稼働するように調整されていた彼は、とうとう自身の力に耐え切れず崩壊してしまったのだ。

その未来は既に理解していた事。少女は涙を一滴零しながら、一言礼を言つて国を去った。

国を去った少女は辺境の地にて草木に囲まれた生活を営んでいたが、住まう家屋の地下に巨大な研究施設を作り上げていた。

時を経て大人となった彼女は、兵器としての生涯を過ごす事となった彼の存在した証を生み出す事に全力を注いでいた。

彼の残した遺品、少女への贈り物の中にあつた彼の存在した証、遺髪となったものから遺伝子情報を取り出し、胚細胞へと付着させ培養する。

遺伝子操作技術により少しずつ彼のように自壊しないよう化物の遺伝子を薄め、人としての遺伝子を強くする。

そうして生まれた子供の為に、存在を補助する機能を持った、魔法装具が用意された。その装具は子供が自身の戦闘能力に気付いた時の為に武装となる役割も与えていたが。

思考型装具として用意したそれには研究室の管理を任せていた魔法装具のデータをコピーして利用する。長年使用していたその装具のデータは、思考性を育てる必要がない為、始めから膨大なデータの取り扱いを可能としていたからだ。

全ての準備が整った時、彼が存在した証は、産声をあげた。

彼にそっくりな深い青の瞳と、深い青の髪色。その存在は、間違いなく母に祝福され、この世へと生み出された。

だがそんな幸せを彼女が甘受したのもたった一日だけ。

どうやって突き止めたのか、彼女は元居た国より搜索されており、ついにその日見つかってしまったのだ。

彼女が考えたのはたった一つ、彼の存在した証である赤子を逃がす事。このまま自分と共に国へと戻れば、彼と同じように生物兵器としての一生が待っているだろう。

一緒に逃げる事も考えたが、見つかってしまった彼女には監視が常に付き纏い、逃げる事等出来はしない。だが、赤子一人であれば何とかなる。

彼女は苦渋の選択をして、赤子と用意した魔法装具を、共に次元跳躍魔法にて送り出す。

「どうかこの子には、心穏やかな日々が訪れますように——」

思考を持たされたその魔法装具が最後に見た光景は、光の槍で胸を貫かれながらも、笑顔を見せる彼女の姿だった……。



《そうして、私と相棒は次元跳躍によりこの世界へ降り立ち、その中田氏へと保護されたという事です》

何とも、開いた口が塞がらないとはこういう事を言うのだろう。

余りにも衝撃的な自身の生い立ちに、正直現実感が無いというか、いやまあ自分の元となった男性と女性のデータと映像を見つつ説明されれば事実なんだろうとは思いますが、しかしそんな壮絶な話の下に自分が生まれたなんてのは、中々に現実離れしすぎているというか……。

「うっ……グスッ……」

「ううっ……可哀想だよ、けんちゃんのお母さん……」

いつの間にか周りに居た高町家の面々、特に女性陣は涙ぐみながらその話を聞いており、途中から泣き出している。しかも静かに泣くもので、どうしていいのかわかりやし

ない。

「なんていうか、うん。大変だったんだな……」

「いや自分は大変じゃないから。ていうか何とも言えないから、突っ込む余裕とかあんまないから」

ポン、と優しく肩を叩く父に突っ込む。ていうかほんと、無茶な話すぎて驚き通り越して頭が回りませんよ、まじで。

《ちなみに本日の魔力の暴走。アレあのまま放っておいたら彼のように自壊していたかと思えます。海鳴市全域を巻き込んで》

「ちよつとそういう事言うのやめろよ！ マジでへこむから！ 自分が怖いわ!!」

《私がいれば大丈夫ですよ。もっとも暴走時の魔力の生成量が今の倍くらいになってしまったらお手上げですが》

「ちなみに倍くらいになりそうなのって、今からどれくらい?」

《そうですね。相棒の遺伝子とか実力とかを加味すると後十年も無いのではないでしょう。五年後くらいにはある程度完成された魔導師になれるかと思えますよ》

「全然大丈夫じゃねえじゃねえか！ 五年で意外とすぐだぞ！ そうなったらどうすんだー!」

《さあ? ご自分で何とかするしかないでしょう。その為に私がいるんですから》

「いかん、コイツ投げっぱなしだ……、すげえ将来が不安になってきた……」

余りにもあんまりな発言の連続で思わず崩折れる。なんだよ、マジで自分危険人物じゃねえか……。海鳴を巻き込む自壊って、大規模な自爆じゃねえか。

「まあ、その……。が、頑張ってください！ まだ時間はありますから！」

「うるせえよ！ 簡単に言うなよこのやろう!!」

慰めるように、軽く言いやがった小動物を両手で握り絞めつける。コンチクショウ、このままパーンと破裂させてやろうか！ 「ギブ、ギブ」じゃねえよ！

《相棒の現時点での魔力行使の実力でも、そう簡単には暴走しないでしよう。ですから現時点での脅威はありませんので安心して下さい》

「全然安心できないんですけど。とりあえず今は大丈夫って事で、納得するしかないか……」

全く、こんな壮絶な人生を歩む事になるなんて、一体何がどうなっちまったんだろうか……。



自分の知らなかった壮絶な過去の暴露が行われた翌日。

早速自分となのはちゃんは昼休みに一緒に弁当を食べるグループであるアリサちゃんとすずかちゃんに昨日の話を伝えた。

「——という訳で、これがジュエルシード。こいつをもし見つけたら絶対に近づかないで、自分達に連絡して欲しい」

「分かったわ……。しっかし、昨日のフェレットからそんな話になるなんてね」

「本当、不思議な事って世の中には一杯あるんだねえ……」

なのはちゃんの出したジュエルシードを携帯で撮影しつつ、アリサちゃんとすずかちゃんが呆れた顔で話す。ユーノが実はフェレットじゃない事や危険物が海鳴市にある事、自分達がそれに対応できる力を得た事なんかは話しておいた。

二人共賢い子なので、余り深く聞いては来ないし、無闇矢鱈と言いつつ触らす事などはないだろう。

「ねえ。この話鮫島にしても大丈夫？ 学校にいる間は自宅近辺を探させようかと思うんだけど」

「あ、ウチもお姉ちゃんやノエルとかに話して大丈夫かな？ 近所にそんな危険物があつたら怖いし……」

「ノエルさん達だったら大丈夫じゃないかな？ ねえけんちゃん」

「うん、問題ないと思うよ。ちゃんと危険物だって説明しておかないと逆に危ないかも

しれないし」

なのはちやんはこう言うが、正直自分は一人だけ言わないほうがいいんじゃないかと思う人がいる。すずかちゃんの姉の月村 忍（しのぶ）さんだ。

自分達の同級生であるすずかちゃんのお姉さんは、偶然にも高町家の恭也さんと同級生であり、最近交際関係をはじめた人である。そして、彼女は機械いじり、という範疇では収まらない程科学技術を嗜んでいる。その上かなりマッドである。

そんな人物にジュエルシードの情報を渡し、もし見つけられでもしたらどうなるだろう。解析に解析を重ねて科学の力で制御しようとか考えるような気がしてならない。もしかしたら、無限エネルギーとかへ転用してしまうかも……。

そんな思考が見えてしまったのか、すずかちゃんが困ったように声をかける。

「だ、大丈夫だと。お姉ちゃんも、そんな無茶はしらないと思うよ。多分……」

「た、多分か。出来れば絶対と言い切って欲しかったけど」

「それは……、ご、ごめんなさい。お姉ちゃん、そうなたら見境が無いから……」

ははは、余計に不安だ。妹からすら不安がられている姉だ、本当に大丈夫だろうか……。

「でも、恭也さんから忍さんへ話が行くかもしれないでしょ？ どっち道諦めたほうがいいと思うわよ」

「あつ……そ、そうだねアリサちゃん」

「ああ、そうだなあ。危険物だもんなあ、心配して恭也さん注意するだろうなあ」

この将棋は、始めから詰みの状態が確定していたようだ。大人しく諦めるしかないな、こりや。

「ま、まあまあけんちゃん！ 大丈夫だよ！ 忍さんが見つける前にわたしやお兄ちゃん達が見つければいいんだよ！」

ああなのはちゃん。ナチュラルに忍さんをジュエルシード争奪戦の対抗馬みたいに行っているのは、自分も不安だからなんだね、よく分かるよ。

なんとなく、なんとなく、この先が不安なってしまう昼休みだった……。

第七話

化物との初戦闘、魔導師なつてしまった日の翌日、昼休みをちよつと過ぎた辺りで、諸々の事情により学校を早めに出る。優等生つて訳じやないが、学業成績が優秀なのはこういう時非常に助かった。先生も特に何も言う事無く帰宅させてくれる。

向かう先は市立図書館。昨日「また明日」と言っていたのだから、そこに彼女は居るだろう。

そう思い訪れば案の定、車椅子に乗つたはやてちゃんが読書机で本を読んでいた。

「や、はやてちゃん」

「ん？ おう、堅一君。なんやえらい早いな」

「ちよつと諸々の事情があつてね」

よいしよつと向かいの椅子に座つてはやてちゃんの顔を正面から見ると、彼女は声はかけてくるが、本から目を離すことはしなかつた。

「ごめんなー。もうちよつと待つとつて」

「ん、いいよ。ゆつくり読むつもりだったんでしょ」

「せや。もつと遅いもんやと思つとつたからな。キリの良い所まで読ましてー」
「はいはいー」

さすがは読書家を自認するだけあって、はやてちゃんはじつくりと、だが比較的早いペースで読み進める。読んでいる本は文芸小説、歴史系である。恋愛小説とかでない辺り子どもらしくないなあと思いつつ、はやてちゃんらしいと思う。この子もかなり利発なお子様だ。

数分後、章の区切りまで到着したのかはやてちゃんは葉を挟み本を閉じる。

「ふう、これ借りてこ。あ、どっか動く?」

「うん、出来れば。出る時に借りてつちやおう」

「せやな。んじやまたヘルパーさんに連絡せんとなあ」

ポケットから図書カードと携帯を取り出すはやてちゃんの背後に周り、車椅子のハンドルを握る。

「んじや動かすよ」

「りよーかい。今日も安全運転でお願いしますー」

押し出す前に一声かけ、昨日と似たようなやり取りに思わず笑みを浮かべる。はやてちゃんも笑顔で「しゅっぱーつ」と号令をかけ、とりあえずは、図書館のカウンターへ向かって出発した。



高町家より少し離れた、駅沿いの道を一本入った小道になる『喫茶店 翠屋』のテーブル席でゆつくりとコーヒーを啜る。目の前には甘そうで、だがとても美味しそうなシュークリームが三個、皿に盛りつけられ置かれている。

「コーヒーのお代わりはいるかい？」

「あ、大丈夫です」

ゆつくり飲んでいた自分を見て近づいてきた土郎さんは、「そうか、ごゆつくり」と答えると入り口近くのカウンター席へと戻っていく。

ランチタイムが終了し、これから学生の帰宅時間までの間のアイドルタイム。この時間が一番、翠屋が静かになる時間なのだ。聞こえるのはキッチンで夕方からの仕込みを行っている桃子さんの作業音と、カウンターでコーヒーの調整をしている土郎さんの音。あと、隣でシュークリームを幸せそうに、夢中で食べているはやちゃんの咀嚼音だけだった。

もぐもぐと実に幸せそうな笑みを浮かべながらシュークリームを食べているはやちゃん。実に小動物的な可愛さがそこにはある。

「……なあ。なんで今まで教えてくれへんかな。こんなおいしいお店と知り合いなんて」

「いやあ、特に言う必要も無かったしねえ」

シュークリーム一個をペロリと平らげてしまったはやてちゃんは、口元を紙ナプキンで拭きつつ恨めしそうに言ってくる。いやあ、そんな機会ありませんでしたしねえ。

「まあ、ええわ。んっ……、うわっ、紅茶おいし」

「気に入ってくれたようで何よりです。で、そろそろ話をしようと思うんだけど、いいかな」

「あ、ごめんごめん」

おいしいシュークリームと紅茶に夢中なはやてちゃん、本当に連れてきた目的を忘れてたような気がしてならない。気を取り直すように佇まいを直すはやてちゃんを見ながら、自分はとりあえず、昨日あった小動物からの一連の騒動を説明した。

「ん、なんや……。ごめん、ちよお待って。昨日のフェレットが別世界の人で、堅一君と、昨日あったなのはちゃんが魔法使いになったって事でええんか？」

「ま、そういう事。で、これが問題のジュエルシード」

自分は左腕のブレスレットからジュエルシードを取り出してはやてちゃんへ見せる。当然出すのはステイールからで、《排出します》なんてしつかり喋られるおまけ付き。

「うわ、喋った。何も無い所から出てきた……。なんや、私夢でも見とるみたいや」

「残念ながら現実なんですこれ。で、これが海鳴にまだあるから、見つけたら近づかないように。あと自分達に連絡して欲しい」

「了解や。しかしまあ、普通に綺麗な宝石にしか見えへんなこれ。こんな危険物なんてわからんで」

「そこが困りどころなんだよね。子供が綺麗な石だと思つて拾つて行つたら目も当てられない」

「せやなあ。私も説明されてなかったら普通に拾つて持つて行くわ。というか警察に届ける」

「だよねえと言いながらジュエルシードを仕舞う。興味深そうに見ていたはやてちゃんはやつと残念そうだが、話はまだあるのである。今の話題も本題の一つではあるが、もう一つ、はやてちゃんには言わなければいけない事がある。

「それで、ここからもう一つ重要な話があります」

「何や。私も魔法使いになれる力がありますー、いう事か？　もしかして」

「アハハ、と紅茶を飲みつつ笑いながら言うはやてちゃんに表情が素に戻る。いや、あの程度の予測を重ねた上での仮説ではあるんだが、自分は間違いないと思つている。だがここで言い当てられるとは思つてなかったなあ。」

「……え、なんや、ホンマ？ いや笑いどころちゃうの？ 今のは。ホンマに？」

自分が笑っていない事に気付いたはやてちゃんが焦ったように問いかける。いやまあ普通だったら笑いどころなんですよ。中々笑えない状況になっているような気がするんですよ、自分は。

「一応これは、自分の中だけの仮説だけだね。昨日言ってた夢見が悪かったりここ最近の胸騒ぎだったり、正直自分と関連する事が多すぎるんだ。声が聞こえた時にも胸騒ぎが激しくなるって事があつたし。今は魔法は使えないかもしれないけれど、自分達と同じように魔導師になる力がある可能性が高いと思ってる」

「いや、うん、まあ……そう、やけど。え、ホンマに？」

「そう何度も聞かれても答えは変わらないですよ」

「うん、そうやね……」

焦った顔から一転、アハハ、と非常に乾いた笑みを浮かべつつ、はやてちゃんは背もたれにどっかりと背を預ける。まさか自分も摩訶不思議なゴタゴタに巻き込まれる立場にあるとは思っていなかっただろう、流石に。その衝撃は大きいのだと思われる。だが次の瞬間、勢い良く背もたれから身体を起こし手をテーブルの上に伸ばした。

「アーツ！ シュークリームたべよーおーっ！」

「いや、はやてちゃん……。そんな自棄にならなくても」

「うっさいわあ！ わけわからんわあ！ ボケえっ！ 私の平和を返せーっ！」
両手でむんずとシュークリームを掴み怒涛の勢いで口に頬張るはやてちゃんに、何も
言えませんでした。……非常に、鬼気迫る形相だったんだもの。



シュークリーム三個目に手をつけた頃にはスピードが落ち、既に幸せそうな顔でもぐもぐ食べているはやてちゃん。怒りはそれほど持続しないとは言うが、甘い物を食べる
とこれほど急速に穏やかになるんですね、女の子って。

「なんやもうどうでもええわ。シュークリームうまー」

「このお店の名物だからね。限定商品だしすぐ売り切れちゃうんだ」

「そかそか。もぐもぐ、気い向いたら魔法の話またしてや。あとここ連れてきてな」

「うん、わかったよ」

穏やかになったはやてちゃんとの柔らかい会話。嬉しそうに頬張る彼女の笑顔に
とつても癒される気分です、はい。気分はお兄さんなんだけどねこれって。

時刻はそろそろ夕方に差し掛かる頃。普通だったら今頃帰宅時間なんだけど、はやて
ちゃんに一連の話をする為に今日は早退したもので若干体感時間がおかしい気がする。

まあすぐいつも通りに戻るだろう。

と思つた矢先、どこか遠くに、感覚を直接刺激するような強烈な反応を捉えた。

思わず椅子から立ち上がりその方向を見つめる。この感覚は、何となく分かる。ジュエルシードの発動した感覚だ。

向かいに座っていたはやてちゃんは、食べかけのシュークリームを皿に戻し、自分の顔を見つめている。ああやっぱり、と思う。きつと自分の仮説は、間違っていない。

「今一瞬、胸が騒がしくなった。これがそうなんか？」

「うん、ちよつと行つてくる。士郎さんをお願いしておくからゆつくりしてて」
「きいつけてな」

軽く頷き、カウンターに居た士郎さんへ声をかけてはやてちゃんをお願いする。すぐに店を出てから、感覚に従つて街中を走りだした。

街中でなければ空を飛んで行く事も考えたが、こんな所で飛び出したら人に目撃されて大変な事になりかねん。

方向的には山のある方角である。さて、なるべく早く早く到着しないとと思つていたら、頭に声が響いてきた。

『なのは、なのは！ ダメだよ、僕がいくまで待つて！』

『待てない！ 待つている間に、人や生き物が巻き込まれちゃうかもしれない！』

ユーノが念話と言っていた、一種のテレパシーで交わされる会話は、諫めるユーノと突っ走るなのはちゃんの会話だった。どうもなのはちゃんは毎度毎度先行気味な気がするなあ。まあ高町家の人そっくりなんだけど。恭也さんなんか特に似てる。

どうやら自分達よりなのはちゃんのほうが現場には近いようだ。なのはちゃんが心配ではあるが、誰かが巻き込まれてしまう可能性というものがある分、ここは頼らざるを得ないか。

『なのはちゃん！ 本当に大丈夫か？』

『けんちゃん！ うん！ レイジンググハートも一緒、だから！』

『無茶はしないでね！』

ユーノがやんやと言っているが、とりあえず念話を切る。心配するのも分かる。なのはちゃんが怪我でもしたらどうしようとか思ってしまう。でも、それでも。大事に思っているものがあり、彼女がそれを守る為の力を持っているのであれば、その時は彼女を頼るべきだと考える。彼女を守るだけが、護り方ではないのだ。

だがそれと自分が心配なのはまた別の話で。

「ステイール、人気のない場所へ移動した後装着だ」

《既に探索済みです。その小道を右手に入って下さい》

「全く、優秀な相棒で頭の下がる思いだよ。昨日話したばかりだと言うのに、すっかり自分の事を理解してくれている。

「よし、行くぞ！」

《了解。準備完了、武装装着します》

言った通り人っ子一人いない裏通りの路地でバトルジャケットを装着し、自分は空へと飛び出した。



空を飛ぶ事数分、なるべく人から見えない所を飛んだ為少し遠回りもしたが、走って行くより大分時間は短縮できたと思う。

山に近づくにつれて、自分の目には空に見える黄色い閃光が映った。

「ステイール！ 何が起こってる！」

《ジュエルシードのものではありませんね。なのは嬢の他に一名、魔導師が存在しています》

「なんで！」

《分かりませんが、恐らく目的はジュエルシードかと。ですが、現在ののは嬢と交戦状態にあるようです》

なんで突然現れた魔導師と戦闘になってんだ！

全く訳がわからない状況だが、一つだけはつきりしている事がある。なのはちゃん
が、とても危ない状態にあるという事だ。

「もつと、もつと早くならんのか！」

《既に限界速度で飛行しています。現状ではこれ以上の速度での飛行は無理です》

「ああもう！ 昨日の内に魔法教えてもらつときや良かった！」

《後悔先に立たずです》

ご尤もな事を言われてしまいぐうの音も出ない。自分の不真面目に後悔をしてしま
うが、現実には目先では閃光が立ち上っている。

ようやく具体的な姿が視認可能な距離まで近づくと、なのはちゃんはプロテクション
で飛来した金色の物体を受け止めていた。その投擲主は、魔法の光と同じく、金色の髪
を持った、同い年ぐらいの少女だった。

しかしなのはちゃんが受け止めている魔法、感覚的に見て相当物騒なモノに見える。

《あの魔法、恐らく爆散します》

「本気か！ 近距離だぞ！」

ステイルの言葉にスピードを落とさずなのはちゃんへと近づいていく。だが自分が辿り着く前に、その魔法は爆散した。

「くそっ！」

爆発に巻き込まれ落下していくのはちゃん。こうなったら、落下を防ぐ為に受け止める軌道に修正するしかない。

しかしあんな物騒なモノをぶち当てた奴は、どうにも許せそうにない。とりあえず顔を拝んでやろうと見てみると、奴は再び魔法を発動させ、唇を動かしていた。

「ごめんね」

確かに唇が動いたのを見て、全身が熱くなるのを感じる。自分が何を考えているのかわからないが、今感じているのは確かに怒りである。

その瞬間、自分は確かに加速した。

「おおおおおっ!!」

少女が発動していた魔法を射出する前に落下していくのはちゃんを空中で抱きとめ、こちらに射出された二つの魔力弾を右腕で打ち払う。

なんだ、やればできるじゃないか。

《相棒。昨日の今日で無茶はやめて下さい》

「ああ、悪かったよ」

胸元から不満そうな声と共に忠告してくる相棒に軽く言い、なのはちゃんの様子を見る。

「あ……、けんちゃん」

「怪我はそんなになさそうだね、なのはちゃん。飛べる？」

「あ、うん」

軽く様子を見た限り、なのはちゃんは大丈夫そうだった。自分の言葉にあっさりとはび浮かび上がり、自分の脇に立つ。

うん、問題無さそうだ。

「さて……。事情はよく分からんし、聞いても答えてくれないんだと思う。なのはちゃんから君を攻撃したって事は中々考えにくいからね」

「……新士の魔導師」

自分が少女に向き直ると、彼女は再び先ほど打ち出した魔力弾を準備し、こちらへ向けてくる。

全く、こんなに好戦的な奴が、しかも魔導師がいるなんてユーノから聞いていない。恐らく、何らかの目的があつて、ジユエルシードを収集しに来たのだと思う。ユーノの

協力者ではあり得ない。

となると、自分のするべき事は一つだ。

「生憎、自分はそれほどお人好しなつもりはないんでね。君が彼女にした事、謝罪してもらおうか」

「……………私とジュエルシードに、関わらないで」

恐らく警告のつもりなのだろう。こちらを威嚇する姿勢を崩さず、彼女は静かに言う。全く、そんな訳にはいかないんだっての。

「謝罪は求めた。そちらは威嚇するのみ。交渉は決裂だな」

《全く会話が成立していませんでしたが》

「そりやそうだ、話すつもりが無いんだからな向こうに」

静かに拳を構え、空中で腰を低くする。いつでも飛び出せる体勢を作り、問答無用で攻撃する。

「さて、それじゃ…………」

自分の意思に気付いたのか、少女は静かに警戒し、自分を睨みつけてきた。

だがその一瞬に、思いっきり飛び出す！

「はっ！」

「っ！！」

一瞬で相手の間合いに入り拳を突く。少女は驚きながらも反応し、後ろへ下がると同時に構えていた魔力弾を射出してきた。

同時に三発の射撃、だが来るコースが見えていれば避けるのは容易い。

「セエツ！」

「つつ、このー！」

真横へ移動してからすぐに直線で相手へ詰めより、右足からの蹴りを見舞う。それを持っている杖で防御した少女だが、その衝撃までは逃がしきれなかったようで僅かに横へ下がる。

そのその隙を見逃さず、一気に詰め寄ろうとした所で、彼女は再度魔力弾をこちらへ射出してきた。

「おっと」

「当たれ！」

連続で撃ってくる魔力弾を避けつつ少女へ近づく隙を伺うが、どうやら少女は遠距離からの攻撃に集中するつもりらしく、体勢を整えながら後方に引き、魔力弾を打ち続けてきた。

自分の近距離戦闘の適性を理解したのでろう、中々状況判断が的確だと思われる。

正面からの突破は難しいと判断し迂回しようとしても、少女は的確な判断で回避行動

を取りつつ魔力弾を雨あられの如く浴びせてくる。

左右のみではない、上下も駆使した三次元的回避・攻撃行動とその的確な判断に思わず舌を巻く。

「くそつ。素早い上に判断も的確かつ！」

「はあっ！」

口を開いた隙を狙った少女からの斬撃。

それを紙一重で避けてからカウンターを狙おうとしたが、少女は獲物を振り切る前に素早く加速上昇し、頭上から再び魔力弾を放つ。

「チツ、巧い。あいつ空中戦とかの経験があるな」

《彼女は戦闘訓練を受けた魔導師のようです。使用する魔法、戦術共に的確です》

「分かっているって。何か状況を打開するアイデアないか？」

《一つ、今の相棒にもできる手段はあります》

彼女の弾を避けつつ検討していると、相棒から一つのアイデアが提示された。それは余りにも安易なものであるが、現状では確かに有効だろう。今、この時限定だが。

「まあそれしかないな。奇を衒った作戦だが、上手くいくと思う」

《この戦法が通用するのは一度のみです。それだけで、確実に相手を打ち倒す攻撃をして下さい。躊躇いは敗北に繋がります》

「わかってる！」

相棒の声に気合を入れ、覚悟を決める。必ず成功させなければジリ貧になるのは眼に見えている。魔法技術では相手が上なのだ、躊躇いなどしている余裕もない！

「いづくぞおおっ！」

声と共に魔力弾を避ける軌道から一転、弾の雨を掻い潜り、少女へと全力で突貫する軌道へ切り替えた。もちろん魔力弾は可能な限り避けるが、被弾してしまいそうなものは腕に付与した魔力で弾き飛ばす。

「くっ、そんな無茶なんて！」

少女は自分の突貫を無茶と断じ、魔力弾をより密集させて射出してくる。確かに傍目かた見れば無茶かもしれないが、自分にはこの手段しか思いつかなかったし、一発勝負なんだ。この程度の無茶は重々承知している！

気合で降り注ぐ弾幕を避け、弾きつつ彼女へ近づくと、距離を取ろうとした彼女が後ろへ下がる。その瞬間が、好機！

《今です！》

「おおおっ!!」

自分は腕に力を込め、拳を突き出す。もつと、もつと先へと願いながら。その願いは魔法の力で叶えられ、突き出した右手の拳から、一つの魔力弾が射出された。

これが相棒の考えた作戦。未だ自分との戦闘に慣れていない彼女へ通じる唯一の戦術。自分すら認識していなかった魔力弾の射撃を、今この瞬間に成功させたのだ！

「そんなっ！」

恐らく少女は自分が近距離のみの戦闘能力者であると思っていただろう。まあ自分も現状はそれだけだと思っていたので仕方がないが。

そこへ来て、いきなりの魔力弾での攻撃だ、浮き足立つのも当然の事。彼女は慌てて回避行動を取り、射線上から若干大きく離れた。それと同時に、意識も一瞬回避行動へと向く。

そんな瞬間を見逃す訳も無く、自分は彼女の横へ回りこむと、魔方陣の足場を作り、一気に足を踏み出した。

「セリヤアツ!!」

「くうっ!」

足場からの左後ろ回し蹴りを放つ。上手く隙を突けたようで、彼女は回避できずに自分の足を持っている杖で受け止めた。

だがそれも予想しうる一手の内の一つ。足は、二本あるんだよ!

身体を支えている右足のみでジャンプし、左足を捻るようにして杖を横へ流す。そうしてガラ空きになった側頭部へ、右足を叩き込む!

「おおおっ！」

ガツン、と思いつきり米神へ魔力を付与した右足を、そのまま打ち下ろす。

勢い良く打ち下ろされた右足に巻き込まれ、少女は思いつきり、地面へと落下していった。

ドン、と下方より若干鈍く聞こえてきた音に、全身の緊張を解く。結構厳しい戦いだったが、何とかなつたようだ。もう同じネタは使えないけれどな。

なんて考えていたら、相棒が小さく喋った。

《……少々やり過ぎかもしれません》

「え、マジで?」

《もう少し自身の戦闘能力を理解して下さい。先ほどの物理ダメージに加え魔力ダメージが上乘せされ、半端な実力の者であれば気絶じゃ済まない破壊力が乗っています》

「ちよおお！ 行こう、助けに行こう！」

《自分がしたんでしょに……。相棒は戦闘になると大雑把になる嫌いがありますね。それでも戦術をきっちり成立させるのは血の力か才能か……》

ブツブツと胸元で喋る相棒を放って、先程少女が落下したと思われる地点へと急いで向かう。

周囲を慌てて探すと、少女は横になつて倒れていた。そしてその2メートルほど前に地面が陥没している所。そこから少女へと繋がる引きずつたような跡。ドン、と地面に衝突してから2メートルほど地面を擦つて移動したのか……。

慌てて少女へ近づき、顔を起こす。苦しそうに目を瞑る少女は中々の美少女ではあるが、その米神から軽く血を流しているのを見て自分の血の気が引く。だが胸が動き、口も呼吸ができてきているようなので、とりあえずは生きているようだ。

《大丈夫のようですね。接触している地点より生体スキャンをかけましたが脳震盪を起こしているようです。それと、頭部からの出血は相棒の蹴りによるものです》

「そっか、良くはないけどとりあえず大事にならなくて良かった」

《アバイスが優秀なのでしょう。その三角形の板が、彼女の被害を最小限に食い止めたようです》

なるほど、彼女の横を見ると金色に煌く三角形の板が転がっている。これが先ほど自分の蹴り足を受け止めた杖か。

《意識のない内に回収しておきましょう。それと、彼女をどこかへ運ぶ必要があるかと思えます》

「そうだな……」

光る三角形の板を回収し、さて彼女はどうしようか……。と思つていたら、上空より

なのはちゃんが降りてきた。一緒にユーノを連れて。

「あ、なのはちゃん」

「けんちゃん。ジュエルシード回収しておいた」

地面へ降り立ったなのはちゃんは静かに、そう、静かに言うのと連れてきたユーノを肩から降ろした。

あれ、なんだろう。どこか怯えられているような、でもそれだけではない、何か普段と違う感じをなのはちゃんに覚える。

「あ、ああ、ありがとうなのはちゃん」

「ねえ、けんちゃん」

何だかよく分からない感覚に戸惑いながら感謝を述べるが、なのはちゃんは相変わらず静かに次の言葉を述べる。

「けんちゃん。さつき、その子の顔、蹴らなかつた？」

静かに、そう、静かに言うなのはちゃんの瞳には、明らかに軽蔑の色が見て取れた。



どうやらグーなら良いらしい。というのが高町家女性陣糾弾会で自分が得た答えで

ある。

まあ確かに、殴るより足蹴にするほうがより外道な感じではあるが、何もそこまで糾弾せんでもないんではなからうか……。なのはちやんを助けた訳だし。

「うん、それはその、嬉しいんだけどね。やっぱり女の子の顔を蹴るのはいけない事だなのはは思うの」

「いや、直接蹴ったのは米神でして。顔に関しては自然と脛が当たってしまったので」「どちらにしても良くないと思うわ、桃子さんも」

高町家リビングにて、ソファアーム椅子もあるのに床に正座させられる状況が早一時間。未だにお説教は終わる気配を見せません。

女性陣の中で美由希さんは連れてきた少女をソファアームに寝かせて看病している。米神の傷やらも美由希さんが応急処理をしてくれた。

「あたしの顔が木刀で殴られた時、恭ちゃんとお父さんがそんな感じだよ」「何の慰めにもなっていないんでやめてくれませんか、そういうの」

自分の言葉にあははと本当に楽しそうに笑う美由希さんに若干イラツとする。なんだろうこの感覚。

そんな最中も桃子さんとなのはちやんの糾弾は止まらず、女の子に乱暴はいけませんとかデリケートなんだからとか、通常であれば至極尤もな事を言われ自分は黙って頷く

事を繰り返す。

あー、早く終わらないかなーと思っていたら、リビングに恭也さんと士郎さんが入ってきた。恭也さんの肩にはあの後連絡により二人の元へ向かったユーノが。……士郎さんは巨大な赤い犬を肩に担ぎながら。

「ただいま。いやー中々重かった」

「おかえりなさい……。何、ソレ？」

美由希さんに指さされた犬はドサツと若干乱暴に床に下ろされた。見ると全身を鈍く光る糸に雁字搦めにされ、さらに緑色に光る輪つかがこれでもかと括りつけられている。

「恭也さん達が見つけたジュエルシードを封印していたら、襲ってきたんです。言葉を喋っていたので、もしかしたらその子の使い魔かとも思ってた」

「路地裏での戦闘だった。狭い空間で戦っている以上、御神流に負ける要素はどこにも無かった」

ユーノの言葉に続けて、恭也さんが誇らしげに自らの流派の勝ちを語る。しかし、こいつも魔法を使った戦闘を繰り返してたらどうなっていたのか。

「いや、ありえないんですよ。魔法も使わず物凄い速さで移動して魔力弾を避けるし、ピルの間を飛んで相手の制空権を抑えるなんて。普通できないんですよ魔導師でもない

人に……」

「それを可能にするのが御神流だからな。しかし、恭也は若干神速に頼る嫌いがある。そこは今後矯正していくとしよう」

「よろしく頼む」

なんだか、えらいもん見てしまったというように項垂れる小動物と、その横で爽やかに親子の談笑をしている高町男子。ほんと、この一家は規格外も良い所だな。なのはちゃんと桃子さんも含めて。

しかし、問答無用で襲ってきた少女と、言葉を話し問答無用で襲ってくる犬。両方狙いはジユエルシード。

繋がりを疑うなというのが無理そうな話である。

「しかし、余計厄介な話になってきた気がするな……」

「けんちゃん、まだ話は終わってないわよ？」

「はい、すいません桃子さん。反省してます」

現状に対する憂いを述べても桃子さんは許してくれない。

これから小一時間、自分は少女が目を覚ますまで、正座を強制させられる事となつてしまいました。

ほんと助けてくれよ士郎さん……。

第八話

ジュエルシードと異世界からやってきた小動物、ユーノ・スクライアとの邂逅から翌日、再びジュエルシードを封印しに向かった自分は、なのはちゃんと謎の魔導師が戦闘している現場を目撃する。

卓越した技術と戦術に為す術無く墜落していくなのはちゃん。そこへ駆けつけた自分こと中田堅一は戦闘へと割り込み、謎の魔導師を撃退する。

気絶した魔導師を連れ帰った自分を待ち受けていたものは、高町家での説教地獄であつた……。

あ、謎の魔導師もとい少女が目を覚めました。



「んっ……」

「あつ、起きた？」

ソファアで横になっている少女が声をあげ、美由希さんが声をかける。少女は薄く目を開けながらも、未だ意識ははつきりとはしていないようだ。

「……は……」

「ここは君が攻撃した女の子の家だよ」

美由希さんがざつくりと現在地の説明をする。いやしかし、攻撃した子の家つて、正しいんだけどひどい言い方だなあ。

「こう、げき……、っジュエルシード！」

意味が理解できたのか、急速に意識を覚醒させた彼女は一気に起き上がると周囲を一瞬で見回す。そして、何を思ったのか突然一番近くに居た美由希さんへ腕を伸ばした。

「ジュエルシードを返せっ！」

恐らくは殴りかかった後人質でも何でもしようと思っただけであろう。中々の気迫を見せて美由希さんへ掴みかかる少女だが、相手が悪すぎる。美由希さんは伸ばしてきた手をあっさりとは掴み取ると無言で少女の腕を回す。あっせりと関節を極められた彼女は、後ろ手に床に倒されてしまった。

「全く、いきなり掴みかかってくるってどういう事よ」

綺麗に床に押し倒されてしまった彼女は何も言わずに背後の美由希さんを睨みつけ

る。そして改めて周囲を見合すと、土郎さんが連れてきた雁字搦めの赤い犬を見つけて大きな声を挙げた。

「アルフツ！ アルフに何をしたっ！」

「何も。襲いかかかってきたから返り討ちにしたただけだ。怪我は負わせていない」

少女の叫び声に、騒ぎを聞きつけた恭也さんが答える。答えた恭也さんを睨みつけた後、少女は打って変わって驚愕を表情に表していた。

「そんな……、アルフが負けるなんて」

「まあ、しょうがないと思うよ。あんな戦闘は魔法使いであればありえない事だから」

未だにえらいもん見てしまったと全身で表しているユーノの言葉に少女は口を噤む。大人しくなったからか、また暴れだしても抑えこむ自信があるからなのか、美由希さんはあつさりとして少女を開放した。

「えっ……」

「そろそろ我が家の家長から合図が下るからね。君にはもうちよつと付き合つて貰うよ」

不思議そうに見上げる少女に、美由希さんは余裕の笑みで答える。言葉が終わるのと同時に、非常に良いタイミングで、家長である土郎さんから合図が下った。

「おーい、メシ出来たぞー。久々の男の野生料理、味わってくれ」

両手に掲げた皿の上には、大盛りのおかずがこれ見よがしに盛りつけられていた。



和やかに、非常に和やかに高町家でご相伴に預かる。土郎さんの言った通り、今夜の料理は土郎さん特製の野性味溢れる品々だ。猪肉の炒め物に野草の天ぷら、川魚の唐揚げなど、焼く、揚げるといった素材の味を生かしまくった数々である。

猪肉は燻製されたものをじっくり焼き上げており柔らかく解れて旨い。なんでも最近山籠りに行った際に狩ったものを燻製にして持ち帰ってきたらしい。さすが土郎さん、サバイバル技術も伊達ではない。うちの父も全国漫遊して山籠りしてたらしいから出来るんだらうけど。

野草と川魚は今日近所の八百屋と魚屋で売っていたものを買ってきたと。採れたてらしく多少の塩で十分に食べられる逸品だ。

その品々を食べている高町家の面々は、桃子さんが笑顔で土郎さんの料理を褒め、また土郎さんも桃子さんの普段の料理を褒めストロベリったやり取りをしている。向かいの席では恭也さんと美由希さんが猪肉の取り合い。いつも通り恭也さんが美由希さんを煽って争いに発展している。

なのはちゃんの横に自分が座り、テーブルの上でユーノが皿に盛られた猪肉を必死に齧っている。どうもお気に召したらしい。

そして、自然と自分の隣に腰掛ける少女は、非常に戸惑った、不思議そうな顔して状況を眺めていた。

「あれ、食べないの？」

「……えつと、うん。い、いただきます」

「お父さんの料理おいしいから、一杯食べて行ってね！」

彼女が何も手をつけていない事に気付いたなのはちゃんが笑顔で問いかけ、少女は用意されたフォークを使っておずおずと料理を口に入れる。小声で「おいし」と呟いたのを自分は聞き逃さなかった。

「あ、私なのは。高町なのは。私立聖祥大付属小学校の三年生！」

「中田堅一。なのはちゃんの同級生だ」

「ユーノ、ユーノ・スクライア。多分君と同じ、魔法技術のある次元世界から来た」

「あの、その……」

なのはちゃんを筆頭に唐突に次々と自己紹介をすると、少女はわたわたと慌てた様子で周囲をきよろきよろする。うむ、何分あんな経緯があった訳だし、名前を言うべきなのかどうか、判断に困ってるのだろう。

まあなのはちゃんは天然で自己紹介したんだらうけど、自分は多少は少女の名前を聞く意図があつてしている。名前も分からんのでは何も話ができんからな。

暫く少女がわたわたしたのを見ていたら、リビングのほうで急にバタバタと床を叩く音が聞こえた。

「あれ、なんだこの音」

「あつ、目が覚めたのかな」

士郎さんは何かに気づくと一旦台所へ行き、比較的大きな猪肉の燻製を焼いたものを持つてくる。それをそのままリビングへ持つていくと、横になつて暴れている犬の前にそれを差し出す。ああ、あの音は犬の暴れた音か。

「いいか、暴れないなら口を開放してこの肉を食べさせてあげよう。暴れないと誓えるなら首を二回、縦に触りなさい」

士郎さんは目の前に香ばしい肉の香りをチラつかせ、それを惹きつけられたかのように見つめる犬。士郎さんの指示にあつさり首を二回縦に振ると、士郎さんに鋼糸で縛られた口を解いてもらつていた。そのまま士郎さんが皿を床に置くと、勢い良く肉にかぶりつき出した。

「ガブツ、ガツ、んおつ、おいしー！」

「はっはっはっ、うまいかー。俺の料理も大したもんだなあ」

「こんな肉初めて食ったよ！ うまいねえー！ガブガブ」
「ア、アルフ……」

出された肉に思いつきり賛辞を送りつつ猛烈な勢いで食べまくる飼犬——アフルの姿を、青ざめた顔で見つめる少女。あんなにあっさり懐かれてしまつては、正直トッブリーダーも真つ青だろう。ていうか飼主が真つ青だ。

少女の眩きが聞こえたのだろう、アルフと呼ばれた犬がこちらへ顔をあげ、声をかけてきた。

「あつ、フェイトー！ この肉すつこいうまい……よ……よ……」

目の前の肉に夢中になっていたアルフだが、そのフェイトと呼んだ少女の青ざめた顔を見て気付いたのだろう。口は止まり「やってもら」といった驚愕の表情を貼りつけている。

いくら知能が高かろうと、犬は犬。目の前にぶら下げられた餌に本能は抗えなかったか……。

「よろしく、フェイト」

「フェイトちゃんて言うんだ！ よろしくね！」

「ああ……、はい……」

状況へ追いついて打ちをかけるように自分が名前を呼ぶと、天然なのだろう、なのはちゃん

も続けて嬉しそうに名前を呼ぶ。これが意図的だったら怖い。

少女——フェイトは諦めたようにため息混じりに答えると、再び猪肉を一枚、口の中に運び出す。

状況は中々に、カオスな状態となっているのだった。



和やかな夕食も終わり、リビングでTVを見つつゆっくりとお茶を飲む。うむ、この食後のまったり感に飲むお茶がたまらんですよね。

「さて、そろそろ話をしようか」

湯のみをテーブルに置きそうだった士郎さんの言葉に思わずハツとする。いかん、今完全に抜けていた。

横を見ると一緒にお茶を飲んでいたフェイトと呼ばれる少女もハツとし、急にそわそわします。うん、分かる。今まで和やかに食事してまったり満腹を味わっていたのに急に気持ち切り替えるなんて難しいのだ。

ちなみにユーノはリビングのソファのほうで完全に寛いでいる。美由希さんの膝の上で丸くなっている所を見ると眠っているようだ。どうも背中を撫でられている間

に気持ちよくなつてしまつたらしい。おのれ、若干羨ましい。

気持ちの整理がついていないフェイトの状態を知つてか知らずか、土郎さんは言葉を続ける。

「まあいきなり君の事情を説明しろとは言わない。先に我々の事情を聞いて貰つてもいいかな」

「あの、えと……、はい」

「ありがとう。我々はこの、ユーノ君が追跡しているジュエルシードというものを回収している。君も知っているだろうが、ジュエルシードは放つておけば危険な物だ、最悪この街がメチャクチャになつてしまう可能性もあるという事で、今手分けして回収を行つている。まあ、その私の娘であるのはとその友人の堅一君が騒動に巻き込まれて魔法使いになつたという事もあるがな」

いきなり話を振られたなのはちゃんはやつと困つたような視線を自分に投げた後、てへへと小さくテレ笑い。確かに、なのはちゃんが巻き込まれなければ高町家総出での搜索なんて事にはなつていなかったとは思ふ。これが良い事なのかどうかは置いておいて。

「我々の目的として最優先なのは、街中に散らばつたジュエルシードの全回収なんだ。その後の、回収したジュエルシードの取り扱いに関しては、正直言つてどうでも良いと

思っている。通常であればユーノ君へ返却するという事になるけれど、ね。……なので、君の事情によっては、回収したジュエルシードを君に渡すのも吝かではないと考えている」

中々に黒い事を言う土郎さん。確かに最優先の目的は危険物の回収にあり、その後の取り扱いについては問題ではないと思う。正直自分達には、ユーノに返さなければいけない事情というのは全く無いのだ。まあ協力すると言った手前、返すのが一応の筋ではあるけれどね。それでも、それが絶対ではない。

余程土郎さんの言葉が意外だったのか、フェイトは目を思い切り見開いて土郎さんを見る。

「何か困っているのか、大事な事情があるのか。よければ話してくれないか？ 君の悪意ようにはしない事は約束する」

さて、土郎さんが畳み掛けて言った言葉に、フェイトは非常に悩んでいるようなのだが。突然なのはちゃんに襲いかかるほど必死になって集めているものを提供するといった甘い誘惑に、小学生程度の子供が抗えるものであろうか。それが重要なものであれば尚更、困難なのは明らかである。

予想通り、フェイトは一頻り悩んだ後、自分を納得させるように頷くと土郎さんへ向けて口を開いた。

「私の……。私の大切な人が、それが必要だから、集めて欲しいって」
「大切な人……」

フェイトの言葉を吟味する。大切な人というフレーズ、陳腐な恋愛小説などに出てくるような恋人とかを指す意味で多く使われるが、この場合当て嵌まるのだろうか。小学生程度の女の子がそこまで必死になる対象として恋人が居るっていうのは中々に想像しづらい。

「母親だよ。フェイトの母親、プレシアからの命令さ」

「アルフツ!!」

「諦めなよフェイト、あたし達じゃこの人達を言いくるめるなんてのは無理だよ。それに、事情を話せば手伝ってくれるんだろ?」

「その事情にもよるけれどね」

アルフの言葉にやんわりと場合によつては協力できない旨を含ませて答える。それでもアルフは不満そうな顔をせずに一つ頷いた。それにしても母親、か。フェイトの態度から見ると慕ってはいるんだらうけれど、どこか怯えているような節がある。それにあのアルフの態度、フェイトの母親、プレシアの名を告げた時の表情といい、良い母親であるとは思っていないのだらう……。

例えば、児童虐待の被害者である被虐待児は、そのほとんどが母親が摘発されそうに

なった際、必死になって母親を庇うという。虐待をされるのは自分が悪いから、と信じていたり、記憶の中にある優しい母親の思い出から、相手を憎みきれない事から自己否定へと走ると言われている。

自分はそういった被虐待児を間近で見たことが無いので判断はできかねるが、あのアルフの印象と聞き齧った知識でフェイトを見ると、どうにもフェイトの境遇に不安を覚えてしまう。例えば相手が問答無用でなのはちゃんを襲った奴だとしても、小学生の子供がそういった状態にある可能性が僅かでもあるのはよろしくないと考える。

そして土郎さん達の表情はと言うと、どうにも渋い顔をしている。どうも、状況判断だけで見ると宜しくないみたいだ。

「……それでは、そのお母さんにお会いしてお話を伺うというのは難しいのかな？」

「それは、……ごめんなさい」

「そうか……、困ったな」

心底申し訳無きそうに謝るフェイトに、土郎さんは本当に困った顔をして顎に手を当てる。今後の動きに関して色々考えているのだろう。

そんな悩める土郎さんの横で、桃子さんが手を打つ。

「あなた、仕方がないわよ。フェイトちゃん、無理して悩まなくていいのよ。困ってるならちゃんと、ジュエルシードは渡してあげるから」

「ホントッ！ ……あ、その、ありがとう、ございます」

「ユ一ノ君へは、俺から説明するしか、ないか……」

喜ぶフェイトの笑顔に仕方ないといった表情で言う土郎さん。流石に性急に話を進めようとした反省もあるのだろう、若干ホッとした顔で答えていた。

重苦しい話が一段落すると、すぐになのはちゃんがフェイトちゃんを連れてリビングへと向かう。どうも今やっている動物番組と一緒に見るつもりらしい。多少困惑した顔で腕を引かれるまま、フェイトはなのはちゃんと一緒へリビングへと向かっていった。

ああいう時は、有無を言わさぬ頑固さと積極性を発揮するよなあなのはちゃん……。

「さて、どうするかな……」

小声でぼそつと呟いた土郎さんの言葉に顔を向ける。そこにはやはり、渋い顔をした土郎さんと、心配そうな桃子さんの姿があった。

「あなた……」

「可能性としては、無い訳ではないと思うんだ」

「やっぱり、そうなんですかね」

自分の言葉に無言で同意を示す。土郎さんは町内会でのボーイスカウトやサッカークラブの監督もやっていたりするので、子供と接する機会は多い。そして、そういうク

ラブ通いをしている児童の中にも、偶に被虐待児が混ざっている事もあるそうだ。

「町内会であれば、近所の親同士が連携して子供を守る、なんて事も可能なんだが、さすがに別世界となるとな……」

「さすがにそれは無理がありますよね」

「行く事だけなら可能だよ」

士郎さんの言葉に苦笑して自分が答えると、横から声がかかる。先ほどフェイトの母親、プレシアさんの事で良く思っていないさそうだったアルフが、こちらを見ていた。

「あたしがプレシアの居所、フェイトの家の場所を教える。ユーノっていう奴だったら転移魔法が使えるだろうから、そいつに頼んで行けばいいさ」

「それは有難いけど、けどフェイトは」

「フェイトは、苦しんでるんだ。あんな鬼婆に、いつか優しくしてもらえるって、叱られるのはいつも自分が悪いからだって思い込んで……」

自分の否定の言葉を遮り、アルフは言葉を続ける。状況はやはり、余りよろしくないようだ。

「フェイトも、昔はあの子みたいに明るい子だったんだよ。けど教育係のリニスが居なくなっちゃまって、プレシアが魔法訓練をするようになってからいつも叱られるようになって、いつの間にか、あんな風に寂しく笑うようになって……。あたしはフェ

イトの使い魔だ、心は繋がってる。だから、どれだけフェイトが苦しんでるのかも、隠しているけど分かっちゃうんだよ」

リニスというのが誰かは分からないが、きつとフェイトに優しくしてくれた人物なのだろう。その人物が居なくなり、毎日実の母親から叱られるようになる。多感な子供であれば、確かに自虐的に、自己否定を行ってしまうのも仕方がないのかもしれない。

「あの子は気づいてないけど、あんたらと一緒に御飯食べてる時は、本当に楽しそうだった。それに、憧れてた。いつか自分の母親も、あんたみたいに自分に料理作って、優しく笑ってくれるようになって。けど、今のままじゃ無理だよ。アイツが、プレシアがそんな風になる訳ないんだ。あんたらみたいに赤の他人なのにフェイトの心配をしてくれる人がいるっていうのに、アイツはそんな事もしてくれやしないさ」

吐き捨てるように言うアルフの言葉に、思わず顔を顰める。傍目から見ても酷く映る親子関係というのは、はたしてどれ程のものなのだろうかと考えてしまう。

「フェイトには怒られるかもしれないけれど、あたしはフェイトの使い魔だ。フェイトが一番大事だから、あんた達に頼みたいんだ。フェイトを心配してくれるあんた達なら、きつとフェイトを助けてくれる。いきなり襲っておいでこんな事を言うのもおかしいけれど、頼むよ。フェイトを助けてやってくれないか？ フェイトの為なら、あたしが何でもするからさ」

まるで伏せをするように、大きな赤い犬が目の前で頭を垂れる。堪え切れない涙を浮かべるアルフの姿は、確かに主人の事を真摯に思つての言葉であると如実に物語つていた。

だがしかし、アルフにこうしてお願いをされても、自分達に何が出来るのか、という事が全く思いつかない。地球の人であればそういった機関に問い合わせれば何とかなりそうなものだが、さすがに世界が違つてどうすればいいのか分からなくなつてしまふ。

「しかし、どうすれば良いのか」

「私がフエイトちゃんのお母さんと話をします」

「桃子さん……」

思わず士郎さんの言つた言葉に、桃子さんが答える。自分と士郎さん、二人で驚いて桃子さんを見ると、そこには既に決意を固めている母親の姿があつた。

「話して分かつてくれるとは思われないけれど、それでも、きつと同じ母親だからこそ、分かる事があると思うの」

「いや、しかしだな……」

「お願いあなた。きつと、危ない事にはならないから……」

既に決意を固めた桃子さんの言葉に、士郎さんは何とか行かせない理由を考えている

ようだが、思いつかない。「うう……」とか「むむむ」なんて言葉をずっと繰り返すだけだ。

やがて、士郎さんから降参の声が上がる。

「絶対に、危ないことはしないでくれ」

「約束するわ、ありがとうあなた」

「じゃあ、自分も行きます。もし何かあった時も、自分とユーノの二人がいれば何とかなると思います。なのはちゃんは今余り心配かけたくないので連れて行かないほうがいいと思いますけど」

「あたしも一緒にいるようにするから、何があってもあんた達は守ってみせるよ」

自分とアルフの言葉に「絶対に頼むぞ」と念を押して士郎さんが言う。そして一緒に行くと言い出した士郎さんに、一緒だと相手が警戒するからと桃子さんが今度は士郎さんを説得する場面もあったが、結局士郎さんは家で待機する事となった。

それからずっと、フエイトがなのはちゃんにあれやこれやと世話を焼かれている間に自分達はどういう形で訪問するのが良いか、打ち合わせを行っていた。



明けて翌日。

昨夜はなのはちゃんに世話を焼かれている内に夜遅くになった事に気付いたフェイトが帰宅しようとした所を桃子さんとなのはちゃん二人がかりで引き止め、ついでに自分も引き止められて一緒にお泊りする事となった。

そして早朝、まだなのはちゃん達が寝静まっている内にリビングで丸くなっていたユーノを引つ掴み高町家の道場へ。そこで土郎さん、桃子さんとアルフと合流し、今後の予定とジュエルシードを引き渡す話をした。

ちなみに昨日の内に、自分達の持つているジュエルシードは数にして五つ。フェイト達が集めていたという二つを合わせても未だ七つという状況だ。街中には残り14個ものジュエルシードが残っている。

ジュエルシードの引渡しに関して、正直ユーノは乗り気ではない。あれが危険物であり、自分が事故によってばら蒔いてしまった不安の種だからだ。だがそこをなんとか説得し、そのフェイトの母親の目的を聞いてからなら、といった形で渋々承諾させた。

そんな話し合いが終わった後、フェイトが帰る段となった。

「それじゃあフェイトちゃん、また遊ぼうね！」

「あ、うん……」

未だに曖昧にどういった対応を取っていいのかわからないといった表情でフェイト

はなのはちゃんへ返事を返す。まあなんだ、うん、なのはちゃんも押しが強いからな。
なのはちゃんの言葉に続き、自分は懐から三角形の板、フェイトのデバイスを取り出しそれを手渡す。

「悪かったな」

「いえ……、多分、当然の事だから」

自分の言葉に若干シユンとして答える。なんだ、自分のやった事がどういう事なのか理解できてるじゃないか。……それでもいきなり襲撃しなければならぬぐらい、母親からの指命が大事なのだろう。

全く、世の中ままならないもんだな。

「あんた達、ありがとうね。今預かってる分を渡したらすぐにまた会いに来るから」

「ああ、待つてるよ」

フェイトの隣に立つ、赤髪の女性が自分達へ礼を述べる。……赤い犬だったアルフが、変身した姿である。この姿を見た時は思わず「どちらさんですか」と問いかけてしまった。フェイトより年上のお姉さんという格好のその女性は、確かに昨夜の喋る犬と同じ声で礼を述べた。

彼女達は、お母さんへのお土産にと桃子さんから手渡されたお菓子の箱を持って中庭へと立っている。

ここから直接、母親の居る場所まで転移魔法で移動する事となった。

「それじゃあ、ありがとうございまして」

一言そう言い、自身のデバイスを杖にし、フェイトは魔法を発動させて去っていった。去りに際し、アルフがアイコンタクトをしてきたのに頷き返す。……この後すぐ、自分達も向かうよう打ち合わせていたのである。

但し、この打ち合わせの時は話し合われなかった事態も発生している。

………なのはちゃんに、バレてしまったのだ。

朝からそわそわしている土郎さんと、何だか真剣な眼差しでフェイトを見る桃子さん。いつもと違う雰囲気の二人に、多感なお年ごろの少女は、この後何かがある事に気づいてしまったのだ。

「何かあるんなら、わたしも手伝う！ 自分だけ知らないで、誰かに任せるだけなんて嫌だから！」

目元に涙を浮かべ、そう自分に訴えてきたのはちゃんを無下にする事は出来なかった。こうして、当初の予定より若干名増えた四人で、自分達はこれよりフェイトの母親へ

会いに行く。

自分達だけで向かうより、当然フェイトも共に居たほうが良いという結論から、このタイミングで会いに行くしか無いと考えた。

「じゃあユーノ君。転移魔法をお願いね」

「桃子さん、気をつけてくれ。堅一君、ユーノ君、桃子さんを頼む」

「任せて下さい。それじゃあ、いきますー！」

「心配しないで待っててね」

ユーノの展開した魔方陣、緑色に光るその周辺に集まった自分達は、お互いの目を見てしっかりと頷く。きつと、自分達だったら何とかできる。

「いくよ、転移！」

何があっても桃子さんとなのはちゃんを守ろうと心に決めながら、自分は光の渦へと飲み込まれていった。

第九話

前日、ジュエルシードという危険物を先行して回収しに行つたのはちゃんを襲つた謎の魔導師、フェイトと名乗る少女より、彼女の目的はジュエルシードの回収自体、ひいてはそれを依頼した母親の為であるという事を理解した。

現在地球にてジュエルシード回収を行っている高町家では、その回収意図がどのようなものであるかを含め、フェイトの母親、プレシアという人物を見定める為、高町桃子を派遣する事を決定。

フェイトの使い魔であるアルフを協力者とし、事態はフェイトの与り知らぬ所で鳴動するのだつた……。

要は、母親同士の面談がしたいって事です。



ユーノの発動した転移魔法により導かれた、フェイトの母親の居る場所。ユーノの放

つ緑色の光が晴れた先には、驚愕に目を見開くフェイトと落ち着いた表情のアルフの姿があった。

フェイトはそりや驚く。なんせほんの数分前に別れた人間が今度は自分達から姿を現すなんて事になったのだ。当然転移座標を教えたアルフも説明なんざしちやいない。

という事で、ここは口八丁で何とかやってやろう。

「悪いが後を尾けさせて貰ったよ。この小動物は補助とか転移とか得意らしいんでな。君の転移魔法を解析させて位置を割り出して貰った」

口を開こうとしたフェイトに先んじて自分が話す。自分の言葉にフェイトどころかアルフすら驚いて見ているのは逆にこっちがびっくりだ。まさかこんな誤魔化ししてくるとは思わなかったらしい。

そして嘘のネタにされたユーノは「よく言うよ……」と自分の足元で小声でボヤク。まあいいじゃないか、多少事実らしいし。

「そんな……っ！ スクラリア……古代遺跡発掘の一族……」

フェイトがそんな眩きと共に改めて驚愕を貼りつけた顔でユーノを見る。小声で更に「移動する一族だから……」「緊急避難の転移が……」とか言っていて、ただのハツタリにも信憑性があったようだ。

その眩きを聞いて段々得意気になっていくユーノ。調子に乗るなよ小動物。

「フェイトさん。こんな風に訪問して申し訳ないけれど、どうしても一度あなたのお母さんとお話しなければいけないと思ったの」

「お願いフェイトちゃん、お母さんに会わせて」

未だ戸惑っているフェイトに対し、高町母子が声をかける。正直ここまで来てしまった以上、フェイトの同意が無くとも無理矢理会いに行くのも可能なのだが、そこは道理を通そうという事だろう。

「フェイト……」

「でも……、母さんは気難しい人だから……」

アルフからの声に、フェイトが不安でしようがないと言った顔で返事を返す。まああれだけ事前の相談で断っていたフェイトだ、その程度は想定範囲である。

「ともかく、自分達はもう来てしまったんだから。ここまで来たら会わせて貰うぞ」
「……………わかった。ついてきて」

無理矢理にでも、と強い言葉で言った自分に、フェイトは不安そうな顔をそのままに、承諾の意を告げる。諦めた、というのが正しいのかもしれない。

そんな不安そんな表情のフェイトに何も思わない訳でもない、高町母子は心配そうな顔をしてるしね。

それでも、ここは会っておかなければいけないのである。自分達の回収した危険物が

更なる危険物として利用されるのは防ぎたい。

それに、フェイトがそこまで不安に思うような人物である。正直、ロクな想像が出来ないので一度面通ししておかなければ、後の対応に問題があるだろうと考える。

静かに前を進んでいくフェイトに並んで、自分達は拠点の廊下を歩き出した。

◇◇◇◇◇

どこか機械じみた、でも中世の城のような内装が続く廊下を歩き、辿り着いたのは大きな扉。この奥に、フェイトの母親が居るのだろう。

その重厚な扉はとてじやないが知人の家のような雰囲気ではなく、魔王の玉座のような重苦しい演出を醸し出している。これが娘を、家庭を持つような人間の座する場所だとはとても思えない。

いよいよ状況が良からぬ事になってきたなど考えながら、前で扉をノックするフェイトを観察する。

「か、母さん……。フェイトです」

扉へと呼びかける声は非常にか細く、明らかに平静とは言えない怯えを含んだ色をしていった。

この状況をフェイトへ迎えさせたのは自分達であるのは明白で、正直申し訳ないと思
う気持ちもある訳だが、そんなものを口にする事すら憚れる。

現状を作り出したのは、自分達なのだ。

「入りなさい」

扉の奥から聞こえる声に緊張が走る。何となく堅い印象を与えるその返答は、やはり
フェイトの肩を一瞬震わせた。

一つ息を吐き、フェイトは扉へ手を掛け押し開く。見た目とは違い、少女の片腕で
ゆつくりと押し開くことが出来た扉の奥には、比較的大きな部屋が広がっていた。

部屋の奥には書類の散らばった年季の入った机に腰掛けた、フェイトとは違い濃紫の
色をした長い髪の毛を湛えた妙齢の女性が存在していた。

彼女がフェイトの母親、プレシアなのだろう。彼女はフェイトを見、次に自分達を見
て、何ら表情を変化させる事無く問いかける。

「フェイト……。これは一体、どういう事かしら？」

「あの、母さん……」

変わらぬ堅い表情と声色で静かにフェイトへ問いかける彼女の目は、鋭くフェイトを
射ぬいていた。だが、彼女はきつと、自分達がここへ来た時点で観察していたんだろう。
何ら動揺も、怒りすらも感じられないその態度に、少々状況が拙いような気がしてくる。

自分達が侵入してきてからの今までの全てが彼女の掌にあるのだとしたら、こちらの意図すらも掴んでいるはずである。素直に話をしてくれるつもりなのか、こちらを懐柔する意図があるのか、それとも……。

「突然の訪問、失礼します。私は高町桃子、昨日そちらのフェイトさんが娘のなのはと喧嘩をしたようですので、お詫びのご挨拶を、と」

「た、高町なのはです」

堂々とそう言い頭を下げる桃子さんに、腹の底から感服する。器が違う。釣られるように頭を下げたなのはちゃんにも教育が行き届いていて大変良い子だと納得してしまった。

それは相手も同様だったらしく、頭を下げる二人を見て氣勢を削がれたのた、純粹に呆れたのか。プレシアは「は？」と言いたげた表情で固まっていた。

「それで事情を聞けば、何やら物の取り合いだったらしく。幸いなのはも同様のものをいくつか持っておりますので、お困りのようでしたら、と思つたのですが。フェイトさんからは事情をお聞きする事ができなくて」

「そ、そう……。言いつけを守れたのね、フェイト」

「は、はい。母さん」

本当に困った顔で言う桃子さんに、表情を引き攣らせながらフェイトを褒めるプレシ

ア。そして嬉しいやら状況に困惑しているやらで不自然な表情をしているフェイト。

もう場の空気が完全に桃子さんワールドです。

「そこで、なのですが。もしよろしければ事情をお聞かせ願えませんでしょうか？ 私

共もこれを、提供できますので」

そう言い桃子さんがポケットから出したのは、なんとジュエルシード。

なのはちゃんですら「いつの間に!？」と驚いた声を上げているものだからもうびつくりだ。何者なんだ本当にこの人は。

「……いいでしょう。お話をしましょう」

どう見ても押し切られた、といった感じで頷いたプレシアさんに、思わず同情した。

相手が桃子さんじゃ、ねえ。



主婦って怖いと思った。本当に怖いと思った。

プレシアの執務室だったろうそこには丸いテーブルと人数分の椅子、おつかなびつくりフェイトとアルフの持ってきたティーセットが並べられ、お茶をしながらの談話が始まっていった。

初めは桃子さんから「それにしても、次元世界ですか」といった事から始まり、他にどんな世界があるのか、魔法とはどういう物なのか、フェイトの事、アルフの事、そしてプレシアの事と、口を休まず聞けてしまっている。

これは聞き出しているのが桃子さんだからなのか、他の主婦、例えばウチの翔子さんでもできるのか、とつい考えてしまう。

プレシアもプレシアで最初は戸惑いながらも口を開き、今では桃子さんが問いかけなくとも自分から口を開く有様だ。

「——なんていう上司だね。もう本当に最悪だったわ。前後の見境が無い状況での稼働実験なんて」

「それはそうよねえ。私も主人に仕事の事を聞いていた事がありますけど、無能な方とというのはどれだけ偉い役職でもいるそうで。困ったものですよね」

「そうなのよ。研究者でありながら頭の悪い——」

本当に口が止まらない。本当に凄いなと思う。桃子さんも、プレシアも。

周りで聞いている自分達は完全に置いてけぼりだ。特にフェイトとアルフなんか、目を見開いて驚いている。きっと普段はこんなに喋らないのだろう。

しかしユーノもなのはちゃんも、何だか無警戒なんだが大丈夫なのだろうか。心配性な自分は、心の中自らの相棒へと声をかけた。

『ステイール、周囲の状況とか分かるか？ 何か怪しい動きをしているとか』

『只今情報のダウンロード中です。相棒への回答まで三十秒お待ちください』

『情報？ 何の情報だよ？』

『その回答も合わせて、残り二十五秒お待ちください』

何やら相棒はやっているらしい。いつの間に、というか何も聞いていないし何も指示していない。

何を勝手にやっと思ってるんだと思いつつ、自分は相棒からの回答を待ちながら、ウンザリするような主婦トークに耳を傾けていた。

『——全情報の同期を完了しました。相棒』

『ダウンロードじゃないのか。同期ってなに？』

『それより相棒、発声の許可を願います』

『え、なんで？ 何喋るつもり』

『いいからそこはイエスと言えればいいのですよ、相棒』

ノーと言わせないつもりなら勝手に喋れよこいつ。

『分かった、イエスだ。喋っていいぞ、相棒』

ゴーサインを出すと、腕輪がキラリと光を放ち、一瞬周囲の目を引いた。その後、その腕輪が。

のでしょう?」

その言葉に、プレシアがピタリと動きを止め、驚愕の表情で自分を、正確には自分の腕輪を見る。

「何を……何を言っているの、あなた」

《全て、全てを理解したのですよ。相棒は理解していなくとも、データとして存在している以上、そのデータは全て私のデータなのですよ、プレシア。エネルギー駆動炉ヒュウドラの事故から、狂ってしまったモノについても》

「どこでそれを!？」

《言ったでしょう、データとして存在している以上、それは私のデータである、と。私は、【時の庭園】と呼ばれるこの最深部、貴女が存在に気付かなかった管制端末と同期しているのです。故に、ここに存在する全てのデータが、私のデータとなっています》

「そんな……有り得ない、有り得ないわ」

ワナワナと震えながら言い募るプレシア。完全に自分らは置いてけぼりだ。

と思つたら、相棒が自分に語りかけてきた。

《相棒、あなたは豪運の持ち主だ。あなたはプレシアを、フェイトを、アルフを、リニス

を、アリシアを、そしてあなたの母上も救う事が出来る》

「え? ちよ、え、誰だつて? ていうか母上つて自分の?」

《ああ理解しなくて良いのです。ただここに事実として、救う事ができる。あなたはとても素晴らしい、豪運の持ち主だ》

「リニス、アリシア、あなた、本当に」

《ええ、理解していますよ、プレシア。なにせ私は『何千年』も前からここに居たのですから》

相棒はそう言うと、一際光を放ち、言い放った。

《私は【時の庭園】最深部、相棒である中田堅一の生まれた研究施設兼次元航行用移動要塞【時の庭園】の管制AI、太古の昔ハズラットと呼ばれ、今は『アルハザート』と称される世界で生まれたデバイスなのですよ》

相棒のその言葉は、どこまでも空間に響いていた。

高らかに宣言したステイルの言葉に、場がシーンと静まり返る。

《……おかしいですね。もう少し何らかのアクションがあってもおかしくはないのですが》

「いや、お前の言ってる事が意味不明すぎて反応できねえんだよ。ていうか母上つてお前」

《そうですか。ええ、現在この【時の庭園】にて傷を修復された状態で保存されています。仮死状態ですね》

「いやお前、そんなサラツと何言っちゃってんの。ていうかお前、その、設備とかどうやって維持してたんだよ」

《地球にもあるでしょう、自然エネルギーを代替燃料として利用する技術が、その魔法版です。自然に漂う魔力を細々と蒐集して維持していたようです。尤も、プレシアが来た後からは魔晄炉からエネルギー取り放題でしたが》

「おま、それ盗電じゃねえの。何サラツと自分の犯罪自慢しちやってんのこいつ」
「……ごめんなさい。ちよつといいかしら、坊や」

相棒に尚も言い募ろうとしたが、横からの声に口を閉じる。

見ると、プレシアがフルフルと震えながら小刻みに唇を震わせていた。

「はい、なんででしょう?」

「ええ、そうね。何から聞こうかしら。何がいいかしらね」

《おや、随分混乱しているようですね。ああ我々の事でしたらご随意に。この相棒、中田堅一と呼ばれる人に見える生命体はアルハザードの生んだ超古代の生物兵器だったり、それを制御する枷の役割を持つデバイスが私だったり、応えられる事は豊富にあります》

「うわあ、何コイツ。こんな性格だったっけ。こんな根性曲がつてたっけ」

《だから言ったでしょう、何千年分もの蓄積により感情が成長した、と。そりゃ一人で孤

独にそれだけの期間を過ごせば多少捨くれもします。人間ではないので飽く迄多少で済んでいます。感覚器官ありませんし」

「……………せいぶつ、へいきゃ。」

小首を傾げながら疑問形で口にするフェイト。

その言葉に待つてましたと言わんばかりに、相棒が更に喋り出した。

《そうですね、フェイト・テストアロツサ。相棒はその昔存在していたアルハザードがハズラットと呼ばれていた頃、原初の頃にハズラットへ知識と力を授けた外なる神と人の間に生まれた生命の遺伝子を元に作成された生物兵器の、更に複製されたクローンなので》

「おいざつくりすぎて心が痛いんですけど。色々気になる単語が出てるし凄くザクザク刺さるんですけど」

《安心して下さい、相棒。誰が何と言おうとあなたは紛れもなく人間です》

「お前が一番人間扱いしてねえんだよっ!!」

「何というか、けんちゃんもへビーな人生よねえ、ホント……」

自分の腕輪を叩きながら叫ぶ自分に、桃子さんがホウ、と溜息を吐いて呟く。

いやまあ、よく考えるところかなりへビーですよね。

「でもけんちゃん、全然気にしてないよね」

「僕も堅一のそういう所、凄く尊敬するよ」

「やめて、自分を褒めてどうするんだ」

何だかキラキラした目で見つめてくるのはちゃん&ユーノに少しテレて返事を返す。

ほんと、何なんだ一体。

「……ええ、漸く状況は理解できたわ。とりあえず坊や、そのデバイスの言葉の証拠は、あるのかしら?」

《疑り深いですね、プレシア。まあ尤もな事です。それでは、一番簡単な方法で貴女に証拠を提示しましょう》

ステイルがそう言うと、突然空間にガゴンツ、という大きな音が響いた。

「うわっ! なに、なにになにつ?」

「おい、微妙に揺れてる!」

《ご安心を。別の高次空間に格納されていた【時の庭園】本来の区画を呼び戻し再度接続しているだけです》

「ちよつと! 勝手に人の家に何をしているのよ!」

《気にしないでください、プレシア。【時の庭園】は元々ブロック構造。貴女が所有していたココ、コアブロック以外のユニットは全て着脱可能な上拡張し放題なのです》

「うわわわっ！　じ、地面がゆれ、揺れてるじゃないか！」

《そりやあ高次空間内でのドッキングとは言え、多少の振動や衝撃は発生しますよ。現在確認した所20あるブロックの内2つが既に使い物にならない程損壊を起こしていたので破棄しました。まあ相棒の生まれた研究棟なのですが、恐らく彼女が相棒を次元跳躍させた後兵士諸共自爆しようとした名残でしょう》

「なにそれっ！　凄く壮絶な話な気がするんですけど!？」

《彼女の身体が保存されている医療棟はコアブロックにあるのでご安心下さい。接続完了、これより彼女の身柄をこの空間内へ移動させます》

相棒がサラツという言葉はいつも壮絶な事ばかりだ。

そんな事を思いながら揺れの収まった地面を見つめていたら、遠くからガゴンガゴンと、鉄を殴るような音がどんどんこちらへ近づいてくるのが聞こえてくる。

「……なあ、何の音だ？」

《ご安心を。彼女の身柄を最深部から安全装置付きで運んでいる所です。まあ隔壁が降りているとか壁だったりする場所なので無理やり開いては閉じてを繰り返して運んでいる訳ですが》

「いやああっ！　私の家なのよおおお!?」

「かつ、母さん！　おち、落ち着いて母さん!!」

「スンマセン！ ホントですんません!!」

相棒の言葉に半狂乱になって髪を振り回すプレシア、いやプレシアさん。

宥めようと頑張っているフェイトの床に思わず正座で座り、土下座で何度も頭を下げ
る。

そりや、他人にいきなり自分の家リフォームされたら堪らないわ。

《相棒、そこ邪魔なんでどいて下さい》

「お前ホント自由な性格になっちまったな!? つと、どわあっ!!」

思わず頭をあげて自分の腕輪を睨みつけたのと同時に、下からズバツと何かがせり出
してきて思わず背後へ飛び退く。

そこには緑色の光を放つカプセルのような機械が2つ、出現していた。

片方は空、もう一つには、透き通る桃色の髪の毛をした、恐らく少女から女性へと移
り変わる程度の年齢だろう女性の姿が浮かんでいる。

自分はその姿に呆然としながら、相棒へと問いかける。

「えっと。この人」

《はい、相棒。この方がハズラット最後の天才、あなたの製造者であるリリナ・アル・ハ
ズラット。活動停止時の年齢は16歳です》

「……………じゅ、じゅろくくううううううううう!?!」

お母さんは女子高生でしたー!!

第十話

衝撃の事実、お母さんは女子高生だった。



「これが、自分の生みの親……」

「うわあー、キレーな人」

自分の隣に並んでカプセルを見上げるのはちちゃん。

何とも純粋な意見で結構なのだが、その子供の自分としては何とも難しい気分である。

《相棒に彼女の遺伝子情報は一切存在しません。肉親という訳ではありませんので、製造者、と》

「お前ね、そういうドライな意見必要無いから。それにしても、良く何千年もこうして保

存出来たな」

《それがハズラツトの、アルハザードの技術力です。どうですか、プレシア・テストアロツサ》

「……そうね。本当にアルハザードの技術であれば、そのぐらいは可能なのでしょう、ね」

突然水を向けられたプレシアさんだが、息を一つ吸うと疲れたように吐き出し、相棒の問いかけに応えた。

その表情は、突然街灯の消えた路地を彷徨う子猫のようで、何とも危うい。

「私は今まで、何を……。こんな、こんな所に、座する場所にこそあったというのに……」

《落ち込んでいる暇はありません、プレシア。貴女の望みを叶えましょう。愛する娘達と、共に生きる未来を》

相棒の言葉に、ピクリと肩を揺らす。

《その為にも、プレシア。貴女は彼女の居るカプセルの隣へと入って下さい》

「は、何故？」

《貴女、身体を壊しているのです。もう余り長くないと診断されたカルテのデータがあります》

「ほ、本当なの？ 母さん」

顔を真っ青にしたフェイトの問いかけから、プレシアさんは目を逸らした。

「母さん!!」

《プレシア、その病も大丈夫です。原因不明と言われたその症状、ハズラットの技術であれば治療は可能です》

「本当!?!」

相棒の言葉に勢い良く返事を返したのはフェイト。

フェイトの言葉に再びそのクリスタルを輝かせると、相棒は断言した。

《本当です。その症状、ヒュウドラの事故以降から急激に進行していますね。恐らくは

不純物を多く含んだ人造魔力を浴びすぎた事による魔力生成部分の機能障害でしょう》

「そんな話、聞いた事が無いわ」

《通常であれば起こり得ない症状です。ですが貴女の携わっていたヒュウドラというエ

ネルギー駆動炉の生成するエネルギーは、不純物が多すぎた》

「確かに、生み出すエネルギーがああ段階では実用に耐えうるものでは無かったわ。け

れど、そんな症例」

《ですが、事実貴女の病はヒュウドラ以降急に発現した。そうでしょうか?》

「……………本当に、治せるのね?」

《かつてのハズラツトでも発生した病です、治療できない訳が無い。それに都合良く、ここにはジユエルシードという純粹魔力を供給可能な遺物が存在している。断言しましょうプレシア、貴女は治療可能です》

「分かつたわ、お願いしましう」

《それでは衣服を脱ぎ、ポツトの中へ。ああ、治療時細胞に欠陥が出ていないか確認を行う為、その髪の毛をポツトの中で切らせて貰います》

承諾するや否や、プレシアさんは座っていた椅子から立ち上がり、服に手を掛けた。

「本当に、世の中何が起こるか分からないものね……」

「けんちゃん、ユーノくん、あっち向いてなさい」

「はいー」

「ぐえっ」

スルツと脱ぎだしたプレシアさんの横で、様子を伺っていた桃子さんがにこやかに、だが凄みを感じさせる笑顔で自分とユーノを見た時。

自分は勢い良く後ろを向いて、ユーノの首を無理やり背後へグルリと向けた。

グキツと音がしたが気にしない。

「ひ、ひどいよ堅ー」

「トロツとしてるからだ」

涙目で睨んでくる小動物など素知らぬ顔で嘯く。

フェレットの涙目というのも微妙である。

背後からガチャコガチャコと機械音が鳴り、ブーツと甲高い音が鳴ったと思ったら、肩を叩かれた。

「もういいわよ」

「はい」

桃子さんに言われるがまま、再びクルツと後ろを向くと、そこにはポットの目で目を閉じているプレシアさん。

幸い顔部分以外は磨りガラスのようになっていて、しかも緑色の液体で埋まっている為肌色なあんなそんなは見えないようになっていた。

そして、その正面では不安気に母親を見上げるフェイトと、その彼女の傍らに立つアルフとなのはちゃん。

なのはちゃんは崩れそうなフェイトの肩に手をおいて、小声で「大丈夫だよ」と繰り返していった。

本当に、なのはちゃんはいいい子だ。

《ユーノ・スクライア。プレシアと、他二名の治療の為に、ジュエルシードを三つ使用します。異論はありませんね》

「いいよ、そういう事なら。元々僕のものという訳でもないし」

《それでは相棒、あなたの持つジュエルシードを、ポットの下に開いたボックスへ入れて下さい》

「ボックスって、これ？」

相棒が言うのと、カコンツと音を立てポットの下に小さな四角い箱が突き出る。

どうなつてんだコレと思ひながらも、自分は相棒が排出したジュエルシードをその中へと投入した。

すると、箱が再びポットへと仕舞われると同時に、ポットの中が鮮やかな緑に光り出した。

「おい、これ大丈夫なのか」

《大丈夫、純粋魔力を浴びせ肉体や魔成結晶を活性化させているのです。ああそうそうフェイト・テスタロッサ。治療に伴いプレシアの細胞が若干退行する場合がありますので》

「えつと……。どういう事？」

《簡単に言えば、若返りです。損傷のある細胞に遺伝子情報から培養した細胞を新規に植えつける為、そういった事も起こります。病は治療できますので不都合は無いかと》

「そ、そっか……。どうしようアルフ、大丈夫なのかな？」

「あたしに聞かれてもねえ。どうなんだい？」

非常に判断に困った顔をしたフェイトの言葉に、苦笑しながらアルフは自分に聞いてくる。

自分に聞かれても正直分らないが、とりあえずはこう答えよう。

「大丈夫、相棒の判断に間違いは無いよ。ちなみに相棒、治療にはどの程度の時間が必要なんだ？」

《地球時間で言うと明日の夜18時、大体24時間程度ですね。その間私を所有する相棒は可能な限りここに居続けでお願いします》

「マジか……」

相棒の言葉に、思わず膝から崩折れた。



一旦家に帰る桃子さんとなのはちゃんに、翔子さん達への言伝をお願いし、自分はフェイト、アルフと三人並んでポットの見える位置に腰掛けていた。

自分の隣にはアルフが、その隣でフェイトがそわそわと落ち着きなくプレシアを見つめている。

「……そんなに心配しなくても、大丈夫だよ」

「えっ!? う、うん……。その、ありがとう」

「いや、礼を言われるような事じゃないし、礼なら自分の相棒のほうに言ってくれ」

《必要ありません。この方法が尤も物事を円滑に進める為に必要であると判断したまでの事です》

「相変わらずドライな意見だな……」

《それほどでも》

「褒めてないつつうの」

自分と相棒の漫才じみたやり取りで、フェイトが思わずクスリと笑う。

それで漸く、この空間に張り詰められていた空気が変わったような気がした。

「……ねえ、アルフ。アルフは知ってる? 母さんの関わっていたっていう事件」

「いや、あたしはフェイトの使い魔だからね」

「そう、だよ。……えっと、堅一。教えて欲しいんだけど」

「自分も知らないからなあ。おい、相棒」

《分かりました、お答えしましょう。その事件は——》

相棒が話した事件の全容は、フェイトが憤慨して然るべき内容だった。

炬がただ爆発を起こしたという訳ではなく、明らかに人災による事件だったからだ。

しかも当時のプレシアが頑なに実験反対の姿勢を取っていたにも関わらず、開発人員として強硬された実験に携わらなければならなかったというのが、救いようがない。

今のプレシアの病、その当時の責任者が植えつけたと言つても間違いは無いだろう。

《——という事で、プレシアは現在に至る訳です》

「許せないよっ！　母さんが反対してるのに無理矢理働かせるなんてっ!!」

「まあまあ、落ち着きなつてフェイト」

憤慨するフェイトと、それを宥めるアルフ。

アルフはフェイトの使い魔だからか、今までプレシアに対して好印象を持っていないからか、フェイトのように怒りはしていないようだ。

だが、話を聞いていて意外そうな表情を度々していた。

なるほど、ご主人様じゃない人間に関しては中々ドライな側面を持っているのかな、この犬は。

自分はウムウムと一人で納得して頷いていたら、急に眠気が襲ってきた。

そういえば、もういい時間であり、小学生はオネムの時間なのではなからうか。

ふと、寝床とかどうするんだよと思つた自分の耳に、ふと、つい最近聞いたガコンガコンという音が聞こえてきた。

「……おい相棒。何してんだ」

《相棒がそろそろお休みの時間ですので、ベッドをこの部屋へ運んでいます。もう少々お待ち下さい》

「……お前つて、ほんと何でもありなのな」

《それほどでも》

「だから褒めてねえよ」

◇◇◇◇◇

相棒が運んできたベッドはクイーンサイズの大きなベッドで、フェイトが「あ、これ私のベッドだ」と言った事からフェイトのものだったのだろう。

だがその時の自分にはそんな事どうでも良く、いつもなら既に寝ている時間なので意識が限界に来ており、無言でフラフラとそのベッドへ近寄り、徐に身体をベッドへ預けた。

《相棒、せめて靴は脱ぎましょう》

「無理。おやすみ」

そう言った所までは記憶にある。

そして今、頬を何かが啄く感触に目を開いてみれば、そこには笑顔のなのはちゃんが

立っていた。

「おはよう、けんちゃん。もう朝だよ」

「……………えっ、ほんとに？」

「うん、本当。もうすぐ学校に行く時間だから、ご飯持ってきたよ、ほら」

手に提げたバスケットを掲げてホラと見せてくるのはちゃん。

中にはサンドイッチとサラダ、恐らく桃子さんお手製の朝食が並んでいた。

なのはちゃんはそれらを見せてから、ふと自分の後ろに視線を向ける。

「……………フェイトちゃんも、起きないね。昨日夜遅かったの？」

「え、フェイト……………。そういやあいつ、どこで寝てる？」

「え？…一緒に寝たんじゃないの？ ほら」

ホラと指差すなのはちゃんに導かれるまま視線を自分の隣へ向けると、そこには同じ布団に入っているフェイトの姿。

すーすー寝息を立てて寝ているフェイトと、その頬をプニプニと啄くフェレットがそこに居た。

なんじゃこりゃ。

「そういえば昔は、けんちゃんとよく一緒に寝てたよね」

「いつの間に…………。ていうかぐっすり寝てるなこいつ」

ちなみにアルフは犬状態で床に横になっていた。

こいつらも中々肝が太い奴らだなあ。

「今日はけんちゃん学校来れないでしょ？　アリサちゃんとすずかちゃんに何か伝言ある？」

「ん、そうだね。二人によろしく言うだけでいいよ」

「うん、分かった。じゃあけんちゃん、ステイルさん。フェイトちゃんのお母さんの事よろしくね。ご飯テーブルに置いておくからね。いつてきまゝす！」

「いつてらっしやゝい」

言うだけ言つて手をフリフリして駆けていったのはちちゃんと、その後ろへ着いて行くフェレット、ていうかユーノ。

あいつ一言も喋らないとは、ペットに徹する事にしたのか、まさかな。

それにしても。

「……せめてフェイトを起こして欲しかった」

《良い朝じゃないですか、相棒》

「すー、すー……むにゃ……」



目が覚めて、なのはちゃんが置いて行ってくれたサンドイッチと、ポットに入った紅茶をいただく。

「これ、おいしい……」

「こいつも普通にメシ食ってるしな」

桃子さん特製サンドイッチの美味しさに思わず目をまん丸にして驚くフェイト。

こいつは目が覚めると共に「おはよう」と挨拶しシャワーを浴びに行つた後、極々自然にテーブルにつき自分と一緒にサンドイッチを食べ始めた。

何で一連の行動がまるで疑問を持たない流れ作業になつてるんだと突っ込んでやりたい。

ちなみにアルフはまだ土郎さんが保存していたのであろう猪肉の燻製にそのまま齧り付いていた。

「昨日のも、ハグツ、良かったけど、ムググツ、これはこれで」

「あーそうかい。良かったな」

《相棒、朝からやさぐれてますね》

「自分は学校行けないでこいつらの為に残ってるのに、なんでこいつら普通に過ごしてんだと思つてな」

「あ、その……ご、ごめんなさい」

「あーもう別にいいよ。もういいから、ちゃんと残さず食べ」

自分の言葉に申し訳なさそうに頭を下げたフェイトだが、もう本当、それすらもどうでも良かった。

自分は、なのはちゃんと、一緒に、学校に、行きたかった。

《相棒。寂しいのは分かりましたから、フェイトで我慢してください》

「な、なんでも言つて！ 私、頑張るから!!」

「じゃあ、なのはちゃんの家に行つて、桃子さんにこれ返してきて。あとお昼もお願いし
ますつて言つといて」

「うん、分かった！ 昨日の家だね、座標まだ残つてるからすぐ行くよ！ 行こう、アル
フ！」

サンドイッチを食べ終えたフェイトがむん、と無駄に気合を入れて自分に言うので、
使い走りに仕立てる。

実際問題自分が離れるとロア、相棒も離れてしまうのでフェイト達に行つてもらおうし
かないのではない。

フェイトは再び気合を入れると赤い犬つころと一緒に、パタパターと廊下へと駆けて
いった。

気合が入っているのは構わない、が。

「……あいつ、ちゃんと喋れんのかな」

《恐らく、家の前まで行つて右往左往しているのが関の山でしょう。そして士郎か桃子に見つかる》

「現実的な意見だ」

《ドライ、と言つてください》

実際、フェイトがここへ帰つてきたのは三時間経つてからだつた。

「……その、ごめん」

「いいよ、別に。桃子さんと美由希さん連れてきてくれたんだし」

「あはは、家の前をウロウロしてるこの子を見つげちゃったからねえ」

そろそろお昼時かな、と携帯の時計をチェックしていた所に悄気返つたフェイトと共に美由希さん、桃子さんが入ってきた。

桃子さんはその手にまたバスケットを、美由希さんは鞆の中一杯に携帯ゲーム機と漫画、そしてお菓子を。

「ありがとう美由希さん！ あなたは女神様だ！」

「あ、あはは……。ここ何も娯楽が無いって聞いたからね」

思わず美由希さんの手を握つてブンブン振つたのは仕方ない事だと思う。

ここ、プレシアとフェイトの家は本当に何も無い、ベッドと椅子とテーブルしかない。なので自分はずっと、携帯の充電が切れそうな今の今まで、携帯に内蔵されているゲームを遊んでいたのだ。

とてもとても、詰まらなかつたです。

「それにしても、この人がフェイトちゃんのお母さんで、こつちがけんちゃんのこと……えつと、お母さん?」

《製造者です》

「まあ、そんな感じで。16つて言つてたから、美由希さんと同い年じゃないですか?」

「うひゃああ! ホントに〜!」

「普通そう思いますよね! ね!」

きつと普通の人ができるだろうリアクションを美由希さんが取ってくれたのでまた嬉しくなつて手を握つてブンブン振つてしまう。

自分のアクションに困っているのだろう、美由希さんは苦笑を浮かべていた。

「けんちゃん、そんなリアクションに枯渇してたの?」

「なんかみんな、ていうか桃子さんもなのはちゃんも平然としすぎなんですよ! どう考えても美由希さんのリアクションが正解でしょ!」

「はいはい、けんちゃんの話は分かつたから、お昼にしちやいなさい。ほら美由希も」

パンパンと手を叩いて言う桃子さんの言葉に、全員ではーいと手を挙げ返事を返した。



夕方になってなのはちちゃんとユーノが美由希さんと入れ替わりのようにしてここへと帰ってきて、今このプレシアの部屋ではゲーム大会が開催されていた。

「けんちゃん！ 早く走って！ 畏が消えちゃう！」

「大剣は一回振ると長いんだよねえ。ああフェイト、そこ一匹落ちてくるぞ」

「え、なに？ わああつ、上から恐竜降ってきたあ!!」

「きやあくフェイトちゃん早く、はやくにげてえ〜!!」

某モン狩るゲームを携帯機三つでプレイする自分達三人。

フェレットと犬は二人で団子になって横で寝て、桃子さんが静かにお茶を飲んで自分達を見ていた。

初めは操作に戸惑っていたフェイトだが、やり方を懇切丁寧になのはちちゃんに教えてもらい、何とか普通にプレイ出来ていた。

なのはちゃんはライトボウガン、自分は大剣、フェイトは太刀という攻勢一本道の編

成でモンスターが二匹出てくるクエストをしていたのだが、時間切れで失敗となつてしまった。

「ああ。やつぱ難しいよこのクエスト」

「ちよつと厳しかったな。あと罠の場所ミスったよねえ」

「うう、ご、ごめんね手間取って……」

クエスト失敗して落ち込むフェイトと、それを笑顔で慰めるのはちゃん。

本当にいい子だよ、この子は。

《相棒、ちよつどキリの良い所でお話なのですが》

「なんだよ」

ほんわかした空気を味わっていたのに、腕輪から聞こえてきた雰囲気ぶち壊しな顔にゲンナリする。

思わず不機嫌丸出しな返事をしてしまった方がないだろう。

だがこの相棒は、そんな事知ったこつちやないとばかりに言葉を続ける。

《もうプレシアの治療が完了しています》

「へー、そう。……終わったのか!？」

次のクエストどうしようかなーと思っていた所に、青天の霹靂。

思わず椅子を立ち上がった自分に続き、フェイトもゲーム機を机に置いてガタツと立

ち上がる。

「終わったの!？」

《はい、既に。皆さんゲームに熱中していたので、悪いかな、と》

「いやいやいや! 一番優先するべき事だろうがそれは!!」

「そうなの!!」

《申し訳ありません。それで、目を覚まさせてもよろしいですか?》

「お願い!!」

必死なフェイトの願いに了解、と簡単に返事を返した相棒の声と共に、ポットがピーツと甲高い音を出す。

それと同時に、どうやら内容液を排出しているようで、段々とガラス越しの身体が見えるようになり、自分は慌てて後ろへと振り返った。

すると視線の先では、フェレットが犬に頭から啜えられている光景が広がっていた。いいぞ、そのままガブツとやってしまえ。

背後からはまたガタピシと音が響き、次いでフェイト達がパタパタと駆ける音が聞こえる。

そうして暫く待っていると、やはりポン、と肩を叩かれた。

「大丈夫だよ、けんちゃん」

「ん、ありがとうなのはちゃん」

そう言われクルツと振り返ると、黒い髪をボブカットにした、桃子さんより少々年上程度の女性が、黒い衣服を着て佇んでいた。

「……身体が軽くなったわ。ありがとう」

《これも必要な事です。その身を持って理解したと思います、ハズラットの技術を》

「ええ、そうね。——あの子の治療も、同じ手段でやるのかしら？」

《ええ。貴女の願う子供は、貴女よりも強い拒絶反応からショック症状による仮死状態にあります。同様の処置で問題ありません》

「そう……。フェイト、あなたに大事な話があるわ……」

「な、なに……母さん」

ボブカットの女性——プレシアさんは、身体が治ったばかりだと言うのに、難しい表情をして、フェイトへと近づいた。

彼女の言葉にどこか不安を覚えたのだろう、フェイトは迷子のような表情でプレシアさんを見ていた。

そんな彼女に、プレシアさんは尚も続ける。

「……あなたには感謝しているわ。だからこそ、私はあなたに真実を告げなければならぬ。こつちへいらっしやい、母さんの大事なものがこつちにあるの」

「う、うん。分かった……」

「ここから先は、私とフェイトだけで、お願い」

「分かりました」

尚も不安なフェイトをあやすように背中を擦りながら、プレシアさんはフェイトと二人、部屋の奥にあった扉を潜り入っていった。

《相棒。フェイト・テスタロツサにとつては、些か辛い真実かもしれません》

「お前は知ってるのか、それを」

《はい。ですが、私よりも当人達から聞いたほうが良いでしょう》

「言われんでもそうするさ」

それつきり、相棒と一緒に口を閉じる。



暫く経ってから、奥の扉がバタンツと激しい音を立てて開き、中からフェイトが一人だけ現れた。

そのフェイトは、涙を流しながら自分達に見向きもせず出口へと走っていく。

「フェイトッ!？」

「フェイトちゃん!!」

アルフとなのはちゃんが慌てて立ち上がり、フェイトの後ろを追いかけるように走っていく。

自分はその姿を見送り、出てくるであろう人物を待っていた。

やがて、プレシアさんは、その脇に大きなポットを抱えて歩いてきた。

「……プレシアさん。それは？」

「私は、母親失格なんですよ、高町桃子さん」

そう言いながら静かに脇に抱えたポットを床に置く。

その中には、今よりも少し幼い、フェイトと瓜二つの女の子が入っていた。

まさか、と思い当たりつつ、自分はプレシアさんの答えを待つ。

「——この子はアリシア・テストアロッサ。私の娘で、あの子の母体。フェイトは、あの子は、この子のクローンなのよ」

当たって欲しくなかった真実に、思わず大きく息を吐いた。

第十一話

病を治したプレシアから告げられた、フェイトに関する真実。

アリシア・テスタロツサのクローンである事、本人でない事からフェイトに対し辛く当たっていた事が、フェイトと、プレシアを苦しめる。

今の自分には、時間が解決してくれる事を祈る事しかできない。



緑色に輝く液体に浸かり、静かに目を閉じているフェイトの母体、アリシア。そして、自分の製造者を見ながら思う。

自分を製造したこの人の心理は、プレシアさんと同じようなものだったのだろうか、と。

プレシアさんの場合、アリシアの復活を願う結果としてフェイトという『失敗』を生んでしまった。自分の場合、自分の母体となる男の存在していた証として、自分が生まれた。

この二つの小さな差異は、とてつもなく大きく感じられる。自分は自分として、フェイトはアリシアとして求められて生まれた。何の為に生まれてきたのか、みたいな哲学的なテーマになりかねない。

そして、自分とはまた違った事を考えていたのだろう。桃子さんが溜息をつきながら、お茶を口にしてからプレシアさんへ語りかけた。

「……気持ちは、分かるわ。私も、もしなのはが、なんて考えると。私に知識と技術があつたなら、同じ事をすると思う」

「それでも、私がフェイトにした事は。ただの虐待だわ」

《魔製結晶の汚染は人間の心身に影響を与えます。プレシアのフェイトに対する虐待行為も、その汚染による影響かと》

「そうかもしれない。けれどね、だからと言ってそれが許される訳ではないでしょう?」

《人間は難しいものです。事実を事実として素直に受け入れることが出来ない。こちら辺は私の今後の課題ですね》

「今はもう、その汚染の心配も無いんでしょう? だったら、今からでも遅くないでしょう?」

「今更、母親面していいのか……。謝ろうとも、既にしてしまった事の精算は出来ないわ」

アリシアの治療が始まってから、同時に二人の母親の話し合いが始まっている。

相棒の言ったように、汚染がプレシアの精神に悪影響を及ぼしていたのだろうが、虐待をしていた事実は取り消せない。これは今後も、フェイトとプレシアさんに着いて回る問題だ。今すぐ完全に関係を修復する、というのは不可能だと思う。

自分でもこの程度の事は理解できているんだ、桃子さんとプレシアさん、二人が理解していない訳が無い。それでも悩んでしまうのは、やはり母親だから。娘を愛しているからなのだろう。

その気持ちがちやんと娘に伝われば、ほんの少しでも関係の改善はできるんじゃないかと思う。

「お母さん、プレシアさん」

「あら、なのは。……フェイトちゃんは？」

時の庭園に戻ってきたなのはちゃんが、部屋の入口で声をかけてきた。桃子さんがなのはちゃんへ返事をする、なのはちゃんは黙って首を横に振った。

「今は、戻ってきたくないって。私の部屋で休ませてるの」

「そう……。しようがないわよね」

「ねえ、お母さん。今日フェイトちゃんと一緒に、ゆっくりお話したいの。お泊りさせてもいい？」

「ええ、そうね。いいわよね、プレシア」

「……お願いするわ。ごめんなさい、母子共々高町さんの手間をかけてしまつて」

「気にしないで。フェイトさんの、貴女達の為だもの」

「ありがとう」

桃子さんからの優しい言葉に、プレシアさんは一筋の涙を流した。



夜になり、流石に二日も風呂に入らんのはいかんという事で、高町家でお風呂を借りる。どうやら昨日の内に連絡をしてくれていたらしく、家から自分の着替えと下着が鞆に入つて持ち込まれていた。

ベタついた身体を綺麗に流し、ホクホクしながら着替えてリビングへ向かうと、そこには既に夕食が用意されていた。

「お、風呂上がったか」

「恭也さん。お風呂頂戴しました」

「今夜は母さんのご飯だからな、たつぷり食べていけ」

今夜また時の庭園に戻ることを話してある恭也さんの言葉に頷いて、リビングの席に

お邪魔する。既に高町家の面々は晩御飯を食べ始めており、なのはちゃんの隣では、フエイトも静かにご飯を食べていた。

浮かない顔をしながら、静かにもそもそとご飯を食べるフエイトの姿は何とも哀愁漂う。なのはちゃんも、そんなフエイトに気を使いながら食事を取っていた。

自分は自然と、フエイトの正面に座り用意された茶碗一杯のご飯と味噌汁、焼き魚などに手を付ける。うん、桃子さんの料理は相変わらず、とても美味しい。

何だか久々な気分でご飯をモリモリ食べていると、士郎さんが声をかけてきた。

「しかし。堅一君の生みの親までいたとはなあ」

《正確には製造者です。相棒は人から産まれたものではありませんので》

「お前ね。なんでそこいつも突っ込む訳」

《物事は正確に理解して貰う必要があります》

「はは。まあなんだ、良かったんじゃないのかな、生きていた事に關しては」

「確かに、色々聞きたい事とかもありますし。まあ母親として扱うのは難しいですけどね。今まで一緒に暮らしてた訳でもないですし」

「けんちゃんには翔子さんが居るものね」

「翔子さんも母親として見てないですけど。世話のかかる姉みたいな感じですね」

「ご飯のおかわりをよそいながら言った桃子さんの言葉に、苦笑を浮かべて返事を返

す。

翔子さんは自分にとっては何のようないメージ。しかも世話のかかる。所々ドジだったり大人気なかったり、娘を生んでもそれが変わらない所が、翔子さんの若さの秘訣なのかもしれないか思ったりもしている。

自分達の言葉のキャッチボールの所々にピクピクと反応するフェイト。母親とかそういう部分で一々気にしている辺り、彼女の悩みが深いんだなあとか思ってしまう。

そんな一見和やかながら、一部で重い物を抱えている夕食も済み、そろそろ時の庭園に戻らないと思いつながらリビングでユーノに声をかけようとした所で、背後から自分に声がかけられた。

「…………あの、ちょっと、お話、できないかな」

「ん…………いいよ。母親の事が、フェイト」

少しおどおどしながら自分に声をかけてきたのは、フェイト。

彼女は落ち着きなく、不安そうに瞳を揺らしながら、ゆつくりと言葉を紡いだ。

「そう、ただだけ。そうじゃない、かな…………」

「ふむ…………。まあいいや、ゆつくりでいいから、何を聞きたいのか教えてくれ」

「その。堅一も、クローンなんだよ、ね。それを知った時って、どうだったかなって」

ああなるほど。まずは自身が人と同じように産まれた訳ではないという事実から消

化していいこうと思ったのか。

これはゆっくり話をする必要があるかなと思いつながら、立ったままのフェイトをソファの隣に座るよう促し、慎重に言葉を選ぶ。

「自分の場合、一遍に色々な事を知ったからな。正直言うと、誰かのクローンであるという事自体に関しては、何とも思っていない」

「そう、なの……？」

「そうなんだ。そっちよりは、自分が生体兵器である事、間違いなく人間じゃないって所のほうが衝撃としては大きかった」

「あ……。そうか、ごめん」

「何を謝ってるのかわからんけど。まあ自分の境遇に関してはほんと予想外過ぎて理解が追いついてない部分もあるけどな、実感が無いというか。ただ、ゆっくりノンビリ過ごす世界がヤバイって事らしいから、今を必死に生きるようにしようと思積りはしてる」

「今を、必死に……」

「誰かの代わりになんてなれる訳がないし、自分は自分だと思ってるから。自分は自分として、必死に生きる。我思う、故に我あり。それさえ分かればクローンとかどうでもいいかかって思ってる」

「そっか……。堅一は、強いね」

そう言うのと、フェイトはしょんぼりする。全く、何を考えているのやら。

「別に強いとか、そういう事じゃない。それにフェイトの場合、自分より事情が複雑だと思ふ。母体が居たり、母親から辛く当たられていたり。悩むのも仕方が無いだろう」

「そう、かな」

「そうだろう。自分も家庭環境が複雑だったらもつと悩んでたと思うけど、ウチの家庭環境は良好だからな。だからフェイトは、気が済むまで大いに悩めばいい。いざとなったらプレシアと仲直りしなくてもいいんだし」

「……そっか。仲直りしなくても、いいんだ」

「好きにしたらいい。誰もフェイトに文句は言わないよ」

自分の言葉にほつとしたように、フェイトははにかみながら「ありがと」と言った。



時の庭園に戻り、プレシアさんが待機しているだろう執務室へ入ると、今日はベッドが二つ並んでいた。

「ベッド、変わってるな」

「一緒に寝る訳にはいかないでしょ」

「ご尤もです」

ポットに浮かぶアリシアから視線を動かさず自分の言葉に返事を返すプレシアさん。

治療が開始されて数時間、未だ先は長いというのに、彼女は真剣にアリシアの姿を見つめていた。

「根を詰めても何も出来ないんですから、休んでおいたほうがいいですよ」

「分かってるのよ。それでも、この子は私の大事な娘だから」

「そうですか。じゃあ、フエイトは？」

自分の質問に、息を呑む音が聞こえる。

母娘共々お互いの事で思い悩んでいる事は理解できるが、どうにもその先に行き着くのが遠そうだ。

「……あの子も、大事な娘。アリシアの妹、そう、思えるようになったわ」

「アリシアが治るから？」

「そう、でしょうね……きつと。現金なものだわ」

「いいんじゃないですか、それで。子供は別に気にしません、愛情さえ与えてくれたら」

「愛情、ね……。あなたは、ちゃんと与えられているの？」

「ちゃんと貰ってますよ、厳しい父親と、誠実な兄、お転婆な姉がいますから」

「そう……。そうなのね」

何かを理解したのか、プレシアさんは一つ頷いて、妙にすつきりした表情を浮かべた。きつと自分もクローンである事とか、そういう理屈を難しく考えていたのだろうと思うが、今はどうでもいい。

既にオネムの時間なのである。

「それじゃあ、自分は休みます。おやすみなさい」

「ええ、おやすみ」

プレシアさんの返事を聞きながら、潜り込んだベットの中で静かに目を瞑った。明日はもうちよっと、急展開が無い日になりますようにと、願を込めて。



何事も起こらず、その翌日。

相変わらず根を詰めてアリシアを見つめるプレシアさんと、朝食に続き昼食を共に摂る。

そして昼、時刻は三時過ぎといった時間に、来訪者は訪れた。

「……………あなたに話があつて来ました、母さん」

「そう……」

来訪者はフェイト。なのはちゃんとアルフを伴い、フェイトはこの部屋へと現れた。

自分はフェイトの背後で不安そうに彼女を見つめるなのはちゃんへと黙って近づき、肩を優しく叩く。

「けんちゃん？」

「行こう。二人きりのほうが話ができるでしょ」

「うん、そうだね……」

自分の言葉に納得してくれたなのはちゃんと共に、執務室の外へと出る。アルフはフェイトの使い魔だから、一緒に居ても問題無いだろう。

執務室の扉を静かに閉じて、廊下の壁を背もたれにして座り込んだ。

「けんちゃん、お行儀悪いよ？」

「プレシアさんと二人きりっていうのが辛かった。ほぼ無言だったよ」

「あはは、大変だね、けんちゃん」

なのはちゃんも自分の隣に座り込み、静かに部屋の扉を見つめた。

「フェイトちゃん、大丈夫かな……？」

「大丈夫だよ。プレシアさんも、色々考えていたから」

「そっか。じゃあ大丈夫かな」

そういうと、なのはちゃんは自分に肩を寄せてくつつく。小さい頃、よくこうして一緒にテレビとかを見た覚えがある。つい最近のはずなのに、何だか懐かしい気がした。「そういえば、アリサちゃんが怒ってたよ。二日も休むなんて皆勤賞が勿体無いつて」「別に皆勤賞なんて欲しくないんだけどなあ。まあ事情もあるししょうがないでしょ」「うん、アリサちゃんも分かかってるんだけどね。プンプンしてた」

「はは、明日登校したら大変そうだなあ」

無理難題は言われないうけど、一緒に遊びに行くとかで一日振り回されそうだな。

「ま、今日が無事終われば、万事問題なしかな」

「うん、そうだね。アリサちゃんには私からも言っておくから、ね」

「お願いね、なのはちゃん」

「にやはは、お願いされちゃった」

他愛無い、だけど心暖まるやり取りをしている所に、今日もまたしても無粋な声がかかる。

《相棒、話し合いは終わったようです。それと、修復中の二人の快復を確認しました》

「そうか。じゃあ行こうか、なのはちゃん」

「うん」

座り込んでいた床から立ち上がり、なのはちゃんを起こすように、なのはちゃんの腕を引き上げた。



ポットのの前では既にプレシアさんとフェイトが、二人を抱えるようにして抱いていた。意外にもプレシアさんは自分の生みの親を、フェイトがアリシアを。

「ああ、来たのね。今呼びに行こうと思っていたのよ」

「すいません、お手数おかけして。タオルとかはありますか？」

「隣の部屋、今アルフが取りに行ってる」

プレシアさんの言葉に返した返事にフェイトはそう言うのと、抱えていたアリシアを傍らのベッドへと寝かせる。

プレシアさんも同じように、昨日自分達が寝ていたベットへ自分の生みの親を横にさせる。

その横にされた二人は、何が起こっているのか理解できないようで、きよとんとした顔で目の前の自分達四人を見つめていた。どうやら、自分達の声も微妙に届いていないようである。

《長期間活動していない肉体でしたから、無理も無いでしょう。聴覚や視覚が未だ正常に働いていない為かと思えます》

「なるほど、そういう事。今後はリハビリも必要かもしれないわね」

《筋力の低下はある程度致し方無いでしょう。感覚器官は今日中にはある程度回復すると思われますし、生命維持には問題ない状態です》

「こりや、話をしたりとかは、明日以降になるかなあ」

「でしようね。今日は私が見ておくから、なのはさん、今日もフェイトの事泊めてもらってもいいかしら?」

「はい、いいですよ!」

「お願いね。フェイトも、高町さんにご迷惑をかけないようにね」

「はい、母さん」

ゆっくり、恐る恐るフェイトの頭を撫でて言うプレシアさんの言葉に、嬉しそうにはにかみながら応えるフェイト。

ああやっぱり、何だかんだで上手く行ったんだなと思い、ようやく自分はある程度事態が解決した事を確認した。



二日振りに自宅の布団で寝た感触は、非常に極楽気分でした。

やっぱり睡眠というのは人生に置いて重要な位置付けにある行為なので、慣れ親しんだ環境で行うのが一番だ。というのが自分の中で今朝得た結論だった。

食事に関しても翔子さんの料理が一番気持ちが悪く落ち着く。桃子さんの料理が悪い訳ではないが、やっぱりこれも慣れ親しんだ味が一番ほっとするという事ですよね。

そんな事を考えながら制服に袖を通し、玄関から表へと飛び出す。

「いってききます」

「おう、いってこい」

道場の入口前を掃除していた父さんに出掛けの声をかけて、一路高町家まで軽くランニング。

昨日一昨日と日課の鍛錬が出来ず、今朝のランニングで確認したが少し身体の調子が落ちている気がしたので、ほんのちよつとの距離でも走って行こうと思ったのだ。

「あ、けんちゃん！ おはよう」

「おはよう、なのはちゃん」

自分と似たような、白い制服を着込んだなのはちゃんと玄関前で鉢合わせ、二人でそのままバス停まで。

定刻通りに到着したバス車内の最奥席には、いつもの二人が座っていた。

「おはよう、なのは。ケン！ あんたなんで休んだのよ!!」

「ええ。いきなり怒られるの……」

「あはは、おはようなのはちゃん、けん君」

ブンブン怒るアリサちゃんと、それを笑いながらも諫めてくれるすずかちゃん。四人揃って久々に、日常に帰ってきた事を実感した。

まあ、今も絶賛非日常の世界に足を突っ込んでいる訳ですけど、ね。

『——おはようございます、プレシアさん。二人の様子、如何ですか?』

『おはよう。二人共軽い流動食を食べさせているわ。視覚と聴覚に関してはほぼ問題無し。筋力に関してはリハビリが必要ね』

『あの……フェイトちゃんの様子は、どうですか?』

次元間通信という魔法を用いて高次空間とかいう場所に存在するプレシアさんと会話をしつつ、アリサちゃんやすずかちゃんと会話を楽しむ。聖徳太子は並列処理を使えた人間だったんだらうなと実感する出来事である。

なのはちゃんも通信に入りフェイトの様子をプレシアさんに確認する。けれども、その声色は不安というより、ただ心配なだけのようなのだ。

『フェイトも特には。私が思っていた以上に、アリシアと仲良く会話をしているわ』

『そっか、よかったあ』

『そうですか。何事も無いならそれに越した事はないですよね』

『ええ、そうね。きつと、あなた達の存在が大きかったんでしようね。傍に居てくれる人、自分と同じような境遇の人が居たから、事実を受け止める事が出来た』

『フェイトが強い子だっただけです。それと、母親が好きなんでしょう、それだけ』
『そうね……そうであるなら、嬉しいわね』

やはり大人は子供程単純には割り切れないのだろう、喜ばしいのか不安なのか、複雑な心境を現した声色でプレシアさんはそう呟く。

これこそ、時間が経てば何とでもなりそうな話だなと思い、それから軽く二、三言葉を交わしてから、自分達は本業である小学生ライフへと戻ったのだった。

少なくとも、小学校に居る間だけは平穏でありたいです。



小学校からの帰り。半ば強引に以前から三人で約束していたという温水プールに付き合う約束をさせられた以外は、特に問題は無い。

この温水プールに関しては、二年生の終わり頃に自分も行くよう提案されたのだが、

とりあえず自分は断っていたものである。断る理由は、正直女子だらけのプールに混ざる勇気が無かったからです。

とは言え、ああもプンプン怒られては仕方がない。本当に仕方なく、今度の休みに温水プールへお供する事になりました。

「プールかあ。いやプールはいいんだけど、男子が自分一人つていうのがなあ」

「お兄ちゃんも監視員さんだけど、プールにいるよ？」

「監視員じゃ結局一緒に遊べないでしょ……」

恭也さんがバイト中じゃどうしようもないし、結局自分一人だけか……。ユーノも一緒に連れていくが、あいつはペット枠なのでどうしようもない。

仕方ないなあとうじうじ思いながら、なのはちゃんの家へと到着した。

「ただいまー」

なのはちゃんは部屋へ着替えに、自分は中庭へと周り、あの小動物を待つ。

「おう、小動物」

「いい加減ユーノって呼んでよ、堅二」

中庭、リビングに繋がる縁側にユーノが待機しており、魔法陣を展開して周囲の探索を行っていた。

「見つかったか？ ジュエルシード」

「駄目、付近一带には反応が無い。やっぱり発動するか、近くまで行って探索しないと確認できないと思う」

「中々面倒な事だな。まあ、明日からはフェイトとプレシアさんも手伝ってくれるから、今よりラクになるだろ」

「そうだといいんだけどね」

そう、アリシアが快復した事で、プレシアさん達も自分達と共にジュエルシードの回収を行なってくれる事となったのだ。

既に報酬というか、アリシアの快復という願いは相棒により成就されており、今更フェイトを使って先日のなのはちゃんのように奪い取るような真似はする必要が無い。だが街には未だ危険物がゴロゴロしているので、協力を取り付け迅速な回収を目指す。

海鳴という街を愛する我々の願いを聞いた彼女は、快く頷いてくれたのだった。

「けんちゃん、お待たせ」

「あ、なのはちゃん。早いね」

「うん、今朝の内に用意はしてたから」

声と共に現れたなのはちゃんは、オレンジ色の上着を着て、肩から可愛らしいポシェットを提げた服装で現れた。事前に準備をしておくとは、相変わらず細かい所で真面目な子である。

「なのはちゃんも来た事なので、自分達は、ユーノの転送魔法によって、ヒョイツと時の庭園へと移動した。」

「そういえば、いきなりこうして中に入るのは日本じゃ不法侵入だよな」

「そんな事言ったって玄関なんて無いんだからしょうがないでしょ」

「にやはは。確かにしょうがないよね」

「どうでもいい事をつい口にした自分に、ユーノは本当にどうでもよさそうに返事をする。確かに高次空間とかいう訳のわからん場所に玄関なんぞ設置できる訳でもないし、しょうがないと言えばしょうがない。」

その答えに一応の納得をして、自分達はプレシアさんの執務室へと入った。

「こんにちはー」

「いらつしやい」

中に入ると、ティーセットの置かれたテーブルと椅子、それに腰掛けるプレシアさん以下全員が揃っていた。

プレシアさんはカップを置くと、自分へと視線を向けてくる。プレシアさんの隣に座る、何故か瞳を輝かせている女性と共に。

「堅一君、待ってたわよ」

「ええ、そうですか。……えっと、その。お隣の人が、自分の」

「あなたの製造者のリリナです。よろしくね」

「あ、はい。中田堅一、です」

艶のある桃色の髪が軽くウェーブのかかった女性、自分の製造者のリリナさんが手を差し出してきたので、握手する。

未だ起きたばかりだからだろう、ほとんど力の感じられないその掌は、とても柔らかかった。

「貴方も、ありがとうね。起こしてくれて」

《製造主を助ける事も私の仕事の一つです。お気になさらず。お久しぶりです》

「うん、久しぶり、かな。ずっと寝てたから分からないや。あれからどれぐらい時間が経ってるのかな？」

《高次空間への退避および次元跳躍による時間経過で詳細な経過時間は分かりません。単純に計算すると、三千年は固いかと》

「三千年で……信じられないわね、それほどの時間を肉体の損傷無く過ごさせるなんて」
《それを可能にするのがハズラットの技術力です》

相棒の言葉にプレシアさんが驚きのまま目を見開く。本来ならばとうに死んでいる人間が、今こうして目の前にいる事に、今更ながら驚くのであった。

「それにしても、本当にあの子そっくり。良かったわ、君が生まれてきて」

「そういえば、なんで自分を作ったんですか？」

「あの子が生きた証、存在証明の為。それと、あの子を作ってしまった贖罪として、今度は争いの無い所で一生を全うして貰おうと思って、ね。自己満足よ。結局自分じゃ育てられなかったけど」

さっぱりした顔で言い切ったりリナさん。その瞳は本当に、キラキラと輝いていた。

「それにしても、本当素敵に育ったわ。ね、今いくつ？」

「え、9歳ですけど」

「ふむ、わたしが16だから……一回りも離れてないのかあ。弟って感じだね」

「は、はあ」

なんかこの人、テンションが軽いなあ。

「この子、結構ノリが軽いのよ。天才科学者って聞いてたからもうちよつと暗い感じの子かと思っただけど」

「別に軽い訳じゃないですよ。物事はスッキリサツパリしてるほうが好きだけです。ウジウジ悩まない、それが一番」

「なんか、体育会系の人みたいだね……」

なのはちゃんの小声の言葉にウンウンと頷く。確かに言ってることが体育会系のノリだ。科学者のイメージでは無いなあ。

そして、リリナさんの反対側、プレシアさんの右隣では、金髪の少女がじつとこちらを見ていた。

「プレシアさん。彼女は大丈夫ですか？」

「ええ、歩くのは難しいけれど、リハビリで何とか成るわ。ほらアリシア、ご挨拶なさい」
「あ……アリシア・テスタロッサです！ 助けてくれありがとうございます！」

「はい、よくできました」

ペコリと頭を下げたアリシアの頭を撫でると、アリシアがえへへと喜ぶ。それを見て、フェイトも嬉しそうに笑顔を浮かべた。

「……なんかフェイト、雰囲気変わったな」

「え、そう、かな？ うん、そうかも。なんか色々、悩まなくて良くなったから」

「フェイト……」

「あ、その、母さんが悪いとか、そういう事じゃなくって、ね」

フェイトの言葉に気落ちした姿を見せ、フェイトが思わず慌て出す。まあ事情を知っているこちらからすればプレシアさんが悪いのは確かだし、しょうがない。

自分ひとりあえず仕切り直しのつもりで、プレシアさんへと声をかけた。

「それで、今後の行動に関してなんですけど」

「ええ、そうね。アリシアとリリナさんは、要リハビリ。その間は、時の庭園内で過ごし

て貰おうと思うわ。まあ半月もあればいいでしょう」

「その後は、どうするんですか？」

「私達は、地球で生活しようと思うの。生活に困らないだけのお金はあるし、フェイトにもお友達が出来たし、ね」

「ほんとですか！ やったあ、フェイトちゃん！」

「うん、よろしくね、なのは」

キヤツキヤと喜んでフェイトに抱きつくなのはちゃん。フェイトも若干戸惑いながらも喜びを表情に浮かべている。それならそれでいいかと思いつながら、自分は続きを促した。

「リリナさんはどうするんですか？」

「んー、わたしも出来ればプレシアさんに養ってもらおうかなあって。報酬は時の庭園の設備の使用方法和、わたしの知識、かな」

「私としてはメリットだから構わないわ。まあ、堅一君が自分が引き取りたいというならそうすれば良いと思うけど」

「いや、引き取るとか無理なんで。そういう事ならお願いします」

「分かったわ。それじゃありリリナさんもウチで引き取ります。当面の行動としてはこんなものね」

「ジュエルシードの探索については？」

「手分けして探すしか無いわよね。私とフェイトも手伝うわ。いいわね、フェイト？」

「はい、母さん」

「時の庭園に探査機があれば良かったんだけどね、つけてないからねえ」
アハハと情けなさそうに笑うリリナさんは、本当にあっけらかんとした人だと思っ
た。

第十二話

結局フェイトもプレシアさんも、自分の事は自分だけで、決着をつけたようだ。

周囲の影響があったのかもしれないけれど、なのはちゃんも角、自分は何もしていないと思う。フェイトが、強かったから収まる所に収まっただけの事。

まあ、そんな単純に修復できるものじゃないだろうから、安心するには早いんだろうと思うけれどね。

閑話休題、自分の製造者でリリナさん、ざつくばらんな人でした。



諸々、というかテストタロッサ家に纏わる一連の出来事が形的には収束したその日の夜、自分達は時の庭園へと集まっていた。

集まると言っても、具体的には高町家および中田家の面々である。高町家はフェイトが世話になった事もありプレシアさんが呼びつけて申し訳ないが是非にと、中田家に関

しては自分絡みでリリナさんが是非にという事で、こうして一堂に会した訳である。

「えー、それでは。プレシアさん、アリシアちゃん、リリナさんの快復を祝って、乾杯」
『かんぱーいっ!』

状況は完全にホームパーティー。一番広いプレシアさんの執務室に長テーブルをズラリと並べ、テーブルの上には所狭しと桃子さんと翔子さん、プレシアさんや士郎さんなんかも手伝った料理が並べられてジュースにアルコールも揃っていた。

大人は大人同士、子供は子供同士肩を並べてそれぞれ好きなように食べたり飲んだりをしている。

「綾子ちゃん、シューマイ食べるー?」

「食べゆー!」

子供用椅子に座った綾子ちゃんに笑顔でシューマイをあーんするなのはちゃんに心が癒される。その隣では、フェイトがアリシアちゃんの世話を焼いていた。

「アリシア、ちゃんと野菜も食べないと駄目だよ?」

「うー、ピーマンは苦手ー」

「流石にピーマンは苦くて駄目か」

自分達ぐらいになれば何とか食べられるようになるだろうなと思いつつ、翔子さんお手製の酢豚に手を付ける。うむ、酸味が効いてておいしい。

酢豚を食べつつ周囲を改めて見ると、桃子さんと翔子さんが、プレシアさんと談笑、ウチの父は士郎さんと雅俊さんと飲みつつ大笑い。リリナさんは、美由希さんと談笑をしていた。

子供組は自分以外を改めて見ると、女性率が凄く高い環境である。

「しかし、堅一の母親か。俺よりも年下じゃないか」

「まあ、お腹を痛めて生んだ子じゃないですからね、自分は。それにしても限度があると
思いますけど」

「正確には母親、とは言えない訳だしね。色々複雑だと思うよ」

恭也さんの言葉に同意しつつ、プチトマトを齧っているユーノへと視線を向ける。
テーブルの上でプチトマトを齧っている姿は、完全に小動物のソレだ。

「ユーノ、お前の怪我とか魔力って、まだ回復しないのか？」

「外傷は大丈夫なんだけど、魔力がね。全部絞り切っちゃったし、もう二、三日は必要か
な」

「便利だか不便だか分からんな、魔力というのは。体力のほうは回復しやすいじゃない
か」

恭也さんの言葉にウンウンと頷く。それほど長引くほど使いきってしまえる力とい
うのは、反動が大きすぎる気がする。

ユーノのような状態になるのは余り良くないと思うので、自分も魔法を使う時は気をつけなければな。

《相棒の場合、常に制限をかけた上での行使となるので使い切るといふ心配はありません。それよりも制限以上の出力を行わないよう気をつけなければなりません》

「そうしないと世界がヤバイんだろ、分かってるよ」

「力がありすぎて暴走しちゃうっていうのも考えものだよね」

ユーノの言葉にウンウンと頷く。限界以上に膨張した風船のように、自分の身体が魔力でパーンと破裂したら嫌だなあ。

ちよつとグロい想像をしてみたい気分が悪くなり、それを喉の奥へ流し込むようにジューズを一気に飲み込んだ。

グイ、と首を傾けた時に、スリ、と足元に何かが触れる感覚が走る。

「ん、なんだ？」

《ああ、連絡するのを忘れてました。数年前に時の庭園内で瀕死の猫がいたのを捕獲していたんです。つい先程アリシア・テスタロッサ達の治療に使った純粋魔力の余剰分を利用して治療した上で開放しておきました》

「お前、リリナさんといい瀕死の生物を捕獲する趣味でもあるのか？」

《見つけたから捕獲した、それだけの事です》

どういう事だよそれは。

相棒の言う通り、自分の足には毛並みのフサフサとした猫がスリスリと頭を擦りつけていた。

ヒョイつと持ち上げると、その猫はニャーと可愛い声で鳴いた。

「あつ、リニスー!!」

「えっ!？」

自分の持ち上げた猫にアリシアちゃんが反応し、その言葉にフェイトが驚きの声をあげる。

なるほど、こいつはリニスっていいのか。

「おー、お前リニスっていうのか」

「この度は助けて頂いてありがとうございます。プレシアの元使い魔のリニスです」

「……………」

猫が、喋った。

「リニス!! あなた、生きていたのね!？」

「ええ、プレシア。あなたとの契約が切れ、消滅する間に機械に捕獲され、今まで生き長らえていました。とりあえずラインを繋いでください。また瀕死になってしまいません」

リニスがそう言うのと、プレシアさんは慌てた様子で何やらゴニョゴニョと唱え、同時にリニスが光を帯びる。

何かあるのだろうかと思いつき自分がリニスを床に降ろすと同時に、光輝いていたリニスが、そのまま人型へと形を変えた。

「——自意識のある行動は数年振りです。ラインの復旧、ありがとうございますプレシア」

「リニス……私、あなたの言葉を」

「構いませんよ、プレシア。今は全て、良い方向へ向かっているのですから。堅一さん、プレシアとフェイトの事、改めてありがとうございます」

「いや、自分は何もしてませんから……」

人型、それも清楚なお姉さん風な女性となったリニスに少し動揺しつつ返事を返す。

それにしても、プレシアさんもリニスも、なんで微妙に胸元が開いている服装なんだろうか……。

「リ、リニスイツ!!」

「うおおんっ!! リニスイツ!!」

いきなり大声で、とうか涙を流しながらリニスへと抱きつくフェイトとアルフ。そんな二人をリニスはあらあらと言いながら優しく抱き留めていた。

何事かと思いながら眺めながら、そういえばアルフが言っていた事を思い出した。リニスは昔フェイトの傍に居たが居なくなってしまったのだと。

その結果が瀕死で捕獲され、今に至るといふ事なのだろう。

「な、なんか色々起こりすぎて、なのははそろそろ目が回りそうです」

「大丈夫、自分もそろそろついて行けないから」

苦笑いを浮かべるのはちゃんと一緒に、自分は大きく溜息を吐いた。



フェイトの教育係兼プレシアさんの使い魔であるリニスを交えて改めて乾杯を行い、賑やかなまま、宴会はお開きとなった。

フェイトは今日から地球、海鳴市で全員が住める程度の広さの部屋が見つかるまで時の庭園で家族仲良く寝泊まりし、昼間はアルフと一緒にジュエルシードを探してくれるとの事。

アリシアちゃんとリリナさんはリハビリをしながらリニスによってお勉強を、プレシアさんは海鳴市の物件探しと、テストロツサ一家＋αはこれから忙しくなりそうだ。

自分達も放課後はジュエルシードを探すつもりで行動する。しかし、中々隠匿が得意

な物質なようで一日探して見つからないなんて事もあるだとうとユーノは言う。

まあ事が起こる前に回収するに越した事は無いが、事が起こってしまった時、対処できれば問題ないだろうと思う。

兎も角、当面のやる事は決まったので、後はそれに沿って動くだけである。

「——で、今日はプールな訳ですか」

「ケン、いつまで不服そうな顔してんのよ」

「いや、約束したはしたけどさ。その約束に関しても流石に色々理不尽じゃないかなあと思ったりね」

「ま、まあまあけん君」

「今朝からずっとその調子じゃないか堅一」

プールサイドで黄昏る自分に不満そうに声をかける浮き輪装備のアリサちゃんと、自分を何とか宥めようとするすずかちゃん。そして一緒に来た小動物兼ユーノ。

今日は約束のプールの日。なのはちゃん達の他に、美由希さんとすずかちゃん家のメイドであるノエルさんとファリンさんと一緒に、恭也さんのバイトしているプールへと来たのである。

なんというか、現地に来た所でなんでこうなってしまうたんだろうとか改めて考えてしまったのが良くなかった。

「それにしても、可愛い水着だね二人共」

アリサちゃんは赤色の帯広ビキニ、すずかちゃんはシンプルな藍色のワンピースで立っている。素が良いだけに何とも可愛らしい。妹的な意味で。

「フフン、どうよ」

「あ、ありがとうけん君」

アリサちゃんは何故か自慢気に、すずかちゃんは少し恥ずかしそうにお礼を言う。いやいや、お兄さんこんな可愛い子とプールで遊べるなんてシアワセダナー。

「あんたね、そう思ってるなら表情を嬉しそうにきなさい」

「いやだつてね、気不味いんだよ、男子一人つて」

「確かに、そうかも。でも私達は気にしないから」

いや自分が気にするんですよ、すずかさんや。

「あつけんちゃん！」

「ああ、なのはちや——」

背後からの声に振り向くと、そこにはオレンジのビキニを着たなのはちゃんが。胸元と下にフリルのついた、結構、いやいや、かなり際どい感じのローライズビキニを着たなのはちゃんが、嬉しそうに手を振りながらこちらへと駆けてきていた。

「——恭也さん、あの水着誰が選んだんですか」

「母さんだ」

「ああ……もう、なんていうか。とりあえずあの子が如何わしい人に攫われないよう目を光らせておきます」

「頼んだ」

視線をなのはちゃんに固定したまま、傍らに静かに立った恭也さんと言葉を交わす。

あれはいかん。可愛い、可愛いんだが、そこはかたなく蠱惑的なものを感じる。健康的なエロスというか、その筋の人が見たらきつと大喜びしてしまうだろう類のものである。

「なによあんた、鼻の下伸ばしてんじやないわよ!」

「けん君、なのはちゃんばかり」

「いたつ、ちよつ、ごめんごめん! 二人の事もちゃんと目を光らせておくから!!」

声と共にバンと背中を張られ脇腹を抓られた。

「あれ、なにしてるの?」

「別に、なんでもないわよなのは。さ、早く行きましょ」

「え、うん。あつ、お姉ちゃん達待たないと」

「そうだね。けん君はもうちよつと反省してね」

「あの、すずかちゃん。自分はこれ以上何を反省すれば」

「はあ……」

呆れられてしまった。

こうして微妙に自分一人だけ気不味い思いをしつつ美由希さん達を待ち、更に美由希さん達が来た時のリアクションで、今度は三人分怒られるのであった。

美由希さんの水着姿は、健全な青少年には目の毒なのでございます。

あのスタイルの良さは反則だ。



波のあるプールでなのはちやんと一緒に波と戯れ、アリサちゃんに泳ぎを教えるフアリンさん達を眺め、すずかちゃん、美由希さんと水泳競争をする。

なんだろう、これは世の中の男性が見たらとても羨む状況なのではないかと思った自分とは間違っていないと思った。

嬉しいやら困惑するやら、どうしようとか思いつながら一旦プールサイドへとあがると、プールサイドで監視している恭也さんの会話内容が聞こえてきた。

「——だから、気をつけてね」

「はい、分かっています」

恐らく恭也さんより少し上ぐらいだろう男性から、何かを気をつけるよう言われている恭也さん。

あの恭也さんが気をつけるような事って一体なんなんだろうか……。

「恭ちゃん、今の会話、どうかしたの?」

自分と同じタイミングで会話を聞いていたのだろう、プールに浸かりながらサイドに肘をつき恭也さんへ声をかける美由希さんの姿があった。

「ああ。ここ最近、女性の着替えや下着が盗まれる事件があつてな。つい先日も女子更衣室で男が捕まったばかりなんだ」

「ああ、そういう事なんだ」

「美由希達も、気をつけるように。くれぐれも単独行動は控えるようにな。それじゃ俺は見回りに行ってくるから」

「了解、なのは達の事は私とけんちゃんに任せてよ。ね、けんちゃん」

「そうですね。心配しないでください」

自分達の言葉に笑顔で頷き、恭也さんは見回りへと行った。

「しっかし、やつぱりこういう所にはいるもんなんですな」

「まあそういうものなんだろうね。恭ちゃんみたいな堅物もいれば、そういう偏執的な

人もいる訳だ。けんちゃんはどう？」

「自分なら下着とか集めるくらいなら本人に声をかけるかな」

「お、言ったなー」

自分の言葉にニヤニヤと厭らしい笑顔を見せる美由希さん。

どうやらからかう気満々のようだが、黙ってからかわれる程自分は素直な子供では無いのだ。

「今日の美由希さん、凄くセクシーですね。その水着、とても似合ってますよ」

「ちよつ、い、いきなり何いってんの!？」

「美由希さん可愛いですし、スタイル良いですから。水着を着ると余計綺麗に見えます」
「やめてやめて! 悪かったからもう許してく!!」

「いやいや、自分はただ美由希さんを女性として意識した上で褒めているだけじゃないですか」

「だったらそのニヤニヤした表情は何よ! 恭ちゃんが私からかう時の表情ソックリ!」

顔を赤くして怒る美由希さんにひよひよと笑いながらプールへと飛び込む。

背後から盛大なバタ足の音が聞こえてきたと同時に、物凄い勢いで美由希さんが追い掛けてきているのを確認して、自分も最大速で水を掻く足を動かした。



美由希さんとの色気もへったくれもない全力水中鬼ごっこやら水中バレーやら一頻り遊んでいた時、突然周囲に強大な魔力が発生したのと同時に、結界が張られた。

「っ！ これ、ユーノか!？」

《その通りです、相棒。恐らくジュエルシードが発動したものだと思われます》

「え、なに？ 何か起こってるの？」

声のした方向に慌てて視線を向けると、そこには自分の言葉に戸惑っているアリサちゃんとすずかちゃんが居た。その奥には美由希さん達もいる。

「『おいユーノ！ なんでアリサちゃん達が結界内に居るんだ!』」

『ご、ごめん堅一！ 範囲が広すぎて、結界から出すことが出来なかったんだ！ 今ジュエルシードを取り込んだ想いの塊がそっちへ行つた!』

情けない声をあげるユーノに思わず心の中で舌打ち。まあ結界が無いよりはあったほうがマシなんだろうが。

「なのはちゃん！ レイジングハートは!？」

「い、今取りに行つてくる!」

「急いで！　すぐかちゃん達はすぐに水からあがつて！　今ジュエルシールドが」
「け、ケン……あれ」

声と共に見ると、震えるアリサちゃんが自分の背後、中空を指さす。

なんというか、もの凄く嫌な予感を覚えながらゆっくり振り返ると、そこには、大きな水の塊が壁のように聳えていた。

「相棒！　装着!!」

《了解、戦闘服装着します》

水中から飛び上がりながら一瞬で装着を行い、戦闘服へと着替える。その勢いのまま、今にもプール内へと雪崩込もうとしている水に向けて突っ込む。

だが、しかし。

「うおりやあああつ?」

《完全に相棒を避けてますね》

水は自分の周囲で完全に分裂し、ダツパーンと背後に居たすぐかちゃん達へと突っ込んだ。

「うわ、しまつ……つて、おい」

「きやああ！　ちよつ、なによこれーっ!」

「いやあ！　引つ張らないで、脱げちゃう、脱げちゃうう!」

目の前では、水に溺れる訳ではなく、どういう事か水に着ている水着を引つ張られる女性陣という状況が出来上がっていた。

「わわわっ、すずかちゃ〜ん！」

「ちよっ、この！ なによこれエッチ！」

《どうやら物理的な危害は加えられなさそうですが。今の内に攻撃しては如何でしょう》

「いや、でも自分だと物理ダメージがアリサちゃん達に通つちやいそうぞぞ」

《困りましたね》

そう、水がアリサちゃん達に纏わりついている所為で自分が攻撃したらアリサちゃん達を傷つけてしまいかねないのだ。

こいつは困ったなあと思いつつ状況を確認していると、あれよあれよという間にどんどん水着が脱げていく。

「きやあっ！ ちよっ、やめて〜！」

「け、けん君！ 見ないでえ!!」

「はいっ!!」

胸元まで踵になってしまったすずかちゃんの言葉に背中を向けて返事を返す。

ああしかしこれは更に困った。顔を化物のほうへ向けたら見えてしまう訳で、でも見

ないと攻撃できない訳で。心の目とか発現しないかな自分。

そんなくだらない事を考えていると、バリアジャケットを着たのはちやんとユーノが、慌てて飛んできた！

「お、お待たせ！ つてなにこれ、どうなってるの!?!」

「見てはいけない……。恐らく、ジュエルシードを発動させた人間、多分捕まったつていう更衣室荒らしの願いが形になったんじゃないかな、と」

「なるほど、つまりアレは変態の怨念で衣服を剥ぎ取るヤツな訳だな」

「そ、そういう事なんだ……」

ユーノと自分の言葉に苦笑いを返すのはちやん。うん、自分で言っておいてなんだけどあんまりだと思う。

だが、そのあんまりな事が現実起こっている訳で。

「きやああ！ な、なんて事を！」

「ひ、酷い……。水着だけ脱がせて放り投げるなんて」

「サイテー！ 水着かえせー！」

な、なんて最低な発動体なんだ……。

閑話休題。

「ユーノ！ プールの人を早く転送しろ！ 自分が戦えない！」

「わ、分かつてる！」

慌てたユーノが魔法陣を展開し、魔法を発動させる。

「OKだよ堅一！」

「よっしゃ！」

ユーノの声と共に後ろに振り返り、とりあえず空中に足場を作り一気に水の塊へと拳をぶつける。

「ゴオオオオオッ!!」

「なのはちゃん！」

「うん！ デイバインシユーター、シユートー！」

掛け声と共に桃色の魔力球が水へと飛んでいき、派手な音を立てぶち当たる。レイジングハートと共にここ数日練習していた魔法の成果である。

魔力球が効いているのだろう、水の塊が呻き声をあげながら震えている。

今こそ好機！

「ステイール！ 封印術式展開！」

《了解、封印術式展開します》

声と共に両腕に五角形を模した魔法陣が展開される。

展開されたのを確認すると、再び一足飛びに水へと飛びかかった。

「喰らえ！ 封印術！」

ゴツ！ と鈍い音を立てて双掌打が水の塊へとめり込む。一拍置いてから、水の塊は中身を盛大にぶち撒けた。

ドッパンという音と共に中から飛び出したのは、色とりどりの水着や下着。

「あれ……ジュエルシードは？」

「え、けんちゃん。ないの？」

「そんな、まさか……分裂してるのか!？」

「な、なんだって!?!」



その後、本体というか、大量に分裂していた水の塊を見つけた自分達は、なのはちやんの新技『レストロクトロク』で纏めて固めてドカーンと倒したのであった。

そうして無事にプールを出た自分達だが、帰宅中、ノエルさんが運転する車内は、とても嫌な空気が漂っていた。

「……………見たでしょ」

「……………見たんだ」

「……………見たくて見た訳じゃないでしょ。事故だよ」

「何よその言い草は！」

「ひどい……………」

「ああもう何て言えばいいんですかねえ!？」

アリサちゃんとすずかちゃんが、自分に対して恨めしいような恥ずかしいような視線をずっとぶつけてくる訳です。

そりゃあチラツと、ほんの少しだけ見えてしまった訳だが、それは致し方の無い事でしょうと思うんですよ。

あんな突発的な事象に早々対応なんてできる訳はないので。

「まあまあ、もうそこら辺にしといてあげなよ二人共」

「美由希さん！ 美由希さんだつて見られたんですよ！」

「別に、けんちゃんだしねえ」

「ぐぬぬ……………」

ぐぬぬつて、ぐぬぬつて言っちゃつてるよアリサちゃん。

どこ吹く風とスルーする美由希さんに対し、またもや恨めしい視線を向けるアリサちゃん。

全く、この子はどうすればいいのかなえ。

「にやはは。大変だね、けんちゃん」

「全くだよ……」

なのはちゃんの言葉に、自分は溜息と共に応えたのだった。

第十三話

これまでで出会った中で、尤も恐ろしい敵。

一時攻撃不能にされた自分だが、ユーノ達のフォローで何とか退治した、ジュエルシードの発現体。

変態の魂を内包した化物は、自分にアリサちゃんとすずかちゃんからの責め苦という恐ろしい置き土産を残していった。

すいません、ほんの少ししか見てませんから許してください。



今日は日曜日。天気は快晴、いい運動日和である。

若干訛ってしまった身体を朝のランニングや稽古で解してベストコンディションへと引き上げ、自分は今、街の運動場へとやって来ている。

「みんな張り切つとるなあ」

「久々の試合らしいからね」

運動場でウォームアップしている選手を見ながら感心しているはやてちゃんの膝には、翔子さんの用意した今日のためのお弁当が載っている。

今日は翠屋JFCという、土郎さんがコーチ兼監督を行なっているサッカークラブの試合の日。

以前より試合観戦に誘われていた事もあり、はやてちゃんを連れて、自分は観戦に来たという訳だ。

「ケン！ こっちよ！」

「おはようけん君、はやてちゃん」

「おはよー二人ともっ」

「おはようさん、三人とも」

「おはよ」

先に観戦場所を取っていたのはちゃん、アリサちゃん、すずかちゃんの三人と合流し、自分はやてちゃんを車椅子から抱えてレジャーシートの上へと降ろす。

「おおきにな、堅一君」

「いえいえ」

足の動かないはやてちゃんは地面か椅子に座るしかない訳だが、丁度ここは芝生が敷かれているのでシートを広げて観戦となった訳だ。

早速はやてちゃんは膝のお弁当をみんなの前へと広げてくれる。

「うわあ、サンドイッチや」

「翔子さんのサンドイッチ、おいしそー」

「なのはちゃんの好きなチョコピーナッツもあるってさ」

「ホント？ やったー！」

きやつきやと楽しそうなのはちゃんを横目にしつつ、自分もシートの上へと座り、脇に抱えていたポットと紙コップを配る。

「はい、中身は麦茶で申し訳ないけどね」

「いいわよ別に、お茶会でもあるまいし」

「ふふつ、でもある意味お茶会みたいだね。こうして休日に集まってる」と

すずかちゃんの言葉に確かにそうだな、と思う。

数日に一度、アリサちゃんかすずかちゃんの家にお呼ばれしてお茶会をする事があるが、会場が変わっただけでやってる事は変わらない気がする。

今日も色々話をしながら、ゆっくりお茶を飲む事になるのだ。

「なんやそれ、ブルジョワな話やな」

「今度はやてちゃんも誘うから、良かったら来てね。ノエルかファリンを迎えに行かせ
るから」

「アタシの家にも誘うから、都合つけておいてよね」

「ホンマ？ 是非ご一緒させてもらおうわ」

アリサちゃんとすずかちゃんの言葉に嬉しそうに頷くはやてちゃん。うん、最近知り合った訳だが仲良くなってくれているようで何よりだ。

微笑ましいやり取りに笑顔になりながら、自分はこれから試合へと臨む選手達を見た。みんなやる気十分、気合が入っている。

「けんちゃん、サッカーやりたいの？」

「え、なんで？」

突然のなのはちゃんの言葉に思わず問い返す。

「だって、手。ギョツてしてる」

言われて自分の手を見ると、確かに拳を握っていた。

イカンイカン、選手達の気合が伝播してしまったかな。思わず手を開きブラブラと振る。

「選手達を見てたらね。思わず自分も気合が入っちゃったかな」

「あー、分かる分かる。力入っちゃう事あるわよね」

自分の言葉にアリサちゃんが同意して、すずかちゃんやはやてちゃんもウンウンと頷く。

サッカーもそうだが野球だったり、自分の場合他人の組手を見ている時など、力を入れて観戦してしまう時がみんなにもあるようだ。

「けんちゃんお父さんに一度サッカーやらないかかって言われたけど断ったよね。なんで？」

唐突なのはちゃんの質問に、うーむとちよつと考えてから答える。

「自分の場合、家の道場の稽古があるからね。それに、なんだかズルをしているみたいで」

「ズル？」

自分の言葉にアリサちゃんが疑問を浮かべる。

「まあ言い方は悪いけどね。正直自分は、あの選手の子達に、足の速さや足捌き、状況判断の正確さでは負ける事は無いと思ってる」

「んー、確かにそう、かも」

すずかちゃんが一応の同意をしてくれた事で、言葉が続ける。

「でもそれって、自分が生まれてずつと修練してきたからで。正直みんなより身体を鍛え始めたスタートが早いんだ。だから、100メートル走なのに50メートルから始めてるみたいで、ね」

「ふーん、色々考えとるんやなあ」

「まあ、最初に言った稽古つていうのが一番でかいけどね。稽古した後でサッカーの練習では、正直しんどい」

「それが本音かい！」

最後の最後で言った本音にはやてちゃんが華麗なツツコミを決めてくれた。

ペチツと可愛らしい音を立てて手の甲を自分の胸に当てたはやてちゃんは、とつてすつきりした顔をしている。

一人で物凄い達成感を感じているようだ。

「あつ、そろそろ試合始まるみたい」

「そうだね、サンドイツチ食べながら観戦としようか」

準備万端、お茶とサンドイツチを食べながら見るサッカーの試合に、自分はどこかわくわくしていた。



前半戦終了で0―0。

途中相手チームの苛烈な攻めを凌いでカウンターを打った翠屋JFCだが、相手キーパーにボールを弾かれて惜しい思いをしていた。

だが試合ペースは翠屋JCFが握っている状態だったので、後半も維持できればきつとチャンスは来るだろうと思う。

「惜しかったわねえさっきのゴール前」

「うん、凄くドキドキしちゃった」

応援に声を張り上げていたアリサちゃんとすずかちゃんは、頬を上気させて麦茶を飲む。

なのはちゃんは、先程からゆっくり味わうようにチョコピーナツツサンドを食べていた。

「むぐむぐ、でもお父さんも凄く張り切ってる。久々だから楽しそう」

「せやなあ。喫茶店のマスターやのに、今はドラマに出てくる熱血教師に見えるわ」

なのはちゃんとはやてちゃんの言うように、今日の土郎さんも凄く気合が入っていて、指示を大声で叫んだりと頑張っていた。

今はハーフタイムの選手達に指示を出し、気合を入れているようだ。

確かに熱血教師みたいだなあと眺めていると、運動場の入り口から給水ポットを両肩に提げた、赤髪の女性が真っ直ぐ土郎さんへ歩いていくのが見えた。

「あれ、アルフさん?」

「うん、アルフだねあれ」

なんでいきなりアルフが？　と思っていたが、その背後に車椅子に乗る金髪の少女と、それを押すやはり金髪の少女が見えた。

「あれ、フェイトとアリシアもいる」

「あ、ホントだ。どうしたんだろ？」

「なに、知り合い？」

自分となのはちゃんと言葉を交わしているとアリサちゃんが入ってきて、説明を促してくる。

さてどう話そうかな、と思っていたら、アリシアが自分達を発見したようで、こちらを指さしながらフェイトへ何やら告げ、二人でこちらへと向かってくる。

というかアリシアは、思いつきりこちらへ向けて手を振ってきた。

控えめに手を振り返し、アリサちゃん達へと視線を向ける。

「ちよつと知り合いが来たんだ。混ぜてもいいかな？」

「あたしは構わないわよ。ちゃんと紹介しなさいよね」

「そうだよ、けん君」

アリサちゃんとすずかちゃんの言葉に、分かっていると同意しながら、自分は二人を迎えるべく腰をあげて二人を招いた。

なんでも息抜きがてら外の空気を吸いたいと言い出したアリシアに、毎日リハビリ頑

張っているご褒美としてプレシアさん達全員で高町家の庭に転移したらしい。

そこを桃子さんにとっ捕まって、本来美由希さんが行く予定だった給水ポットの補給にアルフが駆り出され、ついでに散歩としてアリシアとフェイトが着いて来たらしい。なのはちやんが居る事を聞いたのだそうだ。

今翠屋では桃子さんを中心に、リニスとプレシアさん、翔子さんと翠屋JFCのみなの為に料理を作っているのだとか。

「お、お母さん……。なんかごめんね、フェイトちゃん、アリシアちゃん」

「いいのいいの、どうせ散歩するつもりだったんだし。ね、フェイト」

「うん、アリシアの言う通り気にしないで、なのは」

自分達と同じように、シートの上に座ったフェイトとアリシアに、なのはちやんが苦笑いで返す。

それにしても、料理に二人追加で駆り出されるって、どうかしたんだろうか。

「んにゃ、ただ分担が減るから駆り出されただけだって。あたしはあの肉がまた食えるらしいからね」

「お前はいつでも食欲優先だな」

ガリガリとビーフジャーキーを噛むアルフに冷めた視線を向けながら呟いた自分は正しいと思う。

「それにしても、フェイトだっけ。あんた達も魔法の関係者な訳ね」

「知らない間に、色々ややこしい話になってるんだね、なのはちゃん達」

「まあね。自分の場合、死んだはずの生みの親まで出てきた訳だし」

アリスちゃん達の言葉につられ自分の生みの親の事を話すと、三人揃って「ウソ！」なんて叫び声をあげた。

「え、あんたの親って、翔子さんじゃないの？」

「死んだはずのって、そんな話聞いてないよ！」

「いきなりヘビーな話すなや堅一君！」

「ごめんごめん、なんか最近色々あって、感覚マヒしてるんだよね……」

三人には未だ、自分が生物兵器である事などは話していない。この話を聞いたら、正直ドン引きどころじゃないだろうから。

別に三人の事を信じていない訳じゃないのだが、話すには未だ早いか、となんとなく思っているだけだ。

自分の事よりも、今はフェイト達の事だ。

「まあそういう訳で。フェイト達も直に海鳴に越して来るから、良かったら仲良くしてね」

「よ、よろしく」

「よろしくね、私アリシアだから！」

サッカー観戦をしながら互いの自己紹介。

共通の友人として自分となのはちゃん居るので、場はギクシヤクする事も無く、フエイト達もスムーズに溶け込む事ができたようだった。

うんうん、良かった良かった。

◇◇◇◇◇

試合は2-0で翠屋JFCの勝利となった。後半にセンターリングからのヘッドで先制し、追い討ちに終了10分前といった所でフリーキックからのダイレクトシュートが決まり、そこで相手チームの心が折れたまま終了。

二点共恐らく高学年だろう子が決めており、どうやらチームのエースストライカーらしい。「さすが」とか「やっぱり」なんて言われていた。

そしてその子は今現在甘酸っぱい青春が始まったばかりのようである。

試合が終わった後の食事が祝勝会に切り替わり、チーム全員で翠屋で食事をし、自分達もそこへ混ぜてもらっている。

そして件のエースストライカー君は、マネージャーと思しき女の子と仲良さそうに会

話をし、甲斐甲斐しく世話をされている。

「……なんか、見てて和むなあ」

「あんたはお兄ちゃんか」

アリスちゃんからの痛烈な言葉だが、奇しくも自称なのはちゃんのお兄ちゃん（二人目）を自認している自分には正しいのかもしれない。

あの年頃の子のああいう所を見ると、どうしても和んでしまう。若いっていいねえ、うんうん。

「け、堅一君が公園のおじいちゃんみたいな目をしとる」

「誰が年寄りか、失礼な」

言うに事欠いて年寄りとは何事かとはやてちゃんのおでこをペチツと叩くとてへつと可愛らしく舌を出す。

こういうポケツツコミははやてちゃん相手だと凄くやりやすいのが困りモノだ。関西弁だからか。

この光景を見て、すずかちゃん達が笑ってくれるので更にやりやすくなってしまふ。

この子が将来間違つて芸人目指したりしたら嫌だなあとか思いながらなのはちゃんへと視線を向けると、なのはちゃんは、チラチラとあのストライカー君へと視線を向けていた。

いや、なのはちちゃんだけではない。何かが気になるのか、フェイトも一緒になつて彼へと視線を向けている。

『なのはちちゃん、フェイト。どうかしたのか?』

『う、ううん。多分気のせいだから……』

『やつぱり、気のせいなのかな』

何やらよく分からんが、何かが気になつているようだ。なのはちちゃんは困つたような笑顔を浮かべ、フェイトもそれに釣られるように苦笑している。

一体何だと思つていたら、突然横からグイ、と腕を引かれた。

「なんや、何か内緒話か?」

「ん、まあね。それより良く分かつたね」

「何となく。私にも才能あるんやろ、そういうの」

フン、と得意気に胸を張るが、その才能が本当にあつて良い物なのかどうか、という所である。自分達のように厄介事に巻き込まれるのは普通感覚であれば御免だろ
う。

「なに、また魔法の話?」

「なにかしてたの? はやてちゃん」

アリサちゃんとすずかちゃんが自慢気なはやてちゃんへと絡みだし、祝勝会がお開き

になるまで、自分は内緒話の件を追求される事となった。

やがて一人二人と、サッカーチームの少年達が帰っていくのを見ながら、自分達はジューズを片手に会話を続ける。

女子というのは会話をしていないと死んでしまうのかと言う程延々と会話をしており、既に何週目なのか分からない最近のケータイ事情をフェイトとアリシアに説明するアリサちゃんとすずかちゃん。

はやてちゃんはなのはちちゃんと、料理の手伝いでヘトヘトになっている美由希さんを交えて会話を楽しんでいる。

さつきはサッカー少年達が居たからまだ良かったが、今じゃ完全に自分は浮いてるなあコレ、と思いながらジューズを飲んでみると、足元にチョコチョコと小動物がやって来た。

「お、ユーノ。お前どこ行ってたんだ？」

「ジュエルシード探したよ！ 僕がなんで居るのか忘れてるでしょキミ！」

「冗談だ。それより残り物で良かったら食うか、ほれ」

プンスコと腹立たしさを表して両腕を腰に当て怒ってるユーノに残り物のお菓子の皿を差し出して機嫌を取る。

「全く」とか言いながらもポリポリとスナック菓子を齧る小動物がそこに居た。

「うわあ、めっちゃ喋つとる！」

「キヤー！ 見てすずか！ ユーノが！ ユーノが！」

「フアンタジーの世界だね!!」

あ、と思うがもう遅かった。口頭では喋る小動物の事を伝えてはいたが、実物を見せるのはこれが初めてだったのを忘れていた。

突如現れた小動物が喋り、尚且つテーブルの上でスナック菓子を齧るといふフアンタジー溢れる情景にアリサちゃんとすずかちゃん、はやてちゃんの三人が一気にテンションをあげ、ユーノを撫で回しだす。

「あつ、ちよ！ ダメ、ダメだつて!!」

「うりうり、気持ちいいのかー、こいつー」

「ちよつ、気持ちいいとかそうじゃ、た、助けてなのは!!」

ペットを撫で回す感覚と同じようにユーノの腹をクリクリ撫でるアリサちゃん。これはユーノが少々気の毒だと思うわ。

そろそろ止めないとユーノが気持ち良さで失神するかなと思いかけた所で、感覚を強烈に貫く何かが現れた。

「っ!!」

なのはちゃん達も一緒のようで、思わず椅子を立ち上がり周囲を見渡す。

ふと横を見ると、はやてちゃんも胸を押さえてこちらを見ていた。

「ジュエルシードだ。行こうなのはちゃん。ユーノを借りるよ」

「うん！ ごめんねアリサちゃん達。またあとで！」

テーブルの上のユーノを引つ掴み、自分達は翠屋を駆け足で飛び出した。



感覚に従い来てみれば、昼間の街中で発動するという最悪の状況。そして発動体は、巨大な樹となって、海鳴市をその太く長い根っこで縦横無尽に蹂躪していた。

「ユーノ！ 結界頼む！」

「分かってる！」

自分の言葉と共に結界魔法を発動させ、通常の空間からジュエルシードの発動体と、自分達を隔離。

現在の状況では大木である事しか分からない為、一旦自分達はビルの屋上へと着陸し、状況を伺う事にした。

「さて、この木のどこかにジュエルシードがあると思うんだが」

《現在の所、相棒には探索魔法はまだ教えておりません。相棒は突っ込むしか無いで

しよう」

「待って、私覚えたからやるよ！」

自分とステイルの言葉になのはちやんが挙手をして一気に魔法を発動させる。

「リリカル、マジカル。探して！ 災厄の根源を！」

《エリアサーチ》

なのはちやんの声、レイジングハートの言葉と共に、無数の魔力スフィアが魔法陣から飛び出し、大木の元へと向かう。その隣では、フェイトも同じように魔力スフィアの探索を行っていた。

「見つけた」

「中心近く、右から2つ目の木の上」

なのはちやんとフェイトが同時に見つけたらしく、揃って声をあげる。そして二人は、同時に悲しそうな表情をした。

「……どうした？」

「私、気付いてたんだ。でも気のせいだって思ってた」

「今日の、サッカーでゴールしてた子だ。ジュエルシード持ってたの」

「だから、あの時」

そうか、あの時サッカー少年をチラチラ見ていたのはそういう事だったのか。自分が

全く気付かなかったジュエルシールドの気配に、二人は勘付いていながらも、気のせいだと思いい見過ごしてしまった。

その結果が、現状の海鳴市の被害。

二人の胸の内を思うと、思わず苦しくなってしまう。そして同時に、全く気付かず、現状の自分では対処ができない事に不甲斐なさを覚える。

「ここから封印。できるよね、レイジングハート」

「バルディツシュ、お願い」

《Sealing Form》

二人はビルの上で自身の持つデバイスの形状を変化させ、目標へと杖の先を向ける。

そして、その先へと魔力を集め、巨大なスフィアを形成させていく。

「ディバイーン……」

「サンダー……」

スフィアの周囲に魔法陣を形成し、魔力を一気に撃ち出す準備を整え、二人は揃って魔力を放出した。

「バスターツ!!」

「スマツシャーツ!!」

轟音、激しい発光と共に桃色と金色の魔力が一直線に走り、大木へと魔法が炸裂。そ

の瞬間、封印は確かに為されたようで、周囲に広がっていた巨大な木々は、全て嘘のように消え失せた。

だが道路や建物のひび割れが、実際に被害が出た事を物語っていた。

やがてジエルシードがまるで雪のように舞い降り、静かにレイジングハートの中へと収納された。

二人の為した事、そして海鳴市に大きな被害が出た事に、思わず奥歯を噛み締める。

「……ごめん。自分は何も出来なかった。探索する事も、封印も、全部二人に任せてしまった」

「なのにも気付いてたのに、気のせいだって。けんちゃんは悪くないよ」

「私だって。堅一も、なのにも悪くない」

一体何に対して謝っているのかと、言ってから自分自身に対して悔しさを覚える。

ああそうだ、これは悔しいのだ。探索すら出来なかった自分に、封印すら出来なかった自分に。何も出来ず、なのはちちゃんとフェイトに頼りきりだった自分自身が、とてつもなく悔しい。

「相棒、明日から今の倍のペースで魔法を教えてください」

「ユーノ君、私にも魔法、どんどん教えてね」

「私も、今よりもっと強くなる。だから」

『この悔しきは、ずっと忘れないでおう』

きつと今三人、考えている事はそれぞれ違う事だと思ふ。

自身の不甲斐なき、足りぬ知恵、自信の喪失、様々な思いが胸の内を駆け巡る。

それでも期せずして、三人で共に呟いた一言。互いの心の中の大事な場所に、静かに仕舞われた。



ビルの屋上から戻った自分達に、笑顔で「お疲れ様」と声をかけてくれたアリサちゃん達の存在は、とても暖かかった。

テレビでは既に謎の現象として道路やひび割れたビルの被害が映し出されている。

幸い死亡者は存在していないようだが、何人かの怪我人が出ているという言葉に、三人でギクリ、と身体を震わせる。

「……やっぱり、怪我人は出ていたか」

「しょ、しょうがないよ！ 三人とも、そんな顔をしないで！」

ユ一ノの言葉に三人揃って苦笑を浮かべるしかない。

確かに仕方がないが、こればかりはしょうがない。気にするなというのが無理な話

だ。

「ま、街の復旧だけなら何とでもなるわよ。既にウチのパパ達が動いてるわ」

「うん、お姉ちゃんも稼ぎ時だつてさつき無事を確認する電話と一緒に言つてた」

「こら、人の不幸で富を得ようとしなない」

恐らくは冗談だろう、すずかちゃんの言葉にツツコミを入れつつ心の中で感謝を述べる。

そうして、自分達を元気づけようと思つてくれるだけで、自分達にはとても有難い話だ。

「もうこんな事は、二度と起こさないよ」

「そうだね、なのは」

なのはちゃんの決意の言葉に、フエイトが同意する。

そう、もう二度と同じような事は起こさせない。自分も一人、拳を握りしめていた。

第十四話

ジュエルシードの発動により、海鳴市に大きな被害が出た。

対応するべき自分達は、それぞれに自責を覚え、二度と同じ事が起こらないよう、今以上の力を求める。

知識でも、腕力でも、魔力でも。もう二度と、同じ事は繰り返さないように。



自分に出来る事は現状、そこまで多くはないらしい。

なのはちゃんやんは遠距離特化、フェイトは近接寄りの万能型。自分は近接特化。

見方によつてはバランスの取れた面子であると言えるかもしれないが、それは三人揃つてでの事。

誰か一人だけでもジュエルシードに対応出来るようにならなければ、あらゆる状況に対応出来るとは言い難い。

なので自分は、探査魔法及び遠距離攻撃魔法の練習を行う事となった。

《相棒の魔力圧縮は高町なのは、フェイト・テスタロッサより頭一つ抜け出ています。圧縮した魔力を打ち出したり、集束した魔力を炸裂させる方向で遠距離を克服しましょう》

「それはいいんだけどな。なのはちゃんみたいにスフィアを誘導させたりとかはやっぱり?」

《相棒にそちらの才能はありません》

キツパリと言い切れられガツクリと肩を落とす。ああいうの良いと思うんだけどなあ。

自分が出来る遠距離攻撃と言えば、以前フェイトに行つたような魔力を拳から撃ち出すか、直射型の砲撃をするかのどちらかである事が判明した。

また例外的に足場を作るのと似たような感覚でケージタイプの捕獲魔法が行使可能。何とも魔法というイメージとはかけ離れたものである。

自分と敵を捕獲魔法で隔離して金網デスマッチでもするのか、それが魔法か。魔法なんだろうなあ。

そんな事を思いながら、自分は道場の中心で圧縮魔力を作つては宙に浮かせることをずっと繰り返しているのである。

これが何の練習なのかと言えば、瞬時に魔力を圧縮し出現させる。そして、その後の

集束の練習である。

いついかなる時に魔法を行使せねばならないか分からない。なので頭では無く、身体に魔力の圧縮を染み込ませ、咄嗟の判断で打ち出せるようになるべきである、というのが相棒・ステイルの有難いお言葉であった。

幸い自分にはそつちの才能があつたらしいので、この一週間で身体には十分染み付いている。

宙に浮いた魔力球が十分だなと思つた所で、その魔力達の中心に立ち、両手をパンと合わせ、意識を集束。

両手を合わせるこの行為は、自分の中で集束を行うというスイッチの役割を果たしている。

これも身体に染み込ませる為の一つであり、こういう地味だが確りしたものが咄嗟の時に役に立つのだと相棒が言っていた。

意識の集中と共に足元に中心に星形を描き、五角形を模した魔法陣が展開される。

自分の魔法陣は、なのはちゃんやフェイト、ユーノとは全く違う形をしており、それだけで自分が他の皆とは違う魔法を使っているのだと理解できた。何とも歪な形なのである。

魔法陣の展開に従い、両手をゆっくりと離しながら、間の空間に魔力を集めるよう意

識を高める。

《その調子です。やはり相棒は筋が良い》

「コオオオオオツ」

丹田に力を込め、身体中へ力を行き渡らせる呼吸法、息吹を用いながら意識を更に高めていく。

周囲に存在していた魔力は既に消え失せ、今この道場の中には、自分の両手の間で眩く光る魔力のみが存在していた。

この魔力を盛大に打ち出したらどうなるのだろうか。ちよつと試してみたい気もするが、やったら道場どころかご近所さんのご迷惑になってしまいそうな気がするので、未だ試したことは無い。

そろそろ圧縮、集束共に限界かな、という所で、相棒から声がかかる。

《ここが臨界点です。吸収および霧散を行なって下さい》

「ムンツ!!」

バチンツ、と両手を一気に合わせ、魔力を吸収する。

吸収しきれなかった魔力は空中へと放出され、自分の周りをキラキラと彩る。これだけ見ると少女漫画のイケメン君が出る扉絵のような光景である。

「おー、今日も盛大に煌めいとるな」

「おはよう、父さん。煌めいてるってなんだよ」

「見たまんまじゃねえか」

確かにそうなので何も言えない。

黙ってタオルを放り投げてきた父に冷ややかな視線を向けながら身体を拭いた。

「そろそろメシ食って高町の所行くぞ」

「分かってるよ」

本日から、二泊三日の旅行なのである。高町家主催で。



子供組は全部で六人。自分、なのはちゃん、アリサちゃん、すずかちゃん、はやてちゃん、フェイト。その他恭也さん達も居るにはいるが、彼らを子供としてカウントするのは失礼だろう。そしてユーノはペット枠である。なので六人。

そして車を運転できるのは三人。父、土郎さん、ノエルさんである。忍さんと恭也さんは未だ免許を取っていないそうだ。

父の車には中田家が。土郎さんの車には高町家と月村忍さんが。ノエルさんの車は、八人乗り。

そうして完成したのが、男女比7:1という子供組車両である。

「アリシア達も来られれば良かったのにね」

「これ以上女性を増やそうとしないでくれフェイト」

ポツキーを齧りながら言うフェイトに心の底から苦言を呈する。

今回の旅行は温泉であり、山間の旅館である事。そしてプレシアさんが自分の体調は崩していた割に医療に煩い人だった事から、今回のアリシア・リリナさんを中心としたリハビリ組の参加は見送られる事となった。

『絶対に！ 絶対に温泉たまごとお饅頭！ 分かった！ フェイト!?!』

必死の形相でそう見送ったアリシアの顔を自分は忘れない。半分泣きながらの事でもあったし。

アリシアってこうだったかしら、と遠い記憶を思い出しながら、確かに。と納得したプレシアさんの顔も忘れられない。何を思い出したんだあの人は。

リリナさんとリニスは笑顔でいってらっしゃーいと見送ってくれた。しっかりお土産は要求されたがな。

そんなこんなで、自分達はこうして旅立つ事となったのである、まる。

「けんちゃん、次どのクエストやるー?」

「やっぱりダブル討伐やろう」

「イヤヤ！ もう飛竜に追いかけ回されとうないー!!」

現在車内でモンスターを狩るGを三：三でプレイ中だったりもする。

はやてちゃんもこのゲームを持っていたそうで、今回旅行のお供として持ち込んで貰った。フェイトは以前借りていた美由希さんのものを再び拝借している。今度プレイアさんに強請って購入するそうだ。

通信プレイ中そこから中からギャーとかワーとか叫び声が挙がる中、運転席に座るノエルさんと助手席に座るフアリンさんは慣れた物で、文句一つ言う事無く士郎さんの車を追尾してくれている。何とも有難い事である。

今回の旅行の趣旨は、単純な慰安旅行では無く、なのはちゃんとフェイトの心のケアにある。あの街に被害を出した一件から連日、テレビでは現場の映像が流れ、ワイドショーではキャストが願望を交えた的外れな予想をしたり顔で話す日々が続いた。

そんな現実には、なのはちゃん的情绪が最近不安定になり、フェイトもその現状を知ってか寡黙に、まるでプレイアさんから遠ざけられていた頃のように暗い表情をするようになっていたのである。

そこで高町夫妻が見るに見かねて、気分転換の為情報が伝わりにくい温泉旅館で少しでも休養させようという話になったのであった。

自分？ そんな繊細な神経をしていたら中田家では生き残れませんよ、ねえ？



山間の温泉旅館、連休という若干混む日ではあったが、旅館の方は自分達団体を快く迎えてくれた。

仲居さん達が荷物を降ろしてくれ、早速部屋へと案内してくれる。

仲居さんの荷物降ろしを手伝っていた自分は一步出遅れ、みんなの後を追おうかと思っていた所で、服の袖をクイ、と引かれた。

「ん？ あ、すずかちゃん」

「けん君、ちよつとお話があるんだけど……」

自分の袖を掴んでいたのはすずかちゃん。その表情は旅館についた時の晴れ晴れとした笑顔とは打って変わって、どこか浮かない。

何事だろうか、と思つて腕を引かれるまま着いて行くと、そこには忍さん、ノエルさんと、父さん、土郎さんが居た。

「あれ、どうしたの」

「ああ、来たか。そのノエルさんがな、少し話があるという事でな」

疑問を呈した自分の言葉に応えた父の顔も、なにやら厳しい。

これはいよいよ何事だと思いつつ、すずかちゃん家のメイドさんであるノエルさんの言葉を待った。

「失礼します、堅一様。本日、私共の方で八神はやて様のお宅へお迎えに行つた時の事なのですが」

「ああ、そういえばそうでしたね。それが何か？」

「いえ、その……。失礼ですが、堅一様ははやて様のご家族をご存知ですか？ 皆様の中では一番、はやて様とのお付き合いが長いとの事でしたので」

「いえ、自分は特に聞いてないので……。はやてちゃんの家族に問題が？」

まさか以前のフエイトのような状態なのか？ と思つたがどうやら違うらしい。

静かに首を振るノエルさんが、次の瞬間言つた言葉に自分の耳を疑つた。

「いえ、問題と言いますか。はやて様、ご家族がいらつしやらないのでは、と」

「は………？」

何を突然言つているんだ、と思つたが。続く言葉に二の句を告げることが出来ない。「お迎えに行きました所、玄関からお一人で出ていらつしやいました。どなたの介助も受けず。ご家族がいらつしやれば、お見送り等をして良いものかと思うのですが、そういう方もおらず。またご自宅の庭なども手入れがされておらず、もしやお一人で過ごされているのではないか、と」

「はやてちゃんにお土産とかどうするの？　って聞いてみたんだけどね。自分で食べた
りするものしか言わなかったから、余計心配で」

何を言っているんだ。常識的に考えて、小学生で、しかも足が不自由な女の子が一人
暮らしを行なっているなど、有り得ないのではないか。

そう言葉にして告げたいのだが、出てこない。自分でも、実はそうなのではないか、と
思つてしまつている。

理由は簡単だ。自分ははやてちゃんの家族の事を、何一つ知らない。知つているの
は、彼女が図書館へ来る時、ヘルパーさんに頼んで連れて来て貰つているという事だけ。

ご両親が仕事だからヘルパーさんに頼んでいる、と勝手に思つていただけで。本当に
家族が居ないのではないか？　一人でずっと、家に住んで、食事を作り、一人で生きて
きたのではないか？

その正確の寂しき、過酷さに思わず血の気が引き、嫌な汗が背中を流れる。

まさか、そんな。小さく呟いた言葉の中に、虚しさが漂う。

「堅一君にも言っていないという事は、恐らく彼女が言いたくなかつたのだろう。デリ
ケートな問題でもあるからな」

「まあ、気にかけてやれよ。何をどうこうしろつて訳じゃねえ。気にかけてやるだけで
いいんだ。分かつたな」

「あ、ああ。分かった」

士郎さんと父さんの言葉に、苦しい声で返事を返す。ああ、本当に情けない。自分は何も、何一つ知らない。

今はただ、彼女の思いを尊重する事しか、出来そうにないのが、悔しかった。



はやてちゃんの事は当然気になるが、本人が言い出すまでは待とうと気持ちを切り替える。きつと、今よりもっと仲良くなれば、何かしら教えてくれるはずだ。

自分の荷物が部屋に運ばれているのを確認し、整理をしながら考えて、廊下へと出る。ちなみに部屋は子供は全員一緒に大部屋。自分は父さんと一緒に良かったのだが、なのはちゃん達の押しに負けてしまい同じ部屋になってしまったのだ。

気疲れするのが目に見える訳だが、もうそこはしょうがないと割り切るしかない。既にみんな周囲の散策へと出かけているので、自分もそこを追いかけようと玄関へと出て、恭也さんと忍さんのカップルに出くわす。

「これから散策ですか？」

「ああ。なのは達はウォーキングコースへ出ているようだよ」

「私達は、先に近くのお土産屋さん見てこようかなって」

「そうですか。ありがとうございます」

札を述べて駆け足でウォーキングコースと看板で案内された道を行くと、すぐに女性陣の後ろ姿が見えた。

「おーいっ!」

「あ、けんちゃん来た」

「堅一君も一緒にお散歩するか? おかゝをこゝえゝゆこゝうよゝ」

「はやて、その歌なに?」

「ピクニックっていう民謡よ。フェイトにはそういう所から日本文化を教えていく必要があるわね」

「うふふ、アリサちゃん。一応ピクニックはイギリスの民謡だよ?」

「が、頑張る。よろしくね、アリサ」

おうおう、楽しそうで何より。

車椅子のはやてちゃんと、何故か自然とはやてちゃんの車椅子を押すフェイトを中心に、みんなで広がってウォーキングコースをお散歩。

アルフとユーノは車酔いが少しあるらしく、今は旅館で待機だ。動物状態だし、三半規管が人間より敏感なのかもしれない。

はやてちゃんはどこで拾ったのか細い棒きれを持ってガツサガツサと道の脇にある植え込みを揺らしている。

「全く、はやてちゃん。あんまり振り回すなよ?」

「わかっとするよ」。たまの外泊やからなあ、たのしいんや!」

心底楽しそうなのははやてちゃんが笑顔で棒きれを植え込みに当て感触を楽しんでいる。

まあ誰も怪我する事もなさそうだしいいか。

「ん? なんやろあれ。よつと!」

はやてちゃんが何かに気付いたように棒で植え込みをツンツンとすると、そこから歩道の方にコロロンと何かが転がってきた。

「あれ? …これどこかで見たような」

自身の足元に転がってきたモノ。それを思わず拾い上げ、掌に乗せたすずかちゃん。

その、すずかちゃんが乗せているモノを見て、思わず顔を青くさせる。

「すずかちゃん! 早くそれを捨てて! それはジュエル——」

言い終わる前、目の前に青い魔力光が眩く走ってしまった。

「きやあああああつ!!」



ジュエルシードの光が走ったと同時に武装の装着を行い、戦闘服で目前を見据える。なのはちゃんとフェイトも同様にバリアジャケットを着こみはやてちゃん、アリサちゃんの前に立つが、その表情はこの先の事を考え憂いを帯びている。

それはそうだ。大事な友達であるすずかちゃんが、ジュエルシードの問題に巻き込まれてしまったのだ。

自分達が光が収まるのを待っている所に、ユーノとアルフが空を飛んでやってきた。

「なのは！ ジュエルシードが」

「分かってるよ、ユーノ君。すずかちゃんが、発動に巻き込まれちゃった……」

「そんな……」

なのはちゃんの言葉に絶句するユーノ。前回同様、人が発動させてしまった事による被害などを考えると、その態度も納得する。

だが今はそれよりも、すずかちゃんの身の安全のほうが重要な事だった。

眩く輝く目前の光景は、次第に光を弱め、完全に消えたそこには。

「うつ……ぐうう……」

自身を抱きしめ、うめき声を上げながら震える、忍さんによく似た大学生程度の女性
が居た。

「す、すずか、ちゃん……？」

「に、逃げて……なのは、ちゃん……」

恐らくはこれが未来の姿なのだろう。忍さんにそっくりな、しかし幾分温厚そうな顔立ちをしているすずかちゃんは、今は険しい表情で自身を抱きしめ、歯を食いしばっている。

これは、ジュエルシードの力に抵抗しているのだろうか。

「なのはちゃん、フエイト。封印魔法を早く！」

「う、うんっ！」

「わかった！」

自分の手段ではまだすずかちゃんを傷つけてしまうと判断した自分は、またもやなのはちゃん達に頼らなくてはならない情けなさに怒りを覚えながら、お願いをした。

二人共意図が分かったようで、すぐさま封印魔法を起動させようと動く。

だが。

「がっ、だめっ!!」

すずかちゃんが短く悲鳴をあげたと思ったらその瞳が妖しく輝き、次の瞬間身体全体に鉛を巻いたかのような重量感を感じた。

「くっっ！ か、身体が」

「う、動かん。なんでや」

ズシャ、と背後で音がしたのを聞いて重い首を後ろへ回すと、アリサちゃんやなのはちやん達が床へと崩れ落ち、はやてちゃんがまるで車椅子に縛られるような格好で座っていた。

「す、すずかちゃん……」

「なんで、どうしてこうなるの。私は、ただ普通に、みんなと生きたかっただけなのに……」

フラフラと、危うい姿でその場に立つすずかちゃんは、両目から涙を流しながら、妖艶な瞳で自分を見つめていた。

「けん君……。けん君は、大丈夫だよね……。う？」

「自分は、何とかって所かな。それより、すずかちゃん」

「分かってる、でも、止まらないの。違う！ 止めたいの！ なのに、なのに！！」

涙を流しながら叫ぶ彼女の瞳から目が離せない。ああ、これは、そういう力か。

彼女の瞳から発せられる何かが自分達の身体を縫いつけ、彼女の瞳から目を逸らせないようにしている。

早い所終わらせてしまわないと、すずかちゃんが今以上に傷つく事になり兼ねない。

そう思い、意識を動く方向に動かそうとした所、はやてちゃん達の更に背後から声が

あがった。

「なのは！ これは!？」

「もしかして、すずか、なの?」

「お、お姉ちゃん……」

恐らく騒ぎを聞きつけたか、あの眩い光が見えたのか。土産物屋に行くと言っていた忍さんと恭也さんが背後からやってきた。

だがしかし、現状は余り来て欲しくはなかった。

「恭也さん、忍さん。すずかちゃんがジュエルシードの発動に巻き込まれました。そこから動かないで」

「あ、ああ分かった。忍、落ち着け」

「でも、でも！ すずか！ 大丈夫なの!？」

「大丈夫な、訳ないよ……」

「すずかちゃん、すぐ終わらせる」

重い身体を動かし、一步、また一步と、慎重に歩みを進める。

自分がこうしている間にも、すずかちゃんは目に涙を溜めながら、まるで何かを吐き出すように、忍さんへと叫んでいた。

「私、この力、元から持つてるものだよ。ジュエルシードとか、関係ない。ただ、力が

強くなっちゃったただけなんだよ」

「すずか、それは……」

「私は！ こんな風に生まれたくなんてなかった！ みんなと違う！ 夜の一族なんかに!!」

「すずかっ!!」

「初めてなのに！ お友達も、私と競争して勝てる人も、みんなみんな、初めてだったのに！ どうしてなののお姉ちゃん！」

それは、現状に対する嘆きか、後悔の吐露か。血を吐き出すように叫ぶすずかちゃんの言葉に、忍さんは傷ついたような表情をして、視線を逸らす。

もう、終わりにしたい。

「すずかちゃん、少し痛いかもしれない」

「けん君……。終わる、の？」

「終わらせる。ステール、封印術式、展開」

目前まで近づいた自分に、すずかちゃんの妖しい瞳がホツと安心したような柔らかい瞳へと変わる。

そう、もうこんな悪夢は終わりにしなくちゃいけないんだ。

「けん君、お願い」

《展開、完了》

「封印術!!」

両腕に展開された封印術式を、すずかちゃんへと打ち込む。

ドムツ、と鈍い音を立て掌打が当り、すずかちゃんが、自分へと倒れ込む。

「い……たい……」

「ごめんね、すずかちゃん。少し、休んでて」

静かに目を閉じたすずかちゃんは、そのまま意識を失った。

すずかちゃんの背後、宙空でフワフワと暢気に宙に浮いているのは、青く輝く宝石のような物質。

「石つころの分際で、人様を傷つけやがって」

《回収します》

今回迷惑を掛けまくってくれたジュエルシールドが、静かにスタイルへと格納された。

「……とりあえず一旦、宿に戻りましょう」

背後を振り返り、打ち拉がれたように俯く忍さんへと、声をかけた。



結論から言えば、状況は良い方向へと纏まった。

何でも忍さんとすずかちゃん、月村家というのは「夜の一族」という人は少し違う異種族の末裔らしい。

一部では「吸血鬼」等とも呼ばれ、血を操ったりすずかちゃんが今日やったように瞳を見る事で何らかの暗示をかける事が可能なのだそうだ。

つまり今回みんなが地面へと倒れこんだのはすずかちゃんが元から持つ力がジュエルシードによつて強化されたもの、という事らしい。

全く世の中には知らなかった不思議な事が多いなあと感心する。何でも叔母とかに自分達のような似非では無い、儀式をしたりとか箒で飛ぶような生粋の魔法使いもいるそうだ。

そして、夜の一族にはある掟があるらしい。

曰く、その人物とずつと友達でいるか、異性であれば婚姻関係を結ぶか。さもなくて記憶を無くし、関わりを持たないよう生活するか。

何とも打算的な話ではあるが、この問に対しては、自分以外は快く友達でいる事に同意したのである。

まあ高町家は将来的に血縁となる訳だから、ここで拒否などできる訳もない。恭也さ

んの将来を考えて。

「実は私な、今一人で生活しとんねん……。すずかちゃんみたいな友達おったら、毎日楽しくてたまらんわ」

「一杯お泊りとか、しよ？ 私のはやてちゃんのお家行くのと、はやてちゃんが家に来るの。きつと楽しいよ」

「ちよつと、あたし達も入れなさいよね、はやて、すずか。ウチにもちゃんと来なさいよ、犬が一杯で楽しいわよ！」

「ほんま、私には勿体無い友達や、みんな」

はやてちゃん、彼女は気丈な胸の内を明かし、それを誓いにして、友達でいる事を約束する。

はやてちゃんの周囲には大人も子供もみんな集まり、笑顔でみんながはやてちゃんを囲んでいた。

そしてウチとしては、難儀な問題が一つあった。

「あの。自分、人間じゃないんですけど」

「あ……」

自分の言った言葉に、なのはちゃんが小さく呟く。

やれやれ、自分でも思うが、中々に困った設定である。

「どういう事、かな」

何を言っているのか分からない、という表情でこちらを見つめる忍さんに、腕輪と
なつた相棒から声がかかる。

《今相棒が言つた通り、相棒は人間ではありません。簡潔に申し上げれば太古の血族の
遺伝子上に存在した神と言うべき存在を蘇らせた生物兵器です。恐らくは、あなた方の
言う「夜の一族」よりも、人とは外れているでしょう。この姿も本来の姿ではありません
ので。》

「まつて相棒。自分それ初耳なただけ」

《言う必要がありませんから。ちなみに本来の姿は暴走すると見られると思います。
まあその姿となつた場合、海鳴市どころか宇宙規模で存亡の危機に立たされる事になり
ます。何しろハズラットに知識を与えた『外なる神』の末裔ですから》
なにそれ聞いてないんですけど。

自分の将来が元から不安だったものが更に不安になつた訳だが、何故かそこへすずか
ちゃんが、若干目を輝かせて来た。

「けん君、外なる神つて？ ハズラットつてなに？」

《相棒、中田堅一の産まれた世界です。ハズラットと呼ばれる世界で、相棒はその神の末
裔の遺伝子から神の遺伝子を抽出した人間の複製として生まれました》

「ハズラットつて、アルハズラット？ アルハザード？」

《いいえ、ハズラットです。ですが国に住む人間の内王家に連なる者には全て『アル・ハズラット』と冠する名前が付きます。よくご存知ですね》

何故か相棒が応え、その回答にすずかちゃんもテンションが爆上がりする。

「そうなの?!? じゃあじゃあ、外なる神つて名前は!!? 知識を与えるのであればシユブニグラスとかハスター? もしかしてニヤルラトホテプ!!?」

《私も詳しくは知りませんが、相棒の元となった人物が戦闘時に呼ばれていた名前では『ヴォル』と》

「ヴォル!? ヴォルヴアドス! ムー大陸に生活していたという原初人類に崇拜されていたという旧神!? 外宇宙からの来訪者! 外宇宙は本当にあつたんだ!?!?」

うわーい、と言いながら物凄いテンションになったすずかちゃんが目をグルグルさせながら自分の手を握ってブンブンと振り回す。

一体、この子に何があつたんだ。

「ちよつ、すずかちゃん。落ち着いて!」

「こんな事落ち着いていられないよ!!? 外なる神だよ! 旧神だよ!! けん君すごい! 私よりずつと化け物なんだ!!」

褒めるのか貶すのかどつちかにして貰えませんかねえ!

「この子、物凄く混乱してらっしやる！」

「忍さん、どうやらすずかちゃんはお疲れのようだ。お休みさせてあげてください」

「え、ええ。……堅一君、君がどういう存在かは深く考えないようにするわ。今度本を貸してあげるから読んでおいて」

「? 分かりましたけど、内容は?」

「うわー、お姉ちゃん! すごいよけん君!」

すずかちゃんの肩を抱きながら話し合いをしていた大広間の扉の前で、忍さんは申し訳なさそうに、一冊の本の題名を言った。

「……クトウルフハンドブック」

「うわあ、もう結構です。自分で調べます」

聞きたくなかった単語を聞いて、自分はより一層将来が不安になるのであった。

第十五話

月村家の秘密を共有した自分達。

また、はやてちゃんの一人暮らしも共有され、ついでに自分も人間じゃない事をカミングアウトする事となった。

人外との遭遇率が高い街、海鳴市。ホントに大丈夫かこの街……。



「んん〜つ、と。おはようはやてちゃん、朝早いね」

「おはようさん、堅一君。みんなお寝坊さんやな？ さつきファリンさんが来て、もうす

ぐ朝ぐはんやて」

「昨日あんだだけ布団の中で喋っていればね」

波乱の幕開けをした温泉旅行2日目。

昨日あの後正気を取り戻したすずかちゃんも交えての宴会から、子供達は大部屋で自

然に寝付くまで話をしていた。

すずかちやん家のペットやアリサちゃん家の犬、なのはちゃんは何故かユーノの生態に、フェイトはアルフの事。

それをニコニコしながらはやてちゃんが聞いて、今度アリサちゃんの家泊まりがけで犬をモフモフしに行く事になった所で、自分は寝てしまった。

あの後どうなったのかは判らないが、みんなぐっすり寝ている事から楽しく話していたんだろうと思う。

それはそうと、アリサちゃんがユーノを握り潰してしまいそうなので、掌をやんわり解してユーノを開放してやる。

「ううくん……はっ！ あ、堅一」

「よう。どんな夢見てた」

「発掘作業中、土砂崩れに巻き込まれて潰される夢……」

随分と爽快な夢だったらしい。

ユーノの事は置いておいて、少々寝相が大変な事になっているみんなを起こすことにしよう。

「おーい、みんな起きて。そろそろ朝ごはんだよ」

「んんんむ、もうちよつと……」

「お約束の文句をありがとう、アリサちゃん」

モニヨモニヨと布団を抱きしめながら言うアリサちゃんに苦笑を浮かべながら、優しく揺すりながら起こす。

今日はきつと、良い旅行日和のはずだ。



「おかーをこーえーゆーこーよー、くちーぶえーふきつーつー♪」

「ご機嫌だね、はやてちゃん」

「昨日はなんやかんやで散歩できへんかったからな。今日こそウォーキングコース制覇やー！」

今日は自分がはやてちゃんを押して進む。道いっぱいの子供達で広がって、喋りながら景色を楽しむお散歩。木々に囲まれたコースはとても空気が澄んでいて呼吸をするのも気持ちよく感じる。

「あ、見て。湯気が出てる」

「ホント。きつと温泉があるのね」

すずかちゃんが指さした山間を見て感心するアリサちゃん。なるほど、確かに温泉

の、硫黄の香りがする。

「すごいや温泉卵食うてへんなあ」

「散歩が終わったからお土産屋さんとか散策するから、その時食べようか。お小遣いは貰ってるから」

「ホンマに！ あーなんかヨダレ出てきたわ」

「食い意地張りすぎでしょ」

「冗談めかして言うはやてちゃんに、思わず吹き出して突っ込む。周りのみんなもアハと楽しそうに笑い、周囲が笑顔で包まれる。

さて、そろそろ散歩も半ばかな、という所まで来た時、足元にチヨロチヨロと小さいのがやって来た。

「あつ、ユーノ君」

「なのは。ジュエルシードを見つけたから、これ」

ユーノはそう言うのと胸に抱えていた青い宝石を掲げる。

「全く、なんだって2日連続でこんなもんが見つかるんだ」

「僕に言われても知らないよ。まあ良かったじゃないか、今回は発動する前に封印できたんだから」

「にやはは、確かにそうだけどね」

意外に辛辣な事を言うユーノに苦笑を浮かべながら、静かにレイジングハートへ収納するののはちゃん。

それを見届けると、ユーノは極々自然に、なのはちゃんの肩へと駆け上った。

「探査魔法を使っただけど、ココら辺にはもう見当たらない。念の為足の早いアルフが目視で見に行ってるから」

「うん、ありがとうユーノくん」

やれやれ、今日こそは平穩無事に過ごせそうだな。

「全く、ジュエルシードなんて、厄介ね」

「まあまあ、アリサちゃん」

「うっ、ごめん」

プンスコと怒りを表すアリサちゃんと、その言葉を聞いて凹み出すユーノ。全く、変に責任感の強い奴だなあ。

まあ、その責任感が無ければ今よりもっと被害が甚大になっていた可能性があるから、そこには感謝しておかないと行けないよな。

「それよりほら、先に進もう。フェイトが景色を見ながらいつの間にか前に行ってる」

「あれ！ いつの間に!?!」

今純粋に旅行を一番楽しんでいるのは、間違いないフェイトだった。



一日の締めめに温泉に浸かり、ゆっくりと身体を解してから、晩御飯。

今日も今日とて大人達はお酒を飲みながら宴会をし、子供は子供で集まって楽しく懐石料理を摘んでいた。

今度は夏に海でも行きたいね、などと話をしていた所で、父さんと士郎さんがやって来る。

「やあ、はやてちゃん。少し話をしていいかな」

「はい、改まってなんですか？」

穏やかに話しかけた士郎さんに笑顔で応じるはやてちゃん。

士郎さんと父さんは、はやてちゃんの対面に座ると、静かに話し始めた。

「実はね。はやてちゃんの事を、二人で話し合っただ。その、グレアム小父さんには悪いとは思いますが、一緒に暮らす大人が必要なんじゃないかと思ってね」

グレアム小父さんとは、はやてちゃんが一人暮らしをしているという話の中で出た、資産管理や援助を行なってくれている、はやてちゃんの両親の知人、という人。

何でもイギリスに住んでいるらしく、一度だけ直接会った事はあるらしいが、その後

は手紙だけでやり取りをしているのだそうだ。

士郎さんの言葉にはやてちゃんの表情が若干固くなる。

「まあ、急にどうしようという訳ではないんだ。ただ、我々は君の境遇を知って、何とか助けになれないかと思っている。それだけは分かつて欲しい」

「それは……はい。有難い事です」

「はやてちゃんが今暮らしている家は、ご両親と過ごしていた家だろう。大事な家を引き払え、何てことも思っていないし、施設に入れるなど以ての外だ」

「だが子供が一人暮らしなんてえのは危ないし、何が起こるか分かったもんじゃねえ。だろ？」

士郎さんと父さんの言葉に、黙って頷くはやてちゃん。

父さんはその様子を見つめると、自分の膝をポンと叩いた。

「ずつとつて訳じゃねえ。二日に一遍でいいんだ、俺の家で過ごしてくれ。ウチなら翔子もずつと家に居るし、俺だつて敷地内の整骨院に居る。掛かり付けの病院に送ることもできるし、何かあつた時はすぐ対応できる」

「えっ、でも……」迷惑じゃ

父さんの言葉に、遠慮がちにそう呟いたはやてちゃんだが、父さんは今度は膝をバシッと強めに叩くと一喝。

「バカヤロウ！ 子供がそんな事考えるもんじゃねえ！ 子供は迷惑をかけるもんだ。俺達大人に、もつと甘えていいんだよ！」

厳しくも有り、優しくも有る父さんの言葉。

はやてちゃんは身体をビクリと震わせた後、静かに、涙を零した。

「父さん……」

「えっ、いや、そ、そんな目で見るな。くそっ、まいったな」

「ちがつ、その、私、叱られるのが親以外でなくて、それで、なんやようわからんけど、うれしうて」

はやてちゃんの言葉に、父さんと土郎さんが、少し苦い顔をする。

自分にもその理由は分かる。はやてちゃんの周囲に、どれだけ長い間大人が居なかったのかがありありと分かる言葉だった。

この年頃の子供で孤独を知り、日々を無味に過ごす事の虚しさを理解してしまっている、その言葉の意味に重いものを感じずにはいられない。

父さんは頭をガシガシと搔くと、その手をはやてちゃんの頭へポンと乗せた。

「まあ、なんだ。ウチに来れば悪い事すりや叱るし、良い事すりや褒めてやれる。同情とかじゃねえ、子供は甘えるもんなんだよ。分かったか？」

「はい、はい……うう、うわあーんっ!!」

頭を撫でる父さんの言葉に、とうとうはやてちゃんは、大泣きしてしまった。



明けて翌日。

温泉旅行も最後、朝にみんなでゆつたりと温泉に浸かってから、お土産屋さんを散策。「折角だし、こういうバスタオルとか買っていこうかな」

「あ、いいねそれ。高いものじゃないし、記念にみんなで買っていこうよ」

でかでかと海鳴温泉の名前が入ったタオルをみんなで購入したり、温泉まんじゅうやら温泉卵、美肌効果のある温泉の素などを買って、帰宅の途に着く。

今日は日曜日なので、明日は学校だ。そう考えると若干憂鬱にはなるが、学校では今日とはまた違う環境で皆に逢えるからそれが楽しみでもある。

都市部に帰ってきて解散した自分達中田家は、一路はやてちゃんの家に。今日から早速、はやてちゃんの定期的なお泊りを開始してしまおうという事である。

はやてちゃん本人としても旅行の後には一人寂しく過ごすのは嫌だったらしく乗り気であり、「堅一君家にお泊りや〜」とはしゃいでくれている。

今夜は綾子ちゃん、翔子さんと三人川の字で寝るらしい。雅俊さんが少し哀れだが致

し方なし。涙を呑んでもらおう。

はやてちゃんの家は話に聞いた通りご両親が残してくれていた一軒家で、一般家庭であればそれなりの大きさの物件である。

外見も小綺麗に維持されているが、庭周辺の雑草なんかは生えたままであったり、やはりハンデのあるはやてちゃん一人では難しい手入れなんかはされていないのが見受けられる。

玄関からスロープがちゃんと造られており、はやてちゃんが自身のハンデと向き合って生活している様子が伺える。

「汚い所やけど、あがって待つとって下さい」

「いやいや、十分綺麗だよ」

「私手伝うから、おじいちゃん達はそっちで待つてね」

「宜しくお願いします」

自分達を広間へと促してから、はやてちゃんと翔子さんがお泊りの準備の为一階奥の部屋へと移動していく。

広間にはソファがあり、大きなテレビと食器棚やダイニングテーブルなど、今時の一般家庭らしい造りだ。

自分達の居住スペースが純和風なので、高町家もそうだがこういう洋風に造つてある

部屋はとても興味が惹かれる。フローリングって畳とは違う魅力があるよね。

父さんと二人、ソファに腰掛け待つ事暫し、膝の上に鞆を載せたはやてちゃんを押して、翔子さんがやって来た。

「準備OK。行けるわよ」

「今日は宜しくお願ひします」

「おう。じゃあ行くか」

よっこいしよとジジ臭くソファから立ち上がった父に釣られて自分もよっこいしよと立ち上がる。

さて玄関へ行こうと思った所で、ふとはやてちゃんの膝上、鞆の上に置かれた一本の本が目についた。

「あれ、はやてちゃんそれは？」

「ああこれ？ えろろ昔の事やからわからんけど、いつの間にか持つとったもんやねん。綺麗やろ、中身見たことないんやけどな」

鞆の上には、鎖で縛られたような装飾の大きな本が一冊。何だか判らないがそれが気になっている自分がつくと同時に、腕にいる相棒が声を出した。

《相棒。そちらの本ですが、どうやら魔装具のようです》

「……………マジか」

「え、なんて?」

《私と同じような、魔力行使用の兵装だという事です》

思わず唾然として、はやてちゃんと二人で見つめ合う。

何という事でしょう。はやてちゃんは疾うの昔に、魔法関係と関わりがあったのでした。

「……じよ、冗談やろ?」

アハハ、と乾いた笑いを浮かべながら冷や汗混じりに言うはやてちゃんだが、ところがどっこい。これが現実です。

「自分でも分かる。それは魔法関係の奴だよ」

「……………疾うの昔に、関わりがあったつちゆうこつちやね。アハハハ……ハア」

「父さん、予定変更。はやてちゃんの荷物だけ持って帰っておいて」

「今から行くのか?」

「うん、高町さん家に。心配し過ぎるつて事は無いと思うんだ、はやてちゃんの状態を鑑みて」

「だな。分かった、嬢ちゃん、鞆だけ寄越してくれ」

「宜しく願います。堅一君も、よろしくな」

「自分じゃないんだけどね。フェイトの母親にお願いする事になるから」

自分の言葉に膝の上の本を眺めながら、はやてちゃんは再び溜息を零した。



はやてちゃんと二人、はやてちゃんの家から歩くこと数分で高町家に到着。携帯で話
はしてあるので庭の方でなのはちゃんとユーノが待っていたので声をかける。

「や、旅行帰りなのにごめんね」

「ううん、大丈夫。それよりけんちゃん、その本がはやてちゃんのもの？」

「私の持ったやつなんやけど……」

「うん、間違いない。デバイスだね、これは」

なのはちゃんの肩から本の上へとジャンプして飛び乗ったユーノが前足でツンツン
と突きながら答える。自分達より詳しいユーノが見て間違いないという事は、やはり思
い違いという事は無いようだ。

その事実をやっぱりかあと力なく応えるはやてちゃんの顔は、さつきから苦笑いだ。

それもあるかもしれないながら、自分達は、ユーノの転送魔法で時の庭園へと降り
立った。

「ふわあ、ホンマに瞬間移動しよる。すごいなあ」

「ユーノはこういう魔法得意だからな。自分もなのはちゃんにもできんよ」

初めての魔法体験にワクワクしたはやてちゃんキラキラとした瞳で小動物を眺める。どこか自慢気に歩くユーノの姿は、どこか滑稽だった。

既に念話である程度の概要は伝えてあるので何らかの準備を行なってくれているだろうと思いい、いつもの大部屋、プレシアさんの執務室へとお邪魔する。

「失礼しまーす」

「いらつしやい、待ってたわよ。初めまして、八神はやてさん。フェイトとアリシアの母の、プレシアです」

「あつ、はじめまして。この度はご迷惑をおかけして」

「いいのよ、それは」

物腰柔らかかに微笑むプレシアさんの背後で、フェイトとアリシアがやつほーと笑顔で浮かべる。そしてその背後で、リニスとリリナさんが何やら作業をしていた。

まあ今は関係無いのかなと思いつつ、話を促す。

「そうそう。早速だけどその本、見せて貰えるかしら」

「あ、はい。これなんですけど……」

プレシアさんははやてちゃんから本を受け取り、表を眺め、ひっくり返して裏面を眺めてから呟いた。

「……やっぱりそうね。リリナさん、これ解析できるかしら？」

「まっかせて。ハズラットの叡智の結晶である私の解析機器に不可能はありません！」

何やら車椅子姿ながら張り切ったリリナさんに笑顔で本を差し出すと、リリナさんは嬉々として受け取り、何か台座のようなものに本を置く。

「よし、じゃあ今から簡単に解析かけちゃうから。その間話でもしてて」

そう言うと、宙に浮かび上がったキータッチに流れるように指を踊らせ始める。なるほど、確かに凄い技だ。

この解析が終われば何か分かるのかな、と思っていたが、プレシアさん自身で、アレが何なのかは知っているそうさ。

「昔、アリスアの治療に使えないかと思って探したこともあるものなのよ。資料データは持っているわ」

プレシアさんがそう言いつつ宙空に指を振ると、いくつものウィンドウが出てくる。

中には画像データもあるが、雰囲気からして何やらきな臭い感じがしてならない。

「あの本は『闇の書』と呼ばれる、持ち主の願いを叶えると言われているロストログアよ。但しジュエルシードとは違い、持ち主は本に選ばれた人間のみ。それが」

「今は、私っちゅう事ですか？」

「そう。そして……そうね。少し嫌な話になるけれど、覚悟は良い？」

チラリ、と視線を向けるプレシアさんの言葉に、はやてちゃんはゴクリと唾を大きく飲み込んだ後、フウと一息ついた。

「結局、聞かへんと分かん事やし。聞きます」

「そう、強いわね。簡単に言えば、持ち主の願いが叶うといった事は無いわ」

そう言うのと、プレシアさんは一枚の画像を大きく表示する。

そこには、荒れ果てた世界に存在する、一つの人影が浮かんでいた。

「これは、恐らく闇の書が完成した際に現れる書に存在する管理人格、と言われているわ。闇の書は他者、或いは魔法生物から魔力を蒐集し、魔力を貯める事で初めて力が顕現する。でもそうなった場合、持ち主は闇の書に取り込まれて、世界を無差別に滅ぼして死ぬ事になるわ」

死ぬ、という単語にははやてちゃんの身体がビクリと震える。余り想像したく事態ではある。自分のははやてちゃんの肩に静かに手を置き、なのはちゃんがその掌をギュツと掴んだ。

「あかん、私どうしょ……」

「大丈夫、大丈夫だよはやてちゃん」

「何とかかりますよね、プレシアさん」

自分となのはちゃんの言葉に、プレシアさんは淡い笑顔を浮かべて答えてくれた。

「ええ、何とかする為に私達も協力するわ。その為にも今解析して、何が有効か対策を練っているの。リリナさん、どうかしら？」

「ちよつと中身まで見るのは無理かな、今は。防壁と攻勢の防御プログラムがあるみたいなんだけど、別個のシステムで動いてるみたい。ただ、今現在もこの本がはやてちゃんの魔製結晶に干渉してるのは分かった」

「ええと、どういう事ですか？」

はやてちゃんの言葉に、リリナさんが笑顔で応える。

「この本とあなたが繋がってて、もしかしたらその足も、この本を何とかすれば治るかもしれないって事」

「ホンマですか!？」

「うん、恐らくね。侵食型の干渉だから、肉体にも影響を与えていると思うの。その足は麻痺みたいな感じでしょ。それに、多分時が来たらこの本が自動起動して、何らかのアクションを起こすと思うんだよね。他者から魔力を蒐集する為の何らかの」

「恐らくは、これ。ヴォルケンリッターと呼ばれる四人の戦士ね。闇の書と同時に確認される、古代ベルカの騎士を模した魔導プログラム体よ。この四人が、時が来たらはやてちゃんの前に姿を表すわ」

プレシアさんがそう言うと、一枚の画像を再び大きく表示する。画像には確かに、臃気ながら四体の人影が見て取れた。この四人が現れた時、はやてちゃんの何かが始まるという事か。

横目ではやてちゃんを見ると、何やら目を輝かせている。

「四人かあ、洗濯とか大変そうやな。あ、食事の用意もや」

「心配するのはそつちか」

「げ、現実的だね。はやてちゃん」

何とも生々しい想像に思わず苦笑する。

「ともかく、このヴォルケンリッター達が出てこないと言えないみただいだから。

その時には私達に相談してね」

「はい、ご迷惑かけますが宜しく願います」

こうして、はやてちゃんと闇の書を巡る事情が、始まったのだった。

まだ、ジュエルシードすら片付いていないのに。

第十六話

はやてちゃんの居住の話から一転、唐突に突き出されたはやてちゃんの真実。

闇の書というロストログアが齎す非常な事実、健気に立ち向かうしかないはやてちゃん。

本当に、自分を含め周辺は厄介事が多すぎます。



闇の書の件は、未だアリサちゃん、すずかちゃんには話さないようにとのお達しと共に、現状はこれ以上でできる事は無いという事でその日は帰宅した。

明けて翌日からは改めて高町家、テストロッサ家、中田家、バニングス家によるジュエルシードの探索が行われていた。

月村家？ 彼処も探索してはいるが、目的が「被害が出ないようにする」じゃなく「忍さんの実験の為」になってるので除外しておこう。すずかちゃんが何度も謝っていた

のが痛ましくて涙がでる。

探索をしながら、自分もなのはちちゃんも、フェイトも自身の魔法に関する知識、技術双方を向上させるべく努力を積んでいる訳だが。

そんな折、念話にて呼び出された自分は、時の庭園へなのはちちゃんとユーノ、そして桃子さんと共にやって来ていた。

で、話というのが。

「フェイトに向けて魔法が撃てない？」

「ええ。模擬戦を度々申し込まれているのだけれどね……」

ハア、と溜息と共に吐き出したプレシアさんは、どこか疲れた表情をしていた。

いきなり何かと思えば。そんな事を相談されても、正直困ってしまうのだが。

「あの、大丈夫ですか？」

「ええ、ごめんなさい。ちよつと自分のメンタルが思ったより弱かった事に落ち込んでしまっただけ」

なのはちちゃんの言葉に乾いた笑みを浮かべながら応えるプレシアさん。

自分が豆腐メンタルだった事に落ち込んでしまっているのか。それにしても何故？

と思っていたら、桃子さんがウンウンと一人で納得していた。

「そりゃそうよ。模擬戦だろうと何も悪いことをしていないのに、母親が娘に手を出せ

る訳が無いわ」

「そうなのよねえ。それに以前の事もあつて、また昔のような自分に戻つてしまふんじゃないかという思いが頭を駆け巡るわ」

「ああ、そうよねえ。そこから辺複雑よね、プレシア」

「わかる？　桃子さん」

あれよあれよという間に主婦の井戸端ワールドが形成されてしまった。既に室内で喋っているのはプレシアさんと桃子さんの二人だけとなり、お茶を飲みながらウンウン頷きつつ止まらない口を眺めているだけとなった自分達は、一体ここへ何しに来たのだろうか。

もう桃子さんに任せればいいんじゃないかと思つていた所に、件のフェイトの使い魔であるアルフが部屋へとやつて来た。

「プレシアと呼ばれてあんた達が来たつて聞いたんだけど、なんだい。忙しかったかい？」

「自分となのはちゃんとは別に。忙しいのはプレシアさんと桃子さんの口だ」

「にやはは……。二人とも、さつきからずっと止まらないの」

「なんだ、暇つて事か」

アルフが来たというのにも関わらず、二人は相変わらずお喋りを続けている訳で。そ

りや入ってきたアルフも呆れるわ。

という事で、自分となのはちゃんはアルフに連れられて、フェイトが魔法の訓練をしているという時の庭園中庭へと来たのだが。

そこに映つたのは、地面にへたっているバリアジャケット姿のフェイトと、その前で腕を腰に当てているリニスの姿。

「フェイト、少し休憩にしましょう。お友達も来たようですよ」

「は、はい……」

ゼエハアと完全に肩で息をしているフェイト。顔も汗に塗れて何とも訓練の過酷さが伺えるものである。

その姿に、使い魔であるアルフは冷や汗混じりに、畏敬を込めた視線をリニスへと向けていた。

「リニス、あんた相変わらずだね」

「アルフ、丁度良いです。もう少し身体を動かしたかった所なんですよ」

「口出すんじゃないか!!」

必死に抵抗しようとするアルフをまあまあいいからと笑顔で引きずってどこかへと連れて行くリニス。フェイトオッ！なんて叫び声が聞こえているが、当のフェイトは完全にグロッキーで地面に倒れ込んでいます。

「地面が……冷たくて、気持ちいい……」

「その気持は凄く分かるなあ。ヘトヘトの時は特にな」

「け、けんちゃんもこうなるまで訓練した事あるの!？」

「しよつちゆうだよ」

わ、私も頑張らなくちゃかな? なんて肩に乗せたユーノに相談しているのはちゃんは、どういう訓練をしているんだろうか。

少し気になったので聞いてみると、余り身体を動かす事はしていないのだとか。

「私は遠距離魔法使いだから。避ける事とかの訓練より、如何に相手の行動範囲を狭めて自分の攻撃を当てるかっていう内容でやってるよ」

「なるほど。確かにそれは理に適ってるし、なのはちゃんには丁度良いのかもしれないな」

特性を鑑みれば確かにその訓練方法が一番なのはちゃんに合ってるだろうし、今後も非常に重要になってくる物だと思う。

自分やフェイトのように近接寄りの人間であれば近づく為の体捌きなんかを訓練する訳だが、なのはちゃんに必要なのは離れる為の魔法の特訓なのだろう。

だが実際、近づかれてしまったらどうするのだろうか。それを言った所で、なのはちゃんは指を左右に振った。

「ふふん、それを考えないのはじゃないの。ちゃんと対応策はあるんだよ」

「へえ、どんな？」

「デイバインシューターをばら撒いて炸裂させる」

物凄く物騒だった。確かにそれは相手の足を止められるだろう。自分が相手したと想定して、なのはちゃんは移動しながらでもデイバインシューターを出せるから、追跡していたとしても前方でシューターをばら撒かれて、それが目前で炸裂したら足を止めるか迂回するしか無いと思われる。

うむ、悪い手段ではあるが有効な手段だ。だが、しかし。

「なんか、魔法少女のイメージから凄くかけ離れたやり方だね」

「うにゃあ！ やっぱり！ やっぱりけんちゃんもそう思うの!？」

「自覚あったんだ」

「うん。なんか、レイジングハートとシミュレーションしてこういう手段で、とか打開策はこう、って考えてると、どうしてもそういう物騒な手段になっちゃうんだよね……」

《マスター、それが有効な手段であるなら躊躇する必要はありません》

物騒の大本はデバイスか。だがしかし言ってる事には一理ある訳で。うむむ……。

「まあ……程々に、ね」

「引いてる！ けんちゃんが引いてる!!」

「引いてない引いてない」

「嘘だよ！ 絶対引いてるの！ 私だってこんな手段あまり使いたくないんだよお
!!」

なんだかどンドン魔法少女のイメージから離れていくなあと、少し遠くを見つめたく
なっただけなのですよ。

本当に、ね。



地面にへたれていたフェイトが漸く復活し、三人でそのまま中庭で駄弁る事数分。い
つの間にか、模擬戦をする事になりました。

「お互いの現状を知るにはいいんじゃないかなって」

「確かにそうだね、フェイトちゃん」

やる気を出したフェイトと、乗り気なのはちゃん。それにしてもフェイトは先程ま
でへたれてた割に元気だな。

「じゃあ僕が結界を貼るから。誰からやる?」

「じゃあ私と、けんちゃんかな。フェイトちゃんはもうちょっと休んでて」

「うん、分かった」

おっと、いつの間にか自分もやる事に決まってしまうた。まあいいか、と思いつつ手首をコキツと鳴らす。

「まさか、なのはちちゃんと戦うような事になる日が来るとは」

「にやはは、確かに。先月までじゃ想像つかなかった事だよね」

セットアップしたレイジンググハートをくるりと回して言うなのはちちゃんの言葉に同意だ。本当に、先月までじゃ考えつかかなかった状況に今置かれている訳で。

「思えば遠くへ来たもんだなあ……」

「けんちゃん、お兄ちゃんみたいになってるよ」

失礼な、恭也さん程老成していませんよ自分は。

「ステイール、装着」

《了解、装着》

パシユンと衣服が輝きいつもの戦闘服へと着替える。これでお互い準備万端。向い合つて地面に立ち、あとは合図を待つのみ。

「なのは、堅一、頑張つて」

「二人とも、怪我しないようにね。それじゃ、開始！」

ユーノの声と共に、自分は一気に前へと踏み込み、なのはちゃんは後方上空へと退避

する。

「やっぱり初手はそうくるか」

「行くよ。デイバインシュート!」

宙から放たれる光の弾が4つ、それぞれ不規則な軌道を描きつつ自分へと迫る。こういうのを見ると、羨ましくなる。魔法っぽい。

自分はその弾を手で弾き、回避しながら上空へと上がりまたもやなのはちゃんへと迫る。だがそれを待ち構えていたように、なのはちゃんから砲撃が。

「デイバイーン、バスター!」

ゴウ、と音と共に放たれた砲撃魔法を範囲から少し大き目に回避行動を取りつつ同時に接近、拳の一撃を当てに行く。

「セエツ!」

「わっ、わっ!!」

急上昇で回避したなのはちゃん。同時に置き土産でデイバインシューターを瞬時に作って炸裂させて行く悪い手口を本当に実行してくれた。

爆発を回避する為横へとスライドし、自分はそのまま足場を形成、そこへと立って拳を引き絞る。

「行くよ、なのはちゃん」

「え、もしかして!」

中距離程度の位置で拳を引き絞った自分に何か気付いたのか、射線から慌てて退避する。だが、この魔法は小回りが効きやすいのである。

「シァア!」

掛け声と共に拳を撃ち出し、魔力弾を一直線に放つ。危なげなく回避したのはちゃんだが、魔力弾は一発だけじゃないのだ。

「オラオラオラオラア!!」

「れ、連射で来たあ!」

「腕は左右にあるんだよ、なのはちゃん!」

両腕を絶え間なく突き、魔力弾を雨あられと撃ち出す。威力自体は低いものだが、手数で押し切る事が可能だろう。

と思っていたら、必死に回避行動を取っていたなのはちゃんが、杖を突き出した。

「この、いい加減にするのっ!」

《ディバインバスター》

バシユーン、と光の帯が発射され、自分が撃ち出した魔力弾がほとんど、ものの見事に掻き消えた。

まさか一発で今の状況を打ち破るとは。というか、いくら単発威力が低めだからと言

え相当数あったものを、そんな簡単にかき消してしまうとは。

「なのは……。君の砲撃の才能が、少し怖いよ」

「私、今度やったら勝てないかもしれない」

「ユーノ君もフェイトちゃんもいきなり失礼なのっ!!」

魔力弾を簡単に打ち破る砲撃の威力に若干顔を青ざめるユーノと、以前戦った時との差を思い出しか少しブルツと震えるフェイト。

そりゃあもう、魔法の尽くを砲撃一発で打ち破られる想像をしてしまうのはしょうがない訳で。

これはやつぱり遠距離戦ではどう考えても勝ち目は無いなと踏んだ自分は、今まで以上に気合を入れ、空を滑空した。

「いくよっ！　なのはちゃん！」

「けんちゃん！　勝負なの！」

そして撃ち出されるデイバインシューターを魔力弾で相殺し、距離を詰める。詰めたと思ったら砲撃を狙い撃ちされ回避行動、また詰める作業を繰り返しつつ、魔力弾で牽制。

一直線に詰める訳でも無く、フェイントを織り交ぜながら詰めている訳だが、中々どうしてきっちり把握して撃ってくる。なのはちゃん、厄介だ。

「バスターー！」

「のおおっ！」

「シュート!!」

「せええっ！」

回避し回避され、撃ち合いの続く中、一発のデイバインバスターを回避した所で、自分が一気に距離を詰めた。

「おりゃあー！」

「わあっ！」

ガン、という音と共に右腕がプロテクションで阻まれる。だが、なのはちゃんの足が止まった。今こそ好機！

「魔法展開！」

《拘束魔法、展開します》

「わわっ」

自分の言葉と共に魔法が展開され、足を止めた自分となのはちゃんの四方、上下を魔法の障壁が取り囲む。

ガチンと完全に障壁が接続され、自分達の周囲に、四角い小さな空間が形成された。それを確認し、突き出していた拳を引く。

「さて、なのはちゃん……」

「ふえっ？」

「この狭い空間で、今までのように回避できるかな？」

言われ、周囲を見渡したなのはちゃんだが。本当に狭い、なのはちゃんの部屋よりも狭いこの空間内での自由行動は、まず難しいだろう。

苦い顔をしたなのはちゃんは、次の瞬間乾いた笑みを浮かべていた。

「にやはは……無理、です」

「だよね。じゃあ自分の勝ちでいいかな」

「うう〜！ 悔しいの!!」

ふう、と息をつきながら言った自分の目の前で、なのはちゃんは本当に悔しそうに地団駄を踏んだ。



バチンバチンと、上空を凄い速度で動く桃色と金色の光を眺めながら、自分は芝生の上に寝転がり途中リニスさんが持ってきたお菓子を頂戴していた。

暇を見計らってシナモン味のラスクを作ったとの事で、甘さも控えめでシナモンの風

味がとても心地よい。一緒に見上げているユーノもカリカリと食っている。

それにしても、もう20分程はあぁしてバチバチ空中で撃ち合っている。お互い一歩も譲らず、隙を突いては突き返しての繰り返しである。

だがしかし、そろそろ集中力が切れる頃なんじゃないかなあと思う。

「堅一は、どつちが勝つと思う？」

「フェイト」

同じような事を考えていたのか、ラスクを齧つてたユーノが唐突に問いかけ、自分は間髪入れずに答えを出す。

良く考えなくとも分かる事ではある。現状、模擬戦という事である程度力を抜いた本気という奴で戦わないといけない訳だが、そうなると魔法に対する理解度、そして練習量が決め手になってくると思う。相性とかを抜きにして。

その練習量、理解度は圧倒的にフェイトに分があり、また実戦形式の模擬戦に慣れていないと思われるのはちゃんには、緊張、集中力の維持がフェイトよりも下であると思われる。

なので自分は、フェイトが勝つと予想。というか、今丁度集中が一瞬途切れたのはちゃんの隙を突いてフェイトがバルディッシュのサイズフォームの刃を突き付けた所である。

まあ順当だろうな。そんな感想を浮かべながら、自分は身体についた芝生を払いながら地面に降りてきた二人に近づく。

「お疲れ様。今リニスさんがお茶入れてるからプレシアさんの所へ来てくれて」

「ありがとう、堅一。それじゃあ行こう、なのは」

「また負けた……二連敗……」

「経験の差だよ。フェイトは今まで訓練してたんだし、自分も自宅で常に鍛錬と試合をしていたんだから」

見るからに落ち込むのはちゃんの肩をポンポンと叩いて移動を促すと、「次は絶対勝つてやるの！」と意気込む。

いつの間に、こんなに活発というか、負けず嫌いな子になっていましたか、なのはちゃん。

次やった時はどうなるか、また新しい呪文とかを編み出してリベンジとなるのだろうか。自分はとりあえずまだ負けるつもりはないのでいつでもかかってくれればいいと思う。振り返ちにくれるわ、ぬっはっは。

なんて下らない事を考えつつなのはちゃんをフェイトにけしかける。

「自分よりはフェイトと一緒に訓練したほうが魔法の訓練にはなると思うよ。自分は山田流の延長上に魔法がある感じだし」

「確かにそうだね。じゃあフェイトちゃん、今度から一緒に練習しよう！」

「うん、私としても相手が増えるのは有難いから」

「やった！　じゃあ二日に一日ぐらい、学校終わった後でね！」

なんともすんなりとお互い納得して日々の訓練が決まる。それでいいのか少女よ、二日に一遍戦う日々とか。向上心があるのは良い事なのだろうが、それが戦闘行為の練習というのが何とも言い難いなあ。

ああでも、美由希さんもなのはちちゃんと変わらず幼い頃から御神流を叩きこまれていたのだから、高町家はそれで良いのかもしれない。

戦闘一家に生まれ、今まで縁の無かつた事にどつぶり浸かり始めたなのはちちゃんの先行きに幸あれと願いながら、プレシアさんの執務室へと三人で入る。

中では相変わらずお喋りを続けているプレシアさんと桃子さん、それと車椅子のリリナさんにアリシア、二人を連れて来たのだろうアルフト、紅茶を静かに足しているリナスの姿があった。

「あつ、フェイト！　なのはと堅一も！」

「こんにちは、二人とも」

元気に声をかけてきたアリシアと、笑顔で自分達を迎えてくれるリリナさん。それに応えながら、予め用意されていた空白となつているリリナさんとアリシアの間の席へと

着席する。

アリスアの隣はフェイトが、真ん中になのはちゃんを置いて自分。自分の隣にはリリナさん。この配置に、自分は少し戸惑いを覚える。

と言うのも、リリナさんが起きてから今まで、自分はリリナさんとともに言葉を交わした事が数える程しか無いのである。

今は身体の事がありリハビリに精を出している訳だが、リハビリを始める前にほんの少し自分の事を聞いただけで、それ以外特に言う事も聞く事も無く、今に至っている。

正直言うと、母ではない、だが他人でも無いこの人の事をどう扱っていいものか、目下考え中なのである。

そんな態度が表に出ていたのか。隣に座っていたリリナさんがクスツと笑う。

「ケン君、難しい顔してる」

「……ケン君で、自分の事か」

「あれ、駄目だったかな。嫌ならケンイチ君とでも呼ぶけど」

「いえ、そういう事じゃないです。好きに呼んで下さい」

「ありがとう、ケン君」

鈴が鳴るような声で、笑顔を振りまいて言うリリナさんに、やっぱり自分は戸惑ってしまう。本当に、何ともしずらい関係だ。

「まあ、しようがないわよね。複雑な関係ではあるし」

「そうですね、これがもう少し分かりやすい間柄であれば良かったんですけど」

「こればかりはね。本来、私が今こうして居る事だけでも奇跡のようなものだし。ケン君もそういう意味では同じかな。咄嗟の事だったから、下手をしていたら宇宙空間に放り出されてそのまま、何て事もあつただろうし」

「ああ、ランダム転送という奴ですね。そういう意味では色々奇跡が重なった上での、この不思議な関係という訳か」

本当に、奇跡が重なっている。自分でもまさか製造者である人物とこうして生きてお茶を飲んでいるとは先月までは思っていなかった訳で。

嬉しいとも言いがらだが、嫌である訳が無い現状を、どう表現すれば良いのだろうか。「私も正直ね、戸惑ってるの。自分が育てた訳でもない、けれど自分が生み出して、知らない所で成長していた君の事をどう思えばいいのか」

「立場は違えど考える事は同じ、か」

「そうね。けれど初めて見た時は驚いた。記憶にあるあの子とそっくりな子が目の前に居たんだもの。自分で造つておいて驚いちゃった」

「ああ、それは確かに。ていうか、あの子？」

「そう、あの子。アブドウルは私が遺伝子を培養して製造したから、君とほとんど同じよ

うな子。そして、とても大事な人」

アブドウル、というのはリリナさんが自分の母体である生体兵器に名付けた名前。ハズラットでは偉大なる始祖と同じ名前であると聞いている。

しかし、大事な人、か。

「愛してたんですね」

「愛してなかったら君を生み出したりしなかったわ。自分のエゴの為に、彼が幸せになれなかった分幸せにしようと思って造ったのが君だもの」

「ま、その願いは叶ってますよね。少なくとも今は幸せです」

「私の元で、というのが叶わなかったけれどね。それでも幸せならいい。そう思えるわ」
「有難い事です」

笑顔で言うリリナさんに、強い人だと感想を思い浮かべる。エゴで造られたという事は既に聞いているし、そうじゃなかったらクローンなんぞ作らんという事も理解しているし、大いに納得している事である。フェイトという存在を見ていたので余計だ。

だがリリナさんは母親としてではなく、アブドウルを男として愛していた訳だが。

「何ともはや。そこがもう一つ戸惑う理由でもあるんですよ」

「気持ちには分かるわ。君とあの子は違うけど、同じ存在だものね。私も、そこで戸惑ってる」

「どういう意味で？」

「あの子の面影を持つ君を将来愛してしまいそうで」

「また、はつきり言いますね」

「隠したってしようがないもの。君はきつとあの子に負けず劣らず素敵な男性になるわ。そうなった時、きつと私は君を愛する事になる。でも今はまだ早いから、どういふ距離感で居ればいいのか分からないの」

「何とも重たい話をきつぱりと笑顔で言う人だ。そういう意味でもこの人は強いと思わざるを得ない。」

ふと横を見ると、フェイトが真つ赤になりながら、アリシアがワクワクと、なのはちやんが顔を掌で隠しつつも指の隙間からチラチラと、自分達を見ている事に気付いた。

更に見れば、お茶を静かに注いでいたりニスもニコニコ、アルフとユーノはお菓子を食べつつ、プレシアさんと桃子さんはいつの間にかお喋りを止めニヤニヤしながら、自分とリリナさんを見ている。

「いやあ、若いつていいわねえ」

「本当にね。懐かしいわあ私が士郎さんにシュークリームを食べさせた時の事」

「その母親二人、娘さんの目の前で何を言ってるんですか」

ええいこの二人の目の前でこんな話になるとは思わなかったし、こんな事言われると

は思わなかった。今更恥ずかしくなってくる。

思わず顔の温度が上昇した事を感じると、隣のリリナさんがまたもや鈴が鳴るような声で、過激な発言をしてくれた。

「君が素敵な男の子になるの、期待しているからね？」

「勘弁してください」

本当に、勘弁して下さい。もう。

第十七話

プレシアさんのお悩み相談から、何故かなのはちゃん、フェイトとの模擬戦。

自分より魔法っぽい魔法を使う二人だが、使用方法がエグくてやっぱり魔法少女らしくないと思う。

リリナさんのお陰で、また一つ将来が不安になりました。



毎日毎日、魔法の練習をしている訳ではない。ちゃんと休息も必要なのでございませぬ。

という訳で今日はすずかちゃんの家で放課後のお茶会となりました。相変わらずでかい家。

「いらっしやい四人とも」

「お邪魔します」

テラスで優雅なティータイムを楽しんでいると、大学から帰宅したのだろう忍さんがやって来る。傍らには恭也さんも一緒だ。

「恭也さん、いつも一緒にいるんですか」

「そんな訳ないだろう。今日はこの後買い物に行く予定になっているんだ」

「デートって言いなさいよ、もう。恭也はそういう所が足りない」

「お熱いことぞ」

目の前に広がったカップルワールドに思わず紅茶を一口。砂糖を入れていないはずなのにほのかに甘みがあるのはきつと二人の所為である。

そんな姿を見てアリサちゃんとはやてちゃんがキヤーと盛り上がり、すずかちゃんとなのはちゃん少し恥ずかしそう。まあ自分の家族が友人の目の前でイチヤつく光景なんて恥ずかしいわな。

じゃーねーなんて言いながら軽やかに門へと歩いて行く二人の背後でノエルさんとフアリンさんがお辞儀をして見送るのを眺める。ほんと、あの二人はいつでもアツアツだな。

「お姉ちゃん、恭也さんが初恋なんじゃないかなあ。恋人になる前から男の人の話をした事なんて、恭也さん以外ないんだよ」

「初恋が成就した訳や。ええなあ」

「そういう意味ではお兄ちゃんもそうかも。昔からああだし、剣道一筋だったし」

「ああー目に浮かぶわそれ。恭也さん素敵なのに勿体無いわよねえ」

他人の色恋で話が盛り上がるのは女の性なのか。二人の親族から聞く話をはやちやんとアリサちゃんが興味深そうに聞き入る。それにしても、言葉の要所要所に羨ましいという単語が入るのはまだ早いんじゃないかと思うんだが。

「恋人かー。私らはどうなんやろ」

「まだ早いんじゃないかなあ、私達には」

はやてちゃんの言葉にすずかちゃんが控えめな返答をするが、そこにアリサちゃんが食いつく。

「駄目よすずか。そんな事言ったら何時まで経っても相手の一人も出来ないわよ」

「でもアリサちゃん。なのは達にはまだ早いと思うんですけど……」

「そうだよ、アリサちゃん。第一好きな人も居ないんだし」

「むう、それは確かに。でも私達の周囲に居る男って……」

アリサちゃんのその一言で、四人の視線が一斉に自分に向いて思わずティーカップをカチャリと鳴らす。なんだ、何故そこで自分を見る。

「堅一君か……悪い訳やない、というかいんやけど」

「いきなり何言ってるのかなはやてちゃんは」

本当、いきなり何言ってるかなこのお子様は。

「何だろ、少し近すぎるのよねケンは。気安いとか何というか」

「意識した事ないなあ私も」

「けんちゃんのはなののはの大事な幼馴染だよ」

「君達も何言ってるの。ていうか意識されてたら逆に嫌なんですけど」

そういう関係では無いと自分では思っているし、相手から恋愛対象として意識されていると思うと気不味くてしょうがない訳で。丁度リリナさんみたいに。

全く、こういう話をするには未だまだ早いと思うんだよ本当。

「自分達はまだ小学生なんだし、そういうの早いでしょ。今は他人の恋愛眺めて喜んでるだけにしときなさい」

「はぁーい」

「けん君の言う通り、私達にはまだ早いよね」

「せやなあ。今は忍さん達眺めて楽しんでこか」

それつきり、四人娘の恋愛話は流れて忍さん達の話へと移り変わる。というか、忍さんはともかく恭也さんはなのはちゃんに話のネタにされていると知ったらどう思うのかねえ。

妹を可愛がっている恭也さんが少し不憫に思えた。

「っ!!」

知った時の慰め方を少し考えていた所に、感覚を直接貫くような刺激。

なのはちゃんも同じ感覚を捉えたらしく、席を立ち海の方を眺めていた。

「なのはちゃん」

「うん、ジュエルシード。行こうけんちゃん」

自分の言葉に素早く応え、なのはちゃんがレイジングハートを展開する。自分も併せ、ステイールを展開。

「おおっ! 相変わらず凄いな!」

「一度見たつきりだものね、温泉で」

「なのはちゃん、けん君。怪我しないでね」

「まともな応援の言葉がすずかちゃんだけと言う何とも言えない状況。ていうかアリサちゃんとはやてちゃんはお気楽すぎるでしょ。」

「じゃあ行つてくる、多分戻つてこれないと思うから」

「アリサちゃん、すずかちゃん、はやてちゃん。また明日ね」

とりあえずの別れの挨拶をして、自分達は空へと飛び立った。



感覚に従い空を飛び、自分達は海鳴臨海公園へと辿り着く。海辺に造られたその公園の中心に、どう考えても不自然な大木が一つ。アレがジュエルシードの化け物なのだろうと思う。

そして、その化け物の正面で、両腕の刀を振るう一人の女子高生。

「お、お姉ちゃん!？」

「あつ、なのは！ 良かったー。私じゃ封印とかそういうの出来ないから助かったよ」

服装からして学校帰りの美由希さんが、超スピードで動きながら襲いかかってくる木の枝をバツサバツサと切り捨てていた。

しかし動くスピードが相変わらず素早いし、斬撃が鋭い。これも日頃の修行の成果なのかと思うと御神流恐るべしと言いたくなる。

「美由希さんが魔法使えたら、ジュエルシードもラクそうだなあ」

「うん、多分。魔法使える私より強いもんお姉ちゃん」

「そんな事より、早く片づけちゃってよ」

いやあ余りにも鮮やかにバツサバツサやってるからこのままでも大丈夫かなとか若干思っちゃいました。トンとひとつ飛び大木から退避した美由希さんの言葉を受けて、まずは自分から突撃。

加速をつけた急降下で大木へと近づき、そのまま蹴りを見舞う。

「セエツ！」

だが、その一撃は目に見えない障壁に阻まれ大木へは傷一つ付けられなかった。

「障壁を張るのか!？」

「うわあ、厄介そう……」

傷一つ付けられなかった事に歯噛みして呻いた言葉に、なのはちゃんが嫌そうな顔で言う。確かに、バリアを張るような相手なんて面倒でしかない。

さてどう対応しようかと考えていたら、自分達の反対側から、金色の刃が回転を伴い大木の障壁へと突っ込んで爆発した。

「フェイトちゃん！」

「ごめん、少し遅くなった」

アルフと共に現れたフェイトが静かになのはちゃんの隣へと降り立つ。

「じゃあ私のほうで結界張るよ」

「頼んだ」

アルフの言葉にお願いし、補助魔法の得意なアルフが結界を張ってくれた。さて、これで周囲の事を気にする必要は無くなった訳だが。

「なんで美由希さん残してんの?」

「あれ、必要無かったかい？ 一緒に戦ってるのかと思っただけだ」

「いや、私はもう傍観してただけなんだけど。まあいいよ、安全な所で見守ってるから勘違いしていたアルフの言葉に美由希さんはアハハと苦笑しながら静かに大木から離れて自分達を見守る。

さて仕切り直してどうしようかなと三人で相談していると、行き着くべき解答へと至った。

「三人いるし、多分押し切れる」

「全力全開のディバインバスターなら大丈夫だと思うの」

「じゃあ自分も、練習の成果を出すかな」

結局、障壁を打ち破る程のパワーでの力押しという採択が降りた。

三人で横に並び、各々準備に入る。

「レイジングハート、ディバインバスターフルパワーでいくよー！」

「バルディッシュ、お願い」

「ステイール、圧縮砲準備」

《了解》

返答と共になのはちゃんは桃色の、フェイトは金色、自分は鈍色の魔力光をチャージして、タイミングを合わせる。

そして一斉に、溜めた魔力を開放した。

「いくよ！ デイバイーン、バスター!!」

「サンダー、スマツシヤー!!」

「魔力圧縮砲、発射あ!!」

ドン、と三つの魔力砲撃が空間を走り、障壁へとぶち当たる。

「ゴオオオオオツ!!」

大木は懸命に砲撃を防御するが、やがて砲撃は障壁をぶち抜き、哀れ大木は叫びながら霞へと消えた。

残ったのは、空間に漂うジュエルシードだけ。

「三人揃うと意外とあっさりだったな」

「うん、結局力押しだったけど」

「にやはは、まあいいんだよ解決すれば」

レイジンググハートにジュエルシードを仕舞いながら言うのはちゃんの言葉に同意して、地上に降り立ち戦闘服を解除する。

学校の制服へと戻った自分となのはちゃん、私服のワンピースとなったフェイトの元に、横から人型のアルフと美由希さん、そして美由希さんの胸に抱えられた小動物が一匹やって来た。

「あれ、ユーノ。いたのか」

「うん、ついさつきね。ごめんなのは、遅れて」

「大丈夫だよユーノ君。解決したんだから」

「そうそう、気にすんな。それより早く帰って晩御飯でも待つか」

さーて帰るぞー。今夜のご飯何かなー。ウチはリニスのポトフと桃子さんから教わった唐揚げだつて。なんて日常会話を楽しみつつ公園を後にしようみんな仲良く歩いていた所で、背後から声がかげられた。

「少し待ってくれないか。時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ」

突然の声にみんなで一斉に振り返り確認すると、そこには黒衣の少年が。

はて、何だつて。

「えつと……自分達に何か？」

「だから、時空管理局執務官だ。今の戦闘に関して、少し話を聞かせて貰えないか」

今の戦闘つて、もしかしてジュエルシードの事見られていたのか。ちよつとヤバいかなと思っていたら、美由希さんの胸に抱えられていた小動物が突然騒ぎ出した。

「時空管理局！ やつと来たんですね！ 僕はユーノ・スクライア、救助要請を出した者です！」

「ああ君がそうか。遅くなつて済まない。今付近の高次空間内に艦船アースラが停泊し

ている。そこで少し事情を聞かせて貰えないか」

「え、それはちよつと」

いきなり喚きだした小動物の事もそうだが、そろそろ晩御飯だし。早く家に帰らないとな。

「いや、申し訳ないがそれでは困るのだが……」

黒衣の少年、クロノと名乗った人物がこちらの反応に微妙に困った表情を浮かべていると、フェレットを抱えた美由希さんが前に出た。

「ちよつと君、いくつ？ 悪戯なら他所でやってくれないかな。この子達は私の妹とお友達で、家に帰らないといけないんだよ」

「いや、だから……」

「それに、いきなり知らない人に声をかけられて付いて行くと思う？ それで、君いくつ？ どのこの小学生かな？」

「しようが……？ 僕は14才だ」

「14!?! うつそ、見えない……」

美由希さんが驚きと共に言った言葉にウンウンと同意する。自分から見ても、彼は自分と同じぐらいか少し上程度にしか見えない。つまり小学生程度だ。

しかし14となると話は変わってくる。美由希さんもそう考えたのか、少し表情を嚴

しくしていた。

「あのね、君。14なら分かるでしょう、いきなり現れた得体の知れない組織を名乗る人間に付いて行く事の危険性が」

「そ、それは……だがしかし……」

「しかしじゃない。それに最近隣町で中学生が小学生の女兒に猥褻行為しようとした事件もあつたんだから。余計付いて行くわけにはいきません！」

「わ、わい……そ、そんなつもりは無いのだが。その、誤解だ！」

「その言葉を信用する根拠が無いよ。もういいよ、なのはもみんなも帰ろう」

美由希さんはそう言うと、自分達の背中を押して公園の出口へと歩き出す。背後ではクロノと名乗った少年がアタフタと慌てているが、こうなつては諦めてもらうしか無いだろう。

自分達は大人しく年長者である美由希さんの言葉に従うのみである。

さて、ところで。

「ユーノ、時空管理局って何だっけ」

「ああー。そういや簡単にしか説明してなかつたかな。帰りながらも、詳しい話をするよ」

なのはちゃんの肩に乗りながら少し自慢気に宣う小動物に、思わず軽くチョップし

た。



翌日。時空管理局という組織に関してユーノからある程度の情報を得た自分達は、学校ですずかちゃん、アリサちゃんにも説明を行った。まあ家のお手伝いさんとか搜索に駆り出してくれていたので事情説明は当然の事である。

二人ともそういう組織が来たのなら今後に関して士郎さん達と話したほうが良いよねと言うので、放課後になってアリサちゃん家の鮫島さんが運転する車で翠屋へと到着。

店内に入ろうとした所で、入り口の札がCLOSEになっっている事に気付いた。

「あれ、今日お店やってるはずなのに。店内のライトついてるし……」

「とりあえず中に入ろう。桃子さん達はいるでしょ」

「うん、そうだね」

入り口に鍵がかかかっていないのを確認し、なのはちゃんを先頭に店内へと入る。

「ただいまー、あれっ?!? 昨日の子!」

「あれ、本当だ」

「なに、知り合い？」

アリサちゃんの言葉に軽く頷きながら移動する。店内ではテーブル席に昨日クロノと名乗った少年と緑髪の女性、茶髪の美由希さん程度の女性が座っていた。そしてその正面に士郎さんと、プレシアさん。そしてテーブルの上にはユーノ。

隣の席では桃子さんがシュークリームを嬉しそうに頬張っているフェイトを眺めてニコニコしていた。

微妙に厳しい表情をしている士郎さんと対照的な桃子さんの姿に何が起こっているのか理解しかねるが、とりあえず自分達は桃子さんとフェイトのいる席へと近づく。

「おかーさん、ただいま」

「あらなのは、おかえり。みんなもいらっしやい」

「お邪魔します」

「それで桃子さん、一体何が？」

「大人の話し合いよ」

桃子さんがそう言うのと、アナタ、と士郎さんへと声をかける。その声に士郎さんはこちらへと顔を向けると、表情を柔らかくした。

「ああなのは、おかえり。みんなもいらっしやい。丁度良い、アリサちゃん、鮫島さんは来ているかい？」

「え？ ええ、今外の車で待つています」

「良かったら店内に入ってもらえるかな。少し話がしたいんだが、今後について」

士郎さんに言われたアリサちゃんは、すぐにメールで表の鮫島さんを呼び出す。メールを送つてからすぐに店内へと入つてきた初老の男性、鮫島さんは頭を下げて挨拶をした。

「これは高町様、一体どのような御用で？」

「お忙しい所申し訳ありません。実はジユエルシードの件で、今後の事を目の前の『時空管理局』と名乗る方々が引き継ぐといった事を言つておりました」

士郎さんがそう言うと、鮫島さんは「ほう」と一瞬目を鋭く光らせた。

「アリサお嬢様、皆様。申し訳ありませんが、ここから先は大人の話し合いですので。桃子様、皆様をよろしくお願いいたします」

「ええ、鮫島さんも宜しく願ひします。さ、みんな。おやつ出すからウチで遊んでみましょう」

桃子さんの言葉に「はい」と元気良く返事を返し、店内を出て一路なのはちやん家へと向かう。背後からユーノが『待つて、置いて行かないで！』と呪詛じみた念話を飛ばしてくるが無視。なのはちやんは律儀に『ごめんね、ユーノ君』と返事を返していた。鮫島さんと士郎さんのあの目は、一戦やらかしそうな雰囲気纏つており、明らかに

子供が聞いてはいけない類の話になる事間違いなしである。そんな渦中に居なければいけないユーノには心の中でご愁傷様と言っておこう。言うだけだが。



なのはちゃん家でゲームをやったり漫画を読んだり、各々好きなように過ごしていたら、いつの間にか夕方。そろそろお話は終わってるんじゃないかしら、という桃子さんの一言で、やっぱりみんな翠屋へと向かった。

店内へと入ると難しそうな顔をしている少年と女性、変わらず厳しい表情の土郎さんとプレシアさん、表情が全く読めない鮫島さん。そして自分達が出た後で来たのだろうと忍さんが、これまた自分達の後に来たのだろうはやてちゃんの隣に座っていた。はやてちゃんの後ろにはノエルさんが立っている事から、今日はノエルさんがはやてちゃんの身の回りの世話をしていたようだ。

あの温泉の一件以来、月村さん家のお手伝いであるノエルさんとフアリンさんが、自分の家にはやてちゃんが泊りに来ていない時はお世話をするようになっていた。すずかちゃんの好意の現れである訳だが、はやてちゃんは恐縮しながらもその気遣いが嬉しいらしく、こうして放課後にはノエルさん達を伴い翠屋やすずかちゃん、アリサちゃん

の家で遊べるようになっていた。

いつも明るい笑顔を振りまくはやてちゃんだが、今日はどうも、その笑顔に陰りがあるようだ。

「ああ、みんな。お帰りや」

「うん。……どうかしたのか、はやてちゃん」

「うんとな……この人達の知り合いに、グレアム小父さんがおるみたいなんよ……」

その言葉に思わず土郎さんの顔を見るが、土郎さんは黙ったまま、静かに頷く。

「彼女の言うグレアムは、恐らく我々の知るギル・グレアム提督。過去に闇の書の事件に関わった事のある人物で、この地球出身の人間だ」

クロノと名乗る少年の言葉に視線を向ければ、相変わらず難しい顔をしている。

「まさかこんな所で闇の書の主に出会うとは思わなかったな……。しかしグレアム提督の件、どういうつもりなのだろう」

「エイミイ、連絡はついた？」

「駄目です、こちらからの通信に応答しません」

緑髪の女性からの言葉に、エイミイと言う女性が応える。どうも内部で何らかの問題が発生しているようである、が……。

「えっと……また新しい問題が出てきた、って事でいいのかな」

「概ねその認識で問題無いわよ」

ふう、と溜息をついて紅茶に手をつけるプレシアさんの言葉に、またか、と思わず頭に手を当ててしまった自分は悪く無いと思う。

「どうしてこう、次々と問題が出てくるんだこの街は……」

「平穏な日常が、足音を立てて遠ざかっていく気がするね」

詩的に嫌なことを言わないでくれませんかね、すずかちゃんや。

「それで。はやてちゃんの事、そっちの人達に話したんですねプレシアさん」

「ええ。闇の書については、私より管理局のほうが詳しいはずだからね」

「それは何よりで。えっと、クロノさんと、そちらは……」

「リンディ・ハラオウンよ。クロノの母親です。初めまして」

緑髪の女性、リンディさんが自己紹介しながら頭を下げてきたので、こちらも慌てて頭を下げる。

「中田堅一です、昨日はすいません。何分夕食の時間でしたので」

「仕方無いわ。こちらこそ邪魔してしまつてごめんなさいね。それとジュエルシードの件、搜索してくれていてありがとう」

「いえいえ、自分は何も。ユーノとなのはちゃんが頑張ってくれていましたから。勿論他の海鳴に住む人も」

社交辞令の言葉を交わしつつ、互いに頭を下げ合う。

「堅一君、今後はこちらの管理局の方が協力してくれるそうさ。探査用設備もあるから、今までよりずっとラクになる。君となのは、フェイトちゃんには、現地協力者として彼らに協力して貰う事になった」

「もちろん、後で謝礼もあるそうだから、無償奉仕じゃなくて良かったわね」

士郎さんとプレシアさんの言葉に思わず苦笑で返す。なるほど、そういう交渉を今までやってた訳か。

「僕もジュエルシードの捜索に加わりたいのだが、やる事が出来てしまつて。申し訳ないが、今しばらく協力をお願いする」

「いえ、自分達の街の事ですから。ね、なのはちゃん」

「うんつ。大丈夫、今までもやってこれたんですから！」

自分の言葉に任せなさいと意気込んで返事するのはちゃん。可愛らしさが前面に出たその行為に思わずほんわかしてしまう。

「そして、ユーノ・スクライアには本局にある『無限書庫』という資料室で闇の書に関する資料の捜索を行なってもらう事になった」

「うん、僕に出来る事なら。だからなのは、一旦お別れだね」

「そっか……うん、頑張つてね。ユーノ君」

小動物とのお別れに若干寂しそうなのはちゃん。まあ今まで一緒に過ごしてきていたヒトとの別れは寂しいものである。というか、ペットとお別れのイメージなのかもしれない。

「そういう訳で、明日からもよろしく頼むわね」

「はい、自分に協力出来る事なら」

リンデイさんからの言葉に、自分は頷きながら返事を返した。

第十八話

ジュエルシードの封印に際し、時空管理局という組織に見つかった。

やっと来たとユーノが言っていたが、今後は彼らと協力してジュエルシードの対処に当たる事に。

そして、はやてちゃんと管理局、グレアム小父さんが繋がった時、事態はどのように変化してしまうのか。



アースラという管理局の所有する艦船に搭載された探査装置でジュエルシードの反応を探索し始めて数日。既に相当数のジュエルシードの回収が

出来ており、残るは6つ程度となった。

それにしても、この回収スピードは今まで自分達が行なってきた速度より何倍も早い。事が起こる前に封印できているので有難い事である。何事も起こらないのが一番なのだ、うん。

だがしかし、ここまで来て回収が一気に止まった。理由は、現在ジュエルシードの存在すると思われる場所にある。

「潜って回収を行うのはリスクが高い上、誰が行けるのか」
「設備の問題もありますし、どうしましょう」

リンデイさんと、通信士で執務官補佐という女性エイミーさんがうーんと頭を悩ませながら画面を見る。そこには、一面の青が表示されていた。

青いのも当然、画面に映っているのは海なのである。

そう、ジュエルシードは厄介な事に残り6つ全てが海鳴付近の海域に落下していると
いう予測が立っていたのである。

これは流石に自分達にはどうしようもない事なので、なのはちゃんを持ち込んだ桃子さん特製のキーキヤクツキーを食べつつ、検討会を鑑賞している。

あーでもないこーでもないとしてリンデイさんとエイミーさんが討論を重ね、漸く一つの答えに辿り着いた。

「ダイビングスーツを購入して海中を探索。回収するにはそれしかありません」

「武装隊の人なら訓練もされているし大丈夫だと思う、うん」

やっと終わったか、なんて思いつつ眺めていた自分達だが、さてこれから準備をと思
い椅子から立ち上がった所で、管制から通信が来た。

『艦長！ 海中からロストログア反応が！ 6つのジュエルシードが全て覚醒しています！』

「……今までの討論は一体」

「監視を続けて！ 武装隊は速やかに所定の位置へ！ なのはさん、フェイトさん、アルフさん、堅一君。お願いできるわね」

「はいっ」

疲れたエイミィさんを置いておいて速やかに指示を出すリンディさんの号令の下、自分達は最後のジュエルシード回収へと向かった。



アースラの転送装置から向かった先は、嵐吹き荒れる海鳴港よりかなり離れた海上。もう少し港に近かったら街が危なかった可能性があったという事で、自分達はその知らせにホッと胸を撫で下ろした。

街に被害が出ない事が第一であるので、後は被害が出ないよう、さっさとジュエルシードを封印するのが一番である。

そう思いながらジュエルシードが発動した場所を眺めると、6つの龍巻を従えた、巨

大な影が目映る。

「……あれ。自分の目、何かおかしくなっちゃったのかな」

「け、けんちゃん。なのはも多分、おかしいの」

二人でその光景が現実なのか疑いつつ、一生懸命目を擦るが映る光景は何ら変化が起
こらない。

「なのは、堅一。現実だよ、ちゃんとした現実だよ」

「まあそうやって疑いたくなるのも分かるけどね。流石にあれば目を疑うわ」

「だよね。そう思うよね」

フエイトとアルフの言葉に、漸く自分の目に映るものが現実であると認める覚悟が出
来た。今までジュエルシードのお陰で奇怪な現象に遭遇はし

たが、ここまで突飛なものは流石に考えもつかなかった。

だって海上に、巨大な龍が居るなんて。

「白い鬣と、蛇みたいな下半身……」

「翼のような両腕に、周囲を嵐が取り巻く龍……」

「アマツマガツチじゃね、あれ……」

そう、自分達が旅行の時やプレシアさんの具合を治していた時などにプレイしていた
ゲームの、まさにラスボス的な存在が、現実に顕現していたのである。

「キユオオオオオオオオツ!!」

「うわあつ! 耳が!!」

「す、凄い叫び声!!」

超高音で爆音な叫び声に、思わずその場で耳を塞ぎ蹲る。な、なるほど。あのゲームで動きが止まるのはこういう訳があったのか。

ゲームの仕様に納得いった所で、嵐龍がこちらへ向けて龍巻を飛ばしてきた。

「さ、散開!」

「とにかくもう、攻撃するしかない!!」

「けんちゃん! いつも通りに隙を突いてタル爆弾お願い!」

「そんなの無いよ!!」

ゲームと現実を混同しないように!

なのはちゃんの言葉にツツコミを入れつつ、自分達はバラバラとなり各々が攻撃に移る。

「ダイバインシューター、シューツト!」

「フォトンランサー、ファイア!」

「オラオラオラオラツ!!」

撃ち出された魔力弾が炸裂し、嵐龍へと殺到する。

こうして魔力弾を雨あられとぶち当ててる訳だが、嵐龍に当たっているはずなのに、どうにも攻撃が通っているような実感が無い。

嵐龍はまるで自分達の攻撃が無いかのようには、頭を向けて一直線に突っ込んできた。

「逃げろおっ!」

「わわわっ!」

「きゃあああっ!!」

慌ててその場から離れて嵐龍の通り過ぎた後を見ると、嵐龍はその大きな腕を下から上へと薙いでいた。

こういう動作はゲームの仕様そのままか!

「このっ、ディバインバスター!」

「サンダースマツシャー!」

「圧縮砲!」

砲撃魔法をぶち当て、また突っ込んでくる嵐龍を見て散開。

「もしかして、これずっと繰り返すの!?!」

「いや、それでも無いみたいだ」

なのはちゃんの言葉に自分は離れた嵐龍を見て呟く。

今日の前の嵐龍は、自身の身体をまるでとぐろを巻くように丸め、少しずつ巨大な龍

巻を発生させる。

そうあれは、巷では「ダイソン」等と呼ばれている攻撃！

「うわっ、引つ張られる!!」

「外側に逃げろおっ!!」

「うわっ、わあああつ!!」

「フェイトオッツ!!」

気付いた時点で動けたのはちゃんの腕を引つ張りつつ、凄い勢いで吸い込んでくる龍巻に逆らう。

だがフェイトが距離的に間に合わず、フェイトを救出しに行ったアルフ共々、フェイトは中心地で発生した巨大な龍巻に巻き込まれてしまった。

「フェイトちゃあ〜んっ!!」

自分の手を握りながらフェイトの名前を呼ぶのはちやんだが、流星にアレをどうにかできるとは思えない。

遠くから聞こえる「いやああつ!」「ぐええつ!」という二人の叫び声にまだ無事である意識しつつ、自分達は嵐が収まるのを待った。

やがて巨大な嵐は、龍と共に遙か上空へと飛翔し、やっとそこで自分達を吸い込む風が収まった。

「けんちゃん！ フェイトちゃんは!?」

「飛んできた!」

慌てるなのはちゃんだが、今の嵐の仕様に錐揉みしながらふっ飛ばされてくると思
い待ち構えていると、案の定フェイトとアルフが思い切りふっ飛ばされてきた。

そこをなのはちゃんがフェイトを、自分がアルフをしつかりキャッチして確保する。

「フェイトちゃん、しつかりしてえ〜!」

「だ、大丈夫……ちよつと目が回るけど……」

「世界が回る……」

まああれだけの回転の中に居ただけだから、そりや気持ち悪くもなる。だが、ここまで
である程度の攻撃法則は予測がつくようになった。

つまりは、ゲームの仕様と同じって事だ。

「なのはちゃん、フェイト。相手は頭のガードが甘いから、攻撃を避けつつ頭を狙ってバ
スター撃って」

「けんちゃんは、どうするの?」

「近づいてぶん殴る! 怯んだら一氣に大技お願いね!」

自分はその言うのと、余裕綽々といった風体の嵐龍の懐へと突っ込む。嵐龍付近は思っ
たより嵐の勢いも弱く、これならちゃんと足場を生成してぶん殴れる。

「オラアッ!」

近距離から拳と足の連撃を放ち、嵐龍が攻撃モーションに入った所で引く。所謂ヒツトアンドアウェイの戦法を取りつつ、なのはちゃんとフェイトが着実に遠距離からの砲撃でダメージを与えていく。

なんか本当に、ゲームっぽい戦い方だ。

「堅一! どいて! フォトランサー・ファランクスシフト。打ち砕け、ファイア!」
背後からのフェイトの声に後ろを確認して引くと、フェイトが雨霞の如くフォトランサーを撃ち出し始めた。

「キョオオオオッ!!」

この猛攻には流石の嵐龍も怯んだようで、身体が大きく唸りを上げる。

「スパーク・エンドッ!」

ダメ押しにフェイトが巨大な雷の槍を作り出し、嵐龍へと撃ち出す。

正面から食らった嵐龍は、大きな叫び声を上げながらのた打ち回っていた。

「ハア、ハア……」

「フェイト、ナイス。それでなのはちゃんは?」

「ハア……ハア……あ、あっち……」

フェイトが指し示す方を見ると、そこには自身の身の丈より巨大な魔力球の前に佇む

なのはちゃんか。

というか、いつの間にあんなものを用意していたんだ……。

「いくよっ！ デイバインバスターのバリエーション！」

なのはちゃんはそう言うと、嵐龍へと向けて杖を振りかぶる。もしかしてアレ、砲撃？

「全力全開！ スターライト……ブレイカーツ！！」

ガコンツ、となのはちゃんが杖を振り下ろすと、魔力球が一つの砲撃となり、巨大な尾を引いて嵐龍へと襲いかかる。

「ギョオアアアアツ！！」

桃色の閃光の直撃を受け、嵐龍が大きく叫び狂う。流星にアレは、どうしようも無いのではないか。アレを耐えきられたら、多分もう積む。

「あわわわ、す、凄い魔力」

「お、恐ろしい子だねえ……」

一緒に眺めていたフェイトとアルフが冷や汗を流しながらその光景に怯える。確かにアレが自分に向けられたらと思うと、恐ろしい……。

やがて桃色の閃光が収まった場所には、ピクピクと動く嵐龍の姿が。

「……完全にこれで、終わっただろ」

「うん、そうだと思う」

状況を眺めていた二人でウンウンと頷き合う。そこへなのはちゃんが嬉しそうにやって来た。

「けんちゃん！ やった、終わったよね！」

「うん、多分。というかアレで終わらなかつたら、もう対処のしようが無いよ」

現段階で純粋な火力として一番高いのがさっきのなのはちゃんの攻撃だと思うので。アレ以上の攻撃を与えるのはもう難しいだろうと思う。

まあ向こうも動けないみたいだし終わりだろう。と思っていたら、何やら嵐龍の体毛や鬣の色が変化してきて、きな臭くなってきた。

《相棒。アレのエネルギー反応、増大しています》

「……………どういう事だ？」

『みんなそこから退避！ あの龍の内部にあるジュエルシードのエネルギーが暴走を始めたわ！』

唐突に現れたモニター越しのリンディさんが、凄いい剣幕で自分達へ退避を勧告する。情報的には非常にヤバイものだ。だがしかし。

「退避つたって、海鳴はどうなるんですか？」

『それは……………恐らくは次元震が発生して……………』

「そんなっ！　なんとかならないんですか!?!」

『抑えるのはもう無理よ。一刻も早くあの嵐龍から退避するぐらいしか』

《リンディ艦長、私に一つ提案があります》

悲痛な表情で状況を告げるリンディさんの言葉に、ステイールが割って入る。

《あの嵐龍をこの座標の高次空間へ転送します。アースラ各員は衝撃に備えてください》

『この座標って……プレシアさんの時の庭園じゃない!?』

《正確にはその一区画、パージ可能な格納庫部です。プレシア・テストタロツサ。問題はありませぬ》

相棒が既に決定事項のように言っていると、もう一つモニターが表示され、そこにはプレシアさんの姿があった。

『問題無いわ。パージの作業はこちらに任せて。フェイト、アルフ。転送魔法が使えない二人の代わりに頑張って転送させなさい』

「母さん……はい！　ステイール、座標をバルディッシュに転送して」

《既に終わっています。頼みました、フェイト・テストタロツサ》

「うんっ!」

「あたしも頑張るよ、フェイト!」

座標を受け取ったらしいフェイトとアルフが、蹲っている嵐龍へと近づき、巨大な魔法陣を二人で形成する。

「あの……私達は」

《そこで無事成功するのを見守って下さい》

「はい……」

最後の最後、海鳴最大の危機にただ見ている事しか出来ないという状況になのはちやんはソワソワし、自分は自分で拳を握り無事の成功を祈る。

『次元震発生予測まで、残り15秒！』

「転送、時の庭園!!」

残り時間の予告が来た途端、フェイトの声が重なり巨大な嵐龍の体躯は黄金色の光に包まれ消えた。

《プレシア、今です》

『分かっている。リリナさん!』

『転送確認! 格納庫、射出!!』

ガシャンツ、と何かが割れる音が聞こえた。

『次元震発生まで残り3. 2. 1……発生します』

通信先からエイミイさんの声が聞こえていたと思つたら、次の瞬間、ブツツリと通信

が切れてしまった。

「……………一体、どうなったんだ。」

「けんちゃん、大丈夫かな……………」

「分からない。とりあえず自分達は一旦、臨海公園で休憩にしよう」

よく見れば自分もなのはちゃんも、戦闘服がボロボロになっている。流星に激しい戦いだった訳だし、フェイトなんでもっと大変な事になっていそうである。

自分なのはちゃん達に休憩を促し、臨海公園で待機する事とした。



ヘトヘトになってベンチで座り込んでいた自分達に、再び通信が繋がったのは15分後の事だった。

『……………る、聞こえる？ 四人とも』

「ああ、エイミイさん。聞こえてますよ」

『良かったあ。次元震は中規模程度、世界崩壊の危機は免れたから安心して。時の庭園のほうも』

『こちらは無事よ。まあアースラのほうは、本局方面への航行が一ヶ月ほど出来そうに

ないけどね。次元断層が発生してしまっているから』

『まあそうですけどね。今艦長主導で高次元空間内のジュエルシード探索を行なってますから、丁度いいと言えればいいんですけどね』

どうやらみんな無事らしい。ホッと一安心。

『ま、そういう訳で。フェイト、私達の地球への正式な転居は少し遅れそうよ。今の内に引越しの物件を探しておきましょう』

「あ、そう、だね……」

『あら、大丈夫？ フェイト。今日は頑張ったものね』

「うん……ちよつと、眠い……」

うつらうつら、話をしながらも船を漕いでいるフェイトの頭が、とうとうカクンと落ちた。すかさず掌で受け止めて、自分の左肩へと預ける。

『あらあら……。今日は解決祝いに、翠屋ね』

「了解、なのはちやん家で寝かせておきますよ。尤もその前に、二人を家まで運ばないといけないですけどね」

そう、何も疲れたのはフェイトだけではない。なのはちやんも通信が来る前に既に疲れからぐっすり熟睡に入っており、自分の右肩に寄りかかった状態となっているのだ。

動くに動けない状況のまま、自分はこうして通信をしている訳である。

『桃子さんか美由希さんに連絡しておくわ。もう少しだけ、そのまま寝かせておいてあげなさい』

「わかつてますよ、宜しくお願いします」

『ええ。また後でね』

プツツと通信が切れ、周囲は元の静かな状態に戻る。

微かに聞こえるのは嵐も過ぎ穏やかになった海の音と、二人の少女の可愛らしい寝息だけ。

やっと、一時の平和がやって来たなあ。

「お疲れ様、二人とも」

小さな寝息を立てる二人が、微かに微笑んだ気がした。

闇の書

第十九話

ジュエルシードを取り巻く一連の騒動は一旦の終息を迎えた。

まだはやてちゃんの事など問題は残ってはいるが、海鳴に被害が出るような事は当分無いだろうと思う。

漸く、平穏な日常が戻ってきたのだった。



5月と言えばゴールデンウィーク。一週間弱の長い連休がある訳だが、そんな時こそ喫茶店は繁忙期である。それは翠屋も例外では無く、現在桃子さんも土郎さんも、美由希さんも大忙しで店を切り盛りしている事だろう。

そんな中、末っ子であるのはちゃんと言うと。

「うーん……これかな」

「残念、それはババよ！」

アリサちゃんの家で、古典的なトランプ遊びであるババ抜きに興じていた。世の中にはゴルデンウィークを利用して旅行に行く家族もいる訳だが、先の通り翠屋は忙しい。旅行に行けない彼女の為に、こうしてみんなで集まって休日をまったりと過ごしている訳である。

ババ抜きは先程からなのはちゃんが連敗中。どうにもヒキがよろしくない。ババを引くよう誘導されている行動に、素直に引つかかってしまっているのがアレである。そういう所も可愛いと思う、妹的な意味で。

「あ、堅一君。そっちの漫画終わったらかしてー」

「ん、いいよ。はい」

「あんがとさん」

はやてちゃんはアリサちゃんのかいベッドにゴロリと寝転がり漫画を読み耽る。現在アリサちゃんとなのはちゃんのタイムン状態なので、既に上がってしまったている自分達は暇なのである。

ちなみにベッドの上には他にフェイトとアリシアがおり、二人共横に並んで静かに漫画を読んでいる。『少女漫画は乙女に必要な知識を与えてくれる』というアリサちゃんのみを引きこまれた形だ。

すずかちゃんは一人、フェイトの連れて来た犬状態のアルフを楽しそうに撫でている。

「うふふ。アルフ、ジャーキーあげるね」

「ガフガフツ」

最近開発したらしい子犬モードという機能で小型犬並の大きさのアルフを本当に楽しそうに撫でている。それにしてもアルフ、お前それでいいのかと突っ込みたくなる。

「そういえばアリシア。リハビリの調子はどうだ？」

「ん？ そろそろ普段から杖使つて歩くようにしようつて」

「そっか、良かったな」

「うん。えへへ」

フェイトより幾分小さい、小学1年生程度のアリシアが約一ヶ月のリハビリの末そろそろ歩けるようになるという。これで車椅子ははやてちゃんだけとなつてしまった訳だが、彼女はそういう事は気にしないので、よく出来た子だと思ふ訳で。

「うにやー！ また負けたあー！」

「ハンツ！ 駆け引きで私に勝つなんてなのははまだ早かつたみたいね！」

持っていたトランプをパワーつとぶち撒けて盛大な悲鳴をあげるなのはちゃんと、フンと得意気なアリサちゃん。何ともはや、楽しそうでありよりですねえ。

「さて、トランプも終わったみたいやし、次なにする？」

漫画を読んでいたはやてちゃんが顔をあげて言うが、次に続く言葉が出てこない。うーん、そろそろ遊びは出尽くした感じだなあ。

「えっと、トランプやって、ゲームもして、漫画も読んでるし……」

「もうネタは出尽くした感じよねえ」

すずかちゃんとアリサちゃんも同じ感想のようで、正直次のネタは思いつかない。

あ、そういえば。

「アリサちゃん、この間遊園地の招待券貰ったって言うてなかったっけ？」

「あ、そういえばそうだね。結構な数貰ったから……うん、全員合わせても大人何人か追加で行けるわね」

「ホント！ 行きたい行きたい!!」

アリサちゃんの言葉にアリシアがきやつきやと喜んで応える。うん、遊園地、いいんじゃないか。

「じゃあさ、明日とかどうかな」

「そうね。どうせ明日もみんな予定ない、わよね？」

「うん、私は大丈夫だよ」

すずかちゃんが大丈夫と言うと、他のみんなも同意する。何というか、こういう時大

人が忙しいと子供は暇でしようがないのだ。

「じゃあ明日遊園地ね！ 今から明日の予定決めちゃいましょう！」

「わーい!!」

こうして、明日の遊園地に向けて楽しい予定作りが始まったのだった。

◇◇◇◇◇

明けて翌日。絶好の行楽日となった今日、前日の宣言通りみんなで遊園地へとやって来ていた。

メンバーとしては子供七人に保護者としてリニス、ノエルさんが。そして今日翠屋で唯一休みを貰えた美由希さんが一緒にやってきていた。

遊園地に着いた途端テンションが爆上がりした子供六人を先頭に乗りたい乗り物に片っ端から乗るといふ強行軍を敢行しており、現在はノエルさん、リニスさんが同行して二組に別れて観覧車へみんなは乗っていた。

そして自分と言うと、子供達の勢いに圧倒されグロッキーな美由希さんと一緒に、観覧車の前で小休止である。

「……子供の体力なのに、よく持つわねあのテンション」

「美由希さんは鍛えてるのにバテましたね」

「テンションに着いて行けなくてねー、アハハ……」

買ってきたスポーツドリンクを口にしながら乾いた笑みを浮かべる美由希さん。確かに美由希さんの性格的に、騒ぐのは性に合わないのだろうと思う。実際控え目で大人しい性格をしている読書家である訳だし。

似たような性格のすずかちゃんが居る訳だが、彼女もなのはちゃん達と一緒に居ると結構テンションが鰻登りだったり騒いだりする事があり、同年代の友達が一緒だと控え目な性格が影に隠れるようである。

「それにしても、短い間に友達増えたよねえなのは」

「確かにそうですね。先月まではいつもの三人でしたもんね」

「はやてちゃんとフェイトちゃんとアリシアちゃんか。いい子達だよねえ」

観覧車を見上げながら呟く美由希さんに首を振り同意を示す。見上げていた観覧車はなのはちゃん達が乗っており、遠目ながらこちらに手を振っているのが見えた。自分と美由希さんは揃って手を振り返す。

「先月までは普通、だったのね。魔法に関わって、色んな人に出会って、友達増やして。これからどうなっちゃうのかな」

「まあ、なるべく平和に生活していきたいですけどね。自分が言うのも何ですけど、魔

法に関わるのは危険に関わる事と同じですから」

「ま、それは分かっているけれどね。今なのは魔法に関わっている事が許されているのは、けんちゃんが一緒に居るからだし」

「自分が？」

意外な言葉に思わず美由希さんを見返すと、美由希さんはふと、申し訳無さを含んだ笑みを浮かべていた。

「なのは自分で選んだっていうのもあるけど、けんちゃんが居るから私達は許容できた。なのは一人だけだったら絶対に反対してたもの。それだけ信賴してるんだよ、ウチは」

「それは、有難いやらどうしていいやら」

「まあ魔法関連はけんちゃんに頼り切りになっちゃう所が申し訳ないんだけどね。他の誰でも無い、けんちゃんがなのはの傍に居てくれるから安心できるの」

「ありがとう、ごさいます?」

「あはは、どうなんだろうね。迷惑じゃないかなって思いもするけど」

迷惑とか、考えた事が無かったので思わず目を見開く。自分としては大事な友達であり、護るべき対象だと思っっているのはちゃんをいつも通り護ろうとしていただけで、当たり前前の行動だったのだ。

勝手に期待を寄せられて、などと不満に思ったりなど有り得ないし、逆に期待してくれる事実が信頼関係を実感させてくれるので、嬉しいというのが正直な所である。

自分がそんな事を考えていたら、美由希さんがジッと自分の顔を見ていた。

「……何か？」

「けんちゃんつてさ、なんて言うか、大人だよな」

「……………そうですか？」

「そうだよ。苦勞を買って出るといふか、そういう何かを護ろうとする行動とか、自然に出来ちゃうくらい大人。厄介事なんて関わりたくないし、けんちゃんぐらいの年の男の子だったら駄々こねるものですよ」

「まあ、確かに」

「なんかけんちゃん見てるとき、なのはのお兄ちゃんみたいなんだよね。恭ちゃんは厳しいお兄ちゃん、けんちゃんは優しいお兄ちゃん、みたいな」

美由希さんの言葉に納得する。確かに自分は心の中でなのはちゃんを妹のように捉えている事が多々ある訳で、傍から見てもそれが分かるのだろうか。

「確かに自分にとって、なのはちゃんは妹ですかね」

「でしよう？　なんか見てて分かるんだよね」

「そんなに分かりやすいですかね」

「傍から見るとね。でもいつまでも妹扱いじゃ駄目だよ？　これはあの子の姉として、同じ女としての忠告」

「……何とも重たい言葉ですね」

「実体験だからね」

そう言った美由希さんは、遠くの空を仰ぐ。その瞳に写っているのは本当に空なのか、それとも……。

「まあ、言いたいことは分かりますよ。でも今はまだ妹です」

「それでいいよ。もう少しお互いに成長したら、ちゃんと見てあげてね。女の子の成長は早いんだから」

「ご忠告痛み入ります」

「どうもどうも。ま、私もけんちゃんの成長には期待してるから。っと、そろそろなのは達が降りてくるよ」

何とも曖昧な解答になった訳だが、それに納得したのか。美由希さんはなのはちゃん達の乗るゴンドラを指さしながら、ベンチから立ち上がる。

どうやらグロッキー状態から復活したみたいだと考えながら、観覧車の出口へと移動する美由希さんの後ろを自分も追いかけた。

やれやれ、またしても成長を期待されてしまった。



楽しかった遊園地から数日後。自分となのはちゃんは、アリサちゃんとすずかちゃん、はやてちゃんを連れてフェイトの招待で時の庭園へと来ていた。

いつの間にか改装したのだろう、時の庭園には中庭以外のエリアにカフェテリアのようなものが出来ており、仮想映像を壁面に表示させて草原の中でお茶会をしているような状態になっていた。

「昨日にリクエストがあったので改造したようです。ハズラットの技術をふんだんに使った無駄に豪華な施設です。ここでお茶会をするより月村家かバニングス家でお茶会をしたほうが遥かに経済的です。まあ動力は備え付けの魔晄炉なのでお金がかかる訳ではありませんが」

「そういうシニカルな意見やめろよお前。現実的な事を言うな」
「まあ、確かに我儘で作るよう指示したのは私だからね。偶にはこういう自然も味わいたい訳よ」

リニスさんと一緒にお茶の用意をしてくれていたプレシアさんが苦笑いを浮かべながら応えてくれた。

「地上での生活はまだ出来ないんですか？」

「管理局に正式に申請を受理された訳じゃないから。次元震の影響で艦船の移動がまだできないのよ」

「あと一二週間で渡航できるようになるだろうって言ってたから、そうなったら申請して受理まですぐだって」

「それまではここで擬似的に自然を楽しむか、いつも通り翠屋や高町さん家に半日程度お邪魔するぐらいしか出来ないのよね」

「なんや縛りがキツイんですなあ」

「フエイト達は大丈夫なんだけれどね。私は一応元管理局の研究者で、大魔導師と呼ばれてた人間だから。何かやらかした時の管理外世界への影響力がフエイト達とは桁違いだと判断されているのよ」

プレシアさんの説明にほえーとはやてちゃんが感心したような声を出す。管理局が来てからプレシアさんの自由が減ってしまった訳だが、そこは有名税でしょうがないと割り切っている辺りさすがだと思う。

それにしても次元震か、そんなに影響が強いものなんだなあ。

「高次空間で起こったからこの程度の被害で済んでるけれどね。地上だったら今頃海鳴は無いかもしれないわよ」

プレシアさんの言葉にアリサちゃんが飲んでいたお茶をブツと吹き出す。隣のすずかちやんもポカンとした顔をしていた。まあ確かに自分の知らない所で世界が救われていたと知ったらそういうリアクションにもなるよね。

「管理局としてもそういう事態にならなくて胸を撫で下ろしてるわよ。あなた達には感謝していたわ」

「結局自分達の街を守りたいだけでやった事ですから、感謝される謂れはないんですけどね」

「私としては、フェイトちゃんに感謝かな。私とけんちゃんじゃ、あの発現体を魔法で転送させる事は出来なかったし」

「そんな。なのはと堅一も凄く頑張ったよ。堅一なんて傷だらけだったし」

確かにあの嵐龍と戦っていた時に一番傷が多かったのは自分だが、やった事と言えば近距離戦での足止め程度が精々である。本格的なダメージを与えられたのはフェイトとなのはちちゃんのお陰だ。

「アンタ達、いつの間にか世界を救ったのね……」

「ほんと、物語のヒーローヒロインみたい」

「魔法使いやしなあ」

どうにも実感を得ていない三人の言葉だが、それも仕方のない事で。正直自分達でも

アレが世界の危機であったという事を実感できてはいないのである。

その次元震というものを体験していないからだろうとは思うのだが。

「そういうえば今日はアリシアは？」

「今はリリナさんと一緒にリハビリ中。リニスとアルフが見ているわ」

日々頑張っているという事か。まあ筋力をつけるというのでも並では無いし、動かしていなかったものを動くようにするにはそれ相応の時間もかかるという事だ。

「あの、プレシアさんに、今の内に魔法の事色々教えて貰いたいですけど」

「そうね、はやてさんには今後必要になるとは思うわ。と言っても恐らくはやてさんの魔法はベルカ式になるので、知識として分かる範囲だけになってしまふけれど」

「それでもいいんで、お願いします」

真剣な表情で頭を下げるはやてちゃんに、プレシアさんは笑顔で承諾する。

「ついでだからなのはさんも、一緒に勉強しなさい。アリサさん、すずかさんも興味があるならどうぞ」

「是非お願いします」

「理論とかそういう事、知りたいです」

プレシアさんの言葉に飛びついたのはちゃんとすずかちゃん。アリサちゃんも興味津々なようである。

何だか今日はこのまま勉強会のような感じになりそうだなあ。

「そうね、それじゃあまずは魔法という現象が発生する原理から——」

こうして、学校帰りにも関わらず自分達は魔法という不可思議な現象の勉強までする事となった。

◇◇◇◇◇

最近色々面倒な事があり、疎かになっていた恭也さんとの鍛錬が再開した。とは言ってもお互い自宅で鍛錬は積んでいるし、今まではジュエルシード探索に必死だったのでしようがないのである。

ジュエルシードが見つかったのに鍛錬でクタクタになっていたらいかんだろう、という至極尤もな理由だったのだ。

今日の鍛錬は我が家の道場では無く、高町家の道場である。

小さめの日本庭園の中に立つ板張りの道場の中で、自分は逆立ちをしていた。

これに何の意味があるのかと問われると、何の意味も無いだろうと答えるしか無い。何となく、逆立ちがしたくなったのだ。

自分が始めてから早五分程、ふと気が向いた時に両腕に力を込めて逆立ちのまま腕立

て。ググツと力を入れ、また戻す。

視線の先では逆さまの美由希さんが恭也さんと約束組手の鍛錬を。その隣では雅俊さんが士郎さんと二人でその様子を眺めている。

彼女達は既に約束組手を一時間も継続しており、二人共汗びつしよりである。それもそのはず、今回は真剣を用いての組手であり、気を抜けばお互い大怪我は免れないものとなっているのだから。

互いの一挙手一投足に神経を張り、手順を正確に実行する。それだけだからこそ、気を抜けば怪我に繋がる為気を抜けない。

暫くゆつくりと流れる刀の軌道を眺め、二人の間合いが離れ納刀された事で、組手は終わりを迎えた。

「……ふう。もう汗びつしより」

「剣筋は良くなっている。鍛錬を積むように」

「はい」

タオルで汗を拭く美由希さんに薄い笑みを浮かべてアドバイスを送る恭也さん。兄妹仲は相変わらず良いようで何よりですなあ。

自分もよつと逆立ちから戻り、今しがた鍛錬を終えた二人へと近づく。

「お疲れ様です」

「ほんと、疲れたよお」

「まだまだ甘いぞ美由希。それよりどうだった、堅一」

「あの剣筋でまだまだ甘いという辺り、御神流は鬼だなあ、と」

緩やかな速度で振るわれていた剣だが、その鋭さは半端ではない。速度など無くとも簡単にモノを断ち切れるその剣は、自分から見れば達人と言っても遜色無いものである。

確かに、恭也さんと比べると若干劣りはするが。そこは鍛錬の密度と時間で埋められる差だと思える。だからこそ、同じだけの密度と時間で先を行く恭也さんとの差は埋まり難い訳だが。

「なに、俺もまだまだ。もつと鍛錬を積み、父さんを超えなくてはな」

「年々技が昇華されていくあの人は本当の鬼なんじゃないかと思えますけれど」

「違うない」

ウチの父もそうだが、士郎さんも大概である。伊達に実戦を経験している訳でも無く、過去の研磨を昇華させ技と成し、それを更に発展させ進化させている。自分達の師であり父は、超えるべき目標にしては少し偉大すぎる気がするのである。

と噂をすれば、鬼のいぬ間に。件の鬼が木刀と棍を携えやってきた。

「さて、次は堅一君だな。相手は俺がやろう。組手は乱取りで」

「はい、よろしくお願いします」

差し出された棍を受け取り、道場の中央へと移動し、頭を下げる。相手との距離を確認し、棍を正眼に構えて足で確りと道場を踏みしめる。

「綺麗な構えだ。来なさい」

「いきます」

言うと同時に正面に突き、払われた所を逆らわずに勢いを利用し身体ごと回転、逆の棍先で相手を突きに行く。それを避けられると今一步踏み込んで横薙ぎに払いに行き、下を潜り抜けられ剣が下から昇ってくるのを理解するより前に身体を傾け回転させて剣を逃れる。

棍を一度床に打ち付けてから反動で手元へ戻し舞花棍と呼ばれる棍を回転させる技法で周囲を払い、互いの距離を開かせる。

「何だ、随分器用に使えるじゃないか。普段使わないから武器を使った技法は苦手なのかと思っていたよ」

「山田流は無手のほうが強いですから。自分より上の人との鍛錬で手を抜くのは失礼でしょう」

「それもそうだ。今日はまたどうして？」

「獲物対獲物の鍛錬も大事だと言われたので。それより、次いきます」

一気に踏み込んで下から跳ね上げる。安々と避けられた棍を再び横薙ぎに払い、今度はすかさず逆に戻す。再び踏み込んで突こうとした所で神速の剣が迫ってきたので棍を横にして受け、逸らす。

そのまま身体を回転させて逆先を胴目掛けて振るうが、これも安々と避けられる。なればと突き、払いを駆使して攻めに攻める事にした。

「セエッ！」

「よつと、うん鋭いじゃないか」

「ハッ！」

上段、払い上げ、袈裟斬り、打ち込み。震脚から棍を伝って衝撃を剣へ通すが、土郎さんも解っていたのか同様の衝撃で相殺する。

そこから二刀による怒涛の連撃が始まった。切上げ、袈裟斬り、突き、打つ、蹴りと四方八方からの斬撃を受け、流し避けながら次の一手として棍を頭上に回しながら振り上げる。

ブオンという音と共に一步土郎さんが後ろに下がった所で、一気に振り下ろす！

カアン、と木同士が打ち合う音が鳴り響き、気付けば獲物を取り落としていたのは自分の方だった。

棍は床に落ち、土郎さんは残心をして自分の胸元へ剣を向けながら口を開いた。

「棍の弱点は行動の制限化だな。突く、払う、打ち据える。その3つだけで対応しなければならぬ」

「正しく。だからこそ、制限された状況下でも戦えるようになれば強くなるというのが父の言葉です。参りました」

「まあ、全力で打てば人を殺めかねない山田流の拳には丁度良い制限なんじゃないのかな？ 御神流もそうだが、先生の拳は生々しい技が多いから」

「そうでしょうね」

山田流の拳は生々しい。確かにその通りであるとしか言えない。関節砕きなどまだ易しい方であり、状況によつては臓物を引きずり出してしまいかねないものすら存在する。いいところ取りとはよく言ったもので、悪く言えばあらゆる流派の殺人技法詰め合わせのようなものである。

棍の鍛錬のもう一つの目的は、その生々しい拳を使わずに事を収められるようになる事である。道具を使った方が弱いなど、剣道三倍段に謝るべき発言ではあるが、事実なので仕方がない。

何せ棍を持てば掴み、投げ、極める事が出来ないのだから。手数が減るのと同義である。

それにしても、最後の一撃の衝撃は大きかった。腕に痺れがまだ残っている。両腕の

痺れを解すようにコキコキプラプラとしていると、士郎さんが頭を軽く掻きだした。

「いやあ濟まないね。最後の氣迫が良かったもので、つい技で返してしまつた」

「いえ、この程度慣れてますから。それにしても最後のは凄かったですね」

「君達にもあるだろう、衝撃を内側へ徹す技が。それと同じ事を小太刀でやるだけだよ」
簡単に言うがそれはそんな簡単なものじゃない。道具に衝撃を伝える技は、素手よりも繊細な調節が必要だろう。寸勁ですら筋肉の緊張と弛緩の調整がデリケートなのに。

「だが君も出来るだろう？ 修練すればできるものだよ」

「まあそうなんでしょうねえ」

自分も實際やつてる訳だしね、棍で、両手でという違いはあるが。

「けんちゃん、お疲れ様！」

「あれ、なのはちゃん」

声がかかった方向を見てみると、そこにはタオルを持ったなのはちゃんが立っていた。
た。

「どうやら見学をしていたらしく、パパパタとタオルを持って駆け寄ってきては差し出してきた。」

「けんちゃんやつぱり凄いね！ お父さんも、お疲れ様！」

「ああ、ありがとうなのは。堅一君は強いぞお、なのはもやつてみるか？」

「う、ううん。なのはは既に何回も負けているので今日はいいのです」

「あはは、そうだったか。悪かったな」

ポンポンと頭を撫でる土郎さんと嬉しそうななのはちゃんの姿にほっこりする。うんうん、親子仲も良好で何よりですな。

暫く頭を撫でられていたなのはちゃんは、そういえばとクルリと自分へ振り返った。

「そろそろ約束の時間だよ。フェイトちゃんとアリシアちゃんのプレゼント、今日買いに行くんでしょ?」

「そうだね、自分はお風呂借りるから準備して待つてくれると助かる」

「うん、もうお風呂準備は出来てるから。けんちゃんは入ってきて」

「ありがとう」

笑顔で促されるままに、なのはちゃんの言葉通り高町家の母屋へと向かう。

今週のフェイト・アリシアの誕生日の為に、これからみんなでプレゼント選びなのであった。

第二十話

海鳴の危機とは縁のない、平穏な日常がやって来た。

増えた友達と楽しく遊ぶのはちゃんを見て、自分も頑張った甲斐があったものだと
思いを馳せる。

フェイト・アリシアの誕生日会が終わり、はやてちゃんの誕生日が、もうすぐだ。



「ごめん、はやて。こんな寸前に行く事になって」

春から夏へと切り替わる梅雨入り前のある日。はやてちゃんと一緒に自分達は海鳴
臨海公園でフェイトからこんな言葉を告げられていた。

フェイトの傍にはアリシアがおり、表情を少し暗く沈めてしまっている。そして、
フェイトとアリシアの手には、小さな箱。

実はフェイト達プレシア一家は、次元震の影響が消えた今日から、時空管理局の本局

という場所まで引越しの手続きに行かなければいけないのだ。

手続きが終わるまで帰って来ることが難しく、短くて一週間程度は掛かってしまうらしい。その間、フェイト達は本局へと滞在する事となり、はやてちゃんの誕生日会には出席できない。

本当に、非常に申し訳無きそうな二人の姿は、二三日前に自分達の誕生日をお祝いしてもらったのという気持ちが多分に含まれている。

そんな二人の姿にははやてちゃんは苦笑を浮かべながら、差し出されたプレゼントを受け取る。

「ありがとう、フェイトちゃん、アリシアちゃん。ええんよ、それよりフェイトちゃん達が早う海鳴に住めるようになる方が、私は嬉しいで」

「うん、なるべく早く終わらせるって、母さんも言ってたから」

「お母さんが頑張ってくれるから、本当にすぐ帰って来るからねっ!!」

「約束やで。そしたらまた一緒に遊ぼうな」

わーっとははやてちゃんの両手を握りながら約束をするフェイトとアリシアの二人。仲良きことは美しきかな、か。

「二人とも、特にアリシアは気をつけて行きなさいよ。あんたまだ足腰弱いんだから」

「二人とも気をつけてね。二人の分もはやてちゃんのお祝いしておくから」

アリサちゃんの的確な忠告にぶーっと膨れるアリシアだが、それでも嬉しそうな表情で分かっていると応えていた。

すずかちゃんには、フェイトが車椅子係といういつの間にかついていた役職を代役してもらっている光景が見えた。本当にいつの間にかついていたんだそんな役職。

「アリシアちゃん、フェイトちゃん。早く帰って来るの待つてるからね」

「何かデバイスとか買えたらお土産によろしく」

「あ、あるかなあそんなお土産」

二人の手を握りぶんぶん振りながら言うのはちゃんに嬉しそうに、自分のお土産の言葉に苦笑いしながら応える二人は、一通り自分達に挨拶をしてから、海側へと向かっていった。

「それじゃあ、行ってきます」

「なるべく早く帰って来るからねえ〜！」

フェイトの転送魔法で消えていく二人の姿にみんなで手を振り、彼女達を最後まで見送った後、アリサちゃんがパンツと二つ手を打った。

「よしっ、じゃあ次ははやての誕生日の準備よ！ はやては今夜すずかの家にお泊り！

いいわねー！」

「その予定やしなあ。みんなこの後はどないすんの？」

「みんなですすかちゃん家でお茶する予定だよ。お家に帰る頃まではみんな一緒」
「ま、そういう訳だから。とりあえずすすかちゃんの家まで向かうか」

今は男である自分のはやてちゃんの車椅子を押す役である。これはフェイトがいた時もそうだったし、今後自分が居る時は自分のはやてちゃんの車椅子を押すようにしようと思っている。フェイトだけの役目ではないのだよ。

「それじゃあ、出発しんこお〜！」

「おーっ！」

一声かけてから車椅子を押すとはやてちゃんから声が挙がり、それにつられてみんなが楽しそうに、腕を振って声を挙げた。



深夜。中田家の人間も寝静まった、いやもしかしたら翔子さん雅俊さん夫妻は起きているかもしれない時間に、自分の携帯が突然鳴り出した。

目覚ましでもなんでもない通常の着信音に何事かと布団の傍に置いてある携帯を確認し、液晶を見ると着信相手はすすかちゃん。

本当にこれは何事なんだと思いつつ、携帯の受信を押して耳に当てた。

「もしもし。どうしたのこんな夜中に」

『もしもしけん君？ ごめんね、こんな夜中に』

「いや、いいんだけど。それよりどうかしたの？」

『うん、それなんだけどね。ちよつとはや——ええ加減にせえよアホンダラアガア!!—

—ちよつ、はやてちゃん抑えて抑えて!! ご、ごめんけん君』

電話口からの突然の怒声に思わずビクツと身体が動く。すずかちゃんでは無いのは自明なので、これははやてちゃんか。それにしても何であんな怒声を張り上げているんだ。

「いや、いいけど。はやてちゃん関連？ で、自分に用つて事は魔法関連、かな」

『う、うん。そうなんだけど、ちよつと今ははやてちゃんが冷静じゃなくて。申し訳ないんだけど、今から来れない、かな？』

「分かった、すぐ行くから」

『ご、ごめんね。お願いね』

通話を切つてふう、と一つ溜息。はやてちゃん関連で魔法と言うと、闇の書に関する何かだろうな。

電話の様子からすぐに危害が加えられる何かがあるとは思えないけど、早めに行くべきだろうと思ひ、寝間着のまま玄関へと向かい靴を履く。

「どうしたんだ、こんな時間にそんな格好で」

背後からの声に振り返ると、そこには雅俊さんが寝間着で立っていた。ああ、起こしてしまっただかなと思いつつ奥を見るとリビングの電気が点いているので起きていたらしい。

自分は靴を履き終えて立ち上がりながら必要な事だけ連絡する。

「ちよつと魔法関連で月村さんに呼び出されて。なるべく早めに戻るけど、家の鍵は閉めておいて」

「分かった。師匠には言っておくかい？」

「そんな危ない事は無いと思うから、大丈夫」

そう言つて、玄関から見送られたまま外に出る。

「相棒、装着」

《了解、装着。戦闘服があつて良かったですね、相棒》

「へいへい、感謝しますよ」

相棒の言つた通り、学校の制服と道着を合わせたような白の戦闘服に全身包んでから、空へと飛翔する。

「今の速度だと、どれぐらいで到着できる？」

《大体5分から10分程でしょうか。夜間ですが、なるべく都市部を迂回して行くべき

でしょう。目撃されたら厄介です」

「それもそうだな。んじゃ迂回ルートで行きますか」

相棒の言葉に頷いてバビューンと一路すずかちゃんの家へと向かう。

空を飛び始めて数分、海鳴の程近い郊外付近まで来ることが出来ており、既に遠目にすずかちゃんの家である庭の大きな豪邸が見える。洋風の造りをした森のある豪邸は周囲も静かで普段は非常に過ごし良さそうである。

そんな無駄な事を考えながら家へと近づき、いくつか見える窓の明かりが点いている事で家の人が起きている事を確認して、一応正門へと着地して呼び鈴を鳴らす。

すると、すぐにインターホンの向こうから声が聞こえてきた。

『堅一様、お待ちしておりました。どうぞ中へ』

恐らくファリンさんであろう声と共に門がモーター音をあげて開き、奥へと通じる通路を少し早めに歩きながら玄関へと向かう。

と突然、ガチャンと盛大な音が鳴り、右側の窓から何かが飛び出してきた。

またしても何事かと飛び出してきたものを夜目の中確認すると、それは後ろへと思いきりハンマーを振りかぶった、赤髪の子供お!!

「テートトリヒ・シユラアークッ!!」

「んだあつ!？」

ブオンと威勢良く振り下ろされたハンマーを叫びながらも受け流し、そのままハンマーの持ち手を掴み腰を入れて背後へと投げる。咄嗟の時に習慣が出るとは言うが、別に当て身投げをする必要はないような。

突っ込んできた勢いがかなり強かった為、投げた時の勢いも盛大で背中から地面へと打ち付けられた子供は「ぐへっ」と息の詰まった声を挙げた。

「ぐ、ぐめん。でもいきなり攻撃を仕掛けてくるなんて——」

言い訳のようなそうでないような、とりあえず突然の事だったので謝ろうと思つた直後、背後からもう一つ迫る気配を感じた為勢い良く振り返ると、そこには子供と同じように拳を振りかぶり空中を滑空する白髪の男が居た。

「オオオオオオツ!!」

「ちよつ、いきなりなんなんだよっ!!」

迫る右拳を左腕で受け流し、90度に折り畳んだ右腕をそのまま、右足の踏み込みと共に手のひらは掌打にし、男の顎をかち上げる。

「グオツ——」

「なんでいきなり襲ってくるのか、ちゃんと説明を」

して下さい。と言葉を続けようとしたが、顎をかち上げられた男の目をカツと意志を

持った強さを宿し、重心を左に倒した事で何か仕掛けようとしている事を認識する。

「——オオオオツ」

「くうっ!!」

叫び声を挙げ左脚からの回し蹴りが迫るのを確認しながら前に出て右腕で受け止める。かなりの重さを感じるがここで引いては相手の思う壺だ、更に一步踏み込んで左掌打を相手の胸へと当て重心を崩す。重心が揺らいだ事を確認してから、足払いから短勁を打ち込んでやろうかと考えた所で、背中に走った悪寒に従い空へと勢い良く飛び上がった。

飛び上がってすぐ足元を赤色と魔力弾が通り過ぎ、それに追従するように先程の子供がハンマーを振り上げて再び襲いかかってきていた。

「おりゃあっ!!」

「つたく、なんなんだよお前等は!」

子供のハンマーを避けつつ、追尾してくる魔力弾を撃ち落とす。どうやら魔力弾は4つ生成されていたようで、全てを叩き落とすまで自分は子供へと反撃を行う事が出来なかった。

一旦二人と距離を離して間合いを取る。

「……ザフィーラ、アイツやるぞ」

「ああ、分かっている。かなりの手練だ」

こちらを用心しながら、隙のない立ち姿で自分を見る二人に、そろそろ我慢の限界が来そうである。

友達の家に来たはずなのにいきなり襲い掛かられた拳句手練だ何だと評価を付けやがる。はつきり言つてイライラしっぱなしなのだ。

家の中に居るであろうすずかちゃんやはやてちゃん、月村家の家族は無事なのだろうか、そういう心配もあるというのに、目の前の二人は一体なんなんだと言いたくなる。

「次こそツブす。ザフィーラ、合わせろよ」

「ああ。そちらこそな」

何やら仲良しげに、自信満々に言っている二人の姿に、自分の腹の底で糸が一本プチンと逝つた感触を受ける。

これはもうしようがない。良く分からんが振りかかる火の粉は全力で払うべきが山田流の教えだ。加減などする必要すら覚えん。

全身を弛緩させた状態から、一気に踏み込み男の目の前へ。

「なっ！ そん——」

「フォッ!!」

左足の踏み込みから重心を預けた右足の捻り、右腕を水平に突き込む形意拳で言う崩

拳を男の胸へとぶち当てる。

何やら言おうとしていたような男だが、そんなもの知らない。ぼけつとこちらを見ていた子供へと半身で近づき左手を顔の前へと横から振り当てる。

「つ!! て、てめえ!!」

左手の攻撃を避けた子供はそこから右回転しながら右腕に握ったハンマーを下から上へ斬り上げるように振るうが、こちらにも逆回転で回り軽くハンマーを触るようにして受け流す。

振り上げたままの格好となっている子供の驚愕した視線を受けたまま、左肘を子供の脇の下へと打ち込み、身体が軽く浮き上がった所で一步前へと踏み込み右足から連環脚を腹へと叩き込む。

再び子供が苦痛の声を挙げるがやはり関係無い。完全に浮き上がった身体目掛け絶招歩法での突きをお見舞いしてやろうとした所、今度は横から近づくと気配に気付き踏み込みをそのままに向きを変え、近づくと腕を左腕で捉えて右肘を差し込む。

「ハアツ!!」

「ぐううつ!」

横から腕を差し込んだ主、桃色の髪を後ろで縛り上げた女性が苦痛の声を挙げて後退り地面へと膝を着く。

やれやれ、また新手のご登場かと思つた所で、その女性が地面へと着けていない右腕を前に広げながら声をかけてきた。

「ま、待つてくれ！ 我らは貴殿に対して敵対する意志は無い！」

「……いきなり攻撃してきた奴が、何を言ってるんだか。寝言は気絶してから言え」

本当に何を言っているんだか。突然攻撃してきた輩が敵対する意志が無いなどどうして言えるのか。早い所気絶なり何なりさせて月村家の安否を確認しなければ。

そう思い再び拳を握り構えた所で、横から声がかかった。

「けん君！ 大丈夫っ!？」

「ああ、すずかちゃん。無事だったか。すぐ終わらせるからちよつと待つてて」

「ちよちよちよちよい待ちつて堅一君！ 落ち着きい!!」

すずかちゃんと、そのすずかちゃんに車椅子に押された姿で現れたはやてちゃんの登場に心の中でホツとする。良かった、どうやら二人とも無事のようなのである。

その二人の背後には見覚えのない金髪の女性と、忍さん、ノエルさん、ファリンさんの姿が見えた。どうやら全員無事らしい。

全員の姿を認めた途端サツと感情の波が引き、目の前の女性の言つた言葉を心の中で反芻する。

「とりあえず、これ以上の敵対の意志は無いんだな」

「ああ、我らにその意志は無い」

攻撃のダメージから立ち直ったのか、女性は静かに述べてから両手を上へと翳した。要するに抵抗の意志が無い事の表れである。

その姿に身体のを抜き、構えを解く。

「それじゃあ、どういう事なのか説明して貰おうか」

未だ緊張を保った硬い言葉で、目の前に立つ女性へと告げるに留める。

「とりあえず、お家に入ろう、ね？ けん君」

「そ、そうや。こんな夜中に呼び出してごめんな、堅一君」

何か心配なのだろうか。自分の手を引く二人の言葉に、思わず深い、本当に深い溜息を零した。



月村家のリビング、洋風に纏められた大きな居間でフカフカのソファに座って紅茶を一口頂く。

仄かな甘味とシナモンの香りが芳しいシナモンティーが、爽やかに鼻孔を擽る。うん、とても美味しい。背後からトンカンと金槌の音が聞こえなければ更に爽やかな気分

になつていただろうと思う。

自分の正面に座るのは先程の桃色の髪をした女性と、金髪の女性、赤髪の子供。男のほうで背後で金槌を打っている正体である。

自分の横にはすずかちゃんはやてちゃんが座っており、すずかちゃんの横に忍さんがいる。

「それにしてもけん君、恭也から聞いてはいたけど相当やるわね」

「恭也さんが？ 何て言つてたんですか？」

「二刀では相手取れない、二刀を用い真剣でなければ、とか」

「おいおい自分相手にガチでやり合うつもりですか恭也さん。大人気なさ過ぎますよ。」

「恭也を叩きのめす事ができちやう人の子だもんね。今日のを見て納得しちゃったわ」

「うん、けん君凄く強かった。本気だとあんなに凄いなだね」

「まあ、ちつと怖かったけど。普段ニコニコしるのに無表情やったし」

はやてちゃんの言葉にああ、やっぱりとか思つてしまう。ああいう感情に任せて戦う時、どうしても顔が能面になつてしまう。思考は冷静に、心は熱くを実践すると、表情にならなくなつてしまうのだ。

怖がらせちゃったかあとちよつと落ち込みつつ紅茶をもう一口頂いてから、カップをコースターの上に置いた。

「それで、状況的に考えると。闇の書関連でこの人達が出てきたって事でいいのかな？」
「うん、その通りや。まあ出てきてすぐ色々トラブったんやけどな」

「出てきた時に叫んじやって、それを聞いたノエルとファリンと喧嘩しそうになっ
ちやっただよね」

ああなるほど。それではやてちゃんがブチ切れたと。色々お世話になつてる人に何
しとんじやこのアホンダラ、と。

「そ、そうやけど。そこまで言わんといてえな」

「あの時のはやてちゃんも凄かったよねえ」

クスクス笑うすずかちゃんの言葉に、顔を真っ赤にしてはやてちゃんが恥ずかしそう
に腕をポカポカとすずかちゃんの肩に当てる。

「すずかちゃんがいじめっ子や！ もうやめてえ！」

「あはは、ごめんごめん。でもその後、急に『魔力反応が近づいてくる』とか騒ぎ出し
ちやって」

「ああそうや。そんでまた暴れそうな四人を抑えようとノエルさん達が頑張つとつたん
やけど、ちっこいのが窓を割って飛び出してもーたんや」

「それで、いきなり自分に攻撃を仕掛けてきた訳か」

そう言いながら、目の前に座る赤髪の子供を見つめる。ブスーつとふくれっ面して横

を向いている彼女は、横目でこちらを見てはまた視線をずらすを繰り返していた。

「おい、ヴィータ。貴様何とか言え」

「……スイマセンデシタ」

女性に言われた彼女は、ふくれっ面のまま片言で謝罪をしてきた。何ともはや、きかん坊ですか。

「失礼。私はヴォルケンリッター、烈火の将シグナム。こちらはシャマル、貴殿を攻撃したこいつはヴィータで、あちらの男はザフィーラと」

「どうも、突然攻撃された中田堅一です。それにしてもヴォルケンリッター、か。じゃあ闇の書は？」

「……にあるよ」

自分の言葉に応えたはやてちゃんが、背中に差し込んでいたのであろう闇の書を前へ取り出す。

以前付いていたと思われる書を縛るようにしてあつた鎖が解けており、完全に本の体裁を取っていた。

「ふむ……ああ、今プレシアさんやリリナさんが居れば早かったのに。タイミング悪いなあ」

「そうやねえ、でもすぐ帰って来るんやろ？」

「なるべく早くとは言ってたから、それほど掛からないとは思うんだけどね」

本当にタイムリングの悪い事に、彼女達は今は近くに居ない。時の庭園に居るなら良かったが、そこより離れた場所なのでどうにもならないのである。

「とりあえず二人が帰って来るまでは、彼女達の衣食住をどうにかしないとね」

「任しとき、私が頑張ったるから」

「無理しないでウチも頼りなさいよ、はやてちゃん。余っている服とかあるから、とりあえずそれはあげるわね」

「えろうすんません、忍さん」

いいのいいのと笑顔で言う忍さんは、本当によく出来た女性だと思う。基本的に自分出来る範疇であれば人を助ける事に何も疑問を持たない、本当に良い人である。

ここまでの話の流れを、疑問を浮かべながら聞いていたシグナム達だが、はやてちゃんが一声かけて、状況を把握するするに至った。

「あんたらの生活は、私が預かったつちゆう事や」

「いえ、ですが主。我々は主の命により魔力の蒐集を」

「とりあえずはしなくてええ。今はちゃんと調べてくれる人が来るまで様子見や」

「ちゃんと調べる……ですか？」

金髪の女性、シヤマルの疑問の言葉に何度も頷いてすずかちゃんが応える。

「私達の友達のお母さんが、魔法関係でとつても偉い科学者さんなの。だからその人に調べてもらうんじゃないかな？　ね、けん君」

「うん、そうなるね。今は離れているけどすぐ帰って来るから、その時にまた今後の話とかができるようになるだろう」

「は、はあ。分かりました、そういう事ならば」

将と名乗ったシグナムが納得した事で、他の面子も納得したようである。

とりあえずこの場は収まったかなと思つた所で、ふわつと頭に眠気が走つた。

「それにしても、その格好がけん君の魔法使う時の服なんだね。学校の制服に似てる」

「そやねえ。この中はどうなつとんの？」

「ん、そうだね。相棒、解除」

《了解》

パシユンと解除すると、タンクトップにジャージの下という寝間着姿。これが変身前の自分の姿だった訳です。

「えつと、ごめんなあ。寝てる所……」

「いや、もういいよ」

「そうだ、じゃあけん君も今日はお泊りしたらどうかかな？　折角来たんだし」

「えつ」

良い事思いついたと言わんばかりのすずかちゃんの言葉に、思わずえつと驚愕の表情を浮かべる。何を言つとるんだこの娘は。

と思つたのは自分だけのようで、はやてちゃんもパンと手を叩いて賛成した。

「そーやね！ もう夜も遅いし、ほな、いこか？」

「えつちよ、本気ですか？」

「私達は別にいいよ。ベットは大きいから、三人くらい一緒に寝れるよ。ほらいこ、ね？」

「モテる男は辛いわねえけん君。すずか、あんまり遅くまで起きてちやダメよ」

「はあ〜い」

すずかちゃんに腕を引かれ、はやてちゃんに言われるがまま車椅子を押しすずかちゃんの部屋へ辿り着いた自分達は、結局三人川の字で寝る事となつてしまったのであった。

二人からする爽やか甘い香りに包まれたベットは、非常によく眠れてしまいました。がく。

第二十一話

深夜にすずかちゃんに呼び出され、何事かと思えば突然の襲撃。

見た事の無い赤毛の少女と無骨な男の強襲に、堪忍袋が一本切れて反撃してしまつた。

しかし、闇の書関係でいきなり戦闘になるとは、先が思いやられる……。



朝、どこで寝ようといつも通りの時間に目が覚める。

自分の横ではすずかちゃんとはやてちゃんが気持ちよさそうに寝息を立てているのを確認し、二人を起こさないようベッドを降りる。

しかし、本当に三人で寝れてしまったなあ。大きいベッドである。

部屋の扉を静かに閉めて、月村邸の居間へと向かうと、ノエルさんとファリンさんが既に色々と動いていた。

「あら、堅一様。おはようございます」

「おはようございます。すぐかちゃん達は未だ寝ていますから」

「お帰りになるんですか？」

「ええ。どうせ昼には会う事になると思うので」

そう、今日の昼には翠屋ではやてちゃんの誕生パーティーなのである。会わない訳が無い。

「それに、いつもこの時間は日課の鍛錬をしていますから。ランニングで家まで帰りますよ」

「そうですか。この度はありがとうございます」

言いながら深々と頭を下げるノエルさんに両手を振り応える。

「いやいや、魔法関連で迷惑かけてるのはむしろ自分達ですから」

「それでも、助かったのは確かですわ」

「まあ、そういう事なら。それじゃあ自分はこれで」

「はい、またお越し下さい」

再び頭を下げて見送ってくれるノエルさんに軽く返事を返してから、玄関を出て外へと飛び出す。

さて、ここから自宅まで走って一時間かかるかどうか。いっちょ鍛錬といきましょう

かね。



誕生会より少し前、今日は一日貸切になつて居る翠屋に集まつた主賓以外の面々で桃子さんの作るケーキの香ばしい匂いを嗅ぎながら店内を飾り付け、ケーキが焼けた頃に丁度店内の飾り付けも完了となつた。

ケーキ以外にも軽食のオードブルが用意され、テーブルの上には花と共にジュースと皿が用意されている。うん、見た目は完全に小綺麗なレストランである。

「よし、これで準備はOKかな」

「もうそろそろすずかちゃん達も来るって！」

携帯のメールを確認しながら嬉しそうに言うのはちやん。今日の誕生日ケーキでも桃子さんのデコレーションを少し手伝つたりと、中々気合を入れているのである。

「それで、一緒に夜中に出てきたっていう人達も来るんでしょ。大丈夫なの？」

店内の飾り付けを完了させたアリサちゃんと言う。確かにそこが不安の種と言うか、面倒な部分の一つではある。まあいざとなれば。

「()には俺も堅一君も居る。早々何も起こらんさ」

「ま、そういう事だね」

コーヒーやジュースの用意をしていた土郎さんの言葉に同意する。自分でもある程度の対応が可能だったのである、自分等より手練な土郎さんが一緒に居る限り、この安全は保証されたようなものだ。

土郎さんであれば、魔法を撃たせる前に事は終わらせられるだろう。

その言葉にホツとしたのか、アリサちゃんは一足先に休憩に入っている翔子さん、綾子ちゃん母子の所へと向かい一緒にジュースを飲み始めた。

今日の誕生会は今翠屋に居る自分達と、すずかちゃんノエルさんフアリンさんで全員である。はやてちゃんは普段からお世話になってるのにと大変恐縮していたが、こういう事は大勢でやるのがベストなのである。

翔子さんもはやてちゃんが泊りに来た時は綾子ちゃんが遊び相手としてお世話になってるので時間を空けて二人揃って参加してくれる事になった。

こうして賑やかな面子で誕生会の準備を終え、いよいよ出迎える段となった訳である。

「けんちゃん、車駐車場に停めたって。もうすぐ来るよー!」

「そっか。じゃあ皆さん準備お願いします」

それぞれに音だけ鳴るクラッカーを手渡して、出入り口付近に集まるように招集をか

ける。この事は既にすずかちゃん達には連絡済みで、店内にははやてちゃんが一番先に入れるよう調整して貰っているのである。

具体的にははやてちゃんが扉を開けて、はやてちゃんの車椅子をすずかちゃんが押すという役割分担。昨日からすずかちゃんは完全にはやてちゃんのエスコート役なのである。

全員にクラッカーが行き渡ったのと同時に、店の入口に飾ってあるベルがカランカランと小気味いい音を立て、来客を告げる。

そこには確かに、はやてちゃんとすずかちゃんが居た。

『ハッピーバースデー！ はやてちゃん！』

パーンという炸裂音と共に出迎えられたはやてちゃんはポカンとし、背後のすずかちゃんは楽しそうにクスクスと笑っていた。



クラッカーの音から始まり、はやてちゃんが定番のロウソクの火を吹き消した後、それぞれが持ち寄ったプレゼントを渡していた。

なのはちゃんは可愛らしく小さな花のついたヘアピン、アリサちゃんは小さな鍵のつ

いたシステム手帳、すずかちゃんは自分が気に入ったいくつかの本を、自ら作ったという押し花の葉と一緒に。自分は脚が治った後を考えて父さんが良いと言っていた筋力トレーニングの本を。

しかし、自分のプレゼントはみんなから大不評だった。

「ケン。アンタ、女の子にそのプレゼントはどうなのよ」

「私も他のにしたほうが良いよって言ったんだけどねえ」

アリサちゃんの言葉に翔子さんが苦笑いを浮かべながら応える。ちなみに翔子さん、綾子ちゃんからのプレゼントは綾子ちゃんお手製の『おてつだい券』だった。これにははやてちゃんも喜んでいたのだが。自分のプレゼントの何が悪かったのか。

「今後の事を考えたら絶対に必要だと思うから、さ」

「そうだとは思うけど、誕生日のプレゼントじゃなくてもいいと思うよ……」

自分の言葉になのはちゃんが一定の同意を見せるが、やはり基本的には反対派のようだ。言われてみれば確かにと思ってしまう自分の状態を、後の祭りと言うのだろう。

「あはは、まあ堅一君の言う通り今後必要やからな」

「ごめん、何か改めて考えておくよ」

「期待せんで待つとるわ」

あははと笑いながら言うはやてちゃんの言葉に思わず唸る。ぐぬぬ、次こそは皆から

も同意を得られるプレゼントを用意しなければ……。

パーティーの参加者は勿論自分達だけでは無く、昨夜出現したヴォルケンリッターの四人も居る。ただ、一番小さなヴィータ以外はどこか所在無さげに席に着いており、何とも言い難い。

ヴィータはヴィータでオードブルを自分の皿に盛っては席に戻り「ギガうまつ」とか言いながら黙々と食事を取っている訳で。四人一緒に現れたにも関わらず、どこかバラバラだ。

まあそんなもんかなと思いつながら、自分は小学生組で談笑していた席を外し、ヴォルケンリッター四人の居る席へと向かう。

「どうも。調子はどうか」

「ああ、これは。……いや何とも、我々がこの場に居て良い物なのかと思つてな。主からすれば我々は突然現れた存在である訳だ。それは昨夜の内に思い知らされた」

はあ、と溜息を付くのはヴォルケンリッターのリーダー、烈火の将シグナム。戸惑いやら何やらで、現状に混乱しているようである。

さもありなん。自分が知っている闇の書の事情は極僅かではあるが、彼らの存在は歴代の闇の書の主からすれば謂わば奴隷である。それがこうして主と同じ場に居て良いのかと考えているのだろう。

まあ唯一名、黙々とフオークで肉やら野菜を食っているちびっ子は己の意志のままに食事を食っている訳だが。

「はやてちゃんとの関係に関しては自分達でどうにかしてくれ。自分は唯、あの子達に害が無ければ何とも思わんよ」

「そう、であろうな。我らの事を何とも思っていない訳だろう、貴殿は。今の様子でもそれは理解できる」

シグナムが自分の心情を理解して呟く。その通り、自分としては彼女達ヴォルケンリッターがはやてちゃんやその周囲に危害さえ加えなければ『どうでもいい』と思っっている。自分にとつて居ても居なくても変わらん存在である事は確かである。

自分は博愛主義者で無ければ硬直的性蔑視信者、所謂フェミニストでも無い。助けたいのははやてちゃんであり、こいつらでは無いのだ。

昨夜の襲撃に関してもどうでも良い。結果的に自分は怪我を負わず、誰も犠牲にならずこうして日々を過ごせているのだから。一々恨みを抱いている価値すら彼女達には見出していない。

なのはちゃんやはやてちゃんが聞けば怒りそうな事ではあるが、結局そういう事である。

今こうして彼女達に話しかけたのも、彼女達から何か引き出せないかと思つての事。

はやてちゃんの体調に関する何かを。

だが結果は徒労に終わりそうである。

「残念ながら、我らは何も分からん。今までに主のような状態にあった者が居たのか、それすらも分からぬ。我らとしても、主があのような状態にあるのは本意ではない」

「そうか。まあ分からないものはしょうがないな」

自分が聞くより早くシグナムのほうからははやてちゃんの状態に対する回答があり、少なからず落胆する。

彼女達ヴォルケンリッター、闇の書との付き合いが一番長いのであろう存在からの回答が不明である事が、状況の悪さを物語っている気がするのだ。

自分達が一番理解している等と嘯かれるのも問題だが、理解できていないという回答も問題がある。即ち、闇の書に関する問題が致命的なレベルで発生しているのでは無いかという事。

プレシアさんやリリナさんですら解決出来ない問題であった場合、はやてちゃんはどうなってしまうのか。そこが一番心配である。

現在までにプレシアさん達が調べた所では条件が揃うまでは内部の精査が出来ないと言う事。条件とはヴォルケンリッターの出現や、本を縛っていた鎖、所謂物理結界の解除が当て嵌る。

その二つはクリアされたので精査が可能となったのだろうが、精査しても結局分かりませんでした、暴走しますではどうしようもない。

何とかそれだけは避けねばならない事態である事は理解しておくべきである。

「なんや堅一君、こつちにおつたんか」

横からの声に気付けば、はやてちゃんが一人で車椅子を動かして自分の横へちよこんと存在していた。

「ああ、はやてちゃん。どうしたの？」

「堅一君がおるのが見えたからな。それに、私もその子達と話をしとかんといかんし」

そう言うと、はやてちゃんは前に座るヴォルケンリッターの面々へと向き直った。

「まあ、なんや。初めは色々あつたけど、これからは一緒に暮らしてくんやから、お互い協力していこうや」

「主……」

「はやてでええよ。主なんてガラちゃうし、なんや私ら家族みたいなもんになるんやからな」

やっぱりははやてちゃんは、自分何かとは違う。どこまでも優しく暖かで、人懐っこい心を持った少女である。

その心が何処かなのはちゃんに似たものが見えたから、自分は彼女と友人になったの

かもしれない。雰囲気や考え方は全然違うのに、その心はなのはちやんと同じくどこまでも真つ直ぐな少女。自分の持つていない心を持つ彼女だからこそ、助けたい。

はやてちゃんとヴォルケンリッターのやり取りを見ながら、改めて彼女を救うという決意を、この日心の中で固めた。



フエイト達は、はやてちゃんの誕生会から十日程経ってから帰ってきた。

帰ってきてすぐさま翠屋にやってきた彼女達から話を聞けば、どうやらアリシアとフエイト、二人の存在が何とも難しい扱いになっていたそうだ。

アリシアは過去の動力炉事故の被害者である事がミッドチルダという当時テスタロッサ一家が住んでいた世界の病院の記録から確認できたそうなのだが、治療が行われた記録も無く、かといって死亡届等が提出された記録も無い。

完全に宙ぶらりんな状態だったのだが、この度快復した事で、改めて彼女の戸籍に関する諸々を手続きを行った訳だが、現在の小学1年生相当の外見年齢と戸籍上の年齢では大きく剥離しており、それをそのまま申請する訳にもいかないという事だった。

またフエイトという存在が、これはもう完全に0から1が発生した訳で、元々戸籍等

も存在しない彼女に対する申請も必要であり、もうどうしたもんかと考えたらしい。そこで諸々の問題を解決する一手を、プレシアさんが取った。つまり、『大人の対応』^{オカネのカ}というものである。

何でも相当な金額を政府やら管理局に寄付したらしく、リリナさんの手続きもついでに紛れ込ませて力技で一気に解決してしまった訳だ。

だがそれをするにしても時間は必要になる訳で、結局今までかかってしまったという事らしい。

「まあ元々資財はロストロギアを個人所有可能なよう買い取つても有り余る程持つていた訳だし、今回の出費も特別痛いという訳でも無かったわ」

久しぶりの翠屋のコーヒーをゆっくり味わいながら言ったプレシアさんの表情は、微かに悪い顔でした。

それにしても帰ってきて真つ先にシユークリームとコーヒーを頼む辺り、かなり海鳴の色に染まってしまっているなあと思う。

そしてその娘達も当然と言うか何というか。相変わらず嬉しそうなのはちゃん達と一緒にシユークリームをハグハグと食べている。

ちなみにアルフにはペット用ビーフジャーキーだ。お前狼だろ、それ犬用だぞいいのかと突っ込みたい。

「ま、何にせよこれで諸々の手続きは終了。後は家を契約すれば全部終わりよ」
「そういうと思つて、この物件押さえてあるわ」

一緒にテーブルに着いていた桃子さんがスツと取り出したものは物件の間取り図。場所を見てみればなるほど、高町家と翠屋の間にあるマンションのようで、少々値は張るがファミリートイプの好物件のようである。

階層も上の方のようで、ベランダ辺りからなら高町家も見えるだろう。

「ありがと、早速明日にでも契約してくるわ。今日はもう時の庭園でゆっくり寝たい気分よ」

首をコキコキ鳴らしながら言うプレシアさんは、本当に疲れているようである。長旅というのも気分的に疲れただろうし、各種手続きも頑張ったみたいだし、しょうがない事である。

「プレシア、そろそろあの話を」

「ああそうね。忘れてたわ、ありがとうりニス」

横から何かをせつつくりニスの言葉に礼を述べてから、プレシアさんが自分へと向き直る。

「はやてさんの事なのだけれど。明後日にはやてさんの言う小父さん、ギル・グレアムが来るわ。会談のセッティングをして頂戴」

「ああ、その話ですか。だから自分だけこの席なんですね」

そう、自分だけプレシアさん、桃子さん、リニスという所謂大人組の席に座らされている。その理由が、今言ったグレアム小父さんに関する話なのだろう。

「そういう事。彼は強かな人間でね、当然だけど善意ではやてさんを支援していた訳では無いの。ま、潔さも持ち合わせているみたいだけどね。リンディ達が詰めた所でありはやてさんの件を白状したわ」

「その人の思惑はどうでもいいですけど。会談というのは小父さんと管理局のリンディさん達、はやてちゃんとヴォルケンリッターって事ですか？」

「いえ、ウチのフェイト達も、貴方も同席して貰うわ。闇の書の対策に関する会議も一緒にしてしまおうから」

サラリと言われた言葉に思わず目を見開く。何とも大掛かりな話になりそうな気配である。

「管理局のほうで対策チームを作つてね。今回私が地球に戻つてくると一緒にチームを組んでこちらに来ているの。今は色々準備しているらしくて忙しいみたいけど、明日には身体が空くらしいのよ。だから明後日」

「それはまた。随分気合入っているんですね」

「そりゃ当然よ、管理局も闇の書とは因縁があるからね。ギル・グレアムを旗印に全面的

に私達をバックアップしてくれるそうよ」

私達つて。まるでメインがこちらになりそうな話だ。

「まるで、じゃなくてメインで動くのは私達よ。解析は私とリリナ、リニスでやるから。あなた達ははやてさんのケアとか場合によって現地協力者として戦闘行為もして貰う事になると思うから」

「管理局はどうするんですか?」

「一応武装隊も来てるけど、戦力としてはあなたとなのはさん、フェイトの三人より下よ。場合によってはあなた一人で潰せる程度の戦力」

「えっと、弱いって事?」

「じゃなくて、あなた達が強いだよ。傲慢じゃないけどウチのフェイトは魔導師として優秀、もちろんなのはさんとあなたもね。実戦経験もあるし、魔力量も十分。はつきり言えばあなた達ぐらいの魔導師は、管理局には一握り程度しか存在しないのよ」

驚くべき管理局の実情。自分の知っている魔導師は、管理局で言えばほんの一握りに入る実力者であるという事実は結構衝撃的だ。ぶっちゃけて言えば、大丈夫なのかと。「組織立って動く分には何の問題も無いわ。今回の闇の書に関して言えば、主にバックアップを務めて貰う事になるから。実は今回の作戦は、管理局側で動くのはギル・グレアムとアースラの人員だけなのよ」

「それはまたなんで」

「過去の事件もあって、管理局側では余り関わるべきではないという意見が多いの。放っておけば管理外世界が一つ消滅するだけだから。犠牲を出す可能性を加味して闇の書を確保出来たとしても、それに替わるメリットが少ないという判断よ」

「何とも現金な話で」

「それが組織というものよ」

涼しい顔で言うプレシアさんの言葉に、癪ではあるが納得してしまう。組織として見た場合、管理外世界に存在する闇の書を確保できた時のメリットが少なすぎるという事か。

管理外世界、つまり管理局の管轄外にある世界がどうなろうと、管理局ではどうでも良い話ではある。

そして闇の書を確保出来た時のメリット、それが見当たらない。良くて過去の被害者の心を慰められる程度なのだろう。人員を割くには余りにも危険が多すぎる、と。

「我々も結局個人の事情で動いている訳だから、そこら辺はしょうがないわよ」

「ですね。まあ別に関係ない人達には何も期待してませんから。自分としてはどうでも良い話です。プレシアさんとリリナさんが解析してくれれば、何とかなるでしょう」

「そういう事」

結局そういう事なのだ。プレシアさんとリリナさん、二人さえいれば恐らく何とかなってしまう。だから別に、組織のバックアップなど必要とは思わない。

「ま、早速明日辺りから解析を始めたいと思うわ。はやてさんの都合つけておいてね」「了解します」

プレシアさんの言葉に即答した。

◇◇◇◇◇

明けて翌日。昨日の内にはやてちゃん達に都合をつけてもらい、早速久しぶりの時の庭園へとやってきた自分達。はやてちゃんが一通り喜んだ後は、早速はやてちゃんとヴォルケンリッター達、闇の書の解析作業が始まった。

「リリナ、準備は出来てる?」

「OKですよ。仕入れた機材も繋げられていますし、いつでもいけます」

なんとこの二人、管理局の本局と呼ばれる所で暇に任せて研究用の機材等も新たに調達してきたらしい。元々あるプレシアさんの機材に、ハズラットの叡智を誇っていたらしいリリナさんが時の庭園に組み込んでいた機材、そして今回新たに調達した機材と、ここだけで次元世界一の研究施設となるだろうとは、呆れ顔で語ったりニスの言であ

る。

「主、本当に大丈夫ですか……」

「大丈夫やて心配せんでも。フェイトちゃん達のお母さんなんやから、信用しとき」

心配そうなシグナムの言葉にも動じず、はやてちゃんは笑顔で言う。

こういう時の肝の座り方はなるほど、はやてちゃんだなあと妙に納得してしまう。いざという時の心構えがこの年でしつかりとしている。

「はやてさん、闇の書を。ヴォルケンリッター達はそこのベッドに全員横になって。はやてさんもね」

「了解です。闇の書、ちよつと調べるから大人しくしとつてな」

はやてちゃんがそう言うと、闇の書ははやてちゃんの顔辺りまで浮き上がり、まるでペットがご主人様にするように頬に表紙を擦り付ける。アレ、あんな風に自律行動も出たのか。

一頻りじやれ合いが終わると、はやてちゃんは大人しくなった闇の書をプレシアさんへと手渡す。

「お願いします。ちゃんと調べたつて下さい」

「任せなさい」

受け取ったプレシアさんは自信ありげに頷き、闇の書をベッドの脇にあるポットへと

入れる。蓋を閉めて解析準備を始めると、プレシアさんははやてちゃんを一旦抱えてからベッドへ横にして、機材のセッティングへと入った。

「……よし、リリナ。こちらは準備完了よ」

「了解です。それじゃあ皆さん、これから解析始めちゃいますので大人しくしてて下さいね」

リリナさんが言うと共に、みんなが横になっているベッドが緑の光を放ち始める。ヴォルケンリッターの一番ちびつ子が驚いたようにぎゃーわーと騒ぎ出したがシグナムが一喝すると静かになった。なんだ、本当に子供かアレは。

リリナさんとプレシアさん、リニスの三人はそんな事はお構いなしに空間ディスプレイに表示されたモニターを見ながら投写キーボードを華麗な指捌きで操り作業を進めていく。

「あつ、とりあえずはやてちゃん。これから眠くなると思うから、逆らわないでそのまま寝ちやつてね」

「はい、わかりましたー」

「堅一、寝顔を見たりしちや駄目よ」

「はいはい、わかつてます」

つまりは出て行け、という事らしい。このまま無言で出て行くのも何なので、最後に

はやてちゃんへと話しかける。

「はやてちゃん、また後でね」

「うん、ありがとう堅一君」

笑顔で応えてくれたはやてちゃんに笑顔を返しながら、自分是一路、今頃部屋で引越しの準備をしているアリシアとフェイトの下へと向かった。



部屋の片付けが一通り終わっているらしいフェイト達の部屋には、桃子さんが調達していたのだろうダンボールがちよこちよこ積まれていた。

数にして4つ程、その数がモノがどれだけ少なかったかを物語っている。

「引越しもラクでいいな、この数」

「日常的に使うものだけだからね、必要なのは。時の庭園を引き払う訳でもないし、問題ないさ」

自分の言葉に同意を示したアルフの言葉に頷きながら、もう掃除モードから開放され部屋で好き勝手過ごしているアリシア達へと声をかける。

「二人ともお疲れ。とりあえずみんなて翠屋に行かないか」

『行くー!』

二人揃って言った言葉に思わず苦笑する。ほんと、傍から見るとまるつきり双子である。

自分は転移魔法が使えないし、アリシアも同上。なので結局フェイトにお願いして三人と一匹、アルフ人間モードだから四人か。で、翠屋へとお邪魔する。

「あら、いらつしやい。もういいの? けんちゃん」

ランチタイムを丁度過ぎた辺りでやってきた自分達を笑顔で出迎えてくれた桃子さんの言葉に頷きながら応える。

「今丁度精査に入った所です。ランチ三人分と肉を一人前。自分はハヤシライス、二人共ランチは何がいい?」

「ハンバーグ!」 「私はスパゲツテイカルボナーラで」

アリシアは元気良く、フェイトは落ち着いた感じでそれぞれ好きなものを注文する。こういう時は、何とも対照的な二人である。

「はい、ちよつと待っててね。先にジュース出すわね、何がいい?」

「自分はアイスコーヒーで」「オレンジジュース!」「アイスのレモンティー」「ミルク!」

流石にアルフはミルクですか、狼だもんなあ。笑顔で注文を受けてくれた桃子さんを待ちつつ、四人でテーブル席に座る。

今日は平日で、また自分は学校を休んだ訳だが、まあしょうがないという事で。一人の命が掛かっている訳だから、誰も文句は言うまい。

「久しぶりの翠屋のランチ」 「もうアリシア、はしやぎすぎだよ」

それに、久しぶりの友人とこうして昼食を共にするのも、偶には良いだろう。

今はとりあえず、この暖かな一時を楽しもう。

第二十二話

闇の書の精密検査が始まった。

帰ってきたプレシアさん、リリナさんの下、はやてちゃんとヴォルケンリッター、闇の書本体の調査を行う。

グレアム小父さんも地球に来ているようだし、これから一層闇の書関連で慌ただしくなってくるな……。



精査の翌日、自分を含め海鳴の魔導師とはやてちゃんの友人であるアリサちゃん、すずかちゃんを交えた仲良し組一同で時空管理局の艦船アースラへと招待された。

事前の話通り、本日ここでグレアムさんとはやてちゃんの面談が行われるのである。

「皆さん、お久しぶりです」

招待された自分達にまず挨拶をしてきたのがジュエルシードの件でもお世話になっ

たこの艦船アースラ艦長であるリンディさん。今回もやはり関わってくるという事らしい。

その隣では息子のクロノ、エイミイさんも一緒に頭を下げる。自分達も軽く会釈をすると早速リンディさんは自分達を艦内を案内する。

リンディさんに先導されて向かった先は、アースラ艦内に設けられている大食堂。

どうやらここで、一先ず待機のようなのである。

「はやてさんは一緒に来てくれるかしら。グレアム提督の所まで私が案内します」

「ホンマですか、お願いします」

リンディさんの言葉にはやてちゃんは嬉しそうに頷くと、そのまま車椅子を押されてリンディさんと共に食堂を出て行った。

何やらヴォルケンリッターが不安そうな表情をしていたが、はやてちゃんに関しては安心できるだろうと思う。リンディさんがはやてちゃんに対して何かするとは思えない。

「君達はここで時間を潰して欲しい。好きな飲物を言ってくれ、用意するから」

銘々に好きな所へと着席、子供組は子供組で一塊になつて座るとクロノがそう促してくるので、みんなで好き勝手に注文する。そうして頼んだ注文を持ってきたのはエイミイさん。クロノは一人、ヴォルケンリッターの正面へと座りムツツリ顔で彼女達を隠

す気もなく監視していた。

「……………失礼だが。我々に何か問題が」

正面に座ったクロノの態度が気になったのだろう、代表であるシグナムがとうとう口を開き戸惑いがちにクロノへと話しかけた。

対するクロノもクロノで、眉を若干傾け不機嫌そうな顔でシグナムの顔を見つめる。

「11年前、闇の書の暴走が発生した時の事を覚えているか？」

「11年前……。シャマル、どうだ」

「ごめんなさい、分からないわ。過去の事は相変わらず、霞がかったように朧気なの」
ヴォルケンリッター二人の言葉に、クロノは大きく溜息を吐いた。

「そうか。11年前にも闇の書の主が現れ、我々時空管理局が対処に当たった事件があった」

「その話はプレシアから聞いている。我々には何故か詳細な記憶が無いのだが、な……」
「闇の書の主を護送中に闇の書が覚醒し、時空管理局の艦船が一隻、犠牲になった。その船の艦長であった僕の父が最後に闇の書と共に小型艇で自爆し、その事件は終息した」
クロノの言った言葉にヴォルケンリッターが息を呑む。目の前の少年が、紛れもなく闇の書の被害者の一人だったのだ。

そしてクロノが被害者の子供であるという事は当然、母親であるリンデイさんも被害

者の妻という事になる。彼女達の気分としては、色々複雑だろう。

「僕は君達を責めるような事はしない。だが、償いは必要だし、君達を責める者も居る事は理解しておいて欲しい。闇の書の被害は、それほど大きなものなんだ」

「……そう、なのだろうな。済まない」

クロノの言葉にシグナムが頭を下げる。だが、彼女達には分かっている事がある。どこか、他所で起こった事件を語るようなその表情は、自分達が過去に行っていた事に対する実感を感じる事が出来ていない現れだった。

それがクロノにも伝わったのだろう、彼はその不機嫌そうな表情を諦めにも似たものへと変えていた。

「まあいい。今は闇の書の対策に集中するべきだ、その際には君達ヴォルケンリッターにも協力して貰う事になる」

「もとよりそのつもりだ」

シグナムの返答と共に食堂の入口の扉が開かれ、はやてちゃんと車椅子を押すリンデイさん、その後ろに初老の男性と年若く見える女性二人が姿を表した。

「さて、必要な人員は集まったようだ。これから闇の書の対策会議を始めよう」



食堂に集められた一同は、まず現状の説明を受ける事となった。昨日精査したばかりの闇の書に関する詳細な内容を、プレシアさん、リリナさんの二人から説明して貰う。「まずは昨日の検査結果から報告するわ。こちら、現在の闇の書のデータ構造になつて
いるわ」

プレシアさんがそう言つて提示した画像は、何だか分からない文字が幾何学的な文様を浮き出しているようにしか見えない。

「先生、これじゃ分かりません」

どこから取り出したのか指し棒を振るいながら喋るプレシアさんに、すずかちゃんが手を上げて言う。

すずかちゃんの言葉にプレシアさんは一つ頷くと、違う画像へと切り替えた。

「今のデータ構造をビジュアル的に見たものがこちら」

なら先にこつち出せよと突っ込みたいが突っ込んだら負けなのだろうと思う。

二枚目の画像では、真っ黒い空間に存在する白銀の髪を持つ女性と、蠢く無数の蛇が女性を守るかのようにドームを構成しているのが見えた。

「まずはこの女性、恐らくは闇の書の管制人格ね。解析をかけようとした所この蛇が邪魔をしてこのように対応されてしまったわ。恐らくこれが、防御プログラム」

「ただこのプログラムは多くのバグを内包しているようで、管制人格の命令を受け付けずに調査機材に対して改性データを大量に送ってきたわ。まあそこは何とか凌いだんだけど」

「つまり、闇の書に関する問題の大元はこの防衛プログラムという事よ」

あつさりと言ったプレシアさんの言葉に、一瞬食堂がざわつく。ざわつきの元はヴォルケンリッターと管理局側。我々仲良し組としてはふーんとしか言えない。

「先生、それじゃあこのプログラムを消去すればいいんじゃないですか？」

「はいアリサさんいい着眼点よ。確かにその通りなんだけど事はそう単純じゃないの」

まるで本当の先生のように笑顔で言うプレシアさんに突っ込みみたい衝動に駆られるがやはり負けたくないのも何も言わない。そして何故か嬉しそうなアリサちゃんにも突っ込みたい。

「次はこの防御プログラムの解析データ。凡そにだけども機能が割れたわ」

「はい。この防御プログラム『ナハトヴァール』には、無限再生機能が備わっている事が確認されています。またマスター認証機能の破損、過去に行われたプログラムの改変により完全起動後に暴走するよう施されている事も確認されています」

「今回の調査では八神はやてさんの魔力を仲介して中を覗いた訳だけれど、それが無ければ調査中に主を取り込んで暴走されていたかもしれないわね。ああそれと、はやてさ

んの脚の原因もこの防御プログラムの維持に必要な魔力を捻出する為にリンカーコアを侵食しているからだと思われるわ」

プレシアさんとリリナさんの軽快なトークに誰も口を挟めない。というか結果を述べているだけなのだろうが、色々とへビーな内容が多すぎるのだ。

「という事で、まず何とかするには管理者権限を持つてアクセスする必要があり、それをするには闇の書を完成させなければならぬ。管制人格に関しては脅威は無いと思つて良いわ。それとヴォルケンリッターも」

「ヴォルケンリッターに関してはプログラムの保有権を管制人格が所有しているみたいです。ただ防御プログラムが少なからず影響しており、過去の出来事に関するデータの消去、若しくは改竄が毎回行われているようです。そのデータすら魔力へと変換し防御プログラムの増強へと使用されている痕跡があります」

「という事は、我々が今一度闇の書内へと戻つた際には」
「またまっ更な状態で始まる訳ね。闇の書に関する必要なデータだけを保有した状態で」

プレシアさん達の言葉に、シグナムとシャマルが愕然とした表情で答える。他の二人も沈痛な面持ちで二人の説明を聞いていた。自分達に気付かない欠陥があつた事が名と言された事でショックを受けたのだろう。致し方のない事ではある。

二人の説明が一段落した所で、クロノが手を挙げて質問した。

「つまり、我々の対応としては一先ず魔力の蒐集を行わなければいけない、という事か？」

「簡潔に言えばね。闇の書の完成後、暴走までに若干のタイムラグが予想されるのでその間にはやてさんが管制人格のマスター認証を受け、防御プログラムを切り離す。防御プログラムを破壊後に我々でバグの修復を行うというのが私達の提案できる唯一の解決策ね」

「その対応策の成功率は？」

「はやてさん次第、とは言わないけれど頑張ってもらえばあるわ。高い訳では無いけれど、決して低くはない数字よ」

「自分の事やし、任せといて下さい」

ドン、と自分の胸を叩いて言うはやてちゃん。何とも肝っ玉の座ったお嬢さんだ事。

「これで闇の書に関する説明は以上よ。対策に関しては管理局にお任せするわ」

プレシアさんは言う事は言ったと言いたげな顔で説明を終え、リリナさんと一緒に席へと戻る。ちよつとすつきりした表情は、きつと研究者らしい仕事を久々にした所為だろう。

全く何やってるんだかと思っていたら、食堂に設けられた壇上に、先程見かけた初老

の男性が登った姿が視界に入った。

「さて、それでは対策会議を続けよう。とは言っても先程プレシア女史が説明した通り、対策としてはまずは闇の書を完成させなければいけないらしい。なので、ここで取り急ぎ希望者を募り、魔力の提供をお願いしたい。勿論私は魔力を提供しようと思うし、業務に支障の無い範囲で武装隊にも提供して貰うつもりだ」

初老の男性——恐らくアレがグレアム小父さん——が言うと、クロノとリンディさんが同意する。まあ最短距離で目的を果たすのであれば魔力のある人間が提供するのが一番手っ取り早いのは確かだろう。

ならば自分も、と思った所でステイルから声が上がった。

《相棒は止めておいた方が良いでしょう。不確定要素が多すぎます》

「不確定要素？　なんでだ」

唐突な言葉に思わず問いかける。

《相棒の場合、他の方と違って魔製結晶と肉体との結びつきがより密接なのです。下手をすれば最悪の事態も予想されます》

「私も、ケン君の提供には反対かな。危険な可能性が高いから」

ステイルの言葉にリリナさんが同意する言葉を述べる。ふむ、最悪の事態ね……。

「下手をすれば死ぬかもしれないって事？」

《場合によつては、ですな》

ふむ、確かにそれは勘弁だな。

「大丈夫だよけんちゃん。私が代わりに提供するから」

「私も」

自分達の会話を聞いていたのだろう、なのはちちゃんとフェイトが自分に声をかけてくる。

何とも歯がゆい気持ちではあるが、致し方ない。

「申し訳ないけど、お願いね二人共」

「まかせて!」

何故か自信満々に応えたなのはちちゃんの姿に、思わず笑顔を浮かべてしまった。

「それではヴォルケンリッターの諸君、まずはこの場にいる人員から蒐集を頼む」

グレアムさんの指示に従いヴォルケンリッター、シヤマルが闇の書を手に取り各々の席へと回る。

「なるべく痛くないようにしますから」

そう言いながら蒐集を開始してはいるが、どうにも蒐集を受けている人の表情は辛そうである。

「……なのはちちゃん、やっぱり辞めたほうが」

「だ、大丈夫、大丈夫だよ。なのは注射とか平気だもん」

周囲の状況を見て若干不安そうな表情を浮かべたなのはちゃんに声をかけたが、気丈な答えが返ってくる。表情は相変わらず不安そうではあるが。

どうしたものかと考えながら、今さつき蒐集が終わったプレシアさんへと声をかける。

「プレシアさん、どんな感じなんですか……」

「……何というか、無理矢理魔力を引きずり出される感じね。回復魔法を後でかけてくれるからラクになるけれど」

「うわぁ」

想像するだけで嫌な感じだった。

そしてとうとう順番的に最後、フェイトとなのはちゃんの番が回ってきた。

「ごめんなさいね、少しだけ痛むかもしれないけれど」

「だ、大丈夫、です」

優しく言うシャマルの言葉にまたもや気丈な返事を返すのはちゃん。フェイトも同様に静かに頷き、二人とも苦痛の表情を浮かべながら、魔力の蒐集を完了させた。

「はぁ……はぁ……」

息が荒くなる二人に心配そうにアリサちゃん達が声をかけるが、どうも返事をする余

裕が無いのか、黙って頷くだけだった。

ふと、正面を見るとシャマルが自分の前へと立っている。

「貴方も、大丈夫かしら？」

「えつと……ごめんなさい。自分は少し事情で、蒐集は辞めたほうがいとドクターストップが」

「え、そうなの？」

きよとんとした表情のシャマルに横からリリナさんが声をかける。

「その子はちよつと特殊なので。申し訳ないけれど、もしもの時だけにして貰えるかしら」

「そう、ですか。……この子程の魔力があれば、大分ページも埋まるんですけど」

「ごめんなさいね」

残念そうな表情ながら、納得してくれたシャマルに心の底から申し訳無く思う。何だか自分だけ提供していない事でかなり罪悪感がある訳だが、しょうがないと割り切るしかないか。

そして、蒐集のダメージからある程度回復したらしいグレアムさんが、プレシアさんへと声をかけた。

「ドクター、蒐集のダメージはどの程度で回復できる？」

「そうね……万全を期すのであれば、一週間ほどは魔法を使わずに居れば大丈夫だと思うわ」

「なるほど。ではこの後アースラに乗っている武装隊の人員から希望者を募り蒐集を行なってもらい、一週間経ってから、無人世界の魔導生物から蒐集する為の行動を取るとしよう。みんな、それでいいな」

グレアムさんの言葉に全員が頷く。

いよいよ、本格的な闇の書修復計画が始まろうとしていた。



一週間後という事は少なくとも一週間は暇な時間がある訳だが、自分達には新たな仕事が残っていた。

「囑託魔導師？」

「そう。簡単に言えば管理局の仕事を正式に手伝える資格を取って欲しいのよ」

とあるマンションの一室。何とアースラの人員が地球に降りて闇の書対策に関する拠点としているファミリータイプのマンションがあり、そこに自分となのはちゃんは呼び出されリンデイさんに説明を受けていた。

囑託魔導師、業務を囑託できる人員という事なのは理解できるが、突然なぜこのような話が出てきたのだろう。

そう質問を素直にぶつけると、リンデイさんは申し訳無さそうな表情で事情を説明してくれた。

「現在ただの人員としては足りているんだけどね。ほら今回無人世界へ行つて蒐集しなければならぬじゃない」

「ええ、確かその予定ですよね」

「その場合、ヴォルケンリッター達も駆り出す訳だけれど。何かあつた時にヴォルケンリッターを御する人員がクロノかグレアム提督の使い魔しか居ないので。でもクロノも彼女達も、武装隊の指揮とかをしなければいけないからヴォルケンリッターと常時行動する事が出来ないの。だから」

「可能性として御する事の出来そうな自分達にそれを囑託したい、という事ですか」
「そういう事よ。こちらの都合で申し訳ないのだけれどね」

心底申し訳なさそうに言うリンデイさんに、それも仕方ないかと思う。クロノは現場指揮やら武装隊への指揮、それと未だ姿を現さないユーノとの連絡などに忙しいのを見ているし、あのグレアムさんの使い魔二匹も何やら忙しいようである。

人手不足な印象は否めない。

「どうする、なのはちちゃん。自分は良いんじゃないかと思うんだけど」

「うん、私は問題ないよ。そういえばフェイトちゃんは？」

「フェイトさんには既に打診してあって、プレシアの許可も貰ってるから今嘱託試験の勉強中なの」

「試験があるんですか？」

「ええ。簡単な筆記試験と実技、儀式魔法4種と戦闘技術の適性試験ね」

試験か。何とも大変そうな。

自分と同じ事を考えたのか、なのはちちゃんも若干嫌そうな顔をした。やっぱり試験と
いうのが気になる。

「それで、お願い！ もうあなた達しか頼れる子が居ないのよー」

目の前でパンと掌を合わせてお願いするリンデイさんに、もうしようがないなと思
いつつ分かりましたと承諾する。

すると、リンデイさんは嬉しそうな表情で脇に置いてあった紙袋を二つ、机の上にド
ンと置いた。

「これ、嘱託試験の参考書と、ミッドチルダ語の教本。覚えておいてね」

「こんなにあるんですか……」

紙袋の中にズラリと並べられた参考書に思わずうわあと声をあげるなのはちちゃん。

その気持ちはよく分かる。

「じゃあ二人共、よろしくね」

笑顔でそう言うリンデイさんに、思わず辞めとけば良かったと思ってしまった。



蒐集が行われてから一週間。小さくなったリンカーコアも回復し、いよいよ無人世界で魔法生物に対する蒐集活動を開始する手筈が整った。

この活動には当然地球側の現地協力者として自分となのはちゃん、フェイトの三人が協力する事になるのだが、そこへ待ったをかけた人物が現れた。

「……我々も管理局の武装隊にも問題は無い。だが、この少女達を活動に参加させるのは」

そう苦言を呈するのは、ヴォルケンリッターの将、シグナム。

彼女達活動の中心となるヴォルケンリッターが、自分達三人の参加を拒んだのである。まあ言いたい事も理解できる訳だが。

「つまり、自分は兎も角なのはちゃんとフェイトの実力が分からないから、参加させるのはどうなのかという事か」

「概ねは。だが堅一、私は貴様の魔法も見た事が無いのでな」

どうやら自分も含まれるらしい。さてどうしようかと思つた所で、なのはちゃんがレイジングハートをセットアップ。

「じゃあ、模擬戦しましょう。それでいいですよね」

「ん、ああ。相応の実力を見せて貰えれば問題無い」

「じゃあ私も」

シグナムの返事にフェイトもデバイスをセットアップし、二人共臨戦態勢に。だがしかし。

「やるなら訓練室にしてくれ」

事の成り行きを見守っていたクロノの頭を抱えながらの一言で、場所を訓練室へと移す事となった。

訓練室に移ってからなのはちゃんとフェイト、シグナムとヴィータという2対2の構図でお互い向き合う。

戦うヴィータの姿は見た事あるのだが、以前と違い赤を基調としたゴスロリ風の衣装に身を包み、シグナムも桃色の衣装に白の外套といった騎士風の装束となっている。

「おお、よおできとるやん。さすが私！」

「アレ考えたのはやてちゃんなのか」

「そうやで。戦うには騎士甲冑が必要やとか言うからな」

自分と同じように見学していたはやてちゃんが嬉しそうに応える。なるほど、彼女達は何だかんだで仲良くなっているようだ。

はやてちゃんの後ろに控えるように立っているシャマルとザファイラにも、きつと騎士甲冑とやらがあるのだろう。やはり魔法は便利である。

そうこうしていると、いよいよ模擬戦の開始となった。

フェイトが飛び出すとシグナムが迎え撃ち、援護しようとしたのはちゃんをヴィータの誘導弾が遮る。何とも上手に1対1の構図へと持ち込んだものだ。

フェイトはフォトランサーを打ち出しながら牽制し、隙あらば喰らいつくようにバルディッシュの魔力刃で斬りかかるが、こういった手合には慣れているのだろう、シグナムは危なげなく捌き、逆にフェイトへと斬りかかる。

なのはちゃんは近距離では不利だと理解しているのだろう、デivainシューターで牽制しながら距離を離し適度に離れた所でバスターを狙うが、ヴィータも中々巧く立ち回り砲撃のチャージができないようだ。

一合二合と牽制と迎撃を交えた所で、何やらシグナムがデバイスを操作し、シグナムのデバイスがガシヨンと動く。それと同時に、ヴィータのデバイスも部品がスライドし、同時にハンマーヘッドだったものが先端がドリル、背部がジェットエンジンの噴射

口のような形状に変化する。

「なんだあれ」

「あれはカートリッジシステム、ベルカの騎士が用いる瞬間的な攻撃力を飛躍的に向上させてくれるベルカの秘儀よ」

自分の疑問にシャマルが丁寧に応えてくれ、システムの概要が理解できる。要は瞬間的なパワーアップという所か。そしてシグナムが納刀状態から一気に抜刀、炎を吹き出しながら刃をフェイトへと振り切る。そしてヴェータも同時に、変形したハンマーを回転させながらなのはちゃんへと衝突させる。

なのはちゃんとフェイト、二人共プロテクションで直撃を避けた訳だが。残念ながらプロテクションを砕かれ、二人共デバイスを破壊されてしまった。

『あぁーっ!!』

訓練室をモニターできるモニター室に、スピーカーから聞こえる二人の声が響く。まあ自分の愛機が破壊されてしまったらそりゃあ、悲鳴も挙がるというものである。

レイジングハートは柄が砕かれ、バルデュツシユは真つ二つ。何とも見事な武器破壊である。それを行ったヴェータ、シグナム共に涼しい顔でデバイスを壊された二人の様子を見ている。

相手の武器を破壊すれば自動的に勝利となるのは当然。模擬戦が始まってから狙っ

ていたとしたら、やはり場馴れしているのだろう。

こうして、なのはちちゃんとフェイト、二人の模擬戦は終了となった。

第二十三話

闇の書の問題に対し、いよいよ管理局を巻き込んで動き出す。

なのはちやん・フェイト組とヴォルケンリッターとの模擬戦で、二人はデバイスを破壊されてしまった。

やはり踏んだ場数が違うという事だろう、ヴォルケンリッターは強かったという事で。



アースラ艦内に用意されている訓練室。先程までなのはちやん、フェイトとヴォルケンリッターが模擬戦を行っていた場所に、今自分が立っている。

ステイールをセットアップし身体を解し終わり、自分に相対するヴォルケンリッター、シグナムを見る。

「連戦だが、大丈夫か」

「問題は無い。以前はヴィータが世話になったが、今回は私が相手をしよう」

抜き身の剣、シグナムがデバイスであるレヴァンティンを構えながら言う。なるほど、将たる自分の目で自分の力を計りたいという事なのだろう。

自分もステイルの装備を確認し、シグナムへと向けて構える。

「さて、やろうか」

「ああ」

ゆっくり、静かに構えながらジリジリと相手へと近づく。シグナムは刀剣、自分は無手とリーチの差は目に見える形に存在しているが、それは問題では無い。

ゆっくりゆっくり近づき、恐らくはシグナムの射程圏内へと脚を踏み入れた途端、シグナムが一気に踏み込んできた。

だが、それは予想通り！

「はあっ！」

「又ウン!!」

近づいてくる剣に合わせ、右の拳で正面から迎撃。ガキーン！　といういい音を出し、拳で剣を弾く。弾かれた勢いを利用しシグナムは回転しながら右真横に一文字斬りを仕掛けるが、それも見えている！

再び甲高い音と共に斬撃を左の足甲で受け、弾きながら右足のバネで飛び上がり、顔

面を狙う後ろ回し蹴り！

「ぐっ！」

「オラアッ！」

剣で受けられたのを確認してさらに左足を出して旋風脚。頭を低くして避けられ、蹴り足を斬りに来た所で宙に壁を出し蹴りつけ反動で後ろへと飛ぶ。

トンツと着地した所で追撃をかけてきたシグナムの斬撃を避け、剣を振り下ろした勢いを止められないシグナムへ向け左拳から一撃入れる。

「がっ！」

「ぐっ！」

拳が入ったのを確認したが、シグナムは同時に蹴りを放っていた。胴に響く衝撃を受け思わず後ろへと下がる。

「……これほどの技量、その年で持ち合わせるとはな。未恐ろしい」

「そりやどうも。あんたも騎士と名乗る癖に実戦思考の泥臭い剣術で厭らしいな」

「我らヴォルケンリッターは主を守るための剣であり盾。手段は問わず、ただ主を守るのみ」

「なるほど。それじゃ、スピードあげていくぞ！」

宣言通り、トップスピードでシグナムへと迫る。迎撃のつもりだろう袈裟斬りを紙一

重で避け懐へと飛び込む。

「オラアツ！」

「おおっ！」

そこからはもう、お互い乱打の応酬だった。

蹴りを放ち受け、斬撃を避け打撃を入れる。腕を取れば取った腕を斬りに来られ、斬撃を受け止めそのままぶん投げられる。

上下左右様々な角度からの斬撃を避けつつ、時には上空を取り後頭部へと蹴りを放つ。

剣を弾き、受け流し、避け、こちらにも蹴りを、打撃を放つ。上、左、右、右左下上右
右っ——

「オオオオオオオオツ!!」

「ああああああああつ!!」

いつの間にかお互い吠えるように裂帛の声を放ちながら、攻撃の応酬をしていた。

腕や脚、いつの間にか胴にも打撃や斬撃を受けた形跡があるが、今はそれすら気にならない。腕を動かす度、蹴り足を動かす度に身体が疼き、肉体の奥底で何かが蠢く。

迫る斬撃が、隙を伺う蹴りが、その気迫を伴う瞳が恐ろしい。いつしか必殺の一撃となつている斬撃を避ける度、腹の底が震える。

だが、しかし。拳を撃ち出す度、蹴りを当てる度に、身体は加速していく。恐ろしさはあるが、止まらない、止められない。

いつしかお互い、笑顔を浮かべながら攻撃の応酬を行っていた。

「オオツ!!」

「らあっ!!」

必殺の斬撃を両腕の手甲で受け止め、蹴りを胴へと放つ。衝撃を殺しきれず、お互いもんどり打ちながら背後へと飛ぶ事になってしまった。

ドウツ! と背中から床へと落ち一瞬呼吸が止まるが、寝転がってなどいられない。すぐさま身体を起こし構えを取ると、シグナムも起き上がり剣を構えた所であった。

「ハア……ハア……そろそろ、終わりにしよう」

「ああ……これ以上は、止まらない。お互い死ぬまで相対する事になりそうだ」

「同感だ。ここは一つ、自慢の一撃で勝敗をつけるとしよう」

「それがいい」

話し合いの結果、そういう事になった。シグナムは剣を鞘に収め、カートリッジをロードする。なるほど、先程フェイトのバルディッシュを斬った技だろう。

ならばと自分も魔力をここぞと展開し、右手の掌に小さな、だがかなりの魔力を圧縮して溜め込む。溜め込んだ魔力が鈍色の光を放ち、周辺へと漏れ出る。

「……それが、貴様の自慢の一撃か」

「ああ。遠慮せずに迎撃してみろ」

「言われずとも」

納刀した状態で前傾のままジリジリと間を詰めるシグナム。両腕を身体の脇で構え、同じく前傾となる自分。

間が詰まった、と思った時にはお互い一気に飛び出した。

ダンッ！ と強く床を踏みしめ、お互い最後の―撃を繰り出す。

「おおっ！ 紫電、一閃っ！」

「圧縮、発勁!!」

雷光のように素早い斬撃が炎を纏い迫る。その剣に、腕に溜めた魔力と共に、右の掌打をぶち当てる!!

バチン！ 甲高い音と共に、自分は背後の壁へと叩きつけられた。またしても背中を打った衝撃で一瞬呼吸が止まり、目の前が真っ暗になる。

だがここで意識を飛ばしてなるものか。右足へと力を込め、思い切り床を踏みしめる。

「ハアハア……」

「……負け、か」

声のした方向を見ると、剣を振り切った姿のシグナムが、静かに前へと倒れていく所だった。

シグナムが倒れたのを確認し、背中を壁に預け、足の力を抜く。ズルズルと床目指して腰が落ちるが、しようがない。それだけ、今の戦いは全霊を賭けたものであったのだから。

『……とりあえず君達、やりすぎだ』

スピーカー越しに聞こえてきたクロノの声に、思わず苦笑してしまった。



最後の一撃は魔力と共に勁を撃ち出す技。練習していた魔法と山田流のブレンド技として一つの形となったものである。発勁が中国武術である訳だが、そこは山田流、いつの間にか自流派のものにしてしまっていました。

で、この発勁だが、唯の発勁では無く浸透勁の一種。寸勁と呼ばれる衝撃を内側へ徹す技である。御神流の徹と同様の性質である。

当り所が悪ければ素手で人を殺せる技なのだが、そこはさすが自分。武器へとぶち当たる事で致命傷を避け衝撃を身体へと伝えた訳である。

「なるほど、そのような技があるのか。この世界の武術も奥が深いな」

自分の説明にウムウムと頷くのは、自分と同じようにベッドに横になつてゐるシグナム。自分が倒された技がどのようなものであるか興味が湧いたらしく、その説明をさせられたのであつた。

それにしても、二人してベッドで横になるとは。

「もう、模擬戦なんですからちゃんと加減してくれないと困ります！ リーダーもですよー！」

「はい、すいません」

プリプリと怒るのは自称湖の騎士で補助と癒しが本領というシヤマル。確かに言う通り傷は癒えた訳だが、身体の疲労感は何ともし難い訳で、今はこうして横になつてゐるのだつた。

「まあしゃあないわ、あんだけやらかしたつたらなあ。正直、血を出しながら笑つて殴り合つてる二人にドン引きやで」

「あ、主……」

はやてちゃんの言葉に落ち込むシグナム。なんと分かりやすい。

「なのはちゃんなんか顔青くしとつたからなあ。堅一君が怪我する度悲鳴あげとつたし」

「ん、そつか。まあそれでいいんだけどね」

「心構えが足らんか。私も相対したから分かるが、テスタロッサはともかく高町は戦いに赴くという意味を理解していない所があるな」

「自分もそれは分かっているからね。だから模擬戦で思いつきりいかせて貰った」

自分の言葉にシグナムがなるほど、と呟く。シグナムが言った言葉は自分も理解しており、なのはちゃんに危うさを感じる部分でもあった。

今までなのはちゃんが行使してきた魔法と、戦ってきたジュエルシードの魔物。自覚無く生命のやり取りをしていたのだが、結局最後までなのはちゃんはジュエルシードの事件で命のやり取りはどういうものかという事を理解してなかった気がする。

生々しい現場に遭遇しなかったという事も大きいのだろうか。

だから今回、シグナムを相手に血生臭い戦いをした訳でもある。実際やりあったのは本気だったし、正しく戦いであつたのだが。演出とか手抜きとか、そんな事は一切無い。これでなのはちゃんに自覚が出て、正直言えば危ない事から身を引いてくれればいいなと言うのが本音である。

囑託魔導師の試験勉強をしている訳だが、正直それもどうでもいい。なのはちゃんが危険に足を踏み込まなければ、必要の無い事ではある。

だがしかし、きっと彼女は見過ごせない。自分に出来る事があり、それで誰かが助か

るのであれば、これからも危険へと踏み込んで行くだろう。

そうなった時、危険であるという自覚があるのと無いのでは大きく差が出る。

今回の事で、その自覚が芽生えてくれればいいなあと思う。

こういう考え方もなんか、保護者的な見方だなあ。

「堅一君はなのはちゃんの保護者やん」

「またはつきり言うね」

「だってそうとしか見えんよいつも」

「さいですか」

今更何言ってるのと言わんばかりのはやてちゃんの言葉にしようがないと頷く。自覚があつて保護者やつてる自分は一体何なんだろうな。

まあ放つておくと危なっかしい彼女の事だ、目に見える範囲に居るなら頑張つていこうと思う。

うむ、今後も兄として保護者として、頑張りましょうかね。

◇◇◇◇◇

なのはちゃん達は壊れたデバイスをアースラのメンテナンス担当の人に見て貰って

いたらしい。どうやら修復は可能なようだが、彼女達は壊れたデバイスをそのまま持ち帰り、今は時の庭園へと来ている。

「ふむ、レイジングハートもバルディッシュも、綺麗に壊れているわね」

二機のデバイスを確認してプレシアさんは静かに呟いた。しかしその目で面白いものを見るように輝いている。

「強度不足という事でしようね。アームドデバイス、でしたっけ。あちらの強度の方が強かったという事でしよう」

「後はこのカートリッジシステムね。瞬間火力の上昇とは面白いギミックだわ」

デバイスに残された記録映像を見ながらリリナさんと二人で検討をしている。二人共目が輝いている。怖い。

「フレームの強化とモードの変更、今シーリングモードは基本使っていないみたいなので汎用性の高いモードへと追加修正しましょう」

「後はそうね、このカートリッジシステム。魔力負荷が気になるけどテストしながら追加してみましょうか。リリナ、作れる？」

「この程度のものであれば明日にでも。構造は大体分かりますから後は小型大出力と負荷軽減を目指して作りましょうか」

何だか恐ろしい会話が目の前で進行されている訳ですが。何を言っているのだからこの

人達。

「あ、はは……。あの、お手柔らかに」

ものすつごい不安そうな笑みを浮かべながら言うのはちゃんの言葉が聞こえていないのか、科学者二人があーでもないこーでもないと検討を続ける。

そんななのはちゃんの肩をポンポンと叩き、静かに首を振るフェイトのある種悟ったような表情が全てを物語っていた。

ああなつたらもう、止まらないぞ、と。

「とりあえずあの二人は放っておいて、なのはさん、フェイト。自宅へと帰りましょう」「リニスさん！　どうか、レイジングハートをおかしな感じにしないでくださいね！」

「私のバルディッシュも、お願い……」

「ええ、もちろん。変な改造はさせないようにしますから、安心して下さい」

科学者組の両親、プレシアさんの使い魔であるリニスとフェイトが笑顔でそう告げた事で明らかにホツとした表情の二人。

目の前しか見えていない二人に比べてリニスが信用されるのはまあ当然の事である。如何に実の親であろうと、いやだからこそこうなつた時の恐ろしさがかかるというものなのだろう。

「良ければ一緒に夕食をどうですか？　もちろん堅一さんも」

「今日はリニスのハンバーグなんだよ」

「にやはは、じゃあお邪魔しちやおうかな。ね、けんちゃん」

「うん、それじゃ遠慮無く」

ワイワイと話しながら技術室を離れ転送装置へと向かう自分達。その後、科学者二人は二時間経って漸く自宅へと帰ってきたのだった。

これだから科学者という人種は……。



一先ず蒐集についてはヴォルケンリッター、管理局武装隊とに別れて開始する事になった。

デバイスを修理中ののはちゃん、フェイトの二人は自動的に不参加となり、シグナムに勝利した自分はヴォルケンリッター、シグナムと管理局のクロノと一緒に行動する事となる。

「ま、順当な組み合わせなのかね」

「武装隊とヴィータはリーゼの二人に頼んでいる。というか彼女達は初めヴォルケンリッターと組むのを拒んだのだがな。心情は理解できる」

そう言うクロノだが、彼自身は別に嫌な顔をせず二人と組んで魔法生物を倒している。

しかし砂漠のようなこの無人世界で巨大なワームのような生物を倒している訳だが、何なんだろうなこれは。

「文明が発達した後崩壊した世界なのだろうと研究者は言っている。実際に遺跡も存在する事からほぼ間違いないだろう」

「それで砂漠化した訳か。緑豊かな無人世界もあるのか？」

「そういう世界も存在するが、大抵管理世界住人の観光地として整備されている。レジャー産業の盛んな場所だな」

何とも現実的なお答えをありがとう。

目につく魔法生物を一通り狩った後、シグナムがどこから闇の書を転移させ、書に魔法生物の持つリンカーコアを蒐集させる。

「……やはり魔法生物では、ページが中々埋まらないな」

「誰にも被害を出さずに蒐集するにはこの手段が一番だ。君達に選択の余地は無い」

シグナムのボヤキにピシヤリと言いつつクロノ。まあ何というか、被害者と加害者という構図ではあるので何とも口を挟みにくい。

シグナムとしてもバツの悪い顔をして書をまたどこかへと転送する。大方ヴィータ

が蒐集を行なっているのだらうと思う。

『クロノ君。そろそろ地球時間だといいい時間だよ』

「そうか、分かった」

開いていた通信からエイミイさんの声が聞こえ、本日の蒐集の終わりを告げる。

今日も一日お疲れ様でした、って感じかな。

「それじゃあ明日も僕とシグナムは蒐集を行う。堅一、君は学校が終わって可能だったら来て欲しい。エイミイ、いいぞ！」

『了解！ それじゃあまた明日ね〜』

クロノが合図すると三人それぞれの足元に転送用の魔法陣が広がる。自分は自宅、シグナムは八神家、クロノはアースラへとそれぞれ転送される訳だ。

「じゃあ、また明日」

「ああ。明日もよろしく頼む」

シグナムの言葉に頷きで返す。

魔法陣の光で一瞬視界を奪われたと思ったら、自分の家の玄関前へと居た。

相変わらず、この転送魔法というものは便利ではあるが何だかなあと思う。本当に眩しいし原理が分からんから少し怖い部分もある。

「ただいま〜」

「おかえりなさいっ！」

ガラツと玄関開けてすぐなのはちゃん。なんでいるのこの子？

「お、お邪魔してます……」

「堅一つ！ 晩御飯できてるよ〜！」

おお、フェイトとアリシアまでいる。なんでやねん。

「今日シグナムさん達手伝ったんでしょ？ 色々お話聞かせて欲しいなって」

「晩飯時に話すような事じゃないと思うけど……。まあいいか。先にお風呂入らせてね、砂漠だったから砂が酷くて」

「砂漠！ 砂漠の惑星行つたの？ いいなく私も行つてみたい！」

「アリシアは危ないから駄目だよ」

なるほど、自分の体験談というか、そういうのが聞きたい訳かと納得し風呂へと向かう。

それにしてもこの時間に家に居るといふ事は、もしや泊まるという事では……。

「あ、けんちゃんお帰り。今夜は三人泊まっていくからね」

「ああやっぱりそうなんだ。ただいま翔子さん」

ひよっこり台所から顔を出した翔子さんの言葉にやはりと頷く。どうやら三人とも泊まる気満々で来たらしく、着替えとかその他諸々準備しているのだとか。

はあ、今夜は少し、長くなりそうだな……。



「リベンジです」

「しに来ました」

アースラの訓練室。

修復が完了したレイジングハートとバルディッシュを手になのはちやんとフェイトの二人がヴィータとシグナムの二人に言う。

あれから数日間、デバイスの修理が終わるまでは二人で魔法のトレーニングをしたり自分の蒐集に関する話を聞きに来たり嘱託試験の勉強をしたりと精力的に活動が続けてきた二人。

血生臭い事が待つてるといふ事も話したが、それでも自分もはやてちやんを助けたいという二人の決意は本物のようで、改めて認めてもらうのだと修理が完了し新機能の説明などを受けてすぐこうしてリベンジに来た訳だ。

「へん、やってやろーじゃねーか！」

「その決意、力を持って示してもらおう」

ヴィータは小生意気に、シグナムは嬉しそうにリベンジに来た二人に対して言う。

ヴィータはどう思っているか、自分も言われたが蒐集はヴォルケンリツターだけで十分だと思っっている節が有り、シグナムが一喝して黙らせた事があつたりする。

恐らく今回も煩わしいとも思っっていそうなのだが、はてさてどうなるか。

「メインフレームの強度は既存値の約三倍、リリナと私の二人で作つた六連装カートリッジシステムを搭載し、二人の戦闘技術を生かす為のモードを実装した、まさしくワソンのデバイスよ」

「カートリッジは大火力で少負荷を目指しました！ フレーム構造の変化とモードチェンジの短縮効率化、フレームの魔力伝導率の向上も合わせてやったので、今までの彼女達とは一味も二味も違いますよ！」

プレシアさんとリリナさんがフンと自慢気に言う訳だが。管理局の眼鏡で小柄な女性、マリエルさんが二人の話にワクワクと言った感じで食いついている。観戦席は最初っから不思議ワールドが展開されてしまった。

「要するにパワーアップしたっちゅーこっちなあ」

「だね」

自分と同じように観戦を決め込んでいる、こういう勝負毎には毎回ヴォルケンリツターが立ち会いを求める闇の書の主であるはやてちゃんとフェイトの姉であるアリシ

ア。そのはやてちゃんの後ろで車椅子を押すシャマル、隣で控える狼状態のザフィーラ。

リンデイさんやクロノ、エイミイも見物に来ており、この勝負はもはや見世物に近いものとなっていた。

対峙する二人は真剣なのだが、何とも周囲の観戦組が不真面目である。

「あ、始まった」

はやてちゃんの言葉に視線を向けると丁度四人が動き出した所だった。

前回同様なのはちゃんはヴィータ、フェイトはシグナムと対戦カードが決まっていた。

但し前回と違いヴィータはなのはちゃんのプロテクションを破れず、またデイバインシューター、デバイスが変わって高速化したアクセルシューターにより距離を取らざるをえない戦いになっているようである。

対するフェイトもシグナムと何度か切り結び、カートリッジをロードしたと思ったらバリアジャケットを簡素化し、高速機動モードとも言える形態へと変化する。手足に生えた小さな羽が印象的だ。

そこからフェイトは更に加速し、対するシグナムもスピードを上げて切り結ぶ。

「あの形態ね、この間堅一とシグナムが戦ってるのを見た時から考えてたんだって」

「あれは自分の所為か」

アリシアからの意外な言葉に思わず瞠目。自分のように基本的に攻撃は避けるもしくは受け流すような人間ならば良いだろうが、フェイトの避け一辺倒で大丈夫なのかと思いはするが、いざとなればプロテクションで何とかなるのかと思ひ直す。

まあ、プロテクションを張る間も無く攻撃が直撃したら危ないだろうとは思うが。

両者共に一步も引かず、またなのはちゃん、ヴィータの対戦も射撃が直撃せず、ヴィータも懐に入れずと膠着状態を繰り返している。

これはそろそろ終わりかな、と思つたら予想通り。クロノがマイク片手に室内へ向けて喋り出した。

「そのくらいでいいだろう！ シグナム、二人の実力は問題あるか？」

『いや、問題無い。もう少し斬り結びたいと思うほどに、二人の実力は上がっている』『チツ。うざってえ誘導弾の使い方しやがって……』

楽しそうなシグナムとは対照的に心底うざったそうに言うヴィータ。やれやれ、あの性格は何とかならんのかな。

「こらヴィータ、そんな事言うたらあかんよ。食後のおやつ抜きにするで〜」

『げっ！ は、はやてえ〜！』

はやてちゃんの一喝でしおらしくなるヴィータ。おいおい、中身は本当にガキだなあ

の子は。

ま、兎も角。今後はなのはちゃん達も協力できるようになったので嬉しそうである。だがしかし、結局大変な事には変わらない。何とかみんなで頑張っていこう。

第二十四話

なのはちゃん達のリベンジも成功し、魔導師みんなで蒐集活動。

魔法生物を痛めつけてリンカーコアを抜く事になる訳だけど、流石なのはちゃんは抵抗があるみたい。

それでも頑張つてやってくれるのは、はやてちゃんの為だから、かな。



今日も今日とて蒐集活動。なのはちゃん、フェイトの二人は少しお休みで、今日のヴォルケンはずファイーラとシヤマルの二人。

「……前線メンバーじゃないけど大丈夫なのか？」

「ま、そこはやり方があるのよ。ずファイーラ、お願い」

「承知」

シヤマルの一声にずファイーラが両手を前に構え魔力を溜める。

「オオオオオオッ!!」

掛け声と共に魔法が発動し、砂漠地帯の一部に氷の山が隆起する。なるほど、土の中の生物を炙りだした訳か。そして串刺しになった生物が数匹拘束されている。

この状況に思わずクロノと二人、感心してしまう。

「……あれ、便利じゃね」

「ああ。効率が良いようにも思えるが」

「これ程の魔力行使、回数を熟せるものではない。後はシャマル、頼んだ」

「ええ。クラールヴィント」

シャマルの言葉にデバイスがペンダル状になり、ヒモ部分で輪を作る。そこにシャマルが手をつ込むと、何とびっくりその手にはリンカーコアが。

「——はい、終了。どう、私達もそれなりにできるでしょ?」

「余り回数は熟せないがな。我とシャマルは補助が基本だからな。後は結局、我とお前たちで魔法生物を狩るしか無い」

「いや、なんていうか。それよりシャマルの今の行動にビックリなんだけど」

「リンカーコアを抜き出すとは。恐ろしい事をする……」

クロノと二人、戦慄する。綺麗な顔してやる事エグいなあこのお姉さん……。

「も、もうっ! そんな怖がらなくてもいいじゃないですか! 皆さんにはやったりし

「ませんよ!!」

「はい、すいませんでした」

プリプリ怒るシャマルに思わず謝罪。この人怒らせたら何されるか分かったもんじゃないねえ。怒らせないようにしないと。

クロノとザフィーラ、三人で静かに頷き合う。ていうかザフィーラ、お前もこつち側でいいのか。

「……将などより怒らせると一番厄介なのがシャマルだ。生活一般を基本的に仕切っているからな」

「ああ、兵糧攻めか」

「お前も苦労してんだな……」

渋い声で言うザフィーラの肩を叩いて慰める。まあそんな光景が目の前で繰り広げられたら、面白く無い人も居るわけで。

「ザフィーラ! 私そんな事したりしてないでしょ!」

「物の例えだ。そして事実でもある」

「もう! 今夜のザフィーラのご飯抜きね! 謝つても許しませんからねーだ!」
完全に兵糧攻めだ。プリプリ怒ってる。ザフィーラが落ち込んだ。なんだこれ。

「……とにかく! 今は蒐集を続けよう。みんな、いいな?」

気を取り直すように叫ぶクロノの言葉に、りようかーいとみんなで頷く。
こんなんで本当に大丈夫なんだろうか、不安だ……。



7月。終業式。そして夏休み。

これから始まる長期休みに胸を期待で膨らませる子達が多い中、自分の周辺では二人、必死こいて勉強している人間が居た。

「ここは文章から作者の心情を読み取るという問題なんだけど、この文章の中に感情を表す言葉があるから、それを掴むんだ」

「な、なるほど……」

「フェイトちゃん、そこはこっちのを代入して計算するの」

「う、うん、分かった……」

自分となのはちゃん、アリサちゃんやすずかちゃん、はやてちゃんも交え、みんなでフェイトとアリシアに勉強を教えている。

終業式に近い日程で、フェイトとアリシアの聖祥大学付属小学校への編入試験があるので、その為の勉強が本格化しているのである。

フェイトの場合囑託試験もあるのだがそれはミッドチルダ語なので問題が無いと判断して置いておき、今は必死になって日本独特のテスト構造に慣れる為みんなを巻き込んで勉強していた。

ちなみにここまでの成績だけで言うとお、アリシアの方が上である。見た目的にはフェイトの方が年上なだけに、フェイトが物凄く凹んでいた。

フェイトは自分達が囑託試験の勉強をしている時には丁寧に教えてくれるので頭が悪い訳ではないのだろうが、何となく取っ掛かりで引つかかっている事が多いのである。所謂考えすぎ。

そしてアリシアは要領が良い。問題から必要な部分だけを抽出し精査する事が頭の中で出来ている。アリサちゃんとタメを張るだろう回転の良さである。

何となくプレシアさんの魔導師としての才能がフェイトに、科学者としての才能がアリシアに受け継がれている印象だ。

そんな事をこの間ついポロツとプレシアさんの居る前で言ってしまったら大層お喜びになって一日中ニヤニヤしていた。そして晩御飯をご馳走になったのだが無駄に豪華だった。食後のデザートまでついてた。

まあそんな感じで最近は結構頻繁にテスタロッサ家にお邪魔している訳なのだが、何ともプレシアさんは心配性な部分がある。

編入試験が近づくにつれソワソワしだして桃子さんや翔子さんにどんな問題が出るのかとかウチの子大丈夫かしらとか翠屋で相談して親馬鹿っぷりを発揮。

自分達が勉強を見ている事である程度の安全マージンはあると考えている訳だが、面接とかがとつても心配だと言っている。

そんなプレシアさんは今は翠屋にてリリナさんとリニスを連れてアフタヌーンティである。

今この空間には子供しかおらず、みつちりと勉強する事が出来ている。

「———ぷああつ！ おわったーっ!!」

「はいおつかれアリシア。うん、解答に問題は無いから安心していいぞ」

「ほんと、やったー！ もー作者の心情とか『———』の部分にあるであろう心情を綴るとか意味わかんないよー!」

「まあ確かに、感性に関する問題が多いからな、国語は……」

「答えがキツチリ出る算数のほうが好き！ 割り切れなくても四捨五入できるほうがイイ———」

気持ちには分かるがバタバタ足を動かすんじゃないやありません。中が見えるでしょうが。

「うん、大丈夫。フェイトちゃんもおつかれさまーっ!」

「ありがとう、なのは……。あ、そうだ。冷蔵庫にみんなが来た時用のケーキがあるん

だ」

「ホント！　じゃあ私手伝うよ。取りに行こう！」

「あつ、じゃあ私も一緒に行くね」

フェイトの言葉になのはちやんとすずかちやんが立ち上がり、フェイトと三人一緒にリビングからキッチンへと移動する。

そんな中自分とは言えば、囑託試験のテキストを流し読みしながらアリシアとアリサさんの相手をしていた。

「ねえケン、そのテキストミッドチルダ語ってやつよね。凄く英語みたいなんだけど」

「多少の違いはあるけど英語と変わらないよ。ベルカ語はドイツ語だね」

「ふーん……。それにしても一般問題と言うよりは常識問題かしらね、これ。法を犯さないという常識をテストする為のものか」

アリサちゃんの言葉に静かに頷く。そう、このテキストで記載されている筆記試験対策は一般問題というより常識問題、即ち管理局に所属して問題無いかの人格テストが主なのである。しかも配点の少ない。

この筆記をクリア出来なくても後の実技試験各種をクリアできれば大丈夫という点で、管理局という組織に若干の不安を覚える。

自分達の知る管理局員はクロノやリンディさん、エイミイといった一般的な人格を持

つ人物しか居ない訳だが、もしかしたらそういう組織に所属するには問題のある者も実力を買われて所属しているのかもしれない。非人格者の統治する実力主義の治安維持組織、その危険性は言わずもがなである。

ま、そこまで考える必要は無い。自分達には目の前に試験があるだけなので、やるべき事をやるだけである。管理局がどうか、考えても仕方が無い。

「ね、そういうえば夏休みに管理世界のミッドチルダつて所行くんでしょ？ あたし達も行けないかな」

唐突にそんな事を言うアリサちゃん。

彼女の言う通り、自分達は試験の為管理局本局という何処かの宇宙に存在する宇宙ステーションのような場所に行った後、そのまま管理局の訓練校があるというミッドチルダという本星に行き三週間程滞在し特別メニューの研修を受ける予定となっている。

いきなりどうしたのかと思うと、答えは単純だった。

「だって違う世界よ？ そりゃ興味あるに決まってるじゃない！」

「うーん、多分お母さんに相談すれば何とかかなと思うよ。訓練校になのは達が滞在する間、私達も一緒にミッドに行つて宿泊場所提供するからねえ」

アリサちゃんの言葉にアリシアが気前の良い返事を返す。

そう、訓練校へ行くに当りリンデイさんがまず提案したのが訓練校の施設に宿泊する

事だったのだが、それにプレシアさんが反対しプレシアさん達も同じ時期にミッドチルダへと渡り、自分の所有する家を提供し宿泊する事となったのだ。

これには大人の考えというか、訓練校には自分達より年上の人間が基本所属している事もあり、才能ある若者を妬む者が少なからずいるだろうという事に対するプレシアさんの気遣いである。

自分達としてもこの提案は有りがたかったの飛びついたのである。

「ホント！　じゃあ私と、そうね鮫島。あとすずかとフアリンさん、はやてぐらい行けるように相談できたらいいんだけど」

「うん、お母さんが帰ってきたら相談すると良いよ。私じゃわかんないしー」

アリシアがそう言うと、アリサちゃんはもうミッドチルダに行ける気になって色々聞いている。氣候がどうか美味しいものは何があるとか。

そんな光景を見ると、本当に女子っていうのは話題に事欠かない生き物だなあと感心する。

男の自分には分からんベクトルで世界が回っているんだろう、きつと。



そして、とうとう夏休み。

フェイトとアリシアの試験も終わり、自分達も学校が長期休みに入った。

入って早々、異世界への旅行である。いや、自分となのはちゃん、フェイトの三人は囑託試験なんだけどね。

地球からの面子は自分達となのはちゃんの保護者として美由希さん。すずかちゃんにフアリンさん、アリサちゃんに鮫島さん、そしてはやてちゃんである。

はやてちゃんに關しては本人は渋ったのだが、雲の騎士四人が声を揃えて行け行けと促したので参加になった。騎士達としては主が居ない間に四人総動員で蒐集でき、かつ安全性の確認されている場所へ連れて行ってくれるという事で諸手を上げて自分達の旅行に賛成してくれたのだった。

この面子で一路アースラへ転移魔法で向かい、そこからすぐに転移装置で本局と呼ばれる宇宙ステーションへ。ここで一旦自分達囑託試験組はみんなと別れて早速テストである。

「筆記試験は30分です。それでは、始め！」

バツと裏返された解答用紙をひっくり返した名前を書き、問題を解き進めていく。それにしても試験官がリンデイさんというのは良いのだろうか。

まあいいならいいんだけどねと思いつながら長くて短い30分を終え、次は面接。

「面接官のレティ・ロウランです。初めまして」

「中田堅一です。初めまして」

眼鏡を掛けたキリリとした女性、レティさんが手を伸ばすので握手。柔らかく握った後、自分の後ろに備え付けられている椅子へと腰掛けた。

それにしても、この面接にもリンディさんか。

「あの。なんでリンディさんも一緒に居るんですか？」

「え？ 何故って私も面接官。私提督だし、それでも地位は高いのよ？」

何言ってるのと言わんばかりのリンディさんの言葉に思わず眩暈を覚える。大丈夫なのか管理局。一個人の裁量が大きすぎやしないか。

「それで、中田堅一君。君は先に面接したなのはちゃん達とは違って魔法は不得手だそうだけれど」

「え、ええ。まあ不得手というか。自分の場合魔法を使って攻撃するより近付いて殴った方が早いですから」

「んー。まあ言わんとする事は分かるわ。魔法技術より、自身の技量を信頼したスタイルなのね」

レティさんは面接官らしくカリカリとペンを走らせメモを取っている。対するリンディさんはニコニコ。ほんと何で居るんだこの人。

「レテイ、堅一君は山田流というご実家の武術を習得しているわ。並の道場であれば皆伝となる腕前だそうよ」

「ちよつと待つて。山田流はいいですけど皆伝がどうか誰が言ったんですか」

いきなり喋り出したリンデイさんの言葉に待つたをかける。いきなり何を言い出すんだこの人は。

「え、誰つてあなたのお父様が言つてたつて、翔子さんが」

「……いやいやいや。初耳すぎてビックリなんですけど」

全く初耳な言葉に本当に驚く。翔子さんが言つてたつて事はまあ、本当なんだろう。それにしても、自分はそこまで強くなつてゐる気がしない。何せ毎日雅俊さんや父さんに叩きのめされているんだから。外に出れば恭也さんに土郎さんにも、だ。まあ美由希さんには勝てる訳だが。

「あら、そうなの？ 言わなかつたほうが良かったかしら」

「いいえ、リンデイ。それは良い情報よ。ありがとう」

不思議そうな顔をするリンデイさんにレテイさんは鋭い視線を向け礼を述べる。何だか二人がどういふ関係なのかを垣間見た感じである。

そんな面接を終えた後は、訓練室へと足を運んで儀式魔法四種の実践。これはなのはちゃん、フェイト、アルフも一緒に行う訳だが特に問題も無く終了。

何せこの試験、いくら時間が掛かってもいいから出来る事が重要なのだという試験である。時間をゆつくりかけて四人で一つの魔法を創りあげて終了である。作る魔法も攻撃性のあるようなものではなく結界魔法の一種なのだ、何の危険もありはしない。

まあ自分となのはちゃんはこの時ただの魔力タンクであり、本当の意味で儀式魔法を行ったのはフェイトとアルフであった。

何だかズルした気分だが、受かってしまえば良いのだ、うん。

そして最終試験、魔導師とその使い魔、つまり四人で模擬戦である。もちろん相手は管理局で用意された人間なのだが。

「まさかこんな形で君と杖を交える事になるとは、な」

自分達の向かい側に立つクロノが苦々しい表情で呻く。

そう、試験官は忙しい業務の合間を縫って付き添ってきてくれたクロノなのである。そして彼の脇には例のグレアム提督の使い魔が二人。

「クロスケ、なあにそんな苦い顔してんのよ」

「知り合いだからって手を抜いたら駄目よ」

短い髪、リーゼロッテがからかうように言うと、長い髪、リーゼアリアが諫めるように忠告する。

そんな二人の言葉を受けても、クロノの表情は変わらず苦い表情だった。

「ううん、クロノ君にロツテさんとアリアさんか……」

「中距離はクロノが抑えてくれると思う。遠距離はアリア、近距離でロツテだろうね」

「とりあえずいつも通り、自分が先手を打つから」

「あたしが堅一のカバーに入ればいいんだね」

なのはちゃん、フェイト、アルフと四人で立ち回りに関する会議を行い、結局『いつも通り』という事で落ち着いた。

作戦会議は終わると向こうも話が終わったのか、苦々しい表情が晴れないクロノを尻目に猫姉妹二人は意気揚々とポジションに就く。

予想通り、クロノを間に挟むような陣形である。

『それでは、そろそろ始めます』

訓練室の内部が見える観覧席に居るレイティさんからマイクで声がかかる。その声に自分は手を挙げて質問。

『何かしら、堅一君?』

「手は抜いた方がいいですか?」

『……これは試験です。実力を全て出しなさい』

自分の質問に外野のレイティさんは重い声で、目の前の猫姉妹は表情を怒らせ、クロノは更に苦味を増やして自分を見つめている。

さて、言質は取った。それじゃあ、やるとしよう。

背後に居るなのはちゃん、フェイト、アルフと黙って領き合い、開始の合図を待つ。

『それでは……開始！』

合図と同時に、トップスピードで最前に居るリーゼロツテの前へ飛び出す。

「へっ?」

急加速から急停止。発生した勁を足から腰に、右腕へ。踏み込みと同時に、リーゼロツテの顔面へ思い切り叩き込んだ。

「ロツテ！ くそっ、だからあれほど言ったんだ！ ステインガーレイ！」

「あつまいよー！」

吹き飛んだロツテを見ながら自分に向けて射撃魔法を発射するが、既にカバーに入ったアルフによって弾かれる。その後ろから更にフェイトがハーケンセイバーでクロノへと斬りつける。

「ちっ！ アリア！」

「っ！ このおっ！」

フェイトの斬撃を避けたクロノの指示でアリアが射撃魔法を打ち出してくるが、フェイトのプロテクションで弾かれる。フェイトはそのまま、後ろへと上昇してその場から退避した。

それに合わせて自分達も一旦下がる。

「つー！ マズ！ アリア防壁をてんか——」

何が来るのか分かったのだろう、クロノが指示を出すのがもう遅い。クロノとアリア。二人纏めて、桃色のぶつとい閃光が貫いた。

「うきやああつ!!」

「ぐ、おおお！ また火力上がってるんじゃないのか！」

「最近はやいのも打てるの！」

二人を貫くのはちやんのデイバインバスターに対してクロノが全くその通りな文句を述べる。そしてクロノの感想に恐ろしい注釈をつけるのはちやん。二人が恐ろしい砲撃を耐えているのを眺めていると、横から突き刺さる殺気を感じたので思わず身体が反応する。

「このクソガキ！ よくもやつ——」

それがロツテだと気づく前に、向けられた拳を受け流して懐に入り掌打で顎をかち上げる。あつ、ロツテだと気付いたと同時に左足で足を払い身体を背後へと泳がせる。背中から地面へと落ちる前、まだ高さがある状態で、胴へと拳槌打ちを叩き込む。

再び床へと沈んだロツテを確認してからクロノとアリアの方へ視線を向けると、フェイトがアリアと、アルフがクロノと交戦していた。

素早い動きで翻弄しながら的確にアリアの隙を突き距離を取らせないソニックフォームのフェイトに、バインドやバリアブレイクを駆使しながら中距離主体のクロノ相手に負けじと食らいつくアルフ。アルフの方は少々押され気味であるが、問題無さそうだ。

とうとうアリアがフェイトの速度に対応出来なくなり決定的な隙を生んでしまった。綺麗に足をハーケンセイバーで狩られてバインドで拘束される。

これが接近戦主体のロツテだったら巧く行かなかったかもしれないが、ロツテは自分分が拘束している。具体的に言うとなんか協固めで。

自分の下からバンバンと床を叩く音と「いたたたたつ！ やめつ、やめてえ！」という悲鳴が聞こえるが、まだ模擬戦は終わっていないので無視している。

「うにやあつ！ クロスケツ！ 早く降参しちやいなさい!!」

「クロノ……」

「もう二度と、君達とは模擬戦をやらないぞ」

両手を挙げて降参したクロノの顔は、とても苦り切ったものだった。



結局あの模擬戦は初手から相手の調子を崩した自分達の勝利、という話になったらしい。なのはちゃん、フェイトは兎も角魔法を戦闘服ぐらいしか使っていない自分は良かったのだろうかと思つたが、レティさんは少々苦い顔でこう言つた。

『魔法使つてないって……。ま、まああなたの戦闘技術は目を見張るものがありますし、バリアジャケットの展開も問題無いので構いません』

自分なんかで驚いていたら、恭也さんなんかもつと速いのにどうするんだと思つてしまふ。恭也さんが魔法使えたら間違ひなく最強だろう。フェイトだつて純粋な速度で勝てないのだから。

そんな感じで、無事嘱託試験をパスした自分達は、いよいよミッドチルダへと向かう事となつた。

「……僕はここまでだ。ミッドチルダには母さんが共に行くから」

「ああ、ありがとうクロノ」

模擬戦の後からずっと自分達に着いてくれていたクロノに礼を言う。ちなみにリーゼ姉妹はロツテがノックダウン中なのでアリアが面倒を見ているそうだ。ふむ、ちよつとやりすぎてしまったか。あの協固めは力入れすぎたかもしれないな。反省。

「ありがとう、クロノ君。お土産いる？」

「いや、ミッドチルダは僕の出身世界だから」

「そっか。じゃあお菓子とか何か買ってくるね」

聞いてないよこの子達。クロノも苦笑を浮かべて「じゃあ頼む」とか言うしか無いわそりゃ。

そうしてクロノに別れを告げ、自分達が試験の間本局を見学していたみんなと合流してから一路、転移装置でミッドチルダへ。

到着したのは建物内の一室。そこからリンデイさんを先頭に廊下を歩き、表へと出る。

意外と普通の景色の町並みを眺めながら、それでも未来っぽいデザインのモノレールに乗って、ついた先は閑静な住宅街。

マンションや大きな家が立ち並ぶ通りを抜けて、一番高そうなマンションへと辿り着いた。

「さ、ここが家よ。入って」

何やらカードを通してドアを開けたプレシアさんに従い中へ入ると、外からの見た目通り、高級そうな室内へと案内された。但し、空気は淀んでいるが。

「……やっぱり、掃除が必要ね。何年も使ってなかったから」

持ち主であるプレシアさんが言う通り、所々埃が積もっていたり、鉢植えが倒れていたりしている。

何でもヒュウドラの事故の後、この家には帰っていないそうだ。

「それじゃあみんな、掃除しましょ！」

『はいー！』

アリシアの号令と共に、大掃除が始まった。何しろこの家に現在一番詳しいのはアリシアである。この家を離れた時には既に意識は無く、この家に住んでいたのはつい昨日の事のようなものだ。霞んだ記憶でしかないプレシアさんより余程詳しい。

「まさか、こうして帰ってこれるなんてね」

「プレシア……」

物思いに耽るプレシアさんと、その様子に笑みを浮かべるリニス。何とも良い話、なのかな？

兎も角大掃除を行い、部屋が綺麗になったのは、夜も更けてからだだった。

「今日は材料も無いので出前です。それじゃあいただきませう」

リニスの言葉の通り、自分達は買い出し等していませんので当然食材も無く、今夜は店屋物。ピザ食べ放題であった。

「うわーい！ ピザだ〜ピザだ〜い！」

「ちよつ、ちよつとアリシア……」

出前ピザにはしゃぐアリシアとそれを諫めるフェイト。周りのみんなも思い思いに

食事を取り始めた。

「ね、けんちゃん。明日から訓練校だね」

「ん、そうだねえ」

ピザを食べながら話しかけてくるなのはちゃんの言葉に、思わず考える。

魔法を知ってから僅か三ヶ月。そのたった三ヶ月で、自分の製造者が目の前でピザ食つてたり、異世界に来るような事になるなんて思いもしなかった。

「思えば遠くへ来たもんだ……」

「ほんと、そうだよねえ……」

なのはちゃんと二人、黄昏れる。ちよつとここ最近の時間の流れに疲れてきている気がするのである。

もう少し、平穩が欲しいです。

「訓練校では、平穩が欲しいなあ……」

「多分、無理だよお」

なのはちゃんの言葉に、ですよねー、としか返せない。

神様でも何でもいいですから、もう少し自分達に、平穩を下さい……。

第二十五話

囑託試験は恙無く終了した。

模擬戦にも勝利できたし、まあ問題ないだろうと思う。

さて、訓練校での日々が始まるのだが、どうなるのか……。



A M 5時に起床。近隣をひとつ走りしてシャワーを浴びた後で朝食を全員一緒に頂戴する。プレシアさんとリニス、ファリンさんの共同で作る毎食

はとても美味しいものである。

A M 7：30にはみんなに見送られながらモノレール駅へ。そこから30分程で、自分達が現在所属する武装隊第四陸士訓練校へと到着。

特別待遇、と言うと聞こえは良いが「魔力と技術を下手に持った扱いにくいガキを纏めて面倒見る」為の部屋に三人揃って入り、鞆を置いて一息

つく。

「今日のプログラムなんだっけ？」

「えと、午前は座学を二時間、後は体力トレーニングと、魔法の訓練だね」

何気なく言った言葉にフェイトが反応しプログラム表を読み上げてくれる。このプログラムは週に二回あるプログラム。5日の内3日はトレーニング

と魔法技術に関する訓練が主になる訳である。

自分達は短期プログラムというやはり特別待遇での所属になっており、内容もより実戦向けの通常よりも濃いもの、らしい。自分は余り実感が無いのだが。

なのはちゃんは最初の頃「筋肉痛がああ」とか呻いている事もあったが、最近は慣れたようで余り言わなくなっている。それでも翌朝痛む事があ

ったりするらしいが。

フェイトも自分も、現状の体力トレーニングはそれ程苦ではなく、というか自分に至っては物足りなさを感じている訳で。帰ってからも動く事が

頻繁である。

「堅一の体力は、凄いなと思う」

「じゃはは……」

「実家の稽古のほうが何倍も辛いからなあ。ともかくなのはちゃんは、基礎体力をもっとつけていかないとね」

「うう、が、頑張ってるんだけど、ね……」

自分の言葉に乾いた笑みを浮かべるのはちゃん。まあ現状でもほんの少し前よりは体力がついてるから良いか。

「あ、そろそろ先生来るよ」

「そうだねフェイトちゃん。座学の教科書出しておこう」

チラリと時計を見て言うフェイトに倣いそいそと教科書とノートを準備する。それが丁度終わると同時に、部屋の扉がガラリと開かれた。

「はい、皆さんおはようございます」

『おはようございます』

管理局地上本部の制服を着た、中年のおばさんが部屋に入ると同時に挨拶をしてくる。何を隠そうこの人こそ訓練校のトップであるファーン・コ

ラードさんなのである。

トップ自ら教鞭を振るうという事実が、如何に自分達がこの訓練校にとって異質であるのかを物語っている。そもそも短期プログラムなんていう

のも通常有り得ないのだから。

「それじゃあ今日は、管理局法の153ページからやりましょう。座学の時間は短かったけれど、最後まで手を抜かないように」

「はい」

先生の言葉に気持ちよく返事を返す。

そう、自分達がこの訓練校に在籍する時間は、本日で終了となっていたのである。



座学を終えた後は魔法の授業。

通常であればまずは魔法の発現から行使までをじっくりと教わる訳だが、自分達の場合は特別プログラム。既に実践で行っている魔法を高めて

いく授業となる。

つまり、実技ベース。身体に教え込むとも言う。

フアーン先生は流石と言うか、教官官であった実績もあり教えるのが巧く、また教導隊の教え『分かるまで何度でも身体に叩き込む』を実践して

くれるものだから、それぞれ実技の伸びが、特になのはちゃんの伸びが目覚ましい。

今は特別プログラムの最終段階「一本取ろう」を実施中である。誰から？ 自分から。

「ハアッ!」

「つと、残念」

迫り来るザンバーの持ち手を掴みクルツと転がす。勢い良く突っ込んできたのと同様、勢い良く転がったフェイトが「うきゆうっ!」と面白い声

を出す。

「バスターツ!!」

「自分の動きは止まってないよ」

「つ、立ち直りが早すぎるの!!」

フェイトを転がした一瞬の隙を突いて撃たれたエクセリオンバスターを掻い潜りなのはちゃんへと迫る。自分の言葉に文句を言いながらもシュー

ターをいくつも出しながら後方へと下がりつつこちらへと放つ。むう、シューターの生成速度が以前の比じゃないな。

お陰で懐に潜り込み難くなってしまった。

「このつ、余裕そうな顔して避けてるう〜!!」

「いやいや、これでも結構頑張ってるんだよ」

プンスカと擬音がつきそうな感じで怒りを表しているのはちゃんだが、そんな姿も可愛らしくて微笑ましい。

だが飛んでくるシューターは鋭い機動を描きつつ自分に迫る訳で。4つのシューターが飛んできているのを確認し、先行した2つを避け、残る2つ

は勢いと機動を読み、魔力を両腕に込め、円を描くようにして受け止める。

バシント、と高い音を立てつつ自分は両手でシューターを受け止めた。

「まつ、またそれえ〜!!」

「なのはちちゃんのお陰で段々慣れてきたんだよね。もうそろそろ他人の魔力弾を——」

「セエエツ!!」

背後からやはり迫ってきていたフェイトの斬撃を飛び上がる事で避け、先程掴んだ魔力弾を投げつける。

「ちよっ! それズルイ!!」

「——攻撃に転用できちゃったね」

既の所を避けたフェイトからも似たような文句を言われるとは。自分としては不本意な訳ですよ。

「このっ、いいから、早く、当たれえっ!!」

「そうそう当たる訳にはいかないでしょうが」

「フェイトちゃん頑張って!!」

フェイトの斬撃となのはちゃんとのシューターを避けつつさてどうするかと考える。二人共ここ最近の実践で良い感じに鍛えられており、目立つ隙が非常に少なくなっている。

このまま行けば魔法ありなら御神流の剣士にも引けをとらない戦いができるのでは無いかと思えるものがある。まあそれだけ訓練校での実践が有益なものだったのだろう。

だが自分としては、まだ負けてやるつもりは無いのである。

今のフェイトの斬撃と、シューターの機動。恐らく誘い込まれている訳だが、ここは誘いに乗ってやる。予測した地点へ回避運動を行うと、両腕

両足に、桃色と金色の輪っかが取り付き身体の自由を奪ってきた。

「設置型バインドか。器用だなあ」

「ふふん、一杯練習したんだから！ フェイトちゃん、今日こそやつちやええー!!」
「堅一、覚悟おっ!!」

まるで本気で自分を殺そうとするかのような裂帛の声に軽く冷や汗をかく。おいおい覚悟って、本気で殺す気か。

思いつきりザンバーを振りかぶって迫るフェイトだが、そうは問屋が降ろさないのである。

「はああっ!!」

「ムウンツ!!」

大振りの斬撃が迫る中、足から膝、腰、肩から腕へと勁と魔力を伝いまずは両腕のバインドを破壊する。

「うそっ!」

「セイツ」

続いて足のバインドを破壊してからザンバーを左手で受け流し、そのまま当て身投げでござる。狙いは勿論、なのはちゃん。

「ずっ、ずるいいいいいっ!!」

「は、はわっ! ええ、受け止め、え、でもそうするとあれ、詰んだっ!!」

「その通り!!」

飛ぶフェイト、慌てるなのはちゃん、フェイトを追うように駆ける自分。なのはちゃんが避けようと受け止めようと、自分が迫っている以上もう

ほぼ詰んでいるのである。

この詰みを打開する方法は一つ。しかしなのはちゃんが……。

「ええいもう!! フェイトちゃんごめん! バスターツ!!」

「なのはっ! はびゅう——」

「そこまでするかーっ!!」

やったよこの子! 飛んできたフェイトをショートバスターで撃ち落としたよこの子!

魔力ダメージで地面にドシヤアツと墜落したフェイトに心の中で両手を合わせ、なのはちゃんに一気に踏み込む。

「わっわっ、とにかく防衛!」

「それは、悪手だつて!」

自分が踏み込むと同時に、守る為にプロテクションを張ったなのはちゃん。だが、自分の拳はその障壁を抜けるのだ。

勁が障壁を通して抜け、なのはちゃん自身に衝撃として伝える。

パンツ、という炸裂音と共に、プロテクションが割れ、なのはちゃんはがっくりと崩折れた。

「うう……けんちゃんはずるい……」

「なのはちゃんは意外と酷いよね。フェイトを撃ち落としたり」

自分の言葉に、なのはちゃんはガツクリと地面に突っ伏した。



とりあえず本日で短期研修プログラムは終わりという事で、帰ってからお疲れ様のパーティーである。

「いやー異世界を堪能したわねえ」

「うう……結局ほとんど研修で終わっちゃった……」

お肌をツヤツヤさせたアリサちゃんの言葉に、なのはちゃんが悲しそうに呟く。

研修は当然休日が設けられており、本来であればその休日にみんなで観光でもしようと言っていたのだが、なのはちゃんが体力的にきつい部分があつたので休日は専らなのはちゃんの休日となっていたのである。

そんな訳で、なのはちゃんは観光が殆どできていない。まあ代わりにアリサちゃんやすずかちゃん、はやてちゃんは思いつきり楽しんでいたようではあるが。

研修自体は今後も定期的に講義を受けたりとかが発生するらしいので、その際にもまた改めて観光を楽しもう。

今はとりあえず、はやてちゃんの件が無事終わるよう頑張るべきなのである。

早速明日には帰って久しぶりの休息を取り、その後日常に戻ってから再びはやてちゃんの蒐集を手伝う日々となる。

過密という訳では無いが、明らかに小学生がやるようなスケジュールでは無いというのが何とも言い難い。

少なくともなのはちゃんの分は自分の方で何とかカバーしなければ……。

「ほらケン！ アンタも飲みなさいよ！」

「アリサちゃん、ジュースで酔ってるのかよ」

まるで絡み酒の酔っぱらいのような事を言うアリサちゃんに引き摺られるように、自分も皆の輪に入ってジュースで乾杯をしまくった。



ミッドチルダから戻って日常への帰還。

その間にも色々な出来事があったが大事件という事でも無く、極々普通の出来事が様々に起こった。

夏を巡って秋になり、気付けばもう冬。季節の移ろいは早いものだなあと感じる。

そんな中、はやてちゃんを救おうと闇の書の蒐集を継続している自分達、とりわけヴォルケンリッターの四人には、何か焦りのようなものを感じ

始めていた。

少し前辺りから活動距離を伸ばし始め、怪我を厭わず魔導生物を討伐して蒐集を行う。周囲の意見をお構いなしに、彼女達は蒐集を行なっていた。

「最近、少しずつ……麻痺が広がっているとプレシアさんや病院の石田先生に言われて。だからシグナム達も焦って」

何かあったのかと問いかけた所そう返してくれたのはシヤマル。彼女以外はそのままで冷静ではいられないという訳か。

「だからって、焦って蒐集しようにも最近じゃ魔導生物に警戒されてしまっているし、彼女達の魔力で余計出てこなくなっちゃいますよ」

「それは分かっているんだけど……ごめんなさいね」

「シヤマルさんに謝ってもらっても、ね」

焦る気持ちも理解できる分、謝罪されても困ってしまうのである。

このままのペースでは今年中には蒐集できないかなあと考えつつ、もう一つの事も考える。今闇の書の蒐集を手伝っている人間の中で、自分だけが魔力を提供できていない。

安全のため、とリリナさんは言うがそれがどれだけの意味なのか。なので最近、リリナさん、ステイールと魔力提供に関する相談を行なっている

のである。

自体は騎士たちの焦り様から、思った以上に切迫している可能性もある。その時のために、恐らく魔力量の多い自分が魔力を提供できれば、相当

の助けになれるのではないかと思っている。

リリナさん、ステイルとは相談の上、はやてちゃんの人命と、自分の人命を優先に、本当に切迫した自体に陥った時のみ魔力を提供するならば

という事で一定の理解を得られている。

その際に何か起こった場合の事も考えて、現在リリナさんは何やら制作を行なっているらしいが、何を作っているのかは分からない。

この日から数日、自分達はともやきもきしながら蒐集を行なっているのだった。

そして12月。そろそろクリスマスが目前に迫ってきたある日に、とうとう一本の凶報が舞い込んできた。

はやてちゃんが、倒れた。

第二十六話

魔法生物からの蒐集を繰り返す日々の中、事態は少しずつ悪化していく
そんな中でも最悪の状況
はやてちゃんが、倒れた



「みんな、えろうすまんなあ。イヴぐらい家で過ごしたい言うたんやけどな」
「ま、しょうがないわよ。私達の事はいいから、ゆっくり休んでなさいよ」
クリスマス前日。はやてちゃんの入院する病室にみんな集まってクリスマスパーティーである。

病院なので騒がしくするのは無しではあるが、はやてちゃん自体は食事制限等を受けていないので、お菓子やらジュースやらを持ち込んでパーティーとなった。
件の主導はアリサちゃん。なんともアリサちゃんらしい行動である。

翠屋のクリスマスケーキを特注で貰っており、軽めのオードブルまで添えてもらい、桃子さんには感謝感謝である。

「シグナム達も参加できたならよかったんやけどなあ」

「しようがないよ、今忙しいみたいだし」

はやてちゃんのボヤキにすずかちゃんが苦笑で答える。そう、今この場にはヴォルケンリッターの四人は居ないのである。

ギリギリまで蒐集する、という意志の元クロノ達と一緒に無人世界で魔法生物の蒐集を行っている。ヴィータは参加したがっていたが、将の言葉は絶対なので仕方なしといたった所か。

今夜には戻ってくる予定になっているので、戻ってきたら改めてヴォルケンとはやてちゃんできりスマスパークティをしてもらおう。

「という訳で。はいこれ、プレゼント！」

「あつ、私も」

早速鞆の中からラッピングされた綺麗な包みを取り出したアリサちゃんに続き、アリシアも小包を取り出す。これはみんながはやてちゃん用に持ってきたプレゼントであり、みんなの分はまた別に用意しているものだったりする。

自分も一緒にはやてちゃんにプレゼントを渡すと、はやてちゃんは早速自分のプレゼ

ントから袋を開けて取り出す。

前回の誕生日プレゼントの反省を生かし、今度は小さなリボンのついた髪留めという女の子が好きそうなものをチョイスしてみた。

はやてちゃんはそのを見ると、ぼうっとした顔で言う。

「堅一君が、まともなプレゼントしてくれおった」

「前回の反省を活かしたんだよ！」

あんまりな言葉に思わず突っ込んでしまう。途端起こる笑い声に、自分も釣られて苦笑を浮かべるしかなかった。



病室での簡単なパーティも終わり、日も落ちた頃。自分は病室ではやてちゃん達と別れて一人、病院の屋上へと立っていた。

暫く屋上から見える海鳴の街を観察していると、背後に4つの気配が降り立つ。

「済まない、待たせたか」

「いや。それよりちゃんと、なのはちゃん達に悟られないよう魔力は」

「大丈夫、抜かり無いわ」

視線を街から背後の四人、ヴォルケンリッターへと向ける。

四人は普段の騎士甲冑と違い普段着を着てそこに立っている。この後はやてちゃん
の病室に伺う予定なのだ。

その前に、はやてちゃんの為の用事を済ませておくのである。

自分のリンカーコアからの、魔力の蒐集を。

「それで、自分はどうすればいいんだ」

「ただ自然体で立ってればいい。闇の書のほうで勝手に蒐集を行ってくれる」

「少しリンカーコアから痛覚が来るかもしれないけど、幻痛だから心配しないでいいわ
よ」

シグナムとシャマルの言葉にそういうものかと思ひ、肩の力を抜く。

と、そこで俺の相棒たるステイルが口を開いた。

『相棒。私を装着した状態では何らかの不具合が発生する可能性があります。どなたか
に預けることをおすすめます』

「そっか。お前は俺の魔製結晶の管理もしているんだもんな」

『その通りです。そして、もしもの時に私が存在していなければ問題が発生する可能性
がありますので』

「ならば、我々のほうで預かろう」

相棒とシグナムの言葉に、腕から待機状態のステイルを外して手渡す。

途端、身体の奥から少しずつ、じんわりとした熱が湧き出てくるのを感じる。もしかしてこれが、本来の俺の魔力って奴なのか。

『相棒。身体の調子は如何ですか』

「ああ。多少熱いが問題無い。大丈夫、いける」

自分がそう言うのと、ヴォルケンの四人が俺を囲むように立ち、その中でシャマルさんが闇の書を手に、俺へと近づく。

「ごめんなさいね」

「それより早くやっちゃって。はやてちゃんを治すのが先でしょ」

「そう、そうね……」

シャマルさんに関しては、自分の事情がある程度リリナさんから聞いている。一番闇の書に対して理解がありそうなシャマルさんのみ、リリナさんとプレシアさんは自分の事情を説明していたのだ。

だから少し、自分に対して後ろめたさがあるのかもしれないが、自分自身が問題ないと楽観視しているので、はやてちゃんの為にこうして蒐集する事に否はないのである。

シャマルさんが静かに闇の書を自分へ近づけると、闇の書が自ずからページを開き、それと同時に自分の中の熱が一際ドクリ、と鼓動する。

次第にその鼓動は大きくなり、一際大きな鼓動が鳴つたと思つた途端、自身の身体から巨大な熱が湧き上がった。

「ぐっ、あああああつ!!」

「きやああつ!」

巨大な熱、魔力が吹き出すのと同時に近くに居たシヤマルさんが吹き飛ばされる。それを理解しているのだが、身体が思うように動かない。

目の前には鈍色に輝く結晶と、その前に浮かんでいる闇の書が見える。

「シヤマル、大丈夫か!」

「え、ええ。それより早く、蒐集を止めないと!!」

「確かに、こりやヤベエかもな」

ヴォルケンリッターの四人が話をしているのだが、自分はそれどころではない。何とかこの身体から吹き出る魔力を制御しようとしているのだが、次々に魔力が吸い取られている感覚もあり、思うようにいかない。

他の人間や動物の時にもここまでの反応があつたのかと一瞬間疑問に思つた時、目の前の闇の書が眩く輝いたかと思うと、バチンツと音を立てて2つに分裂した。

いや、闇の書自体が分裂したんじゃない。白銀の髪をした女性がまるで闇の書から弾き出されたかのように現れて、闇の書は黒くとぐろを巻く複頭の蛇へと変化している。

「一体これは、どうなっついていやがるんだ。」

「くっつ、なんという事だ……」

「き、貴様は、確か闇の書の」

「早くアレを、ナハトヴァールを止めなければ！ 全てが終わっってしまうぞー！」

「ナハト……？ 一体何が起こっているの!？」

「ナハトヴァール、闇の書の防衛プログラム。だが今は、暴走を起こしている。彼の者の魔力を喰らい尽くした後、この世界を破壊しようとする！」

突然現れた白銀の女性がとんでもない事を言っているが、早く助けて欲しいと思う。自分でも制御できない魔力とその魔力を吸収し肥大している破壊の意志。とてもまともな状況では無い。

そして更にまずい事に、自分の身体の奥底から、更なる何か湧き出てきているのを感じているのだ。

熱くも無く冷たくも無く、ただ当たり前のように存在しながら、普通じゃありえない何かであると分かる異質なモノ。こんなものが自分の身体の中に入っていたのかと思うと悪寒が走る。

感覚的のだが何とも悍ましい、醜悪なモノである事だけは理解できている。先程からソレが、自分の奥底から這い出し、少しずつ自身の身体を侵しているのだ。

正気でいる事が、難しい。

「ぐぎやあああああああつ!!」

自身の身体を侵される恐怖に耐え切れず心からの叫び声を挙げる。それに気を良くしたようにソレは確かに震え、より一層自身を侵していく。

やがて周囲の音も声も聞こえなくなり、目の前が闇に染まった時、自分は確かに見た。深淵の底、昏い次元の果ての世界に見える、醜悪なるモノが浮かべた笑みを。

◇◇◇◇◇

夢を見ている。紛れも無く夢だ。

殺し、壊し、全てを破壊する動物ですらない、よくわからないモノに成り果てている自分の姿。

全てが終わって初めて自分に戻れる、そんな生き物。

心など無ければ良かったのに、心を持ってしまったから、壊れてしまったモノ。

ただ、ただ。

少女の言葉が、少女の祈りが、寄り添う少女の温もりが、壊れた心を支えてくれていた。

人であろうと思つて、でもできなくて。

せめて最後は、少女の居ない所で。

戦場で一人、心も身体も、魂ですらも侵された一人の男の記憶を、ずっと見ていた。

ああそうか、これは、魂の記憶。

心のあつた彼の、人であろうとした彼の魂に刻まれた、大事な記憶。

その魂は、自分の魂で。

ああ、これは悲劇？ それとも喜劇か。

彼はずっと、ここに居たのだ。

そして意識が、浮上する。



鈍痛、というには割りかし鋭い頭痛を覚えて目を開く。

黄緑色に発光しているフィルターが目の前にあり、何だこれ、と思つて身体を見ると、

どうやら液体の中に浮かんでいるようである。

ああこれはあの救急用ポットのやつか、と理解した所でここが時の庭園なのだ気付く。

と、液体が少しずつ排出されているのか水位が下がっており、自分の身体も重力に従い床へと足をつける。

やがて全ての液体が排出されるとポットの扉が開いたので、外へ自分の足で確りと踏みしめ歩いていく。

『相棒。気が付かれましたか』

ふと、いつもの定位置に収まっている腕輪から声が出てきて、それがステイールのものであると一拍置いてから認識できた。

「……ああ、ステイールか。意識がまだグラグラ揺れているが問題無い」

『それは何より。そこにタオルとガウンが用意されているので、身体を拭き身につけて下さい。今の相棒は裸です』

「分かっているよ」

ステイールの言葉に傍らに置いてあったタオルで身体を拭いて、バスガウンを身につける。スリッパは置いてないのでまあ、しようがない。裸足のまま失礼しよう。

ガウンを着込んだ後、ポットの傍らに設置されていたコンピュータとそのデスクの椅子に、桃色の髪が埋まっているのが確認できる。

『リリナ』だなあと妙にほっこりした気分になってから、ステイールに聞くことにした。

「ステイール、あれから何があった？」

『簡潔に申し上げれば、闇の書の暴走と、相棒の中に居るモノの暴走が同時に起こり、お互いに潰し合い闇の書が敗北し、ヴォルが破壊活動に移る前に、私に搭載されたりリナ特製の制御装置により事態は終息いたしました』

「そうか……。ちなみに俺の中に居るモノってというのは」

『深淵の中に揺蕩う物。虚空の存在。お友達のすずか嬢はこう言っていました、「混沌の媒介」「全にして一、一にして全なる者の一欠片』」

「そらまた大物が……。確かに人との間に混血児を作った話がありはするが」

自身の中に住まう混沌に思わず頭が痛くなる。ヴォルヴァアドスなんてものじゃない、もつと醜悪で、最悪なものじゃないか。

「それで相棒、俺の身体に現れた異変はどの程度だ？」

『一つ、貴方のタイムリミットは無くなりました。一つ、私の補助が無くとも、ある程度の生活が可能になりました。一つ、貴方は完全に生命の輪から外れました』

「要するに完全にバケモノになった結果、魔力暴走とかの心配は無くなったって事か」

『その代わり、貴方の中に潜む混沌が顔を出しやすくなった事は留意して下さい。貴方の力は既に、人のソレとは隔絶しています』

「気をつけるよ。最後に、今日は何日だ？」

『おめでとうございます。12月29日、年明け前です』

何が目出度いもんか、一週間近くも意識が無い状態だったんじゃないか。と思った所でもしかして、と思いが当たる。

「もしかして俺、意識が戻る前まで人の形してなかった?」

『肯定します。暴走終了後から昨日まで貴方は、肉の塊と呼ぶのが相応しい形容をしていました』

「そのショッキング映像、誰が見た?」

『リリナ、プレシア、そしてヴォルケンで言えばシグナムとシャマル、リインフォースになります』

「リインフォース?」

『貴方が闇の書に魔力を食われている時に飛び出した、銀色の髪の女性です。はやて嬢が名前を付けたとの事です』

「ああ……」

あの白銀の女か。と思った所で、傍らで寝ていたリリナが目を覚ました。

「んっ……あつ、いけない!」

「そんなに慌てなくても大丈夫だよ」

自分の声にバツと顔を振り向き、大きく目を見開く。まあ今まで色々頑張ってくれていたんだらう、その対象が急に目の前に現れたら驚くわな。

「ケン君……良かったあ……」

思わず、といった感じで自分に覆いかぶさるような形でギュツと抱きしめるリリナに、苦笑を浮かべながらポンポンと頭を撫でる。

記憶ではこうして、彼女が泣きそうな時には慰めていたよなあと思いつつ続けていると、やがてバツと顔をあげ顔を見つめてくる。

その表情は、困惑。きつと何故とかどうか、色々考えている事があるだろうと想像し、思わず苦笑を浮かべながら俺は、まず記憶の方から説明する事にした。

この事により、リリナとの関係が更に複雑な感じになる未来が、簡単に想像できたのだった。



「すまなかった」

翌日。諸々の検査を済ませた後、無事問題無しとお墨付きを頂いたのと同時に、時の庭園にやってきたヴォルケンリッター達に揃って頭を下げられた。

シグナムを筆頭にラインフォースも含め揃って現れた五人は唐突にそう頭を下げる。

一体何に対して謝っているのか分からんが、別に謝られてもなあ……という感じであ

る。

「別にいいよ。こうなったのは自業自得だ」

「だが！ 我らが問題が発生した際には何とかするとおきながらも、何も出来なかった。何らかの罰は受けるべきだ」

「って言われてもなあ」

頬をポリポリ掻きながら周囲を見渡すと、一人思い切り沈んでいるリインフォースが見える。

「そういえば、闇の書は結局どうなったの？」

「あ、ああ。バグ部分を含め、無事消滅させる事ができた。これも貴方のお陰だ」

「え、闇の書消滅したの？ でもヴォルケンのみんなは居るのは？」

「私達は元々魔導プログラム体とも言うべき存在。闇の書から切り離された私達は、現在独自に動いているのよ。そこに制約は何もないわ」

「ほー」

なるほど、切り離されているなら問題が無いのか。じゃありンフォースを含めたこの五人でまたはやてちゃんと一緒に居られるって訳だな。それは良かった。

「んじゃあさ、はやてちゃんの問題も解決したんだし、それでいいじゃないか」

「だが、しかし……」

「しかし何も無し。問題ないからそれでいい」

「だが！ あの一件さえ無ければ、貴方はまだ人として生きていけたはずなのに」

あー、そこを気にしているのか。なるほど、自分達の行った事の結果で俺が生命の輪から外れた事に対して責任を感じている訳だ。

「別に、いつかはこうなっていたんだらうし、早いか遅いかの違いでしかないよ。だからむしろ、無事に済んで問題ない訳だ」

「そう、そうか……。ならば我らは、これ以上何も言わないでおこう」

これ以上言っても無駄だと悟ったのだらう、シグナムがそう言うときみんなが静かに頷く。うむ、やはり将の言葉は絶対なのだ。

「それで、はやてちゃんの様子は？」

「現在順調に快復に向かっている。足の感覚も次第に戻ってくるだらう」

「そっか、身体を張った甲斐はあったか」

これで何も改善してませんが、なんて言われてたら流石に泣いていたかもしれない。良くなつて本当に良かった。

「今は皆翠屋に集まっている。出れるなら顔を出したほうがいいんじゃないか」

「という事なんですけど、大丈夫ですか？ プレシアさん、リリナ」

シグナムの言葉に振り返り二人を見ると、問題ない旨の返事をいただいたので、みんな

なで翠屋へ行く事にした。

シャマルの転移魔法で翠屋前に来てちよつと中を覗いてみると、なんだか雰囲気がい。
い。

なのはちゃんもフエイトも深く沈んでおり、車椅子のはやてちゃんなんか机にべつたりと寝ている。

アリサちゃんもすずかちゃんも暗い雰囲気醸し出しているし、いつも元気なアリシアですら同じだ。

何だ、何があつたんだ。

「みんな、堅一君の事が心配なのよ。もう一週間も経っているから」

シャマルの言葉にそういう事か、と思ひ至る。なんだかこんなに心配して貰つて申し訳ないなあ。

まあいい、とりあえず快復報告が優先だ。

いつも通り翠屋の玄関をカランカランと鳴らしながら入ると、桃子さんがすぐにこちらに気付いてくれた。

「いらつしやい、あら堅一君！ もう大丈夫なの？」

「ええ、ご心配おかけしましてすいません」

「あらいいのよそんな、それより」

「けんちゃんだあああつ!!」

桃子さんと話をしていると、横からわあああと叫びながら駆け寄ってくるのはちゃん。とうか普通に飛び込んできたので慌てて抱き抱える。

ポフツと軽い音と共に飛び込んできたのはちゃんは、頭をグリグリ俺の胸板に擦りつける。

「けんちゃんけんちゃん！ もう大丈夫なの？ 痛くない？」

「大丈夫大丈夫、心配かけてごめんね、なのはちゃん」

胸元から話しかけてくるのはちゃんに、笑顔で応えると花が綻ぶような笑顔が返ってくる。

この笑顔を見ると、ああ、帰ってきたなあと何となく思うのだった。

空白期

第二十七話

道場に入ってくる冷たい空気を感じ、これからより寒くなる事を想像して軽くため息を吐く。手にした雑巾が冷たさをより一層堅一に伝え、今が間違いなく冬である事を感じさせる。今はまだ12月、2月になればこれより更に寒くなるかと思うとうんざりする。

手にした雑巾を傍らに置いてあるバケツに叩きこみ持ち上げる。中の水はそれなりに汚れており、掃除の成果がこの中に溜まっているのを考えるとほんの少しだけ気持ち良くなる。

ほぼ毎日使用している道場であり、稽古の後にはいつも門下生を含め師範である父共々掃除をしているというのに、汚れというものは気付かない所で溜まるものだと実感した。その成果がこのバケツの中身ならまあ、冷たい思いをした甲斐もあるものだと納得する。

「おう、掃除終わったか」

振り返ると、自分に道場の大掃除をするよう指示を与えた師範であり父の中田正元が立っていた。ニヤニヤと何処か悪戯を思いついた悪ガキのような表情をしている所から推測すると、どうやら今回の道場大掃除は彼なりの堅一に対する罰ゲームのようなものであったらしい。

その事に今更気付いた堅一ははあ、とやはりため息を吐くと今日の成果を語るようにバケツを持ち上げる。

「終わったよ。そっちこそ母屋の掃除ちゃんとしたんだろうね」

「したに決まってるんだろ、母屋どころか診療所のほうもピツカピカにしてやったわ、みんなでな」

ニカツと笑みを浮かべた父の言葉になるほど、と納得する。確かにみんなで、ということか中田家の面々で掃除をすればそれなりに早く終わるだろうと思う。何せ力持ちが二人も居るのだ、普段気付かないような場所でも持ち上げて埃を落とす事ぐらい造作も無い。父の孫である翔子さんもその娘である綾子ちゃんも頑張ったんだろうな。

堅一の感想に父が「あたりめえだ」と同意し、堅一の持ったバケツを指さした。

「お前が最後だからな。台所じゃ今晚飯とかの仕込みしてつから、外の水道でそれ洗えよ」

「げ、そーいやそーうか。うわあ、この気温で水仕事か、きついなあ」

「日が沈む前に終わらせちまえよな。余計冷えるぞ」

「だよな。早い所終わらせるよ」

バケツを持って慌てて外の水道へと走り、ジャバジャバと水の冷たさを感じながら汚れた雑巾とバケツを洗い流す。粉石けんを使って雑巾を綺麗にした後、バケツをタワシで軽く擦るように洗い、中の砂埃の混じった泥を綺麗に流す。うん、これで完璧だ。ついでに自分の手も備え付けの石鹸で綺麗にする。

それにしても手が冷たい。日本の四季という季節感是非常に好ましく感じるのだが、こういう時ばかりは疎ましいと思う。冬は寒いのが当たり前だが、こうも手が悴んでしまふとやはり冬より夏がいいなあと感じてしまう。夏は夏で冬のほうが良いなどたまに嘯くのだろうが、それはそれ、である。

悴んだ手を擦りながら母屋の玄関へ駆け込むと、靴が普段の中田家よりも多く並んでいる事に気付く。自分の気付かない間に来ていたのかと考えながら靴を脱いで居間へと向かう。

近づくにつれ居間の騒がしさが耳に入ってくると、どうにも苦笑を覚えてしまう。今年の年末年始は本当に忙しいな。

「おつ、堅一君。終わったか」

「雅俊さん、やっと終わりましたよ。もう手が冷たくて」

居間に入ると正面の炬燵に座っていた翔子の旦那である雅俊が声をかけ、その声に釣られるように、滑りこむように炬燵の中へと侵入する。中は程よく温まっており、悴んだ手の感覚が次第に解れてくるのを実感する。

あーあつたけーとほつと一息つきながら、居間に置いてあるテレビのほうを見る。テレビでは最新の格闘ゲームの対戦画面が表示されており、ボスカとお互い殴りあっているのが見える。

テレビの前のソファアーでは小さい影が2つえいえいと声を出しながらコントローラーを動かしており、その足元には恐らく姿の見えない青色の小型犬が居るだろう。

「おつ、堅一君戻ったんやな」

「うん、やつと掃除終わってね。いらつしやいはやてちゃん」

声のした方を見ると父に抱えられた最後の夜天の主、八神はやての姿があつた。はやては父に炬燵の中へ入れてもらうと、あーあつたかーと言いながらぬくぬくと温まる。特に部屋が寒いという訳でもないが、炬燵の暖かさは独特のものである。その気持ちはとても良くわかる。

はやての反対側に父が座り、これで炬燵席は一旦締め切りである。来年辺りにはもう少し大きなものを買うか、いつそ掘りごたつにリフォームしてしまうか、なんていう話もある。実現するかは判らないが、掘りごたつもいいな、なんて考える。

「はやてちゃんは、一旦料理は終わり？」

「うん、私はとりあえず終わり。今翔子さんの手伝いをウチの三人がしとる所や。とい
うても教わりながらやけどな」

はやてと一緒に来ているヴォルケンリッターの将シグナムとシャマル、リインフォー
スの三名で現在翔子のお手伝いという名の料理指導を受けている所らしい。三人がど
れだけ料理が出来るのかは知らないが、翔子の頑張りに期待という所である。

「はやてー！」

話しているはやてに飛びつくように横からソファ席に座っていたヴィータが抱きつ
く。それを苦笑をもって受け止めるはやては完全に姉の表情だった。

「どしたんヴィータ、また負けたんか？」

「ヴィータちゃん、よわーい」

はやての言葉に合わせるようにとてと歩いてきた綾子が笑いながら言う、
ヴィータが半分涙目になりながら綾子を可愛らしく睨みつけた。

「う、うるせえ！ あんなコンボ、卑怯だろ！」

「えー！ お母さんとかふつーに防ごもん。ヴィータちゃんが弱いんだもーん」

きやつきやと嬉しそうに言いながら綾子が雅俊の膝の上に自然と座り、炬燵に入る。
それにしても幼稚園児に格闘ゲームで負けて半泣きとは、大人げないにも程がある。

元々中田家で格闘ゲームをするのは日中程々に暇な翔子か幼稚園帰りの綾子しか居ない。翔子が暇で、綾子も友達との約束などが無い時には二人で何度も対戦をしているものだから、翔子はともかく綾子の上達ぶりは凄まじいものになっている。今や堅一とも対戦で拮抗するレベルだ。初見のヴィータが敵わないのは仕方がない。

だがそんな理屈は彼女達には関係ないのである。ヴィータは半泣きで悔しがり、綾子はとても嬉しそう。堅一としては綾子が嬉しそうならそれでいいかと自分を納得させた。見た目も中身も小学生でも実態は大分年のいったロリばあであるヴィータより、姪っ子である綾子ちゃんの方が優先されるのだ。

「はいはい、そろそろご飯できるよ。男子は配膳手伝えー」

台所からひよっこ顔を出した翔子と共に、背後からリインフォース達が夕食の乗った大皿を持ち歩いてくる。翔子の言葉にどっこいしょと呟きながら父が立ち、それに続いて雅俊も堅一も立ち上がると、台所へと入っていく。中には色とりどりのおかずが盛りられており、今夜が盛大に祝われている事を感じさせる。

「さて、じゃあ早く持つて行ってご飯にしよう」

雅俊の言葉に丁寧に盛られた皿を持ち上げて、慎重に居間へと運んでいく。居間では既に机とコタツの上に大皿が並べられており、大人数での本年度最後の食事が開始された。



「新年明けまして、おめでとうございます」

「けんちゃん、おめでとうございます」

「あいよ、おめでとさん」

元旦の1月1日、中田家では例年通り堅一が起きる前に既におせち料理が食卓上に並べられ始め、翔子と父が準備をしている所に堅一が起きてきて元旦の挨拶となった。例年この日だけは雅俊は綾子が起きてくるまで寝室で待つており、翔子と父はおせち等の準備を行うのである。

ちなみに今は未だ明け方5時半という早朝。この家の人間は基本的に朝が早い。それも山田流の鍛錬が基本早朝から始まる事もある為、それに釣られるように翔子も早起きが癖になっていたのである。何せここの人間は身体を鍛えている為良く食べる。朝食だというのにボリユームが無ければ一日を生きて行けないのだ。それなりのボリユームある朝食を作るには、このくらいの時間から準備しなければ行けないのである。

とは言え今日は元旦、いつも翔子に任せきりの料理だが、正月料理という事もありこ

の日ばかりは家長が腕を振るう暗黙の了解が成り立っていた。

堅一も率先して準備を手伝い、おせち料理が次々と食卓へ並べられていく。今年は人数が例年よりも多い事もあり、量もそれなりに多い。そして父の作るお雑煮も今年は大鍋である。

そこへ、廊下からバタバタと足音と共にリインフォースとシャマルが駆け込んでくる。

「す、すいません！ 気が付かなくて」

「も、申し訳ない」

「ああいいのいいの。ウチの人達が早いだけなんだから。それより、明けましておめでとうございませす」

「お、おめでとうございませす」

深々とお辞儀をする翔子に釣られ、シャマルとリインフォースも戸惑いながら礼を返す。すぐさま翔子の手伝いに入った二人と共に動いていた堅一が、気になった事を聞いていた。

「ベルカでは新年の祝祭とか無いのか？」

「うーん、無いわけではないんだけど。今はどうなのかは知らないけど、私達の知っているのは王家主導でやる感謝祭みたいなものだったから」

「ああ、王家が料理や食材を振るまいその糧を感謝する祭りで、新年だからどう、というものではなかったな」

「日本みたいな感じでは無いね、やっぱり。日本では正月は神様への豊作祈願とか、先祖を祀ったりする意味合いが強いから。風習とか世界的に見ても独特だよな」

堅一の言葉にほー、と感心した声をあげるベルカの二人。次々出来上がるおせち料理を配膳しているとその内に日が昇り、他の八神家の面々や綾子達も居間へとやって来た。

翔子も粗方の作業が終わった所でテーブル席に座り、ヴォルケンの面々はテーブルの大きさの関係上、別に用意されている炬燵に着席である。この日ばかりは、ザフィーラも犬の姿では無く人型である。

全員が席に着いたのを確認すると、一番上座で家長である正元が号令をかける。

「それじゃあ全員揃った所で改めて、明けましておめでとう」

『おめでとうございませす』

正元の声に呼応してみんなで頭を下げつつ元旦を祝う。この独特な風習にヴォルケンリッターは戸惑いを浮かべつつも、大事な儀式なのだと事前にシヤマルとリインフォース、はやてに説明されており周囲に従うように頭を下げた。

「去年は、なんつーか色々あった訳だが。今年はどうなんだ、堅一」

「今年は去年程慌ただしくは無いと、思う。ある程度問題は収まったからね」
「去年はご迷惑をおかけしました」

堅一の言葉に苦笑を浮かべながらはやてが頭を下げるが、気にしないと言うように父がプラプラと手を振る。

「ウチのが役に立ったならそれでいい。んで、はやては今年からリハビリ頑張らねえとな。ウチでマッサージとリハビリ、ガンガンやってくぞ」

「はいっ！ よろしくお願いします！」

「おう、やる気があるのは良いこった。んじゃそろそろメシ食うか。いただきます」
『いただきます』

こうして食事が始まり、各々食卓に並べられた豪華な食事に手をつける。今年は奮発してタイの尾頭付きを焼いたものだったりや並んでいる。そのどれもがそれなりに日持ちのするものであり、三が日の間には大体無くなる計算だ。

ヴォルケンリッターの面々は普段見ない料理に戸惑いを覚えつつ箸を伸ばして食べている。おせち料理はその殆どがゲン担ぎ、縁起物だ。普段

食べないのはしょうが無い。「バリうまつ！」とか声が聞こえてくるのでそれなりに気に入ってくる事だろう。

みんなでワイワイと朝食を食べ、ある程度腹に溜まってまったりした所で、正元から

子供組に声がかかる。

「おう、堅一、綾子。それとはやてにヴィータ、ほい」

「わっ、ありがとうございます」

「あ、ありがとうございます？」

正元が出したのは小さなぽち袋で、中にはお金が入っていた。所謂お年玉だ。そういった風習を知らないヴィータは受け取りつつ疑問符を頭にいくつも浮かべており、何の事か分かっていない。

「なーはやて。これなんだ？」

「それはなあ、お年玉いうて、大人が子供に毎年お小遣いあげるんやで」

「マジでっ！ そんな風習あんのか!？」

「あるんやでー。大事に使わんとあかんよー」

はやての説明にひやつほいひやつほい喜ぶヴィータに思わず堅一が苦笑を浮かべる。お年玉を渡されるという事は自分が子供だと見られている訳だがそれに気付いているのかどうか。見ればシャマル達も苦笑を浮かべており、シグナムは頭が痛そうに額に手を当てている。これは後でお説教である。ぽち袋の中身は大人三人分なのでそれなりの金額が入っていたりする。全額アイスに消えたりしないよう祈るばかりである。

お年玉を渡し終えた大人な既にお神酒を飲み始め、場はいつしかまつたりした空気が

流れていた。テレビでは毎年恒例の長時間時代劇が始まり、正元やシグナムなどが食い入るように見ている。子供達もまったりとそれを眺めていた。

時刻が昼過ぎとなり、各々好きなように過ごしていると、ピンポンと呼び鈴が鳴らされる。これは例年同様みんなかな、と思いつつ堅一が玄関を開けると、予想通りなのはとずずか、アリサの三人娘にフェイトとアリシアの姉妹が来ていた。それと一緒に、なのはの姉の美由希にリリナ、アースラのエイミイとクロノ。そして、見覚えの無い少年が一人。

「えっと……誰？」

「ユーノだよ!! 覚えてるよねえ!？」

「あー、すまん。フェレット姿じゃないから分からなかった」

見覚えの無い少年がガーンと怒鳴ったと思ったら吾輩はユーノであると言ったので申し訳なく謝った。堅一のこの対応に「まあいいけどさ」と言っているユーノを置いて、なのは達が前に出た。

「けんちゃん、明けましておめでとうございます!」

「はい、おめでとうなのはちゃん。それで、初詣かな?」

「うん、はやてちゃんも一緒にしょ? どうかな?」

「そうだね、ちよつと準備してくるから待ってて」

一旦玄関を閉めて居間に戻ると、はやてがザフィーラに抱えられている所だった。

「なのはちゃん達やる？ 今準備するからちよう待つてな」

「うん。行くのははやてちゃんとザフィーラ？」

「アタシも行くぞ」

そう言うのと、可愛らしい兎の肩掛けポシェットを下げたヴィータがやつてくる。他のヴォルケンリッターはテレビや家事に夢中のようだ。

はやての準備も終わり玄関を出ると、なのは達が待ち構えていた。

「あ、はやてちゃん、ヴィータちゃん、ザフィーラさん。明けましておめでとうございませす」

「明けましておめでとうございませす」

ザフィーラに車椅子を押されながらはやてがみんなの輪に入り、一同で神社へと向かう。毎年初詣には八束神社と決まっており、今年も例に漏れず八束神社である。

堅一は例年よりも多い人数の中、後方をクロノ、ユーノと一緒に並んで歩いていく。女子率の高いこの集団で数少ない男子枠はこうして固まるしか無いのである。

「それにしても、日本の正月というのは独特だな。民族的なものがあるのだろうが、こうも大々的に祝うものなのか」

「まあ他の世界、というか地球でも他の国から見たら結構独特だと思うよ、日本は。そう

いやリンディさんとかは？」

「リンディさんはプレシアさん達と一緒に自宅でゆつくりしてるよ。日本文化を楽しんでるさ」

ユーノの言葉になるほど、と納得する。何やらクロノの母親であるリンディは独特の日本文化好きらしく、アースラ船内の自室には和室すら用意しているという筋金入りだ。だが室内に鹿威しはどうだろうと思う。

八束神社に到着すると、境内は参拝者が列をなしていた。毎年恒例の行事ではあるが、流石元旦、人入りが最高潮である。

「そういやこの初詣っていうのは、神様にお願いをするんだよね」

「そうだな、基本お願いかな。勉強ができるようになりませうように、とか事故に合いませんように、とかそういう類の。ほらあそこ、絵馬って言って絵だったり文字でお願い事を書いてああしてぶら下げるんだ。祈願という奴だな」

「へー、色んな形式があるんだね」

「その他にも破魔矢って言って魔除けの矢を買ってそれにお願いを書いた絵馬をぶら下げて部屋に置いたりとかな」

他にもおみくじを引いたりお守りを買ったりなど、様々な形式がある事を説明し、二人から感心される。境内に並んでいた順番がとうとう堅一達の番になると、堅一は財布

の中から十円玉を一枚取り出し賽銭箱へと投げ入れた。その姿を見様見真似でクロノとユーノもお賽銭を入れ、パンパンと手を叩いて何事かを願う。初詣の願い事は言葉に出さずに行うというのが一応の通例になっている。

順番が終わると列から離れ、なのは達の姿を探す。彼女達はすぐ脇で待つており、手には既に屋台で買ったのかたこ焼きやクレープが握られていた。

「や、お待ちせ」

「ううん、大丈夫。それよりお守りとおみくじ見に行こう!!」

なのはの言葉にわーっと子供集団でお守り売り場へ足を運ぶ。最近は様々な種類のお守りが増え、中には防犯ブザーと一体型になっているというお守りも存在している。もちろん防犯ブザーはきちんと音がなるようになっており、本当の意味でのお守りだ。

家内安全、交通安全、商売繁盛と様々な四文字熟語の並ぶ小さな袋に、地球組はどれにしようか考え、ミッド・ベルカ組はどういう意味なのかを色々聞きながらお守りを物色する。

堅一は無病息災と書かれたお守りを、他のみんなも家内安全など当り障りのないお守りを買っていた。ただ一人、フェイトだけがどこかズレた感覚で夫婦円満を買っていたが。

「あんたね、夫婦円満って意味わかってんの？」

「えっと、母さんと仲良くって事じゃ、ないかな」

お前はプレシアさんの旦那か、とツツコミたい衝動を堪えつつ、フェイトには家内安全のお守りも合わせて買っておくようアドバイスするに留める。

続けてみんなでおみくじ売り場へと行き、一人百円払っておみくじを引く。おみくじの箱から棒を引き、そこに書かれた番号を受付のお姉さんに言う番号に従いおみくじの紙が出てくるというシンプルなものだ。

結果としてはアリサとなのは、ザフィーラが大吉、はやてとフェイト、エイミーが中吉、ヴィータとすずか、ユーノとアリシアが吉、堅一とリリナ、美由希は小吉となった。なんだかこの組み合わせに嫌なものを感ずるなど思っていると、横からクロノが声をかけた。

「なあ、これはどういう意味なんだ？」

「あー、えーっと。良くないって事、かな」

クロノの差し出した紙には「凶」としつかり書かれている。しかも内容も内容で、待ち人來ず失せ物多し、病注意に事故注意だ。流石に内容的に笑う気にもなれず、若干凹んでいるクロノを励ましつつ、おみくじの紙を境内にある木に結ぶ。こうすると木の生命力で良くないものが追い払えるなどと言われていると説明すると、クロノは必死になっっておみくじの紙を結びつけていた。

「おみくじを引いた後は一通り境内の中を散策し、その後どうしようかと話している
と、それじゃあウチに来る？」というなのは言葉にみんなでわーつとなのは家にお
邪魔する事になった。美由希とエイミイ、リリナはこの八束神社で巫女をやっている美
由希の友人とこれからお茶をするという事で、別行動だ。美由希は兎も角エイミイ、リ
リナが地球で着実に同年代の友人網を形成し始めている事に堅一が軽く驚愕を覚えて
いた。

「一路なのはの家に向かう途中、閑散とした商店街を眺めながら歩きつつ、クロノが嬉
しそうに呟いた。

「しかし、こういう風習も悪くは無いな。気分的にのんびり出来てラクだ」

「他の世界の風習は知らないけど、そんなのんびりできるもんじゃないのか？」

「堅一の言葉に、クロノとユーノが微妙な笑みを浮かべる。

「僕が知ってる風習は、結構ロクなものじゃなかったりするかな」

「ああ。管理世界入りした世界の中でも、未だに生贄やら姥捨てやらの風習が残ってい
る地域がある」

「マジか。魔法文明が発達した世界でそういう風習があるって」

「だからこそ、だ。土着民族の中で信仰されている宗教と風習が合体してな、神に魔力持
ちを生贄に捧げる事で村が豊かになる、といったものは往々にしてあるんだよ」

「それを取り締まる管理局は大変だよ。地域を敵に回す事になるんだから」

ユーノの言葉に全くだ、と首を振り答えるクロノ。その姿に哀愁を感じるのは何故だろうか。

「それに比べたら日本の風習は随分ラクなものだ。お正月にお盆、彼岸にクリスマス。祝い事や祭り事だらけだから」

「まあ、一部地域じゃどういふ風習が残ってるか分からないけど。随分穏便なものだとは思うよ。生贄とかそういう考え方は元々無いから。姥捨てはあったけど、既に過去に規制されてるから」

「穏便でいい事だよ」

うんうんと頷くユーノにクロノが同意する。何より平穏が一番なのは、管理局でも同じ考えなのだ。

話をしている間になのは家に到着し、それぞれなのは父である士郎と母桃子に挨拶をして、家へと上がらせてもらう。今日は流石に翠屋もお休みであり、三が日はこうしてのんびり過ごす事になる。

リビングルームで女子がグループを作ってワイワイと話しをしている中、男子も自然と固まって、縁側の方を陣取った。

「実は士郎さん達にお久しぶりですつてご挨拶した時、堅一と同じように誰って言われ

「たんだよね」

「まあそりやそうだろうな。この家に居た時はフェレットだったんだし」

「二期一一緒に住んでたのに、と思つてちよつと寂しかった」

子供らしいユーノの発言に堅一がプツと吹き出す。なるほど、ユーノから見れば何も変わっていないのにといい認識なのだろう。

その当の士郎さんは将棋盤を持ちだして、ザフィーラの正面に座る。ザフィーラも乗り気なようだ。その二人の傍らには、日本酒の一升瓶と湯呑みが2つ置いてある。どうやら飲みながら対局のようである。

「ザフィーラと士郎さんつて、雰囲気似てるよね」

「ああ、確かに。ああして見ると良く分かるな」

「声も結構近い雰囲気あるしね」

そんな事を話していると、不意にクロノが縁側に寝っ転がる。

「あー、こうして過ごすのも悪く無い。うん、悪く無いな。仕事の事は今日は考えないよ
うにしよう」

「うわ、親父臭いセリフ」

「うるさい、執務官というのは大変なんだ、察しろ」

そう言うのと、クロノが意地の悪い笑みを浮かべる。

「どうせこの三が日というのが終わったら、堅一もユーノも大変なんだ。今のうちに君達も英気を養う事だな」

「うわ、言いやがったコイツ。考えないようにしてたのに」

「あはは、まあクロノの言う事も間違つてないしね。僕もこの三が日はゆっくり過ぎよ
よ」

「そうしておけ」

クロノの言葉に同意してユーノも横に寝転がったのを見て、堅一ものんびりする事にする。この先に待っている慌ただしさを受け入れる為に、今はとりあえず、この正月の空気を甘受しておこうと決意しながら。

第二十八話

三が日が明けてすぐの事。堅一達地球の魔導師組プラス闇の書事件に関わった地球人一同は、リンデイの呼びかけにより時空管理局の旗艦アースラへと招集された。

地球人一同とは言うが、いつもの仲良し小学生組にヴォルケンリッター、プレシアにリリナ、使い魔のリニスという内訳である。性質としては報告会に近い。

現に今、プレシアとリリナという出る所に出れば管理世界の科学技術を大きく変えてしまいそうな二大魔導研究者の二人が、招集された人員とアースラの主要クルーに対して、懇切丁寧に講義している。

内容は、現在の闇の書の状態プラスアルファ、だ。

「——という訳で、現在『闇の書』と呼ばれていたものに関しては完全に消滅。残っているのはヴォルケンリッターおよびリインフォースという魔導プログラム体、そして八神はやてさんの中に残っている膨大な魔導技術のみ、という事になるわ」

「ちなみにこのはやてちゃんの中に残っている魔導技術というのも自由に引き出せるようなものではなく、彼女の年齢や魔力量に応じて読み取れるように心理的なロックがか

かつていて、今すぐ何かに利用するという事は非常に難しいと思います。既存の魔導技術、つまりはやてちゃんが知っている魔法であれば問題はありませんが」

二人の説明にリンデイがふむふむと頷き、クロノが手を挙げる。

「それはつまり、段階を踏んではやての知識が拡張され、将来的に何かに利用できる可能性がある、という事か？」

「その認識で概ね問題無いわ。とは言えその知識は現在のミッドチルダで主流のもではなく、古代ベルカの知識になる訳だけど」

「モノによっては時代遅れだったりする訳です。というか多くの知識は時代遅れのものであると認識して問題無いでしょう。ただ、現在失われた技術の復刻、というものも可能となる可能性はあります」

「例えばヴォルケンリッターのような魔導プログラム体を作成する技術、とかね」

プレシアの言葉に当のヴォルケンリッターやリインフォースが何とも言いがたい表情を浮かべる。自身達がどのように造られたかは既に記憶の彼方になる訳だが、この技術が復活して、ロクな事になる未来が中々想像できないのである。

それは彼女達のような『戦争を経験している人間』であれば当然の事で、自身達のような存在がもしまかり間違って大量生産でもされてしまうと、新たな戦争の火種にしかならない未来しか想像できなかつたのだ。

「とは言え、どんな技術があるかは未だ分からないので、少なくとも管理局の方々にはやてさんに対して慎重な行動を取ってもらえるよう期待しているわ」

「それは当然、丁重に対応させて貰うわ」

リンディの言葉にクロノがウンウンと大きく頷く。彼女達は技術者でも研究者でも無く、治安維持の現場担当だ。そういった事に疎い訳では無いが、それほど技術の躍進を望んでいる訳でもない。はやてをどうこうして知識を引き出すような愚を犯すつもりはなかった。

「さてそれではこちらからの話は以上で——」

「ちよつといいか」

プレシアが場を締めようとした時に、またもやクロノが手を挙げる。プレシアが彼に黙って続きを促すと、クロノは一つ咳払いをし、慎重に言葉を選びながら、彼女達に問いかけた。

「その、だな……。あの闇の書のバグ、闇との対決の時の事なんだが」

「……ええ、それで？」

「その……。もし彼が『あのまま』だった場合、どうなっていた？」

予測していた質問内容に、プレシアはため息を吐く。彼女はチラリとリリナに視線を向けてから、彼女に説明させる事にした。

「どうなの、リリナ」

「そうですね……。もちろんこの答えに関しては、記録に残さない形をお願いしますよ」

「ええ、そうね。エイミー、処理しておいて」

「はい」

リンデイの言葉に軽く頷いたエイミーがコンソールを叩き、OKが出てからリリナは言葉を続けた。

「まあ、仮称名『ヴォルヴァドス』があのままだった場合、一番軽い被害で言うと、あの大量の魔力と共に大爆発を起こし、次元震が発生、少なくとも地球は崩壊、という形ですかね」

「それで軽いんだ……」

リリナの言葉にフェイトがボソツと呟く。周囲の子供たちも同様の感想で、どこか薄ら寒さを感じていた。

「最悪のパターンは、そうですね。あのままの形に固定が成功し、手始めに地球に存在するありとあらゆるエネルギーを喰らい尽くした後、他の次元世界へ渡り、同様の事を繰り返す。そうすると倍々ゲームで力をつけていきますから、最終的に次元世界というのが崩壊するんじゃないですかね」

その言葉に、誰かがゴクリと唾を飲む音が響く。とてもでは無いが、受け入れがたい

未来が待つていたらしい、という事だけは誰もが理解した。

「まあそれも無事防げた訳ですし、今後に関しても特に問題は無さそうです。完全に適合してますから、ね、ケン君」

「ええまあ。とは言え、完全に自分が人間じゃ無くなった事も自覚できてるんで、何とも言い難い気分な訳ですけどね」

堅一の言葉に、何とも言い難い難い空気が漂う。主な発生源はヴォルケンリッターとリンフォースであり、彼女達は未だ、彼が人間から外れた事に対して責任を感じていた。

「今まで自覚なかったんだ……」

「おいフェイト。お前だつて自分がアリシアのクローンだつていう自覚はあったのか？」

「ていうか今もあるのか？」

「ん、そう言われると……。どっちかと言うと、姉妹つていう感じしか無い、かな」

「だろ。そういうもんだ」

「そういうものなんだ……」

素直なフェイトが全く答えになつていない堅一の言葉に完全に丸め込まれる様をプレシアは静かにニヤニヤしながら眺めていた。こういうフェイトの素直な所がとても可愛らしいと親馬鹿なプレシアは思っている。ただ少し、将来悪い男に騙されないかという部分が若干不安ではあるが。

と、ここで。今まで静かに話を聞いていたさすがが綺麗な挙手をして立ち上がった。

「リリナさん。仮称名『ヴォルヴァドス』は変更した方が良いと思います」

「へ？ あ、えつと。じゃ、じゃあ何がいいかな？」

『『ウィルバー・ウエイトリー』で』

「（こらこらこらこら。ちよつと待ちなさいすずかちゃん。確かに的確かもしれないけど、しれないけどね。それは辞めようよ」

何とも不吉な事を言い出すすずかに待ったをかけて駄目だしをする。流石にその名前は頂けないし、不吉過ぎる。最終的に犬に噛み殺される未来しか想像できない名前であった。

どういふ事なのか理解できていない他の面々の頭の上には『？』がたくさん並んでいるが、分かっているならそれでいいと堅一は思った。

「ま、という訳で。既にそちらの記録装置からデータは削除されている訳ですけど、あまり余計な事は言わないようお願いします」

「分かっているわ。流石に報告もできるものではないし」

言われずとも、リンディ以下アースラ組に今回の闇の書事件で起こった真実を管理局へ正確に報告するつもりはない。報告した場合、最悪中田堅一という存在は、闇の書と同等か、それ以上の対応対象となる可能性がある。

藪を突いて蛇を出すつもりは、毛頭無いのだ。

「それじゃ、今度こそ説明は終わりね。後はリンデイさんに任せるわ」

プレシアの言葉にリリナも一緒に席へと戻り、後を引き継ぐ形でリンデイが登壇する。

「えー、という訳で。今回の闇の書に関する一連の事件は終わりましたが。後処理として我々の今後の行動を連絡します。エイミイ」

「はい。今後アースラは平時は第98管理外世界地球近辺に待機とし、ヴォルケンリッター及びリインフォースの保護観察任務に当たります。またリンデイ・ハラオウン提督、レティ・ロウラン提督が連名にてヴォルケンリッター及びリインフォースの保護観察官となります」

「そして、ヴォルケンリッター及びリインフォースさんについては、管理局である程度の期間労務に従事して貰うことになるわ。そこまではいいわね?」

「ええ。我々が過去に犯した罪については、償いをしなければなりません」

リンデイの言葉にシグナムが重々しく頷き、他のヴォルケンリッターもそこに異議を唱えない。全て納得詰めで、この労務に従事する事になったのだ。

「あなた達は魔導師ランクの都合上、危険任務も伴う事もあるだろうけど、まあ大丈夫でしょう。生半可な事件ではあなた達を害することはできなさそうだし」

「そして、えー、はやてちゃんも足が完治次第アースラで研修後、管理局へ入局し、彼女達の減刑に協力する、つていう事でいいのかな？」

「はい、それでお願います」

「主はやて……」

「ええんよ。それでみんな今までどおり過ごせるんなら」

柔らかな笑みを浮かべるはやての言葉に、ヴォルケンリッターのみんなが嬉しいような申し訳ないような、そんな感情を抱える。それにしてもやはり、八神家の母親ポジシオンははやてで確定だった。

「えっと、そしてプレシア・テスタロツサさん、リリナ・ハズラツトさんが、それぞれ技術顧問として特定期間管理局に協力してくれるつていうのは、問題ないですか？」

「ええ、給料も出るしね」

そう、今回の事件で高い技術力を管理局に誇示したプレシアは、助手という名目でリリナを伴い管理局で技術顧問として協力する事になった。ついでに彼女達の顧問就任も、ヴォルケンリッターの減刑に加味されている。

「で、次は囑託魔導師の三人とも。一応三人も囑託として今後協力して貰えるつて事になつてるけど、いいかな」

「私は特に問題ないです。協力できる事があつたら協力しますから」

「私も。母さんも管理局入りしてるし、いいかなって」

「俺も特に問題は。何か他にやりたい事がある訳でもないですし、通常の学校の授業とかに響かなければ問題ありません」

無条件で協力するなのはと、母親を切欠に管理局に興味を持ったフェイト。一番現実的な堅一の答えに、皆が苦笑いを浮かべる。どこまでいっても堅一は、同年代の少女たちと較べて捻くれてる答え方をする。

「それでは今後はそのように動いてもらいます。本日はもう、解散しましょう」
「お仕事とかの時にはデバイスに通信を送るので、よろしくね」



それからの日々は、特に多忙という訳でもなく。偶に入る管理局からの協力要請に従い任務を完遂し、普通に学校に通い、友人と遊ぶ。それを繰り返す非常に平穏な日々が待っていた。

そして季節は巡り、4月。

堅一達がついに小学4年生へと進級する事となった。

「クラス替えかー、緊張するねえ」

「ま、新しい出会いがあるという事で楽しみでもあるけどね」

一緒に登校しているなのは言葉にポジティブな返答を返す堅一。言葉通り彼の心の中では楽しみだという感情が多数を占めていた。

「またフェイトちゃん達と同じクラスだといんだけどなあ」

「別のクラスでもいつでも逢えるんだから大丈夫だよ」

「そうだけどさあ」

雑談をしつつ、クラス替えの掲示板の前に立つ。なのはドキドキしながら、堅一は落ち着いてその掲示板に自分の名前を探していた。

一組、無し。二組、無し。三組、あった。

「俺は三組、か」

「あつ、私二組……けんちゃんは別のクラスかあ」

がつくり項垂れたなのは言葉に苦笑しながら二組のクラス編成を見る。なるほど、よく分けられていると思うが、微妙に知り合いが固まっている気もする。

二組の編成はなのはにフェイト、そしてアリサの三人。三組には堅一にすぎか、そしてアリシア。

そう、アリシアもフェイトも、聖祥大学付属小学校の転入試験をパスして去年から一緒に勉強していたのだ。昨年はアリシアのみ別のクラスという残念な事になっていた

が、今年はどうやらそれは避けられたらしい。

他の同級生と較べて身体の小さいアリシアだが、他のクラスでは持ち前の明るさで人氣者だったらしいとは本人の弁であった。

そしてクラス表を見てみると、一組二組より、三組の人数が若干少ない。これは転入生が来るんだなあと察した堅一は思わず苦笑してしまった。どうやら彼女も同じクラスらしい、と。

「それじゃ、教室まで行こうか」

「うん、またねけんちゃん」

なのはと別れて教室へ入ると、ポツポツと席を埋める数人の生徒が見える。今日からクラスメイトとなる彼らだが、堅一は余り喋った事の無い生徒達だったので、とりあえず適当な席に座り鞆から本を取り出して読む。

実はこの本、リンディから支給された囑託魔導師に関するルールブックというか、ガイドブック的な本であった。基本英文でありこの年の普通の生徒には読めないだろう本を、パラパラと捲りながら読み進める。

本を読み進めっていると次第に教室が騒がしくなり、次々と生徒がやってくる事が確認できた。

「けん君、何の本読んでるの？」

ふと、声の方向を見ると隣の席についたすずかの姿があった。

余り周囲を気にせず本を読んでいたものだから、隣にすずかが座った事も気付かなかったのだ。

「おはようすずかちゃん。これはまあ、アッチの本」

「ああ、アッチの。けん君も大変だね」

「それなりにね。実入りもいいし、続けてはいるけどね」

囑託魔導師の依頼による収入は非常に良い。元々管理局の給料が高いというのもあるのだろうが、その管理局から要請されて行う依頼は、基本的に危険度が高く、魔導師としての実力が高いものでなければ受けられないようになっていた。

その依頼を難なくクリア可能な堅一達であれば、実入りが良いと感じられる仕事内容であり、その収入は、ジュエルシード事件、闇の書事件で受け取った報酬も加えると当分は遊んで暮らせるぐらいの額である。

だが堅一を含めなののもフェイトもそれを使って遊びほうけたりもせず、律儀に貯金していた。地球と、ミッドチルダで。

ミッドチルダの銀行に貯金している理由としては、何らかの時にミッドチルダで遊ぶ、もしくは居住する事になった場合に不便なく使えるようにと考えた上での事。

何だかんだで先の事も見据えて生活している彼らはしっかりしていた。

「あつ、堅一！　　すずか！　　おはよう！」

「おはよう、アリシアちゃん」

「おはよう」

小さな身体で元気な少女、アリシアが教室に入つてすぐさま堅一達に声をかける。側頭部から髪を2つに分け、後ろ髪はそのまま下ろしている彼女は、元気いっぱいだ。そして自然と堅一の前の席へと座る。

密かに窓際を陣取っていた堅一だが、隣をすずかに、前をアリシアに押さえられた形になつた。

「今日ちよつと寝坊しちやつてさあ、朝起きてから大変だつたんだよね、フェイトが」

「え、フェイトちゃんか寝坊しちやつたの？」

「ううん、私が寝坊して、起こそうとしたフェイトが大変だつたの」

「お前、真面目な妹を困らせるんじゃないよ」

「だいじょぶだいじょぶ、そんなぐらいで喧嘩したりとかしないから！」

そういう事じゃないんだけどな、と思つてみると、教室の前の入り口から教師が入つてきた。朝のホームルームの時間である。

「みなさん、おはようございます。これから始業式ですが、その前に転校生を紹介いたします」

早速、というように教師が教室へと引き入れた人物は、覺束ない足取りで歩き、左手に杖をついていた。

「八神はやて言います。今はこんな足なもんで、皆さんに迷惑かけるかもしれませんが、どうかよろしくお願いします」

ペコリと頭を下げたはやてに周囲からパチパチと拍手が出る。そして教師に促されて空いている席へと座った彼女は、堅一達に向けてピースする。

「はやてちゃん、同じクラスだ」

「うんっ、今年は楽しくなりそうだねえー！」

すずかとアリシアの言葉に、笑顔を浮かべながら堅一は頷いた。